

博士学位論文（東京外国語大学）
Doctoral Thesis (Tokyo University of Foreign Studies)

氏 名	麻生 玲子
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博甲第 282 号
学位授与の日付	2020 年 2 月 12 日
学位授与大学	東京外国語大学
博士学位論文題目	南琉球八重山語波照間方言の文法

Name	Aso, Reiko
Name of Degree	Doctor of Philosophy (Humanities)
Degree Number	Ko-no. 282
Date	February 12, 2020
Grantor	Tokyo University of Foreign Studies, JAPAN
Title of Doctoral Thesis	A grammar of Hateruma, a Southern Ryukyuan language

南琉球八重山語波照間方言の文法

麻生 玲子

目次

序章	1
第 1 章 波照間島と波照間方言	5
1.1 地理	5
1.2 生活	7
1.2.1 歴史	7
1.2.2 産業	8
1.3 言語的背景	8
1.3.1 言語系統	8
1.3.2 方言差	10
1.3.3 話者人口	11
1.3.4 島名・言語名	11
1.3.5 類型の特徴	11
1.4 先行研究	12
第 2 章 音韻論	15
2.1 音素とその実現形	15
2.1.1 子音音素	16
2.1.1.1 閉鎖音	17
2.1.1.2 破擦音	21
2.1.1.3 摩擦音	22
2.1.1.4 鼻音	25
2.1.1.5 はじき音	28
2.1.1.6 接近音	29
2.1.2 母音音素	30
2.1.2.1 前舌母音	30
2.1.2.2 中舌母音	33
2.1.2.3 後舌母音	36
2.2 音節	38
2.2.1 音節構造とモーラ	39

2.2.2	語根頭の無声化音声プロセス	40
2.2.3	語の音節構造	41
2.2.3.1	1 音節語	42
2.2.3.2	2 音節語	43
2.2.3.3	3 音節以上の語	43
2.2.4	渡り音	44
2.2.5	核音に現れる子音音素/n/	46
2.2.6	末音に現れる子音音素/n/	46
2.2.7	末音に現れる /n/ 以外の子音音素	49
2.2.8	母音連続	50
2.3	アクセント	50
2.3.1	下降型	53
2.3.2	平進型	54
2.3.3	上昇型	55
2.3.4	複合語・属性動詞のアクセント	57
2.3.4.1	複合語	57
2.3.4.2	属性動詞	59
2.3.5	アクセントに関する先行研究	61
2.3.5.1	20 世紀後半に行われた調査結果によるもの	61
2.3.5.2	近年行われた調査結果によるもの	62
2.3.6	アクセント型に所属する語彙の偏り	64
2.4	イントネーション	66
2.4.1	平叙文と疑問文のイントネーション	66
2.4.2	強調を表すイントネーション	69
2.5	音韻規則	72
2.5.1	アクセント実現のための同母音音素の挿入	72
2.5.2	子音音素間の母音/u/の脱落	75
2.5.3	母音の渡り音化	77
2.5.4	連濁	78
2.5.5	動詞語幹における形態素境界の母音融合	78
2.5.6	動詞語幹の非語幹末母音交替	79
第 3 章	単位の認定	81
3.1	語・接辞・接語	81
3.1.1	語と接辞	81
3.1.2	接語	83
3.1.2.1	内部要素の結束性の有無	83
3.1.2.2	共起制限の度合い	85

	3.1.3 問題となる形式	85
3.2	品詞分類	86
	3.2.1 動詞	87
	3.2.2 名詞類	87
	3.2.3 指示連体詞	88
	3.2.4 副詞	89
	3.2.5 指示様態詞	94
	3.2.6 感嘆詞	95
	3.2.7 助詞	97
第 4 章	節	99
4.1	節の基本構造	99
	4.1.1 項	100
	4.1.2 述語	100
	4.1.2.1 動詞述語	100
	4.1.2.2 名詞述語	101
4.2	動詞節	101
4.3	名詞節	104
4.4	文法関係	106
	4.4.1 主語	106
	4.4.2 目的語	108
	4.4.2.1 直接目的語	108
	4.4.2.2 間接目的語	108
4.5	格	109
	4.5.1 格標示体系	109
	4.5.2 格標示のアラインメント	111
	4.5.2.1 琉球諸語の中での位置づけ	111
	4.5.2.2 中立型に推移した歴史的背景	112
	4.5.3 談話内における直格項の表出環境	114
	4.5.3.1 談話内における直格項の表出の有無とその形式	114
	4.5.3.2 焦点が当たっている場合	117
	4.5.3.3 予測不可能な指示転換が起こる場合	118
	4.5.3.4 その他：項と動詞の結びつきが強い場合	120
第 5 章	名詞類と名詞形態論	123
5.1	代名詞	123
	5.1.1 人称代名詞	123
	5.1.1.1 1 人称代名詞	125

5.1.1.2	2 人称代名詞	126
5.1.1.3	3 人称代名詞	127
5.1.2	再帰代名詞	128
5.1.3	指示代名詞	129
5.1.4	疑問代名詞	131
5.2	語彙名詞	132
5.3	数詞	133
5.4	名詞の形態操作	135
5.4.1	複合	135
5.4.2	接辞	137
5.4.2.1	複数接辞	137
5.4.2.2	指小接辞	140
5.4.2.3	場所化接辞	140
第 6 章	動詞形態論	143
6.1	動詞の基本構造	143
6.1.1	一般動詞	144
6.1.2	属性動詞	144
6.1.2.1	構造	144
6.1.2.2	属性動詞の歴史的特徴	145
6.2	語幹クラス	146
6.2.1	各クラスの形式	146
6.2.2	不規則動詞語幹	148
6.2.3	語幹クラスに関する先行研究	149
6.3	動詞の屈折形式	150
6.3.1	屈折と派生	150
6.3.2	各動詞形式	151
6.3.2.1	確信形 1、確信形 2、命令形、禁止形、意志形	151
6.3.2.2	時制形	154
6.3.2.3	条件副動詞形 1、条件副動詞形 2、付帯副動詞形	155
6.3.2.4	中止形	157
6.4	屈折接辞	158
6.4.1	過去接辞	158
6.4.2	非過去接辞	159
6.4.3	近接過去接辞	160
6.4.4	確信法接辞 1	163
6.4.5	確信法接辞 2	164
6.4.6	命令法接辞	165

6.4.7	意志法接辞	166
6.4.8	禁止法接辞	167
6.4.9	条件接辞 1	167
6.4.10	条件接辞 2	168
6.4.11	付帯接辞	169
6.4.12	中止接辞	169
6.5	派生接辞	170
6.5.1	使役接辞	170
6.5.2	受身接辞	173
6.5.3	可能接辞	175
6.5.4	否定接辞	176
6.5.5	語幹拡張接辞	178
6.6	接辞以外の動詞形態操作	178
6.6.1	複合	178
6.6.1.1	願望	180
6.6.1.2	許可	180
6.6.1.3	能力	181
6.6.1.4	その他	181
6.6.1.5	派生接辞なのかあるいは複合語の後部要素なのか	182
6.6.2	重複	182
第 7 章	品詞をまたぐカテゴリー	185
7.1	指示語	185
7.2	疑問語	188
第 8 章	名詞句	191
8.1	修飾部に名詞句と属格助詞が現れる場合	192
8.2	修飾部に指示様態詞が現れる場合	193
8.3	修飾部に指示連体詞が現れる場合	194
8.4	修飾部に連体節が現れる場合	195
8.4.1	基本的な構造	195
8.4.2	特殊な構造	198
8.5	主要部に形式名詞が現れる場合	199
8.5.1	時点を表す形式名詞	199
8.5.2	期間を表す形式名詞	200
8.5.3	事柄を表す形式名詞	201
8.5.4	物事を表す形式名詞	201
8.5.5	様態を表す形式名詞	202

8.5.6	程度を表す形式名詞	203
8.5.7	場所を表す形式名詞	204
8.5.8	予定を表す形式名詞	204
8.5.9	「言葉」「島」を表す形式名詞	204
8.6	名詞句が共格助詞を介し並列する場合	205
8.7	格助詞	205
8.7.1	奪格	206
8.7.2	与格 1	208
8.7.3	与格 2	210
8.7.4	具格	211
8.7.5	位格 1	212
8.7.6	位格 2	213
8.7.7	位格 3	214
8.7.8	向格	215
8.7.9	属格	215
8.7.10	共格	217
第 9 章	複数の動詞から成る動詞句	219
9.1	形式	219
9.2	補助動詞構文	220
9.2.1	継続を表す補助動詞 1 a(r)~da(r)	221
9.2.2	継続を表す補助動詞 2 biri	225
9.2.3	完了を表す補助動詞 nen	226
9.2.4	接近を表す補助動詞 k	227
9.2.5	乖離を表す補助動詞 ng	228
9.2.6	経験を表す補助動詞 mi(r)	229
9.2.7	準備を表す補助動詞 sik	230
9.2.8	受益を表す補助動詞 hi(r)	230
9.2.9	敬意を表す補助動詞 o(r)	231
9.2.10	依頼を表す補助動詞 tabor	232
9.3	軽動詞構文	233
9.3.1	軽動詞 s	233
9.3.2	軽動詞 a(r)	235
9.3.3	軽動詞 nen	235
第 10 章	文の形成	237
10.1	主要な文の構造	237
10.1.1	疑問文	237

	10.1.1.1 真偽疑問文	237
	10.1.1.2 内容疑問文	239
	10.1.2 命令文	243
10.2	極性	243
10.3	テンス	246
10.4	アスペクト	248
	10.4.1 完結相	248
	10.4.2 継続相	249
	10.4.3 結果相	250
10.5	モダリティ	250
	10.5.1 ムード	251
	10.5.1.1 確信法	251
	10.5.1.2 命令法	254
	10.5.1.3 禁止法	254
	10.5.1.4 意志法	254
	10.5.2 モーダル助詞	254
	10.5.2.1 推量	255
	10.5.2.2 自問	258
	10.5.2.3 確信	260
	10.5.2.4 伝聞	264
	10.5.2.5 後悔	266
10.6	談話標識	266
	10.6.1 談話助詞 1	267
	10.6.2 談話助詞 2	267
	10.6.3 談話助詞 3	268
10.7	項構造の変更	268
	10.7.1 受動	269
	10.7.2 使役	271
第 11 章	節の結合	275
11.1	補文節	275
	11.1.1 引用助詞 1	275
	11.1.2 引用助詞 2	277
	11.1.3 引用助詞 3	279
11.2	逆接節・逆接助詞	280
11.3	副詞節	281
	11.3.1 理由を表す副詞節	281
	11.3.1.1 理由助詞 1	281

11.3.1.2	理由助詞 2	282
11.3.2	条件を表す副詞節	283
11.3.2.1	条件助詞	283
11.3.2.2	条件副動詞形 1	285
11.3.2.3	条件副動詞形 2	287
11.3.3	付帯状況をあらわす副詞節	291
11.3.3.1	付帯助詞	291
11.3.3.2	付帯副動詞形	292
11.3.4	限界点を表す副詞節・限界助詞	292
11.4	中止節	293
11.4.1	中止形	293
11.4.2	継起助詞	294
第 12 章	情報構造	295
12.1	焦点助詞	295
12.1.1	形式と分布	295
12.1.2	機能	297
12.1.2.1	新情報の導入	297
12.1.2.2	対比	299
12.1.3	係り結び現象	301
12.2	主題助詞	303
12.2.1	形式と分布	303
12.2.2	機能	306
12.2.2.1	主題	306
12.2.2.2	対比	307
12.2.2.3	時の規定	308
12.3	累加助詞と排他助詞	309
12.3.1	累加助詞	309
12.3.1.1	形式と分布	309
12.3.1.2	機能	310
12.3.2	排他助詞	313
終章		315
参照文献		319
付録 A	不規則動詞の活用表	325
付録 B	テキスト	331

B.1	自由会話「診療所での笑い話」	331
B.2	昔話「ナビハキタ（鍋搔き田）」	338

表目次

1.1	波照間方言に関する先行研究	12
2.1	子音音素目録	16
2.2	母音音素目録	16
2.3	子音連続の初頭に [m] が観察される場合の分析立場	27
2.4	音節組み合わせ一覧 (C)N	42
2.5	音節組み合わせ一覧 (C)NN	42
2.6	(C)Nn の組み合わせ一覧	47
2.7	ミニマルトリプレット・ミニマルペア	52
2.8	先行研究における 2 拍 (2 音節) 名詞単独のアクセント型および音調と本研究との比較	62
2.9	系列別語彙と語頭分節音に基づくアクセント型の分布	64
2.10	ミニマルペアの分布	65
3.1	品詞分類の基準	87
3.2	副詞	90
3.3	感嘆詞	96
3.4	格助詞一覧	97
3.5	接続助詞一覧	97
3.6	モーダル助詞一覧	98
3.7	疑問助詞	98
3.8	その他の助詞	98
4.1	格標識の一覧	110
4.2	焦点・主題助詞の分布	112
4.3	S 項の表出の頻度と形式	115
4.4	A/P 項の表出の頻度と形式 (自由会話)	116
4.5	A/P 項の表出の頻度と形式 (昔話)	116
5.1	人称代名詞と派生人称代名詞	124
5.2	指示代名詞 (人・事物)	130

5.3	指示代名詞（場所）	130
5.4	1 から 10 までの数詞	133
5.5	10 以上の数詞	133
5.6	類別接辞の一覧	134
5.7	複数接辞の付加例	138
5.8	指小接辞の付加例	140
6.1	一般動詞と属性動詞	143
6.2	語幹クラス	147
6.3	不規則動詞語幹の一覧	148
6.4	確信形 1、確信形 2、命令形、禁止形、意志形	153
6.5	時制形	154
6.6	条件副動詞形 1、条件副動詞形 2、付帯副動詞形	156
6.7	中止形	157
6.8	使役接辞の異形態（ahe 系統）	170
6.9	使役接辞の異形態（語幹クラス 2）	170
7.1	指示語（人・事物）	185
7.2	指示語（場所）	185
7.3	疑問語	189
8.1	格標識の一覧（再掲）	206
9.1	補助動詞の一覧	220
10.1	疑問語の一覧	239
10.2	各相の動詞形式	248
10.3	ムード形一覧	251
10.4	モーダル助詞一覧	255
10.5	項構造の変更操作	269
10.6	他動詞化可能な自動詞	272
12.1	=(n)du と=ru の分布	295
12.2	=ja と=ba の分布	303
A.1	不規則動詞 k「来る」	325
A.2	不規則動詞 s「する」	326
A.3	不規則動詞 en「言う」	326
A.4	不規則動詞 mu「思う」	327
A.5	不規則動詞 h「食べる」	327

A.6	不規則動詞 mi(r) 「見る」	328
A.7	不規則動詞 o(r) 「いらっしゃる」	328
A.8	不規則動詞 hi(r) 「あげる」	329
A.9	不規則動詞 a(r) 「ある」	329
A.10	不規則動詞 ja （コピュラ）	330

目次

1.1	日本列島	5
1.2	琉球諸語が話される地域	6
1.3	八重山諸島	6
1.4	波照間島	7
1.5	Pellard (2015: 15) による日本語族の系統図	9
1.6	ローレンス (2000) に基づき筆者が作成した広域八重山語支の系統図	10
2.1	波照間方言の音節構造	39
2.2	下降型アクセント	51
2.3	平進型アクセント	51
2.4	上昇型アクセント	51
2.5	/zïï/ 「血」	53
2.6	/zïï/ 「乳」	53
2.7	/zïï/ 「土・地面」	53
2.8	初頭に下降がない/minan/ 「貝」	57
2.9	初頭に下降がある/minan/ 「貝」	57
2.10	/nisjahan/ 「苦い」	60
2.11	/isjagahan/ 「小さい」	60
2.12	/marohan/ 「低い」	60
2.13	/takidupïtu/ 「竹富人」	64
2.14	/pïtu/ 「人」	64
2.15	平叙文のイントネーション 1	67
2.16	疑問のイントネーション 1	67
2.17	平叙文のイントネーション 2	68
2.18	疑問文のイントネーション 2	68
2.19	下降型の強調イントネーション	69
2.20	平進型の強調イントネーション	69
2.21	上昇型の強調イントネーション	69
2.22	下降型の強調イントネーション「使うだって?！」	70

2.23	平進型の強調イントネーション「木のそばにだって?！」	71
2.24	上昇型の強調イントネーション「大和だって?！」	72

例文について

3 章以降で提示する例文データは、基本的には 3 行で 1 セットとする。その他、各箇所が必要な情報を記載する場合がある。

1 行目 : 音韻表記と形態素境界

2 行目 : 形態素ごとのグロス

3 行目 : 日本語訳

- 1 行目に関して、借用と思われる語はスペースで区切り、山括弧<>内に記す。借用語は分析しないため、スペースで区切られるものの、2 語だという意味ではない。
- 2 行目に関して、ある形態素が多義的である場合でかつ内容語の場合、その場に応じてグロスを使い分ける。それが文法機能を表す機能語の場合には、グロスを統一する。

略号一覧

グロスに用いる略号は、leipzig glossing rules に従った。ただし、注意点が 2 つある。まず、4 文字以上のアルファベットの略号には、可能な場合、日本語（漢字 2 文字）を用いた。次に、形態素が対になっている場合や、特定の統語環境で用いられる形態素グループには、アルファベットか日本語を選択し、一貫させる。例えば、名詞に付加する除外と包括を表す形態素にはアルファベットを（EXCL と INC）、補助動詞構文で用いられる補助動詞には漢字 2 文字を選択した（継続、完了、接近など）。

1ST	1st person	1 人称	IND	indicative	確信
2ND	2nd person	2 人称	INS	instrumental	具格
3RD	3rd person	3 人称	INT	intentional	意思
ABL	ablative	奪格	INTJ	interjection	感嘆詞
ADVLZ	adverbializer	副詞化	LOC	locative	位格
ALL	allative	向格	NEG	negative	否定
CLF	classifier	類別辞	NPST	non-past	非過去
COM	comitative	共格	NOM	nominative	主格
COP	copula	コピュラ	PL	plural	複数
CVB	converb	中止接辞	POT	potential	可能
DAT	dative	与格	PST	past	過去
DIM	diminutive	指小辞	Q	question	疑問
DIR.EV	direct evidential	直接証拠	RCTPST	recent past	近過去
DSC	discourse marker	談話標識	SE	stem extender	語幹拡張辞
EXCL	exclusive	除外	SG	singular	単数
FOC	focus	焦点	TOP	topic	主題
GEN	genitive	属格	-		接辞境界
HS	hearsay	伝聞	=		接語境界
IMP	imperative	命令	+		複合語要素境界
INC	inclusive	包括			

この他、* の記号を、話し手に非文法的であると判断された例文、あるいはこれまでに見つかっていない形式に記す。* の記号を、歴史的に存在していたと仮定される形式に記す。

序章

本論文の目的と構成

本論文の目的は、沖縄県八重山郡波照間（波照間島）で伝統的に話されている言葉（波照間方言）の文法を音韻、形態、統語の面から包括的に記述することである。全 12 章から成り立つ。

まず導入として、1 章で、波照間島の概要（地理、歴史、産業）と波照間方言の言語的な背景について述べる。

次に 2 章で、音声、音韻解釈およびアクセントといった、波照間方言の音声・音韻に関する記述を行う。

続いて、3 章から 12 章で、波照間方言の形態・統語に関する記述を行う。3 章では、本論文で使用する記述の単位（語、接辞、接語）を認定し、品詞分類を行う。4 章では節の基本構造、文法関係について述べる。5 章と 6 章では、主要な品詞である名詞と動詞の形式に関する記述をそれぞれ行う。名詞と動詞に認定される下位分類と、観察される形態操作、個々の接辞の機能について述べる。7 章では指示語と疑問語といった、品詞をまたぐ機能語について述べる。8 章では名詞句の構造と格について述べる。9 章では、節の述語を構成する動詞句が複数の動詞から成る場合について述べる。10 章では、主要な文のタイプと、観察される体系について述べる。11 章では、複数の節が結合した際に観察される従属関係について述べる。12 章で、談話の情報構造について述べる。以上の記述を踏まえたうえで、終章で今後の課題と展望をまとめる。

琉球列島には、数十の相互理解が不可能な下位方言があると言われ、それらの多くは今後 10～20 年で消滅するとされる¹。これらの下位方言の多くは、十分な記述の無いまま消滅の危機にさらされている。従って本研究は記述文法書としても価値があるといえよう。

これまでの調査

筆者はこれまでに、以下の日程で 1 週間から 1 ヶ月のフィールド調査を行った。

1. 2007 年夏（石垣島および波照間島）
2. 2008 年春（波照間島）
3. 2009 年春（波照間島）
4. 2009 年秋（波照間島）
5. 2010 年秋（波照間島）

¹ 現在、多くの地域で若年層の言葉には一部の語彙や表現に方言の特徴が残るのみである。

6. 2011 年夏（波照間島）
7. 2011 年秋（波照間島）
8. 2012 年冬（波照間島）
9. 2012 年春（石垣島）
10. 2012 年冬（波照間島）
11. 2017 年冬（波照間島）
12. 2019 年春（波照間島）

これらのフィールド調査および本研究は、以下の助成を受けている。

- 2008 年度 東京大学学術研究活動等奨励事業（国内）による学術奨励費
- 2009 年 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 LingDy 若手共同研究支援プログラム「琉球語諸方言の研究成果および研究資料の幅広い公開・利用に向けて—琉球語の文法概説書籍の刊行と Pear story テキストのウェブ上での公開」
- 特別研究員奨励費「琉球語波照間方言の研究（特別研究員：麻生玲子）」（2010 年度～2012 年度；課題番号 10J06081）
- 基盤研究（A）「消滅危機言語としての琉球諸語・八丈語の文法記述に関する基礎的研究（代表：狩俣繁久教授）」（2012 年度～2016 年度；課題番号 24242014）
- 鹿島学術振興財団助成「宮古語池間方言と八重山語波照間方言における無声鼻音の研究（代表：林由華氏）」（2017 年度～2018 年度）
- 若手研究「日本の消滅危機言語を対象とした大量の言語資料収集・蓄積方法に関する基礎研究（代表：麻生玲子）」（2018 年度～継続中；課題番号：18K12390）

本論文で用いるデータ

本論文で示すデータは、筆者がフィールド調査（面接調査および自由談話）で収集した音声資料を書き起こしたテキスト、および柴田（1972）の音声資料を筆者が書き起こしたテキストである。

主な調査協力者は以下の通りである（五十音順）。どの方も波照間島出身で、両親、夫も共に波照間島出身である。括弧内に性別、生年、および現在の居住地を記す。

- 崎山チヨさん（女性、1918 年生まれ、北）
- 田盛吉さん（女性、1939 年生まれ、北）
- 鳩間末さん（女性、1931 年生まれ、北）
- 前迎スミさん（女性、1930 年生まれ、石垣島）
- 宮良英子さん（女性、1930 年生まれ、北）
- 山田シゲさん（女性、1917 年生まれ、前）
- 屋良部ヒデさん（女性、1924 年生まれ、北）

なお、筆者がフィールド調査で収集した音声資料と書き起こしテキストは、順次以下の URL で公開し

ている：<http://haterumatext.webcrow.jp/>²

本論文の内容の一部は、以下に示す筆者の研究成果に加筆・修正を行ったものである。

- 全体
 - 麻生玲子 (2013) 「八重山波照間方言の文法スケッチ」 狩俣 繁久 (編) 『琉球諸語 記述文法 I – 消滅危機言語としての琉球諸語・八丈語の文法記述に関する基礎的研究』 47–74.
 - Aso, Reiko (2015) “Hateruma Yaeyama grammar”. In Heinrich, Patrick and Miyara, Shinsho and Shimoji, Michinori (eds.) *Handbook of the Ryukyuan Languages –History, Structure, and Use*. 423–447. Berlin/Boston/Munich: Mouton de Gruyter.
- 第 2 章
 - 麻生玲子・小川晋史 (2015) 「南琉球八重山語波照間方言の三型アクセント」 『言語研究』 150. 87–115.
- 第 4 章
 - 麻生玲子 (2009) 「南琉球八重山波照間方言における格標識と語順」 口頭発表. 日本言語学会第 138 回大会. 2009 年 6 月 20 日. 神田外語大学.
- 第 6 章
 - 麻生玲子 (2010) 「琉球語波照間方言の動詞と助詞の研究」 修士論文. 東京大学.
 - 麻生玲子 (2010) 「南琉球八重山波照間方言の「形容詞」認定に関する問題」 口頭発表. 日本言語学会第 141 回大会. 2010 年 11 月 27 日. 東北大学.
 - 麻生玲子 (2012) 「八重山波照間方言における動詞の屈折と派生をテキストから考察する」 口頭発表. 国立国語研究所.
 - 麻生玲子 (2013) 「八重山語波照間方言の分詞 一単独形式と接語が付加した形式の機能一」 『北方言語研究』 55–68.
- 第 12 章
 - 麻生玲子 (2011) 「南琉球八重山方言における焦点標識および主題標識の機能と分布」 口頭発表. 日本言語学会第 142 回大会. 2011 年 6 月 18 日. 日本大学.

² 執筆時点ではメンテナンスしており、当面はアクセスに問題ないと思われる。しかし、生涯にわたり保証できるものではないため、その点はご了承ください。

第 1 章

波照間島と波照間方言

波照間方言は、主に波照間島で伝統的に話されている言語である。本章では、まず波照間島の地理的特徴および歴史や産業といった生活に関する特徴について 1.1 と 1.2 で述べる。次に、波照間方言の言語的背景と、主な先行研究について 1.3 と 1.4 でそれぞれ述べる。

1.1 地理

波照間島は、北緯 24 度 2 分 44 秒、東経 123 度 47 分 18 秒に位置する日本最南端の有人の島である。島の面積は 12.77 平方キロメートル、周囲は 14.8 キロメートルである。波照間島は図 1.1¹に示す日本列島の地図のうち、南に位置する琉球列島に含まれる。琉球列島は、北は鹿児島県の奄美諸島から沖縄県に広がる大小様々な島で構成されている。

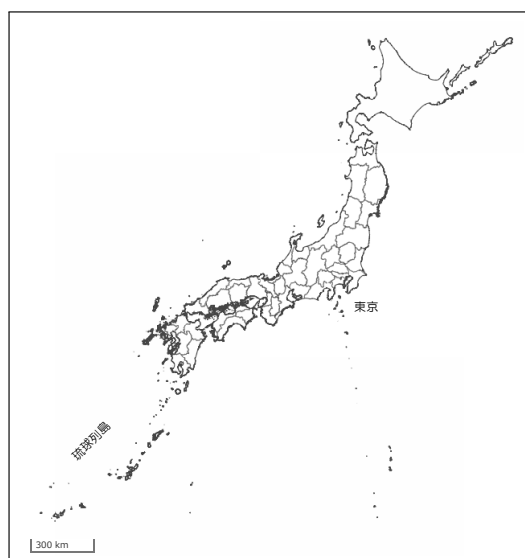


図 1.1: 日本列島

¹ 本地図は、国土地理院が公開している地図 (<http://maps.gsi.go.jp/>) に基づき筆者が作成したものである。

図 1.2²に琉球列島の地図を示す。琉球列島は沖縄本島と宮古諸島を境に北琉球と南琉球に分かれる。波照間島は南琉球の八重山諸島の一部である。

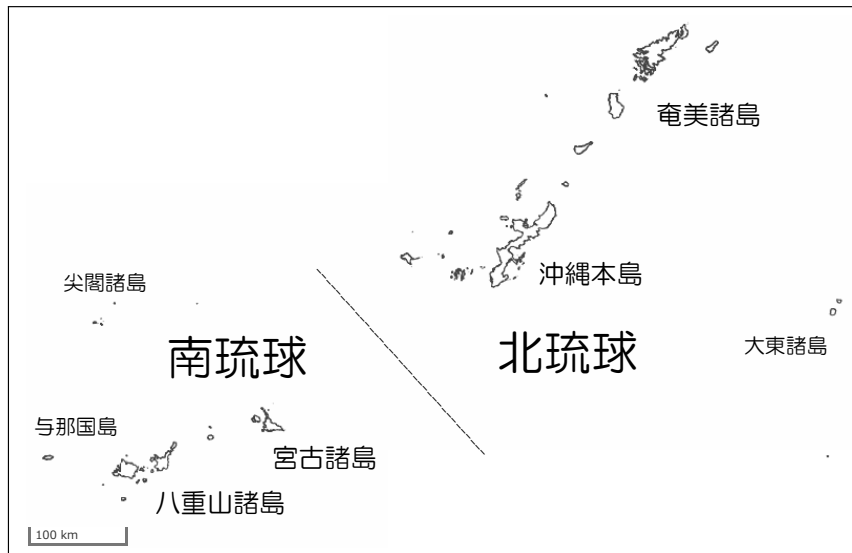


図 1.2: 琉球諸語が話される地域

八重山諸島を拡大した地図を 図 1.3³に示す。

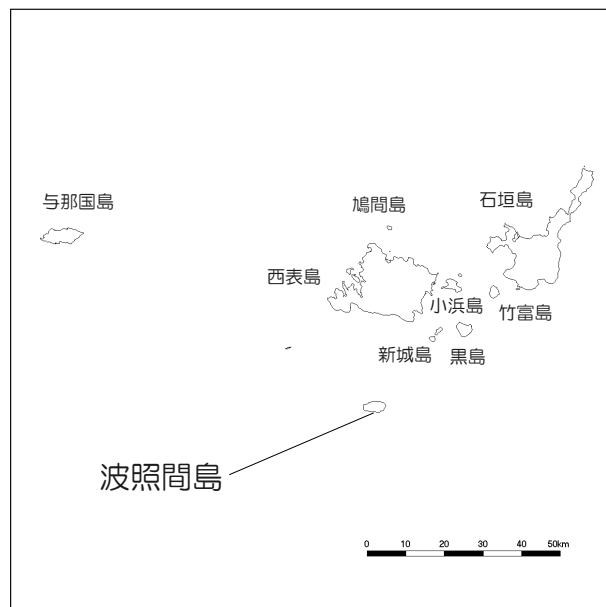


図 1.3: 八重山諸島

² 本地図は、国土地理院が公開している地図 (<http://maps.gsi.go.jp/>) に基づき筆者が作成したものである。

³ 本地図は Aso (2010) に基づき、筆者が表記を日本語に修正したものである。

八重山諸島は、人口や経済活動が最も大きい石垣島を中心に、竹富島、小浜島、黒島、新城島、西表島、鳩間島、与那国島、そして波照間島から成り立っている。

行政区画として、波照間島は沖縄県八重山郡竹富町に属する。石垣島は一島で沖縄県石垣市、与那国島は、沖縄県八重山郡与那国町、その他の島は、波照間島と同じ沖縄県八重山郡竹富町である。竹富町は複数の島から成るため、利便性を考慮して竹富町役場は現在石垣島にある。

波照間島の地図を図 1.4⁴に示す。図を見るとわかるように、島の北西部から中心部にかけて集落がある。西から富嘉、名石、前、南、北という5つの集落から成り立っている。



図 1.4: 波照間島

1.2 生活

1.2.1 歴史

波照間島に居住する人々の祖先がいつ頃、どこから移住してきたかについては十分な証拠がなく、未だ不明である。しかし、歴史言語学的観点から琉球諸語が広がった時期が同定されつつある。Pellard (2015) によれば、琉球諸語の話し手は、10～12 世紀以降九州を経由して琉球列島に広がったと考えられている。波照間島では、13～15 世紀頃のものとして複数の遺跡が見つかった⁵。これらを考慮すると、琉球諸語の話し手が広がったとされる時期に、波照間島にも九州方面からの人口の流入があったと考

⁴ 本地図は Google earth に基づき筆者が作成したものである。

⁵ 沖縄県立博物館 (1998: 147) によると、下田原城跡、伝マシユク村跡遺跡、伝ヤグ村跡遺跡、伝ミシユク村跡遺跡、伝ペーミシユク村跡遺跡、伝シムス村跡遺跡などが見つかった。なお、このうち伝ヤグ村跡遺跡に関する民話は「ナビハキタ」(巻末の付録テキスト B.2 に収録)として今でも語り継がれている。

えて差し支えないだろう。

16世紀以降は、波照間島を含む八重山諸島は琉球王国に支配される。17世紀以降は薩摩の支配下に置かれ人頭税の制度が20世紀初頭まで続いた(アウエハント 2004)。その間、18世紀に他島への強制移住があったことは知られているものの⁶、当時の生活についてはあまり知られていない(沖縄県立博物館 1998: 3)⁷。第二次世界大戦中は、全島民が軍命によって西表島(南風見⁸)への疎開を余儀なくされた。

なお、古い遺跡としては、3,000~4,000年前を中心として考えられている下田原貝塚とおよそ4世紀~12世紀のものと考えられている大泊浜貝塚が古い遺跡としてそれぞれ見つかっている。下田原遺跡で発掘された土器片(下田原様式)は、沖縄本島や九州以北の日本文化には見られない特徴を有していることから南方系のものと考えられており(沖縄県立博物館 1998: 130)、想定される起源については、中国大陸南部や台湾、さらに南東の島々などで一致して(石垣市教育委員会文化財課 2014)。

1.2.2 産業

現在の波照間島の産業の中心は、農業(サトウキビ)である。1963年に大型製糖工場を導入して以降、サトウキビの単作農業時代に移り現在に至る。近年は観光業も盛んになりつつある。

サトウキビ農業以前は、20世紀初頭から中頃まではカツオ漁が産業の中心を担っていた時期もある。そのうち、1930年代から1940年代前半までは最も波照間島に活気があった時代だという(沖縄県立博物館 1998)。しかし第二次世界大戦中、軍命による西表島への疎開をきっかけに島民のほとんどがマラリアにかかるという悪夢に見舞われる。それにより人口の三分の一を失い、かつ家畜を失うなど、甚大な被害を被った(石原 1983)。大型製糖工場導入後も、漁業を継続し、他の産業も試みるが、島の過疎化によりどれも続かなかったという。

1.3 言語的背景

1.3.1 言語系統

波照間方言は琉球語派の中の南琉球語群に属する。図 1.5 に、Pellard (2015) の日本語族の系統図を挙げる。図中の下線部は筆者による。

⁶ 沖縄県立博物館 (1998: 3) によると、波照間島の住民は、1713 年(石垣島白保村)、1734 年(西表島南風見村)、1755 年(西表島崎山)、1771 年(石垣島大浜村、白保村)と 60 年の間に 4 度も強制移住させられている。

⁷ 古文書の中に波照間島が初めて登場するのは、15 世紀末に書かれた『李朝実録』の「済州島民漂流記録」である(沖縄県立博物館 1998: 151)。

⁸ ほとんどが南風見へ疎開し、一部が古見と由布島に疎開した(石原 1983)。

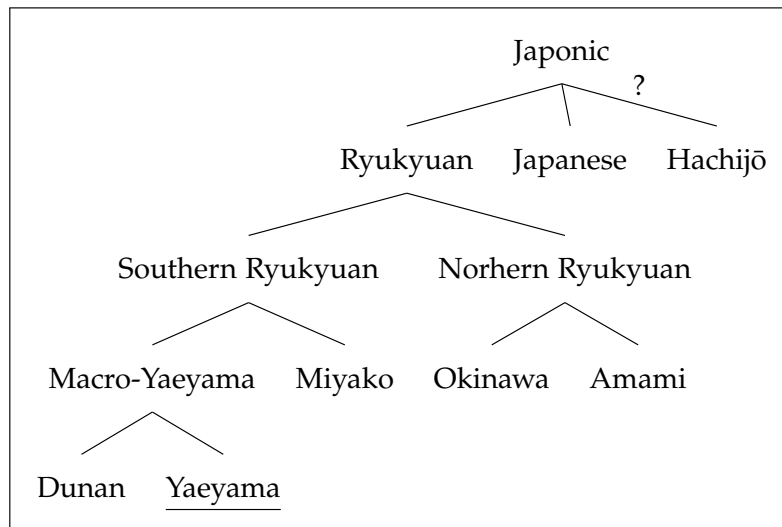


図 1.5: Pellard (2015: 15) による日本語族の系統図

Pellard (2015) によると、南琉球語群には八重山諸島で話されている広域八重山語支(Macro-Yaeyama)と宮古語があり、そのうち広域八重山語支には与那国語(原文では **Dunan**)と八重山語が属する。本論文では、琉球語派に属する語の総称として琉球諸語という用語を用いる。琉球諸語に属するそれぞれの語を与那国語、八重山語、宮古語、沖縄語、奄美語と呼び、下位分類については方言と呼ぶ。波照間方言は八重山語波照間方言である。

広域八重山語支の系統関係については、ローレンス (2000) が詳しい。図 1.6 に、ローレンス (2000) に基づき筆者が作成した広域八重山語支の系統図を挙げる。石垣島と西表島は、島面積が広く、島内の方言差が大きい。石垣島と西表島の方言に関しては、島内の地名のみでは地理情報が判別しにくいいため、括弧に島名を併記した。

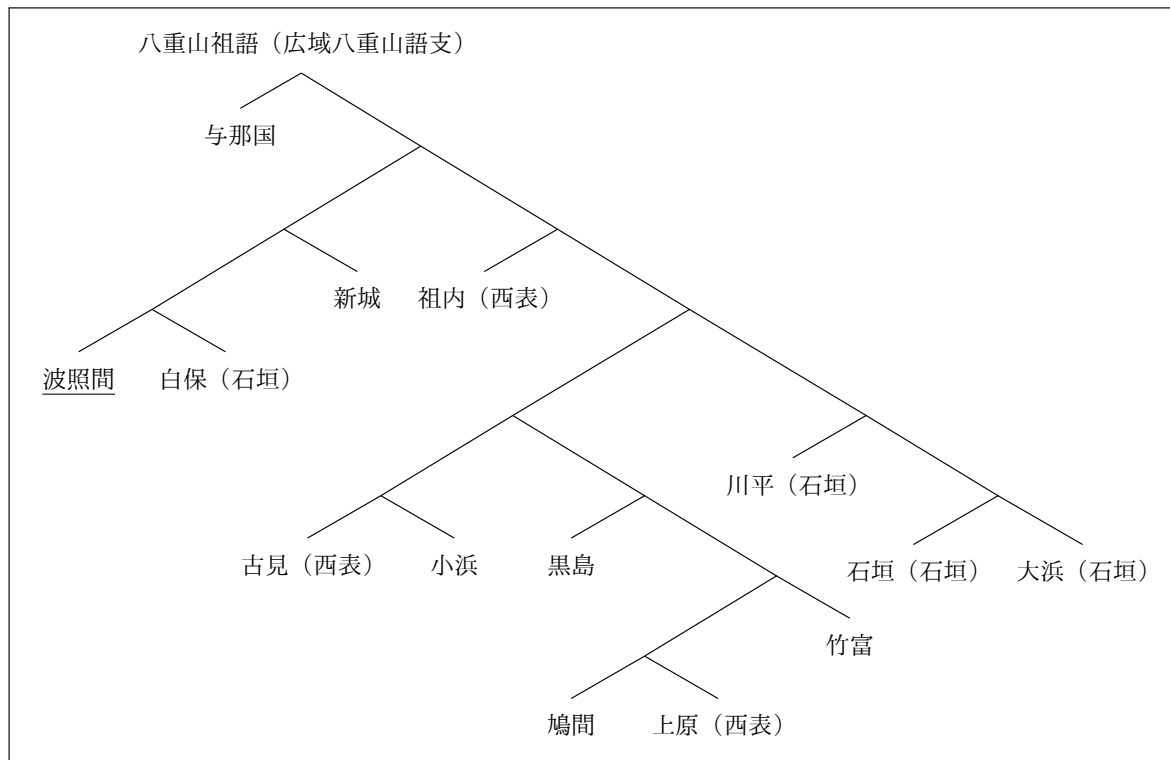


図 1.6: ローレンス (2000) に基づき筆者が作成した広域八重山語支の系統図

図 1.6 を見ると、波照間方言は、与那国語と分岐した後、比較的早い段階で他の八重山語諸方言から分岐していることが分かる。筆者の観察によれば、波照間方言話者が八重山語の他の方言を聞いた際に理解できないことがあった。従って、八重山語の中でも方言によっては相互理解性が欠けると思われる。このため波照間方言を独立的に「波照間語」と呼ぶことも可能であるが、ここでは便宜上、波照間方言と呼ぶ。

1.3.2 方言差

波照間方言内部の方言差には2つの段階がある。まず、より大きい方言差として挙げられるのは、石垣白保方言と波照間方言の方言差である。石垣白保方言は、18世紀に波照間島からの移住によって再建された石垣島の白保集落で話されている方言である。波照間方言話者の話では、白保方言と波照間方言はお互いに相互理解が可能である。一方で、アクセント体系や動詞の活用形についても異なる点がいくつか挙げられる。白保方言について、詳しくは中川他 (2015, 2016) を参照されたい。

次に、波照間島内の方言差である。波照間島は図 1.4 に挙げたとおり、5つの集落に分かれている。5つの集落は西から東の順に、富嘉、名石、前、南、北である。パップラルド (2012) の報告から、母音/ε/に富嘉とその他の集落で違いがあることが分かっている (p. 34, 注 14)。その他にも、アクセントの違いが富嘉とその他の集落で異なる可能性がある (麻生・小川 2016)。このような差が見られるものの、相互理解を損なう程度ではないため、コミュニケーションに何ら問題は生じない。本論文では、北集落の方言に焦点を当てる。

1.3.3 話者人口

波照間方言の話者人口を正確に示すことは難しい。しかし、筆者の経験から、1940年代半ば頃までに生まれた方であれば、流暢な波照間方言を話すことが可能である。筆者のこの観察が正しいとすれば、波照間島における波照間方言の話者人口は、およそ120人だと推定できる⁹。ただし、波照間島以外にも石垣島や本島などに移り住んでいる方もいるため、実際の波照間方言話者は120人よりも多いことが見込まれる。

40～60歳代の若い人々は、波照間方言を聞き理解することはできるものの、話すことは難しいようである。さらにそれよりも若い世代は波照間方言をほとんど理解することはできない。

1.3.4 島名・言語名

波照間島は波照間方言で「ベスマ」と呼ばれる。この語の意味は「私達の島」である。このような言い方で波照間島を指す。形態的な構造を次に示す。

- (1-1) be+sima
1ST.PL.INC+ 島
「私達の島」

be～be は、1人称代名詞の包括複数形¹⁰である。ほぼ固有名詞化している¹¹。

波照間方言は「ベスマムニ」と呼ばれる。この語の意味は「私達の島言葉」である。形態的な構造を次に示す。

- (1-2) be+sima+muni
1ST.PL.INC+ 島 + 言葉
「私達の島言葉」

波照間島や波照間方言を指す語には、1人称代名詞の包括複数形 be「私達」が用いられる。それゆえ、波照間島出身者でない限り、波照間島や波照間方言をベスマあるいはベスマムニとは呼べない仕組みになっている(麻生 2012)。従って島出身者が否かを問わず、誰もが使用可能な「波照間島」あるいは「波照間方言」を指す固有名詞は波照間方言には存在しない¹²。

1.3.5 類型の特徴

波照間方言の典型的な特徴は次のとおりである。

⁹ 竹富町 HP より。アクセス:2016年2月18日。URL: http://www.town.taketomi.lg.jp/town/index.php?content_id=41

¹⁰ 話し手と聞き手を含む。

¹¹ 筆者に向かって1人称単数形 ba～baa「私」を用いた表現で波照間島を指す例 (ba+sima「私の島」) が見つかったため、完全に固有名詞化しているとは言えない。

¹² 波照間出身者以外が無理やり方言で言うとしたら、「クヌスマ (この島)」や「スマムニ (島言葉)」といった語を用いる。

- 基本語順は、日本語および琉球諸語を含む日本語族と同様に SV/APV である (4.1)。
- 修飾部や項に助詞が後続し、主要部に対する役割を示す特徴を持つため、従属部標示型の言語であると言える。
- 格標示体系は、日本語族のほとんどが主格対格型であるにもかかわらず、波照間方言は中立型である。(4.5.2)。
- 主要な品詞（名詞および動詞）に対する形態法は接尾辞の付加が最も多く、次いで複合が比較적으로観察される (5 章、6 章)。かつてあったと推定される形態法に、重複がある (6 章)。
- 音声的な特徴として、語頭の無声阻害音に後続する母音の無声化が頻繁に起こることが挙げられる。
- 音韻的な特徴として、母音の長短、子音の長短の区別が基本的に非弁別的であり、三型アクセント体系かつ語声調の言語であることが挙げられる (2 章)。

1.4 先行研究

波照間方言に関する先行研究の多くは、八重山語の記述の一部として波照間方言に触れているものである（例えば、アクセントに関して挙げると、秋永 1960, 平山・中本 1964, 平山他 1967 など）。波照間方言のみを詳しく扱った先行研究は限られている。ここでは先行研究の中でも、波照間方言あるいは波照間島について詳しく研究されているものを、表 1.1 に挙げる¹³。

表 1.1: 波照間方言に関する先行研究

言語学的分析	簡易文法書	Aso (2010, 2015a), 麻生 (2015b)
	音声・音韻	沖縄県教育委員会 (1975), 加治工 (1996)
	アクセント	麻生・小川 (2016)
	動詞形態	麻生 (2009)
言語資料	辞書	中松 (1987), 平山 (1988)
	談話資料	柴田 (1972)
	諺集	西岡 (2010)
文化人類学的分析		アウエハント (2004)
波照間島全体に関する資料		沖縄県立博物館 (1998)

このうち辞書に関して、中松 (1987) は、波照間を含む複数の八重山語下位方言の語彙が対照できるよう記されている。同じく辞書に関して、平山 (1988) は非常に詳しい辞書である。波照間方言のみを対象にしたものではないが、波照間方言に関する語彙がイラスト付きで豊富に示されている。特に現在ではあまり使用されていない漁業に関する語彙や、昔の生活に関する語彙は、調査中に話者がすぐに思い出せるような語彙ではないため貴重である。談話資料に関して、柴田 (1972) は音声とその書き起こしがセット

¹³ 表 1.1 に挙げた先行研究は、八重山語の一部として波照間方言に触れている細かい先行研究を網羅している。

になっており、談話が10話ほど収録されている¹⁴。文化人類学的な観点から詳しく記述されたアウエハント (2004) は、言語資料としても価値が高い。地名や屋号を網羅し、現在では失われつつある波照間島の神行事に関してもセリフとともに記されている。

¹⁴ この録音資料を書き起こし直したものに関して、次のウェブサイトで公開している。URL: <http://haterumatext.webcrow.jp>

第 2 章

音韻論

本章では、波照間方言の音韻に関して述べる。まず 2.1 で音素を提示し、続く 2.2 と 2.3 で音節構造とアクセント体系について述べる。2.4 でイントネーションについて記述し、最後に 2.5 で音韻規則について述べる。

2.1 音素とその実現形

波照間方言の音素として子音音素 16 個、母音音素 7 個を認める。音声的長母音は、音韻的に短母音の連続が実現したものと解釈する (2.2.1)。母音の長短の対立について、これまでに単一形態素から成る語同士でのミニマルペアは見つかっていない¹。同一語でも短母音で実現する場合もあれば、長母音で実現することもある。しかし、常に（音声的に）長母音で実現する語もあるため、長短の対立が弁別的ではないとは言いきれない。同一語で短母音と長母音で実現する環境は、音韻規則 (2.5.1) で記述し、音声的長母音は短母音音素の連続として記述する。

表 2.1 と表 2.2 に音素目録を示す²。子音音素については 2-1 で、母音音素については 2.1.2 でそれぞれ詳しく述べる。

¹ 唯一、アクセント型も同じ単語で見つかっているのは /mici/ 「道」と /mii-ci/ 「3 つ」である。ただし後者は (1) 2 つの形態素から成る点と (2) 音韻規則により長母音化している可能性があり、明確に弁別的であると言えない。

² 音素として用いる記号には、なるべく IPA に準ずる記号を用いた。ただし、便宜的に [g] に /g/ を、[ts] に /c/ を、[r] に /r/ を、[i] ~ [ə] に /i/ を、[ɐ] に /a/ を用いる。詳しくは各音素の実現形を参照されたい。

表 2.1: 子音音素目録

		唇音	歯茎音	硬口蓋音	軟口蓋音	声門音
閉鎖音	無声	p	t		k	
	有声	b	d		g	
破擦音	無声		c			
	有声		z			
摩擦音		f	s			h
鼻音		m	n			
はじき音			r			
接近音		w		j		

表 2.2: 母音音素目録

	前舌	中舌	後舌
狭	i	ï	u
中	e	ë	o
広		a	

2.1.1 子音音素

子音音素は調音点からみて唇音、歯茎音、硬口蓋音、軟口蓋、声門音の各類に分類され、また調音方法から見て閉鎖音、破擦音、摩擦音、鼻音、はじき音、接近音の各類に分類される。/z/は、歯茎摩擦音/s/に対応する有声子音ではなく、無声歯茎破擦音/c/に対応する有声子音と解釈する。このように考える根拠は、歴史的に/c/と/z/がクラスを成していると考えからである。例えば、/zi/「乳」は、後に2.3で述べる通り、平進型アクセントを持つ。波照間方言の平進型アクセントは、語頭に無声子音あるいは母音が想定され、歴史的に*cï > ziの変化があった可能性が高い(麻生・小川 2016)。よって、閉鎖音と破擦音に関して、有声・無声の対立が観察されると分析する³。

子音音素に関して特筆すべき点は(1)無声閉鎖音と無声摩擦音が語頭で帯気音として実現する点と、(2)いくつかの子音音素が、環境によって他の子音音素と中和する、すなわち同じ分節音で実現する点である。前者に関しては、各異音を参照されたい。後者に関しては、3つの環境が観察される。/t/は/i/の前で口蓋化し、結果として/ci/と中和する。/d/は/i/の前で口蓋化し、結果として/zi/と中和する。/h/は/u/の前で唇音化し、結果として/fu/と中和する。形態論的な観点から、明らかに/ti/、/di/、/hu/

³ 一方で、議論の余地は残る。連濁の音韻規則(2.5.4)には、無声摩擦音/s/が/z/と交替する例、すなわちsara「皿」という語が含まれていると考えられるkuzara「小皿」、buzara「大皿」という語が見つまっているからである。連濁によって無声閉鎖音/c/と/z/が交替する例は見つかっていない。ただし、無声閉鎖音/p/および摩擦音/f/は、共に連濁によって有声両唇閉鎖音/b/と交替する例が見つまっているため、連濁の規則だけでは決めかねる。従って筆者は、/z/を/c/に対応する有声子音とする歴史的な説明にも耐えうる立場を選択した。

であるものについては、それぞれの音素/*ti*/、/*di*/、/*hu*/として扱い、それ以外のものは実現音を優先し、統一して/*ci*/、/*zi*/、/*fu*/として扱う。例えば、これまでの調査では、次に挙げる/*uti*/「落ちる」、/*ndi*/「出る」、/*hunu*/「あげない」でのみ明らかである。

(2-1) / <i>uti</i> /	[utɕi]	落ちる (cf. / <i>uta</i> /「落ちている」)
/maci/	[mɛtɕi]	待つ (cf. / <i>macu</i> /交替語幹)
/ndi/	[ndzi]	出る (cf. / <i>nda</i> /「出ている」)
/zin/	[dzin]	銭
/hunu/	[f ^h u _u u]	あげない (cf. / <i>hi</i> /「あげる」)
/funi/	[f ^h u _u i]	船

2.1.1.1 閉鎖音

閉鎖音は/*p*/、/*b*/、/*t*/、/*d*/、/*k*/、/*g*/の6つで、3つの調音点のそれぞれで無声と有声の対立がある。無声閉鎖音は、帯気音として実現する。2音節以上からなる語でかつ初頭音節が軽音節からなる語（例えば/*pītu*/「人」や/*paton*/「鳩」など）では、語頭の無声閉鎖音の帯気が後続する母音を無声化する（2.2.2）。

■唇閉鎖音

唇閉鎖音には、無声の/*p*/と有声の/*b*/の2つを認定する。

- /*p*/
 - 無声帯気両唇閉鎖音：[p^h]

(2-2) 語頭

/paa/	[p ^h ɛ:]	葉
/pii/	[p ^h i:]	火
/puu/	[p ^h u:]	穂
/pee/	[p ^h ɛ:]	南
/poo/	[p ^h o:]	穂
/pëë/	[p ^h ɛ:]	灰
/pīni/	[p ^h i _u i]	ひげ

(2-3) 非語頭

/sīpari/	[s ^h i _u p ^h ɛri]	小便
/tapi/	[t ^h ɛp ^h i]	旅
/busupu/	[bus ^h u _u p ^h u]	尻尾
/asīpoo/	[ɛs ^h i _u p ^h o:]	遊びます

/pī/は基本的に語根頭以外の環境では現れない。複合の形態操作を受けた場合は語中に現れうる。

- (2-4) /ucizap̥itu/ [utsizep̥^hitu] 兄弟 (/uciza/「兄弟」+ /p̥itu/「人」)
 /jamatup̥itu/ [jemetup̥^hitu] 大和人 (/jamatu/「大和」+ /p̥itu/「人」)

語中に /p̥i/ が観察される例として、/p̥iip̥i/「とても薄く」というような語が例外的に残る。

- (2-5) /p̥iip̥i/ [p̥^hi:p̥^hi] とても薄く (cf. /p̥isjaha/「薄い」)

このような例は、歴史的には語根の重複という形態操作で説明できる可能性が高い。なぜなら /p̥iip̥i/「とても薄く」に対して、/p̥isjaha/「薄い」という語が観察されるからである。/p̥isjaha/「薄い」の語根 /p̥i/ が重複したと考えれば、/p̥iip̥i/ の語中の /p̥i/ も語根頭と考えられる。重複法に関しては、この他、副詞に 10 個程度、動詞に 2 例見つかっているのみで現代では観察されない。重複については 6.6.2 を参照されたい。

- /b/
 - 有声両唇閉鎖音 : [b]

(2-6) 語頭

/baa/	[bɛ:]	1ST.SG
/bira/	[birɛ]	ニラ
/busupu/	[bus ^h upu]	尻尾
/bee/	[be:]	1ST.PL.INC
/boo/	[bo:]	棒

(2-7) 非語頭

/aba/	[ɛbɛ]	油
/naabi/	[nɛ:bi]	鍋
/takabu/	[t ^h ɛk ^h ɛbu]	煙草
/abee/	[ɛbe:]	あらまあ (感嘆詞)
/abo/	[ɛboɛ]	お母さん (/abwa/ ~ /abo/)

■ 歯茎閉鎖音

無声の /t/ と有声の /d/ の 2 つを認定する。/ti/、/di/ は、それぞれ uti「落ちる」、ndi「出る」という動詞語幹で見つかっているのみである⁴。

- /t/
 - 無声歯茎硬口蓋破擦音 : [t̪] / _i

⁴ /ti/ に関しては、歴史的に [ti] が実現していた可能性がある。現代の共時態で /ci/ と解釈する語の中で、/sitomuci/ [c^hitomuɬi]「朝」がある。これまでの調査で、1 度だけ /sitomuci/ が [c^hitomuɬi] と実現した例を観察した。これは、/ti/ がかつて [ti] で実現していた表れかもしれない。/sitomuci/ に関しては、周辺の言語を見ると歴史的に /sitomuti/ であった可能性が高いが、観察されたのはその一度のみであるため、本論文では /sitomuci/ として扱う。2.1.1 の冒頭で述べた通り、現在は [t̪i] と発音されるものには /ti, ci/ があり、本論文では形態論的な観点で /ti/ と解釈できるもののみ /ti/ と認定する。

– 無声帯気歯茎閉鎖音 : [t^h]

/t/には、特定の語彙に自由変異として [t^h] が見つかっているが、規則による一般化が現段階ではできない。トークンによって短子音で実現する場合と、長子音で実現する場合がある。

(2-8)	/ota/	[ot ^h e] ~ [ot ^h e]	いらっしゃった (cf. /o/ 「いらっしゃる」)
	/bata/	[bet ^h e] ~ [bet ^h e]	お腹

本節の冒頭で述べた通り、/ti/は形態論的な観点から/ci/ではないことが明らかなもののみにみ認定している。従って/ti/の例は uti「落ちる」のみである。形態的に/ci/ではなく/ti/だと考えられる理由は、「落ちる」を意味する [utɕi] が、[utɕ] (/uta/)「落ちている」に変化するからである。一方、形態的に/ci/と分析する語には、例えば「持って」を意味する [mutɕi] や、「待つて」を意味する [metɕi] がある。これらの動詞語幹は、それぞれ [mutsenu] (/mucanu/)「持たない」、[metsenu] (/macanu/)「待たない」と変化するためそれぞれ/muci/、/maci/と分析する。

(2-9)	[tɕ]	
	/uti/	[utɕi] 落ちる

(2-10)	[t ^h] : 語頭	
	/taa/	[t ^h e:] 誰
	/tun/	[t ^h uŋ] 妻
	/tokkin/	[t ^h okɪŋ] グアバ

(2-11)	[t ^h] : 非語頭	
	/sata/	[s ^h ɛt ^h e] 砂糖
	/butu/	[but ^h u] 夫
	/fute/	[f ^h ut ^h e] 額
	/paton/	[p ^h ɛt ^h oŋ] 鳩

• /d/

- 有声歯茎硬口蓋破擦音 : [ɖ] / _i かつ先行する音素が V 以外
- 有声歯茎閉鎖音 : [d] / 上記以外の環境

/di/の例は ndi「出る」のみである。例えば、「出る」を意味する [ndɕi] が、[ndɕ] (/nda/)「出ている」に変化する。従って [ndɕi] を/ndi/と分析する。ただし、/ti/と/ci/に挙げた例のように、語幹末で/di/と/zi/のペアが観察されないので、形態論的に議論できない。しかし/t/と/c/の体系性を考慮し、/d/と/z/と分析した。

(2-12)	[ɖ]	
	/ndi/	[ndɕi] 出る (cf. /ndan/ 「出た」)

(2-13)	[d] : 語頭	
--------	----------	--

/daa/	[dɛ:]	2ND.SG
/duu/	[du:]	体 (胴)
/deera/	[de:rɐ]	とても
/doo/	[do:]	～だよ (助詞)

(2-14) [d] : 非語頭

/onda/	[ondɐ]	かご
/jadu/	[jɛdu]	戸
/agadeguni/	[ɛgɛdeguni]	ニンジン

■軟口蓋閉鎖音

無声の /k/、有聲の /g/ の2つを認定する。

- /k/
 - 無声帯気軟口蓋閉鎖音 : [k^h]

(2-15) 語頭

/kaa/	[k ^h ɛ:]	匂い
/kii/	[k ^h i:]	毛
/kuu/	[k ^h u:]	粉
/kee/	[k ^h ɛ:]	井戸
/koozi/	[k ^h o:zi]	麴

(2-16) 非語頭

/s̥ikara/	[s̥ik ^h ɛrɐ]	力
/s̥aki/	[s̥k ^h i]	酒
/taku/	[t ^h ɛk ^h u]	タコ
/s̥iken/	[s̥ik ^h ɛŋ]	月
/sako/	[s̥k ^h o]	咳

/k/には、自由変異として [k^h] が特定の語彙に見つかっているが、規則による一般化が現段階ではできない。トークンによって短子音で実現する場合と、長子音で実現する場合がある。

(2-17) /gaku/ [gɛk^hu] ~ [gɛk^hu] 学校

- /g/
 - 有聲軟口蓋閉鎖音 : [g]

(2-18) [g] : 語頭

/gaja/	[gɛjɐ]	萱
--------	--------	---

/giigi/	[gi:gi]	はっきり
/guccee/	[guttse:]	雄牛
/gokka/	[gok: ^h ɐ]	ニワトリ

(2-19) [g] : 非語頭

/iga/	[ige]	イカ
/irigi/	[irigi]	鱗
/kagu/	[k ^h ɛgu]	かご
/jafugee/	[je ^f h ^u ge:]	(着物などの) 入れ物

2.1.1.2 破擦音

破擦音として無声の/c/と、有声の/z/の2つを認定する。/c/は破擦音で実現し、/z/は現れる環境により、破擦音または摩擦音として実現する。2.1.1の冒頭で述べた通り、/z/は、/s/ではなく/c/と対を成す。

/c/は語頭で現れる例が見つかっていない。例はすべて語中のものである。

- /c/
 - 無声歯茎硬口蓋破擦音 : [t͡ɕ] / _i
 - 無声歯茎破擦音 : [ts] / それ以外の環境

(2-20) [t͡ɕ]

/sitomuci/	[s ^h it ^h omut͡ɕi]	朝
/fuciri/	[f ^h ut͡ɕiri]	葉
/muci/	[mut͡ɕi]	持つ (cf. /mucu/ 「持つ」)
/inaci/	[inet͡ɕi]	海へ (向格助詞/ci/ 「～へ」)

(2-21) [ts]

/fuca/	[f ^h ut͡ɕe]	草
/micī/	[mitsi]	道
/fucu/	[f ^h ut͡ɕu]	糞
/guccee/	[guttse:]	雄牛

/c/には、自由変異として [t͡ɕ] が特定の語彙に見ついているが、規則による一般化が現段階ではできない。トークンによって短子音で実現する場合と、長子音で実現する場合がある。

(2-22) /nici/	[nitsi] ~ [nittsi]	胸
/gucirumin/	[gut͡ɕirumiŋ] ~ [gutt͡ɕirumiŋ]	脇

- /z/
 - 有声歯茎硬口蓋摩擦音 : [ʒ] / V_i

- 有声歯茎硬口蓋破擦音：[ɖ] / #_i あるいは n_i
- 有声歯茎摩擦音：[z] / V_V₁ (V₁ : /i/ 以外)
- 有声歯茎破擦音：[ɖ] / 上記以外の環境

(2-23) [z]

/uzi/	[uzi]	腕
/deezi/	[de:zi]	大変
/mugazi/	[mugezi]	ムカデ

(2-24) [ɖ]

/zinto/	[ɖint ^h o]	空
/utamanzi/	[ut ^h emendzi]	子ども達

(2-25) [z]

/pimiza/	[p ^h imize]	ヤギ
/azi/	[ezi]	味
/uzu/	[uzu]	布団

(2-26) [ɖ]

/zaa/	[ɖe:]	どこ
/zii/	[ɖi:]	土
/zoo/	[ɖo:]	門
/ganzan/	[gɛndɛɲ]	蚊

2.1.1.3 摩擦音

摩擦音として /f/、/s/、/h/ の3つを認定する⁵。摩擦音に有声子音の音素はなく、無声子音の音素のみ観察される。

■唇摩擦音

- /f/
 - 無声帯気唇歯摩擦長音：[f:^h] / #_VV, CV_V
 - 無声帯気唇歯摩擦音：[f^h] / 上記以外の環境⁶

⁵ /f/を認定せず、代わりに/hw/（音節構造としてはCG）と分析する立場は取らない。理由は、音声的に唇歯摩擦音であることと、仮に/hw/と解釈した場合、動詞形態を分析する際に問題が生じるからである。例えば、nuf「寝る」という動詞に継続の補助動詞1が後続する補助動詞構文 nuf-j a（寝る-CVB 継続1）「寝ている」は、/nuhwja/（CN.CGGN）と解釈され、渡り音が2つ現れることになる。渡り音はその性質上、2つ現れるとは考えにくい。

⁶ /sifuku/「蜘蛛（巣吹き）」は、[s^hif^huku] で実現する。[f^h] が実現している点に関しては、形態素境界の初頭が語頭と同様に解釈されるか、先行する形態素が/sii/「巣」であるためなのか、どちらとも判断しがたい。/sii/が/si/に短母音化する理由は、短母音化の音韻規則による。

(2-27) [f^h] : 語頭

/faa/	[f ^h ɐ:]	蔵
/fii/	[f ^h i:]	降って
/fuu/	[f ^h u:]	降る
/foo/	[f ^h o:]	降ります

(2-28) [f^h] : 非語頭

/nufa/	[nuf ^h ɐ]	寝よう
/mafa/	[mɛf ^h ɐ]	枕
/nufi/	[nuf ^h i]	寝て
/nufoo/	[nuf ^h o:]	寝ます

(2-29) [f^h]

/fuca/	[f ^h ɯtsɐ]	草
/funi/	[f ^h ɯni]	船
/aafuu/	[ɐ:f ^h u:]	灰汁（灰を溶かした水。洗い物に使用する。）

■ 歯茎摩擦音

- /s/
 - 無声帯気歯茎硬口蓋摩擦音 : [ɕ^h] / _i
 - 無声帯気歯茎摩擦音 : [s^h] / 上記以外の環境

(2-30) [ɕ^h] : 語頭

/sii/	[ɕ ^h i:]	手
/sipi/	[ɕ ^h iɸi]	尻
/sino/	[ɕ ^h iɲo]	角
/simi/	[ɕ ^h iɸmi]	爪

(2-31) [ɕ^h] : 非語頭

/asi/	[ɐɕ ^h i]	汗
/isi/	[iɕ ^h i]	石

(2-32) [s^h] : 語頭

/saa/	[s ^h ɐ:]	茶
/sin/	[s ^h iɲ]	唾
/suumaari/	[s ^h u:mɛ:rɐ]	汁椀 (suu 「汁」 + maari 「椀」)
/see/	[s ^h ɛ:]	(魚の) 酢の物
/soogi/	[s ^h o:gi]	ざる

(2-33) [s^h] : 非語頭

/baasa/	[bɛ:s ^h ɐ]	芭蕉
/usi/	[us ^h i]	牛
/maasu/	[mɛ:s ^h u]	塩
/jaasee/	[jɛ:s ^h e:]	野菜

■声門摩擦音

- /h/
 - 無声帯気唇歯摩擦音 : [f^h] / _u
 - 無声硬口蓋摩擦音 : [ç] / _i
 - 無声声門摩擦音 : [h] / 上記以外の環境

本節の冒頭で述べた通り、/hu/は形態論的な観点から/fu/ではないことが明らかなもののみ認定している。/hu/の例は/hunu/「あげない」のみである。形態的に/fu/ではないと考えられる理由は、「あげない」を意味する[f^hu_{ɔ̃}u]が、[çiru] (/hiru/)「あげる」に変化するからである。形態的に/fu/だと考えられる語には、例えば「寝る」を意味する[nuf:^hu]がある。本動詞語幹は[nuf:^hi] (/nufi/)「寝て」に変化するため/nufu/だと考えられる。

(2-34) [f^h]

/hunu/	[f ^h u _{ɔ̃} u]	あげない (cf. /hi/ 「あげる」)
/huntan/	[f ^h untɐŋ]	あげなかった (cf. /hi/ 「あげる」)

(2-35) [ç]

/hii/	[çi:]	家
/baahii/	[bɛ:çi:]	私の家 (/baa/ 「私」 + /hii/ 「家」)

(2-36) [h] : 語頭

/haa/	[hɛ:]	自分
/hee/	[he:]	食べて
/hon/	[hoŋ]	食べる

(2-37) [h] : 非語頭

/maha/	[mɛhɐ]	美味しい
/mahenu/	[mɛhenu]	美味しくない

/h/が現れる語は、/f/よりもさらに少ない。属性動詞語幹に/ha/が含まれるため(例: /maha/ 「美味しい」、/takaha/ 「高い」など) 一見すると多いと感じるが、名詞語根となると、/haa/ 「自分」あるいは「あちら」と、/hii/ 「家」のみである。

上記の実現音の他に、歯茎鼻音の連続/**nn**/に先行する場合にのみ、/h/を初頭の鼻音を無声化させる音素として解釈する。/hnnci/[ɲntsi]「6つ」や、/hnnsin/[ɲnsiŋ]「6本」など、「6」に関する語にのみ用いる(2.2.5)。

2.1.1.4 鼻音

鼻音として/m/、/n/の2つを認定する。/m/と/n/には、有声鼻音と無声鼻音の異音が観察される。無声鼻音が観察されるのは、基本的に/m/、/n/が(帯気した無声阻害音に隣接する)無声化した母音に後続する場合である。

■両唇鼻音

- /m/
 - 無声両唇鼻音：[m̥] / 無声化した母音に後続する場合
 - 有声両唇鼻音：[m] / 上記以外の環境

(2-38) [m̥]

/pama/	[p ^h ɐ̃m̥ɐ]	浜
/kami/	[k ^h ɐ̃mi]	亀
/sumu/	[s ^h ũmu]	肝
/fumon/	[f ^h ũmoŋ]	雲

(2-39) [m] : 語頭

/maa/	[mɛ:]	孫
/min/	[miŋ]	目
/mun/	[muŋ]	麦
/mee/	[mɛ:]	前
/moo/	[mo:]	ここ
/mëë/	[mɛ:]	米

(2-40) [m] : 非語頭

/amaa/	[ɐ̃mɛ:]	姉
/imi/	[imi]	夢
/sikimee/	[ɕ ^h ik ^h ime:]	崎山(屋号)

■歯茎鼻音

/n/には、異音が多い。逆行同化の音声プロセスが観察されることが一因である。すなわち/n/は、nC という子音連続の環境で、後続するCの調音点に同化する⁷。語頭で/hnn/が実現する場合は、初頭

⁷ 先行研究では、日本語研究の伝統的な分析法を用い、通常の音素/n/の他に、語末あるいは音節末に現れる鼻音音素とし

の/hn/が無声化した歯茎鼻音として実現する⁸。これまでに数詞「6」に関する語でのみ、見つまっている。異音が多いため、非語末と語末で異音を挙げる。#は語境界を示す。

- 非語末の/n/
 - 無声歯茎鼻音：[n̥] / V_ (Vは無声化した母音)、あるいは h_
 - 両唇鼻音：[m] / _C (Cは両唇音)
 - 軟口蓋鼻音：[ŋ] / _C (Cは軟口蓋音)
 - 歯茎鼻音⁹：[n] / 上記以外の環境
- 語末の/n/
 - 歯茎鼻音：[n] / i_#
 - 軟口蓋鼻音：[ŋ]～口蓋垂鼻音：[ɳ] / 上記以外の語末環境（自由変異）

(2-41) [n̥]

/pana/	[p ^h ̥n̥e]	花
/tani/	[t ^h ̥ni]	種
/pĩni/	[p ^h ̥i̯ni]	髭
/sunu/	[s ^h ̥i̯nu]	服
/sino/	[s ^h ̥i̯no]	角
/hnnci/	[n̥ntsi]	6つ
/hnnsin/	[n̥nsiŋ]	6本

(2-42) [m]

/panbe/	[p ^h ̥embe:]	天ぷら（アンダギー）
/nman/	[m̥reŋ]	馬

/nman/「馬」に関して、語頭であっても逆行同化の音声プロセスは有効である。子音音素/m/を認定しているため、音声実現に沿って/mman/「馬」と分析することも可能であるが、これまでの調査で語頭に [m:] が観察される語は「馬」のみであるという点から、成節的な子音 (2.2.5) として/n/だけを認め/nman/と分析する立場をとる。仮に、子音連続の初頭に [m] が観察される場合に/mC/を認める立場では、表 2.3 の A 案に示す通り、逆行同化のプロセスは適用されず、唇音が連続する場合にのみ/mC/を認め、その他の環境では/nC/と分析することになる。表中の「-」は例がないことを示す。

て/N/ [n̥~m̥~ŋ~ɳ] を認定している (柴田 1972, 平山 1988, 久野 1992, 加治工 1996)。しかし、本論文では/n/の現れる環境によって導かれる異音と考える。/N/を認定しない理由は、日本語東京方言のように「記入」と「金融」、「兄」と「安易」といった対立が、これまでの調査では見つからないからである。このような状況の中、鼻音音素/N/を認めた場合、音素および動詞接辞の異形態が増えるだけである。

⁸ /nn/[n:]「うん」など、/nn/を含む語が見つまっているため、初頭に/h/を想定する必要がある。

⁹ この他、/juunen/「夕方」という語でのみ、硬口蓋鼻音 [ɲ] と歯茎鼻音 [n] の自由変異が観察された ([ju:ɲeŋ]~[ju:neŋ])。

表 2.3: 子音連続の初頭に [m] が観察される場合の分析立場

	/m/+ (逆行同化：適用外)			/n/+ (逆行同化：適用)		
	唇音	歯茎音	軟口蓋音	唇音	歯茎音	軟口蓋音
A 案	mC	-	-	-	nC	nC
B 案	-	-	-	nC	nC	nC

なお、[m] に後続する子音音素は語頭で /m/、語中に /b, m/ が見つかったのみである。筆者は、限られた環境のために成節的な子音音素を /m, n/ の 2 種類認め、かつ逆行同化のプロセスにも例外を設けるよりも B 案に示すように語頭、語中にかかわらず逆行同化のプロセスを認め、成節的な子音を /n/ のみと分析する方がより体系的だと考えた。

(2-43) [ŋ]

/kangan/	[k ^h ɛŋgɛŋ]	鏡
/ngi/	[ŋgi]	行く
/p̄ingi/	[p ^h iŋgi]	逃げる

(2-44) [n] : 語頭

/naabi/	[nɛːbi]	鍋
/nin/	[niŋ]	根
/nudu/	[nudu]	喉
/nee/	[neː]	どう
/nooru/	[noːru]	治る
/nta/	[nt ^h ɛ]	土
/nda/	[ndɛ]	出ている (cf. /ndi/ 「出る」)
/nca/	[ntɕɛ]	満ちている (cf. /nci/ 「満ちる」)
/nsaha/	[ns ^h ɛhɛ]	「重い」
/nn/	[nː]	「うん」(感嘆詞)

(2-45) [n] : 非語頭

/ina/	[inɛ]	海
/ini/	[ini]	稲
/andani/	[ɛndɛni]	アダン
/munu/	[munu]	もの
/juunen/	[juːnɛŋ]	夕方
/enoo/	[enoː]	言います (cf. /eni/ 「言う」)
/zinto/	[ɕint ^h o]	空

/onda/	[ondə]	かご
/manca/	[məntɕə]	まな板
/utamanzi/	[ut ^h eməndzi]	子ども達
/mansin/	[məns ^h in]	首

(2-46) [n] : 語末

/sin/	[s ^h in]	唾
/sipurin/	[s ^h ip ^h urən]	冬瓜

(2-47) [ŋ] ~ [N]

/kangan/	[k ^h əŋgəŋ]	
	[k ^h əŋgəN]	鏡
/ganzan/	[gəndzəŋ]	
	[gəndzəN]	蚊
/kan/	[k ^h əŋ]	
	[k ^h əN]	神
/nun/	[nuŋ]	
	[nuN]	ノミ

2.1.1.5 はじき音

はじき音として /r/ を認定する。/r/ には、鼻音と同様に無声化の音声プロセスが観察される。無声化の音声プロセスが観察されるのは、/r/ が（帯気した無声阻害音に隣接する）無声化した母音に後続する場合である。語頭では /ra/ のみ観察された。

■ 歯茎はじき音

- /r/
 - 無声歯茎はじき音 : [ɾ̥] / 無声化した母音に後続する場合
 - 歯茎はじき音 : [ɾ]¹⁰ / 上記以外の環境

(2-48) [ɾ̥]

/sira/	[s ^h ɪ̥ɾ̥ə]	面
/turi/	[t ^h u̥ɾ̥i]	鳥
/taru/	[t ^h ə̥ɾ̥u]	樽

(2-49) [ɾ] : 語頭

¹⁰ /garasi/ 「カラス」という語でのみ、/r/ が歯茎ふるえ音 [r] と歯茎はじき音 [ɾ] の自由変異が観察された ([gerəsi] ~ [gɾɛsi])。

/rakkjon/	[rekːjoŋ]	らっきょう
/raa/	[reː]	ねえ（感嘆詞）

(2-50) [r] : 非語頭

/bira/	[biɾe]	ニラ
/fuciri/	[fʰuːt̚ɕiri]	薬
/ari/	[eɾə]	蟻
/juru/	[juru]	夜
/tamuree/	[tʰemureː]	田盛（屋号）
/aroo/	[eɾoː]	あるよ（cf. /aa/ ~ /a(r)/ 「ある」）

2.1.1.6 接近音

接近音として /w/、/j/ の 2 つを認定する。他の多くの子音が、音節構造中の初頭子音にのみ現れるのに対し、/w/ と /j/ は、初頭子音としてだけでなく、初頭子音から音節の中心を成す核音への渡り音としても現れる（2.2）。渡り音として現れる以外の /w/ は、/a/ の前で観察されたのみで、/wa/ 自体あまり観察されない。一方、渡り音として現れる以外の /j/ は、/a/、/u/、/o/ の 3 つの母音音素に先行する例が観察されている。

■唇接近音

- /w/
 - 有声両唇軟口蓋接近音 : [w]

(2-51) [w] : 語頭

/waa/	[weː]	御嶽
/wassaha/	[wesːʰehe]	悪い

(2-52) [w] : 非語頭

/uwa/	[uwe]	豚
/siwa/	[sʰiwe]	心配

■硬口蓋接近音

- /j/
 - 硬口蓋接近音 : [j]

(2-53) [j] : 語頭

/jama/	[jeme]	山（丘）
/jamu/	[jemu]	痛む

/juu/	[ju:]	魚
/judarī/	[juderə]	よだれ
/joo/	[jo:]	よ（感嘆詞）

(2-54) [j] : 非語頭

/uja/	[ujɐ]	親
/ija/	[ijɐ]	父
/maju/	[mɛju]	猫

2.1.2 母音音素

母音音素は、3段階の位置（前舌、中舌、後舌）および、3段階の狭め（狭、中、広）により区別される。短母音音素を7つ認める。音声的長母音は、音韻的に短母音音素の連続が実現したものと解釈する(2.2.1)。

歯茎摩擦音/s/に後続する無声化する中舌狭母音/i/および後舌狭母音/u/は、無声母音として実現するため、どちらの母音で実現しているか音色からは判断が付きにくい([s^hi] vs. [s^hu])。従って、形態・音韻的な理由で/i/だと考えられるものについては/i/として扱うが、それ以外のは/u/として扱う¹¹。本論文では/arasi/「洗う」などのクラス2に属する動詞語幹(6.2)、/sisu/「切る・着る¹²」、/sisan/「知らない」、/sik/「聞く」、/sik(o)/「使う」といった動詞語幹中の無声化母音を/i/として扱う。なぜなら、これらの動詞は動詞語幹の非語末母音交替の音韻規則(2.5.6)が適用され、当該母音が/i/と交替するからである。それぞれ/arasimirun/「洗わせる」、/sisi/「切って、着て」、/sisi/「知って」、/siki/「聞いて」、/sike/「使って」である。これらの母音交替を/su/と/si/の交替と考えず、/si/と/si/の交替として記述する立場をとる。

2.1.2.1 前舌母音

前舌母音として、前舌狭母音/i/と前舌中母音/e/を認定する。/i/、/e/とも、単独で生起することも、同じ音素が2つ続けて生起することもある。/i/には異音として有声母音と無声母音が観察される。/e/は、語末音節に多く見つかっている。

■前舌狭母音

- /i/
 - 無声非円唇前舌狭母音 : [i̥] / #C^h_. あるいは、非語末の s_
 - 有声非円唇前舌狭母音 : [i] / 上記以外の環境

(2-55) [i̥]

/pikoha/	[p ^h ik ^h ohɐ]	危ない
----------	--------------------------------------	-----

¹¹ 口の構えに違いが見いだせる可能性があるため、今後口の構えを注意深く観察する必要がある。

¹² この2つはアクセントが異なる。

/kipusi/	[k ^h _i p ^h us ^h _i]	煙
/sipi/	[ç ^h _i p ^h _i]	尻
/usitu/	[uç ^h _i tu]	年寄り

(2-56) [i] : 語頭

/ibi/	[ibi]	エビ
/itu/	[it ^h u]	糸
/ici/	[itsi]	いつ
/izanda/	[izɛndɛ]	ちゃんと
/iga/	[igɛ]	イカ
/isi/	[iç ^h i]	石
/imi/	[imi]	夢
/ini/	[ini]	稲
/irigi/	[irigi]	鱗
/ija/	[ijɛ]	父

(2-57) [i] : 非語頭

/pin/	[p ^h iŋ]	屁
/naabi/	[na:bi]	鍋
/mici/	[mitsi]	道
/uzi/	[uzi]	腕
/tokkin/	[t ^h ok:iŋ]	グアバ
/paagi/	[p ^h ɛ:gi]	禿
/fi/	[f ^h i]	降る
/sitomuci/	[ç ^h _i t ^h omutçi]	朝
/hiri/	[çiri]	あげる
/imi/	[imi]	夢
/ini/	[ini]	稲
/fuciri/	[f ^h utçi:ri]	葉

• /ii/

– 有声非円唇前舌狭長母音 : [i:]

(2-58) [i:] : 語頭

/iiba/	[i:ba]	ちょうど
--------	--------	------

(2-59) [i:] : 非語頭

/pii/	[p ^h i:]	火
/bii/	[bi:]	あれまあ（感嘆詞）

/kii/	[k ^h i:]	毛
/giigi/	[gi:gi]	はっきりと
/sii/	[s ^h i:]	手
/hii/	[hi:]	家
/miici/	[mi:tsi]	3つ

■前舌中母音

- /e/

- 非円唇前舌中母音：[e]

(2-60) [e]：語頭

/eni/	[eni]	言って (cf. /en/ 「言う」)
-------	-------	---------------------

(2-61) [e]：非語頭（語末）

/pīte/	[p ^h ite]	畑
/siken/	[siken]	月

- /ee/

- 非円唇前舌中長母音：[e:]

(2-62) [e:]：語頭

/ee/	[e:]	そう
------	------	----

(2-63) [e:]：非語頭（語末）

/pee/	[pe:]	南
/bee/	[be:]	1ST.PL.INC
/mizattee/	[mizette:]	宮里（屋号）
/deera/	[de:re]	とても
/guccee/	[guttse:]	雄牛
/tuuzee/	[t ^h u:ze:]	通事（屋号）
/keesee/	[k ^h e:se:]	貝敷（屋号）
/memugee/	[memuge:]	前迎（屋号）
/jaasee/	[jɛ:se:]	野菜
/mee/	[me:]	前
/nee/	[ne:]	どう
/sikobaree/	[s ^h ikobere:]	底原（屋号）

2.1.2.2 中舌母音

中舌母音として、中舌狭母音/i/、中舌中母音/ë/、中舌広母音/a/を認定する。/i/、/a/は単独で生起することも、同じ音素が2つ続けて生起することもある。一方、/ë/は同じ音素が2つ続けて生起する場合のみ観察され、単独で生起することはない。/ë/を含む語はそもそも少なく、これまで見つかったのは2語のみである。

■中舌狭母音

/i/に先行する子音音素には、偏りがある。これまでに16個の子音音素中6個（/p, c, z, s, n, r/）が/i/に先行する子音音素として見つかった。このうち、/pi/が実現する場合に摩擦噪音が聞こえる¹³。語頭に/i/が現れるのは「飯」を意味する/i/のみである。

- /i/
 - 無声非円唇中舌狭母音：[i̥] / #C^h_。あるいは、非語末の s_
 - 中舌中母音：[ə] / r_
 - 有声非円唇中舌狭母音：[i] / 上記以外の環境

(2-64) [i̥]

/p̥itu/	[p̥ ^h _{i̥} t ^h u]	人
/p̥ima/	[p̥ ^h _{i̥} m̥e]	暇
/s̥iku/	[s̥ ^h _{i̥} k ^h u]	聞く
/aras̥itan/	[e ^h res̥ ^h _{i̥} teŋ]	洗った

(2-65) [ə]

/supur̥in/	[s̥ ^h _u p̥ ^h ur̥ən]	冬瓜
/naar̥i/	[n̥eːr̥ə]	実

(2-66) [i]

/maci/	[m̥etsi]	松
/kuci/	[k̥ ^h _u tsi]	腰
/andani/	[e ^h nd̥eni]	アダン

- /ii/
 - 有声非円唇中舌狭母音：[iː]

(2-67) [iː]

¹³ 摩擦噪音が観察される中舌母音の研究には、青井 (2012) がある。青井 (2012) は、音響分析パラトグラフィーを用い、同じ南琉球語群に属する宮古語多良間島方言の中舌母音を観察した。青井 (2012) によると、多良間方言でも破裂音に後続した中舌母音に摩擦噪音が観察されており、この摩擦噪音は、当該母音を調音する際、舌背 (dorsal) と舌端 (laminal) の2か所で、狭めを同時に作るため生じるものであると結論付けている。波照間方言の/i/も、多良間方言の中舌母音と同様の性格、すなわち/i/は舌背と舌端に狭めを持つ母音である可能性がある。

/i:/	[i:]	飯
/sɪ:/	[s ^h i:]	巢
/zɪ:/	[dzi:]	血

■中舌中母音

/ee/とは別に舌の位置で対立する/ëë/を認める¹⁴。ただし、筆者の知る限り/ëë/を含む単語は(2-68)に挙げる2語のみである。さらに、全ての話者に/ee/と/ëë/の対立があるわけではない。70歳代以上の話者で/pee/「南」と/pëë/「灰」の対立がかるうじて観察される一方、/mee/と/mëë/の対立は80歳以上の話者でのみ観察された。/ëë/は前舌中母音/ee/に合流しつつあると言える¹⁵。/mee/と/mëë/に関しては、アクセント(2.3)が異なるので、70歳代の話者にとって上昇調で発音された場合は「前」、下降調で発音された場合は「米」という対立になっていると考えられる。

一方で、/ee/と/ëë/の対立は、筆者が観察した際、話者の口の開きや舌の動きが全く異なる。/ëë/を発音する際、舌の動きが特徴的である。舌尖は下歯茎の内側に置かれ、そこを支えとし、舌面が前面に押し出される¹⁶。沖縄県教育委員会(1975)では、/ë/の実現音を「中舌中母音[ə]よりもやや前寄りの広い母音[ɜ:]」として記述している。これに従い、本論文でも[ɜ:]の記号を用いる。

- /ëë/
 - 非円唇中舌半広母音:[ɜ:]

(2-68)	/pëë/	[pɜ:]	灰
	/mëë/	[mɜ:]	米

■中舌広母音

- /a/
 - 無声非円唇中舌広母音:[ɐ] / #C^h _.
 - 非円唇中舌広母音:[ɐ] / 上記以外の環境

(2-69)	[ɐ]	
	/paton/	[p ^h ɐ ^h on] 鳩

¹⁴ 当該母音音素に関して、別集落ではあるが、富嘉地区の話者のデータを分析したパップラルド(2012)がある(本論文は、1.3.2で述べた通り、北地区および南地区の話者のデータを用いている)。パップラルド(2012)は、音響的事実に基づいて、調音的特徴を推測した。結果、当該母音音素と母音音素/e/に、舌の前後の対立も、広さの対立も認めず、唯一、咽頭の狭めの対立を認め、当該母音音素を、咽頭狭めを伴う前舌中母音(pharyngealized front mid vowel) [e^ɕ]と分析した。筆者が実際に当該母音音素を含む音声データを聞いたところ、南や北地区では観察されていない音価であった。この違いは、島内の方言差であると考えられる。筆者は、その他の(平山・中本1964, 柴田1972, 平山1988, 大野1989, 久野1992, 加治工1996)といった先行研究と同様に舌の位置の対立と考え、中舌半広母音(もしくは中舌半狭母音)/ë/と分析する。現在、舌の位置での対立を認めているが、詳細な音響分析は今後の課題である。

¹⁵ 「ハエ」を意味する語では/pee/と/pëë/で揺れが観察された。話者は「灰」と「ハエ」は同じだと判断することもあれば、異なると判断することもあった。アクセント型が同じため、2つを区別しやすいように、「灰」を/kama=n pee/ (窯=GEN 灰)「窯の灰」と言うこともある。この場合の「灰」は/pee/で現れる。

¹⁶ この母音の音価について、/ee/と異なるのは、単純に広さや位置だけではなく、後方舌根性(RTR)も関連している可能性もある(白田理人氏, 2017 p.c.)。

/tapi/	[t ^h ɛp ^h i]	旅
/kaci/	[k ^h ɛtsi]	風
/saki/	[s ^h ɛk ^h i]	酒

(2-70) [ɛ] : 語頭

/aba/	[ɛbɛ]	油
/ata/	[ɛtɛ]	あった (cf. /aa/~/a(r)/ 「ある」)
/acca/	[ɛtsɛ]	明日
/azi/	[ɛzi]	味
/agan/	[ɛgɛŋ]	さつまいも
/asi/	[ɛs ^h i]	汗
/ami/	[ɛmi]	雨
/an/	[ɛŋ]	粟
/ari/	[ɛrɛ]	蟻

(2-71) [ɛ] : 非語頭

/pana/	[p ^h ɛnɛ]	花
/banu/	[bɛnu]	1st.SG
/tana/	[t ^h ɛnɛ]	田
/andani/	[ɛndɛni]	アダン
/azan/	[ɛzɛŋ]	痣
/kan/	[k ^h ɛŋ]	神
/gaja/	[gɛjɛ]	萱
/buusaha/	[bu:s ^h ɛhɛ]	大きい
/maju/	[mɛju]	猫
/nan/	[nɛŋ]	波
/uwa/	[uɛ]	豚
/jadu/	[jɛdu]	戸

• /aa/

– 非円唇中舌広長母音 : [ɛ:]

(2-72) [ɛ:] : 語頭

/aaii/	[ɛ:ii]	いいえ (感嘆詞)
/aafuu/	[ɛ:f ^h u:]	灰汁 (灰を溶かした水。洗い物に使用する。)

(2-73) [ɛ:] : 非語頭

/paa/	[p ^h ɛ:]	葉
/baa/	[bɛ:]	私

/taa/	[t ^h e:]	誰
/daa/	[dɛ:]	2ND.SG
/zaa/	[dʒɛ:]	どこ
/kaa/	[k ^h e:]	香り
/faa/	[f ^h e:]	鞍
/saa/	[s ^h e:]	茶
/maa/	[mɛ]	孫
/naa/	[nɛ:]	そこ
/raa/	[rɛ:]	ねえ（感嘆詞）
/waa/	[wɛ:]	御嶽
/jaa/	[jɛ:]	ほら（感嘆詞）

2.1.2.3 後舌母音

後舌母音として、後舌狭母音/u/と後舌中母音/o/を認定する。どちらも円唇である。/u/, /o/とも単独で生起することも、同じ音素が2つ続けて生起することもある。/u/には有声母音と無声母音の異音が観察されるが、/o/に無声母音の異音は観察されない。後舌中母音を含む語の例は、後舌狭母音を含む語の例に比べて少ない。

■後舌狭母音

- /u/
 - 無声円唇後舌狭母音：[u̥] / #C^h_.C
 - 有声円唇後舌狭母音：[u] / 上記以外の環境

(2-74) [u̥]

/puni/	[p ^h u̥ni]	骨
/turi/	[t ^h u̥ri]	鳥
/kuri/	[k ^h u̥ri]	これ
/fute/	[f ^h u̥te]	おでこ
/sunu/	[s ^h u̥nu]	着物

(2-75) [u] : 語頭

/ui/	[ui]	上
/utama/	[ut ^h emɛ]	子ども
/udurugu/	[udurugu]	驚く
/uciza/	[utsizɛ]	兄弟
/uzu/	[uzu]	布団
/ugi/	[ugi]	起きる
/usi/	[usi]	牛

/unu/	[unu]	その
/uri/	[uri]	それ
/uwa/	[uwe]	豚
/uja/	[uje]	親

(2-76) [u] : 非語頭

/kipusi/	[k ^h i _ɔ p ^h us ^h i]	煙
/takabu/	[t ^h ɛ _ɔ k ^h ɛbu]	煙草
/tun/	[t ^h uŋ]	妻
/jadu/	[jɛdu]	戸
/pucu/	[p ^h u _ɔ tsu]	星
/uzu/	[uzu]	布団
/paku/	[p ^h ɛ _ɔ k ^h u]	へび
/daagu/	[dɛ:gu]	道具
/maasu/	[mɛ:s ^h u]	塩
/mugazi/	[mugezi]	ムカデ
/nun/	[nuŋ]	ノミ
/taru/	[t ^h ɛ _ɔ ru]	樽
/maju/	[mɛju]	猫

• /uu/

- 有声円唇後舌狭長母音 : [u:]

(2-77) [u:] : 語頭

/uubi/	[u:bi]	いくつ
--------	--------	-----

(2-78) [u:] : 非語頭

/puu/	[p ^h u:]	穂
/tuu/	[t ^h u:]	十
/duu/	[du:]	体 (胴)
/kuu/	[k ^h u:]	粉
/aafuu/	[ɛ:f ^h u:]	灰汁 (灰を溶かした水。洗い物に使用する。)
/suu/	[s ^h u:]	汁
/nuu/	[nu:]	何

■後舌中母音

• /o/

- 円唇後舌半狭母音 [o]

(2-79) [o] : 語頭

/otta/	[ot: ^h ɐ]	カエル
/ori/	[ori]	いらっしゃって (cf. /o/いらっしゃる)

(2-80) [o] : 非語頭

/paton/	[p ^h ɛt ^h oN]	鳩
/sukobi/	[s ^h u ^h k ^h obi]	帯
/gokka/	[gok: ^h ɐ]	ニワトリ
/hon/	[hoŋ]	食べる
/moo/	[mo:]	ここ
/sino/	[ɕ ^h i ^h no]	角

/u/と/o/の対立については (2-81) のミニマルペアが見つかった¹⁷。ミニマルペアは見つかったものの、/o/を含む語の例は、/u/に比べて少ない。

(2-81) /sikun/	[s ^h i ^h k ^h uŋ]	聞く (cf. /siki/ 「聞いて」)
/sikon/	[s ^h i ^h k ^h oŋ]	使う (cf. /sike/ 「使って」)

- /oo/
 - 円唇後舌半狭長母音 [o:]

(2-82) [o:] : 語頭

/oo/	[o:]	はい (感嘆詞)
/oosi/	[o:ci]	青く

(2-83) [o:] : 非語頭

/poo/	[p ^h o:]	帆
/boo/	[bo:]	棒
/doo/	[do:]	～だよ (モーダル助詞)
/zoo/	[dzo:]	門
/foo/	[f: ^h o:]	降ります (cf. /f/ 「降る」)
/sisoo/	[s ^h i ^h s ^h o:]	着ます (cf. /sis/ 「着る」)
/enoo/	[eno:]	言います (cf. /en/ 「言う」)
/joo/	[jo:]	よ (感嘆詞)

2.2 音節

本節では、波照間方言の音節構造について 2.2.1 で述べ、実際の語にどのような音節の組み合わせが現れうるか 2.2.3 で述べる。2.2.5 から 2.2.7 では、音節構造中の特定のスロットを占める音素が現れる語例

¹⁷ どちらも同じ下降型のアクセントを持つ。

を示す。波照間方言では、異なる母音音素の連続（母音連続）は多く観察されない。2.2.8 では、母音の組み合わせと、語例を示す。

2.2.1 音節構造とモーラ

波照間方言の音節構造とモーラを図 2.1 に示す。波照間方言の音節は、オンセット（Onset）と、ライム（Rhyme）から成る。オンセットは、ライムに先行する子音（群）で、初頭子音（C）と渡り音（G）から成る。ライムは、音節の核を担う。核音（Nucleus）と、末音のコーダ（Coda）から成る。前者を N、後者を Co で示す。渡り音が現れる場合は、必ず初頭子音も現れる。核音のみが唯一の必須要素である。子音音素が核音のスロットを占めることがあるため、音節構造全体を記述する際に、核音に V（母音音素）という記号を用いない。 μ はモーラを示す。モーラは音節構造中の N と Co に付与する μ で数える。

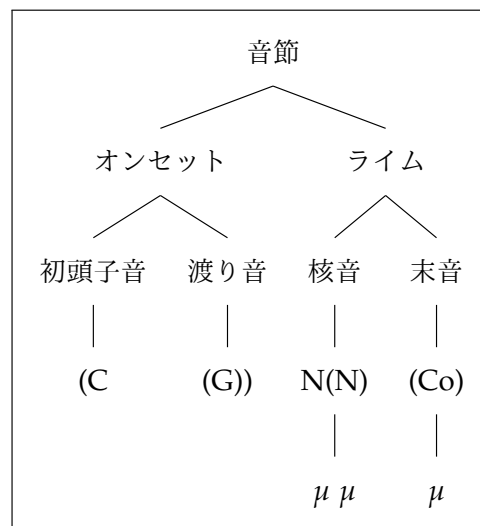


図 2.1: 波照間方言の音節構造

長母音音素を認める、あるいは認めないという積極的な根拠が、これまでの調査では見つからなかった。よって、筆者は経済性の観点から長母音音素を認めない立場、すなわち音素の数を増やさないという立場を取り、音声的長母音は NN と記述する。唯一、短母音では実現しない/ë/ [3] がある。本論文で/ëë/と解釈する当該長母音は、歴史的に母音連続から生じたものでかつ、現代では2語にしか観察されていない（2.1.2.2）。従って、長母音音素を認める積極的な理由とは考えない。

モーラとは、音節よりも小さな、長さを数える単位である。波照間方言における、音節とモーラが担う役割について、これまでの調査では、あまり明らかにできていない。分かっていることは、次の3つである¹⁸。

- 上昇型のアクセントが実現する際、最終音節あるいは最終モーラは、いずれも末尾の高ピッチを担う単位になりうる（2.3）。例えば、/minan/「貝」であれば、/minan/の最終音節/nan/が高ピッチ

¹⁸ 歴史的には、並列助詞=nの異形態=junの現れ方が、音節構造によっていた可能性がある（12.3.1）。

チで実現することもある。/minan/の最終モーラ/n/が高ピッチで実現することもある。

- モーラは、アクセントの強調イントネーションが実現する際、末尾のピッチ変動を担う単位である(2.4.2)。例えば、/jamatu/「大和」の協調イントネーション形は末モーラ/u/が長音化し、/sikon/「使う」の強調イントネーション形は末モーラ/n/が長音化する。
- 音節構造によって、母音の無声化プロセス(2.2.2)の適用の有無が異なる。母音の無声化プロセスとは、語頭で帯気子音に直接後続する短母音が無声化するプロセスである。このプロセスは、語頭が軽音節(初頭子音と1つの核音)の場合、当該プロセスは適用されるが、重音節(初頭子音と核音と末音、あるいは初頭子音と2つの核音)の場合には適用されない。

それぞれのスロットを占める基本的な音素について述べる。初頭子音スロットCは子音音素が、渡り音スロットGは/w/あるいは/j/が占めうる。核音スロットNは母音音素が占め、Nが連続する場合はほとんどの場合同じ母音音素が占めうる。末子音スロットCoは/n/が占めうる。以上のような基本的な音節構造の他に、限定的に観察されるものとして(1)非語末の環境において無声阻害音/t, c, k, s/が末音のスロットを占め、他の音素と共に音節を成す場合(2.2.7)、(2)子音音素/n/が核音のスロットを占め、単独で音節を成す場合(2.2.5)、(3)異なる母音音素がNNのスロットを占め、音節を成す場合(2.2.8)がある¹⁹。なお、同じ母音音素の連続(同母音連続)の場合も、異なる母音音素の連続(母音連続)の場合も1音節を成すと分析する。母音連続を1音節と分析する理由は、唯一、無声化プロセス(2.2.2)が同母音連続と同様に分析できるからという点である。母音連続の例は少なく、別音節から成るという積極的な根拠は見つけられなかった。例は2.2.8を参照されたい。

超重音節、すなわちNNCoを含む(1音節3モーラ)は、これまでの調査で単純語には観察されていない。単純語に別の形態素が後続する際にのみ観察される。例えば、/taa/「誰」に累加を意味する接語/n/が後続する/taan/「誰も」、/aboa/に複数接辞/nda/が付加する/a.boan.da/が超重音節を含む例である。母音音素が3つ連続する例は、唯一「思う」を意味する/mu/に可能接辞を付加した形式/muairun/ (思う.POT.NPST.IND)「思える」で観察される。なお、同じ活用する動詞に「縫う」を意味する/nu/があるため、/nuairun/ (縫う.POT.NPST.IND)「縫える」という意形式も存在する可能性がある。/muairun/は、上記(3)異なる母音音素がNNCoのスロットを占め、音節を成す場合(2.2.8)のさらに例外として分類し、音節構造は/muai.run/と分析する。NNCoすべてを母音音素で占める語は例外的であるため、初頭母音を渡り音として解釈する分析方法もあり得る(/mwai.run/)。しかし、/mw/という音素配列も当該語にしか観察されないため、本論文では音節構造の例外として扱うのみとした。

2.2.2 語根頭の無声化音声プロセス

波照間方言には、語根頭という環境下で無声化の音声プロセスが観察される。帯気子音に直接後続する短母音は無声化する(例:/fuca/[^hʊtsɛ]「草」)。母音音素/i/の例は(2-55)に、母音音素/i/の例は(2-64)に、母音音素/a/の例は(2-69)に、母音音素/u/の例は(2-74)にそれぞれ挙げた。[e], [o]が無声化する例は見つかっていない。

¹⁹ 基本的にNNは同母音連続が実現する。

語頭ではなく語根頭という環境である根拠は、複合語の例でも観察されるからである²⁰。

(2-84)	/uciza+pitu/	[utsizɛp ^h ɪtu]	兄弟 (/uciza/ 「兄弟」 + /pitu/ 「人」)
	/nisi+kaci/	[niɕik ^h ɛtsi]	北風 (/nisi/ 「北」 + /kaci/ 「風」)
	/pan+simi/	[p ^h ɛnɕ ^h imi]	足の爪 (/pan/ 「足」 + /simi/ 「爪」)

上記のプロセスによって生じた無声化母音に [m], [n], [r] が後続する場合、これらの子音も無声化する (例: /pana/ [p^hɛnɐ] 「花」)。/m/ の無声化プロセスが適用される例は (2-38) に、/n/ の無声化プロセスが適用される例は (2-41) に、/r/ の無声化プロセスが適用される例は (2-48) にそれぞれ挙げた。

ただし、語根頭であっても、当該音節が重音節である場合には本プロセスは適用されない。例えば、/pan/[p^hɛŋ] 「足」、/tuu/[t^hu:] 「十」、/kangan/[kɛŋgɛŋ] 「鏡」、/koiſupu/[k^hois^hup^hu] 「便所」などである。

本規則で説明できない例として、(2-85) に挙げるような語が見つかっている。

(2-85)	/agapana/	[ɛgɛp ^h ɛnɐ]	赤花
	/amasina/	[ɛmɛs ^h inə]	サトウキビ
	/amasukuru/	[ɛmɛs ^h ukuru]	頭
	/misikurumin/	[miɕ ^h ik ^h urumiŋ]	耳

これまでの例で観察される規則から見ると、現代では 1 語として化石化しているものの、/agapana/ 「赤花」、/amasina/ 「サトウキビ」、/amasukuru/ 「頭」、/misikurumin/ 「耳」は歴史的に複合語であったと説明できる可能性がある²¹

2.2.3 語の音節構造

基本的な音節は、(C)N_i(N_j) から成る。表 2.4 および表 2.5 に、基本的な音節一覧を挙げる。縦軸が子音音素、横軸が母音音素である。空欄は見つかっていないことを示す。それぞれの例は 2.1.1 で挙げた。

²⁰ 複合語の場合、少数の例しか見つかっていないが、後部要素となる語根頭に連濁の音韻プロセス (2.5.4) が適用される場合には、本規則は適用外である。

²¹ 例えば、/aga/ 「赤」 + /pana/ 「花」、/ama/ 「甘い」 + /sina/ 「綱」、/ama/ (不明) + /sukuru/ (「つぶり」から転じた形式)、/mi/ (耳?) + /sikuru/ (「つぶり」から転じた形式) + /min/ (耳) などと分析できた可能性がある。

表 2.4: 音節組み合わせ一覧 (C)N

	a	i	u	e	o	ĩ
なし	a	i	u	e	o	
p	pa	pi	pu	pe		pĩ
b	ba	bi	bu	be	bo	
t	ta	ti	tu	te	to	
d	da	di	du	de	do	
c	ca	ci	cu			cĩ
z	za	zi	zu			zĩ
k	ka	ki	ku	ke	ko	
g	ga	gi	gu	ge	go	
f	fa	fi	fu			
s	sa	si	su	se	no	sĩ
h	ha	hi	hu	he	ho	
m	ma	mi	mu		mo	
n	na	ni	nu		no	nĩ
r	ra	ri	ru	re		rĩ
w	wa					
j	ja		ju		jo	

表 2.5: 音節組み合わせ一覧 (C)NN

	aa	ii	uu	ee	oo	ĩĩ	ěě
なし	aa	ii	uu	ee	oo	ĩĩ	
p	paa	pii	puu	pee	poo		pěě
b	baa	bii	buu	bee	boo		
t	taa		tuu	tee	too		
d	daa		duu	dee	doo		
c	caa			cee	coo		
z	zaa			zee	zoo	zĩĩ	
k	kaa	kii	kuu	kee	koo		
g	gaa	gii		gee	goo		
f	faa		fuu		foo		
s	saa	sii	suu	see	soo	sĩĩ	
h	haa	hii			hoo		
m	maa	mii		mee	moo		měě
n	naa		nuu	nee	noo		
r	raa			ree	roo		
w	waa						
j	jaa		juu		joo		

2.2.3.1 から 2.2.3.3 では、音節の可能な組み合わせパターンのうち、見つかったパターンを、1 音節語、2 音節語、3 音節語、4 音節語、5 音節語の順で挙げる。6 音節語はこれまでに見つかっていない。渡り音が現れる場合については 2.2.4 を、語頭で核音のスロットを /n/ が占める場合については 2.2.5 を、/n/ が末子音のスロットを占める場合については 2.2.6 を、/n/ 以外の音素が末子音のスロットを占める場合については 2.2.7 を、母音連続については 2.2.8 をそれぞれ参照されたい。

2.2.3.1 1 音節語

語根のみで構成される 1 音節語の例を挙げる。これまでに、CN, NN, CNN, NCo, CNCo, CGN(N), CGNCo が見つかっている。

(2-86)

/ki/	[ki]
/ĩĩ/	[i:]
/pee/	[pe:]
/an/	[eŋ]
/min/	[miŋ]
/cju/	[tɕu]
/kjuu/	[kʲu:]
/mjān/	[mʲeŋ]

木
ご飯
南
粟
目
～だそうだ
今日
膿

(C (G)) NN (Co)

k	i
	ĩĩ
p	ee
	a n
m	i n
c j	u
k j	uu
m j	a n

2.2.3.2 2 音節語

語根のみで構成される 2 音節語の例を挙げる。これまでに、NN.NN, N(N).CN, N.CNN, NN.CNN, N.CNCo, N.CGNC, NCo.CN, CN(N).CN, CNN.CN:, CN(N).CNCo, CN.CGN, CGN.CN, CGNN.CN, CNCCo.CN, CNCCo.CNCo がみついている。

(2-87)			(C (G)) N(N) (Co). (C (G)) N(N) (Co)		
/aa.ii/	[e:ii]	いいえ	aa		ii
/u.wa/	[uwe]	豚	u	w	a
/a.boa/	[eboe]	母	a	b	oa
/uu.bi/	[u:bi]	いくら	uu	b	i
/aa.fuu/	[e:fu]	石鯛	aa	f	uu
/a.gan/	[egɛŋ]	さつま芋	a	g	a n
/i.sjon/	[iɕon]	砂	i	s j	o n
/on.da/	[ondɛ]	編みかご	o n	d	a
/ta.ni/	[tʰɛni]	種	t	a	n i
/poo.ɕi/	[pʰootsi]	箒	p	oo	c i
/jaa.see/	[jɛ:se:]	野菜	j	aa	s ee
/fu.mon/	[fʰumɔn]	雲	f	u	m o n
/juu.nen/	[ju:nen]	夕方	j	uu	n e n
/ma.cju/	[mɛtɕu]	まつ毛	m	a	c j u
/sja.ma/	[ɕʰɛmɛ]	兄	s j	a	m a
/mjaa.gu/	[mɛ:gu]	脈	m j	aa	g u
/nan.da/	[nɛndɛ]	涙	n	a n	d a
/kan.gan/	[kɛŋgɛŋ]	鏡	k	a n	g a n

2.2.3.3 3 音節以上の語

■3 音節語の例

(2-88)	/u.ta.ma/	[utɛmɛ]	子ども	N.CN.CN
	/u.jan.cju/	[ujɛntɕu]	ネズミ	N.CNCo.CGN
	/an.da.ni/	[ɛndeni]	アダン	NCo.CN.CN
	/ku.ku.ru/	[kʰukuru]	心	CN.CN.CN
	/su.pu.rin/	[sʰupurɛn]	冬瓜	CN.CN.CNCo
	/mu.sja.ma/	[muɕɛmɛ:]	豊年祭	CN.CGN.CN

■4 音節語の例

(2-89)	/i.si.na.ga/	[iɕʰinəgɛ]	背中	N.CN.CN.CN
--------	--------------	------------	----	------------

/a.ma.su.na/	[eməs ^h u _u ɲe]	サトウキビ	N.CN.CN.CN
/pĩ.su.ma.ri/	[p ^h ĩs ^h u _u mɛri]	正午	CN.CN.CN.CN
/gu.ci.ru.min/	[gutɕirumiŋ]	脇	CNCo.CN.CN.CNCo

■5 音節語の例

これまでに見つかっている5音節語（複合語を含まない）は、以下の2つである。

(2-90) /a.ma.su.ku.ru/	[eməs ^h u _u k ^h uru]	頭	N.CN.CN.CN.CN
/mi.si.ku.ru.min/	[miɕ ^h ik ^h urumiŋ]	耳	CN.CN.CN.CN.CNCo

これらの語は、現代では1語と分析するが、歴史的には複合語に由来する可能性がある。例えば、/amasukuru/「頭」に関連して、/amazi/「髪の毛」が見つかっており、/misikurumin/「耳」に関連して、/min=nu taru/（耳?=GEN たる）「耳たぶ」が見つかっている。/ama/、/sukuru～sikuru/、/misikuru/はそれぞれ単独で用いられる例は見つかっていない。後者に関して、おそらく「耳たぶ」を意味する表現中の/min/は「耳」を意味していると考えられるが、/min/は基本的に「目」を意味する。従って、「耳」を意味する語に、/min/「目」と弁別可能な表現を用いた可能性がある。

2.2.4 渡り音

これまでの調査で、渡り音を伴うオンセット、すなわちCGに現れる子音音素の組み合わせには、/pj, bj, cj, zj, kj, gj, fj, sj, hj, mj, nj, rj, kw/が見つかっている。/j/は先行する子音を口蓋化し、一方/w/は先行する子音を両唇化する（2.1.1.6）。各子音音素の口蓋化、両唇化の音声プロセスを以下の通り示す。

(2-91) /pj/	→ [p ^j]
/bj/	→ [b ^j]
/cj/	→ [tɕ]
/zj/	→ [dʒ]
/kj/	→ [k ^j]
/gj/	→ [g ^j]
/fj/	→ [f ^j]
/sj/	→ [ɕ]
/hj/	→ [ç]
/mj/	→ [m ^j]
/nj/	→ [ɲ]
/rj/	→ [r ^j]
/kw/	→ [k ^w]

Gに/w/が現れるのは、/kwa/のみである。Gに/j/が現れる場合、Cには様々な子音音素が現れる。Gに/j/が現れる場合の多くの例は、動詞の活用形によって実現する。従って、CGに続く母音には偏り

が見られる。/a/ の例が多く (/pja, bja, cja, zja, kja, gja, fja, sja, hja, mja, nja, rja/)、それ以外の母音の組み合わせは例が少ない (/cju, kjuu, sju, zje, sje, bjo, kjo, sjo/)。(2-94) から (2-95) に例を挙げる。

(2-92) CGa を含む語

/pjaa.gu/	[p ^j ɛ:gu]	百
/ju.bja/	[jub ^j ɛ]	呼び終わった (cf. /jub/ 「呼ぶ」)
/cja/	[tɕɛ]	～なら (接続助詞)
/zjan.cjan/	[dʒɛntɕɛŋ]	じゃんちゃん (擬音語)
/gak.kja/	[gek ^j ɛ]	鎌
/n.gja/	[ŋg ^j ɛ]	行った (cf. /ng/ 「行く」)
/fjaa/	[f ^j ɛ:]	降り終わった (cf. /f/ 「降る」)
/sja.maa/	[ɕɛmɛ:]	兄
/sjaa.mi.ci/	[ɕɛ:mici]	毎日
/hjaa/	[ɕɛ:]	食べ終わった (cf. /h/ 「食べる」)
/mjan/	[m ^j ɛŋ]	膿
/mjaagu/	[m ^j ɛ:gu]	脈
/e.nja/	[ɛnɛ]	言い終わった (cf. /en/ 「言う」)
/bu.du.rja/	[budur ^j ɛ]	踊り終わった (cf. /budur/ 「座る」)
/kwan/	[k ^w ɛŋ]	棺

(2-93) CGu を含む語

/cju/	[tɕu]	～とさ (伝聞助詞)
/kjuu/	[k ^j u:]	今日
/mi.sju/	[miɕu]	味噌

(2-94) CGe を含む語

/kac.cjee/	[k ^h ɛttɕɛ:]	勝連 (屋号)
/zjen.zjen/	[dʒɛndʒɛŋ]	全然 ²²
/sjen.pai/	[ɕɛnpɛi]	先輩

(2-95) CGo を含む語

/bjoo.ha/	[b ^j o:hɛ]	痒い
/rak.kjon/	[rɛk ^j :oŋ]	らっきょう
/i.sjon/	[iɕ ^h oŋ]	砂

²² 日本語からの借用の可能性もある。

2.2.5 核音に現れる子音音素/n/

単独で現れる/n/、あるいは語頭音節に現れ他の子音に先行する/n/は、核音(N)である。すなわち/n/を音節を成す子音音素(成節鼻音)と分析する。ただし、例が多いわけではない。/n/を核音のロットを占める鼻音と分析する理由は、次の2つである。

- 波照間方言の語で、語頭にCCVという連続があった場合、初頭のCは/n/に限られる。
- 話者が語頭の/n/を一つのパート(音節/モーラ)として認識している。

/n/の独立性に対する話者の直観を補足すると、例えば、/nsahan/「重い」をゆっくり発音してもらうと、3つのパート、/n/、/sa/、/han/に分けて発音される。上記2つの理由から、語頭の/n/は核音と分析し、語中では、基本的に初頭子音または末子音として分析する。なお、上昇型のアクセントを持つ語(例えば/min/「目」など)は、語末の/n/も語頭の/n/と同様に分けて発音されることがある。しかし、常に分けられるわけではないため本論文では語末の/n/は成節的としない。

(2-96) に、これまでに見つかっている成節子音を含む語例をすべて挙げる。

(2-96)	/n.busu/	[mbus ^h u]	蒸す	N.CNCN
	/n.ta/	[nte]	土	N.CN
	/n.di/	[nd̥i]	出る	N.CN
	/n.gu/	[ɲgu]	行く	N.CN
	/n.ci/	[nt̤ei]	満ちる	N.CN
	/n.sa.han/	[nsəheŋ]	重い	N.CN.CNC _o
	/n.man/	[mːeŋ] ²³	馬	N.CNC _o

(2-97) に挙げる例では、核音が連続する²⁴。/nn/を成節子音の連続すなわち核音の連続として分析する。感嘆詞と数詞「6」に関する語である(2.1.1.4)。

(2-97)	/nn/	[nː]	うん(感嘆詞)	NN
	/hnn.ci/	[h̥nts̥i]	6つ	CNN.CN
	/hnn.s̥in/	[h̥ns̥iŋ]	6本	CNN.CNC _o

2.2.6 末音に現れる子音音素/n/

音節構造の末子音には、多くの場合/n/が現れる。これまで見つかっている(C)Nnの組み合わせを表2.6に挙げる。空欄は該当する(C)Nnが見つからないことを示す。(C)Nnが単一形態素内に現れることが確認されている例は少ない。多くは動詞の活用や、累加助詞=n(12.3.1)が現れる際に実現する。

²³ /n/の音声実現に関しては、2.1.1.4を参照されたい。非音節末位置の/n/は後続する子音の調音点に同化し実現する(逆行同化の音声プロセス)。

²⁴ [nn]を核音/NN/と解釈する他に、音素として無声鼻音/n̥/を認定するという記述方法も考えられる。無声鼻音が現れる環境が1つに限られていることから、本論文では音素を増やさない前者の解釈を選択した。

表 2.6: (C)Nn の組み合わせ一覧

	an	in	un	en	on	in
なし	an	in	un	en	on	in
p	pan	pin	pun			pın
b	ban	bin	bun			
t	tan	tin	tun	ten		
d	dan	din	dun			
c	can	cin	cun			cın
z	zan	zin				zın
k	kan	kin	kun	ken	kon	
g	gan	gin	gun			
f	fan		fun			
s	san	sin	sun		son	sın
h	han	hin	hun	hen	hon	
m	man	min	mun			
n	nan	nin	nun	nen		
r	ran	rin	run			rın
w						
j	jan		jun		jon	

(2-99) から (2-103) に、/n/ が末子音に現れる語例を挙げる。

(2-98) (C)an を含む語

/an/	[eŋ]	粟
/pan/	[p ^h eŋ]	足
/e.ban/	[ebeŋ]	だけど
/ja.gu.tan/	[jɛgut ^h eŋ]	焼いた (cf. /jag/ 「焼く」)
/daan/	[dɛ:ŋ]	あなたも
/ac.can/	[ɛttseŋ]	明日も
/i.zan.da/	[izɛnda]	ちゃんと
/kan/	[k ^h eŋ]	神
/gan/	[gɛŋ]	そうね (感嘆詞)
/fan.ta/	[f ^h ɛnt ^h e]	降らなかった (cf. /f/ 「降る」)
/san.ta/	[s ^h ɛnt ^h e]	しなかった (cf. /s/ 「する」)
/han.ta/	[hɛnt ^h e]	食べなかった (cf. /h/ 「食べる」)
/man.zjon/	[mɛndʒoŋ]	パパイヤ
/mi.nan/	[minɛŋ]	貝
/mi.ran.ta/	[mirent ^h e]	見なかった (cf. /mi(r)/ 「見る」)
/i.jan/	[ijɛŋ]	父も

(2-99) (C)in を含む語

/i.bin/	[ibin]	いつも
/pin/	[p ^h in]	屁 (~/p ^h in/)
/u.tin/	[ut ^h in]	落ちる
/n.din/	[nd ^h in]	出る
/i.na.cin/	[inet ^h in]	海へも)
/u.zin/	[uzin]	腕も
/tok.kin/	[tok. ^h in]	グアバ
/ba.gin/	[b ^h egin]	～までも (/bagi/ 接続助詞)
/siin/	[s ^h i:in]	手も
/hin.ta/	[çint ^h e]	家のあたり
/min/	[min]	目
/nin/	[nin]	根
/ku.rin/	[k ^h u ^h rin]	これも

(2-100) (C)in を含む語

/in/	[in]	飯も
/p ^h in.gi/	[p ^h in ^h gi]	逃げて
/fu.cin/	[f ^h utsin]	口も
/zin/	[dzin]	銭
/sin/	[s ^h in]	唾
/s ^h i.pu.rin/	[s ^h i ^h pur ^h ən]	冬瓜

(2-101) (C)un を含む語

/un.ga.ra/	[uŋgərə]	だから (その=理由)
/a.s ^h i.pun/	[əs ^h i ^h p ^h un]	遊ぶ (cf. /asip/ 「遊ぶ」)
/bun/	[buŋ]	居る (cf. /buu/~/bu(r)/ 「いる」)
/tun/	[t ^h un]	妻
/ka.dun/	[k ^h ɛdun]	角も
/ma.cun/	[mɛtsun]	待つ
/s ^h i.kun/	[s ^h i ^h k ^h un]	聞く
/ja.gun/	[jɛgun]	焼く
/fun/	[f ^h un]	降る
/sun/	[s ^h un]	する
/hun.ta/	[f ^h unt ^h e]	あげなかった (cf. /hi(r)/ 「あげる」)
/mun/	[mun]	思う
/nun/	[nun]	ノミ

(2-102) (C)en を含む語

/en.ta/	[ent ^h ɐ]	言った (cf. /en/ 「言う」)
/ten/	[t ^h en]	～という (接続助詞)
/si.ken/	[s ^h i:k ^h ɐŋ]	月
/ta.ka.hen.ta/	[t ^h ɐk ^h ɐhent ^h ɐ]	高くなかった (cf. /takaha/ 「高い」)
/juu.nen/	[ju:nɐŋ]	夕方

(2-103) (C)on を含む語

/on/	[oŋ]	うちわ
/kon/	[k ^h oŋ]	買う (cf. /k/ 「買う」)
/son.dan/	[s ^h ondaŋ]	相談
/hon/	[hoŋ]	食べる (cf. /h/ 「食べる」)
/jon.ga.ra/	[joŋgɐɾɐ]	～のようだから

2.2.7 末音に現れる /n/ 以外の子音音素

末子音に /n/ 以外の子音音素が現れる場合、その子音音素の後ろの音節境界には必ず同じ子音の連続、すなわち $C_i.C_i$ が現れる。従って、子音音素 /c/ が重子音で現れる場合、音声的には [tʰts] が実現するが、/tc/ではなく、同じ音素の連続/cc/と解釈する。 C_i には、/t, k, c, s/が見つかっている。子音連続に/n/のような同化のプロセス (2.1.1.4) は考えない。その理由は、現れうる子音/t, k, c, s/はすべて音素として認定しているからである。/n/の場合は/nC/の環境で [m]~[n]~[ŋ] といった異音が現れる。このうち [ŋ] という音素は認定していないため、音声プロセスを想定する必要がある。これまでの調査で見つかっているすべての語を (2-104) に挙げる。

(2-104) /ot.ta/	[ot: ^h ɐ]	カエル
/mut.tu/	[mut: ^h u]	本当に
/tok.kin/	[tok: ^h iŋ]	グァバ
/gok.ka/	[gok: ^h ɐ]	ニワトリ
/gak.kja/	[gɛk ^j :ɾɐ]	鎌
/rak.kjon/	[ɾɛk ^j :oŋ]	らっきょう
/ac.ca/	[ɛttɐ]	明日
/guc.cee/	[guttse:]	雄牛
/kis.sa/	[k ^h i:s: ^h ɐ]	とくに
/was.sa.ha/	[wɛs: ^h ɐhɐ]	悪い
/bas.si/	[bɛɕ: ^h i]	忘れる

2.2.8 母音連続

本論文では、同じ母音音素の連続は同母音連続と呼び、異なる母音音素の連続を単に母音連続と呼ぶ。波照間方言の母音連続は、積極的な根拠がないため1音節から成るとも別音節から成るとも言える。本論文ではひとまず1音節から成ると考える。母音連続を1音節と分析する理由は、唯一、無声化プロセス(2.2.2)が同母音連続と同様に分析できるからという点である²⁵。すなわち、帯気子音に母音連続が続く場合、先行する母音は無声化しない。従って、母音連続が同母音連続と同様に重音節であるためだと結論づけられる。

母音連続は、種類も、それが用いられる語も多くない。母音音素終わりの語に、複数接辞/-(i)ma/ (5.4.2.1)が付加する場合に観察される。/ija-ima/「お父さんたち」、/abo-ima/「お母さんたち」、/sjama-ima/「お兄さんたち」/ama-ima/「お姉さんたち」などである。見つかった母音音素の組み合わせは、/iu, ai, ae, au, ui, ua, oi, oa/である²⁶。唯一3つの母音音素の連続は/muai.run/「思える」(思う-POT-NPST-IND)で観察される。

母音連続を含む語例を(2-105)に挙げる。なお、単純語に(C)N_iN_iCoを含む語は見つっていない。

(2-105)	/miu.sĩ/	[mius ^h i]	雌牛
	/pai.ma/	[p ^h eime]	おばあさん達
	/kae.ru/	[k ^h æru]	帰る
	/nau.bi/	[næubi]	あくび
	/ui/	[ui]	上
	/kui/	[k ^h ui]	声
	/mu.nua/	[munuæ]	物は ²⁷
	/koi.su.pu/	[k ^h ois ^h up ^h u]	便所
	/a.boa/	[æboæ]	母 (/a.boa/~/a.bo/)
	/muai.run/	[muæirun]	思える (思う-POT-NPST-IND)

2.3 アクセント

波照間方言は、ピッチの高低が弁別的な三型アクセント体系を有する。その3つとは、下降型、平進型、上昇型である。単一のアクセントがかかるドメインは、語、あるいは語と接語²⁸である。本論文では単一のアクセント型を担う単位を、アクセント単位と呼ぶ²⁹。

²⁵ ただし過去の資料から、末音節が2モーラ ((C(G))NCo や (C(G))NN) から成る場合に用いられていた可能性がある異形態が観察されており、今後、現代でも1音節として分析の方が妥当である証拠が出てくる可能性がある。例は p. 310 の注 14 を参照されたい。今後の調査が待たれる。

²⁶ (2-105) のうち、/ae/ の母音連続は見ついているものの、kaerun「帰る」、/kirikae/「切り替え」という語の例である。これらは日本語からの借用語の可能性もある。

²⁸ 接語に関しては 3.1 を参照されたい。助詞の一部が接語である。

²⁹ 音韻的な複数の基準で同定する単位を音韻語 (Phonological word) と呼ぶ場合もあるが (Dixon and Aikhenvald 2002)、音韻的な基準の内、アクセントのみを基準とするため単にアクセント単位と呼ぶ。

それぞれの弁別特徴は、次の3つである。各アクセント記号をアクセント単位末に付す。

- 下降型：アクセント単位末尾に向けて下降する。/↓/で表記。
- 平進型：下降も上昇もしない。/↔/で表記。
- 上昇型：アクセント単位末尾に向けて上昇する。/↑/で表記。

3つのアクセント型のピッチパターンを模式化したものを、図 2.2 から図 2.4 に挙げる。実線が弁別的なピッチパターンを示す。点線は、必須ではない余剰的なピッチパターンを示す。平進型では、アクセント単位初頭で上昇のピッチ変動が、上昇型では、アクセント単位初頭で下降のピッチ変動が任意で実現する。なお、長母音を含む音節内にピッチの変動がない場合、母音が短母音化する現象が多く見られる。

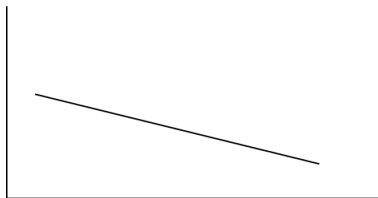


図 2.2: 下降型アクセント



図 2.3: 平進型アクセント

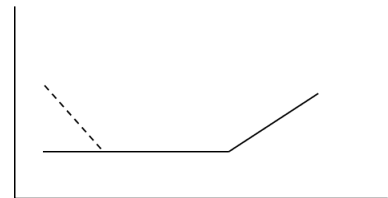


図 2.4: 上昇型アクセント

図に示す通り、アクセント単位の長さが変わってもアクセント型の対立が一定であり、上昇あるいは下降の位置、すなわちどの音節あるいはモーラでピッチが変動するかは、非弁別的である。そのため、N 型アクセント (上野 1977, 2012) でかつ語声調 (早田 1977, 1999) の言語であると言える³⁰。

表 2.7 に、これまでに見つかっているミニマルトリプレット³¹ およびミニマルペアを示す。ハイフン (-) は該当するアクセント型の例が見つからないことを表す。下降型と平進型のミニマルペアが最も多い。一方、平進型と上昇型の上昇型のミニマルペアは 1 例のみである。さらに、平進型と上昇型に所属するアクセント単位の語頭の分節音には、偏りが見られる。平進型と上昇型に所属するアクセント単位に見られる語頭の分節音の偏りについては、2.3.6 で詳しく述べる。

³⁰ N 型アクセントとは、アクセント単位の長さに関わらず、アクセント型の対立が一定数であるアクセント体系を指す。語声調とは、アクセント単位全体に音調が与えられるアクセント体系を指す。従って、語声調は各音節に弁別的な音調が与えられる一般的な声調 (中国語など) とは異なる。語声調はまた、(狭義の) ピッチアクセント (日本語東京方言など) と異なる。なぜなら語声調は、特定の音節あるいはモーラに一貫してピッチが付与されるわけではなく、アクセント単位全体でその音調が実現する体系を指すからである。

³¹ 麻生・小川 (2016) では、/sisjan↓/「知っている」、/sisjan↔/「切った」、/sisjan↑/「着た」をミニマルトリプレットとして提示しているが、分節音に/sisjan/を含むミニマルトリプレットは、2つのアクセント単位から成ると分析する。/sisjan↓/「知っている」は、/sis-j a-n/と分析でき、下降型アクセントを持つ継続補助動詞 1 の影響によって下降ピッチパターンが、/sisjan↔/「切った」と/sisjan↑/「着た」は、上昇型アクセントを持つ近接過去接辞-ja の影響によってそれぞれ平進ピッチパターンと上昇ピッチパターンが、それぞれ実現している可能性が高い。詳しくは、6.4.3 および 9.2.1 を参照されたい。

表 2.7: ミニマルトリプレット・ミニマルペア

音素配列	下降型	平進型	上昇型
/zïi/	/zïi\ / 「血」	/zïi / 「乳」	/zïi^ / 「地」
/pii/	/pii\ / 「女性器」	/pii / 「火」	-
/pîn/	/pîn\ / 「日」	/pîn / 「屁」	-
/pana/	/pana\ / 「鼻」	/pana / 「花」	-
/kii/	/kii\ / 「毛」	/kii / 「木」	-
/kee/	/kee\ / 「井戸」	/kee / 「卵」	-
/kaci/	/kaci\ / 「風」	/kaci / 「うに」	-
/faa/	/faa\ / 「鞍」	/faa / 「蔵」	-
/simi/	/simi\ / 「爪」	/simi / 「包む」	-
/sumu/	/sumu\ / 「下」	/sumu / 「肝」	-
/sunu/	/sunu\ / 「昨日」	/sunu / 「着物」	-
/usi/	/usi\ / 「牛」	/usi / 「白」	-
/zîn/	/zîn\ / 「膳」	-	/zîn^ / 「金」
/mee/	/mee\ / 「米」	-	/mee^ / 「前」
/nan/	/nan\ / 「名前」	-	/nan^ / 「波」
/juu/	/juu\ / 「魚」	-	/juu^ / 「湯」
/mun/	-	/mun / 「思う」	/mun^ / 「麦」

表 2.7 の内、/zïi/を含む 3 つのアクセント単位の音声波形・F0 曲線・スペクトログラムを図 2.5 から図 2.7 に示す。録音は、インフォーマントに単独で発音してもらう形式で行った。なお、音響分析には Praat (ver. 5.4.21) を用いた。図 2.5 は下降型の例である。高く始まったピッチが、アクセント単位末に向かって下降している。図 2.6 は平進型の例である。ピッチは早めに上昇し、そのままの高さをアクセント単位末まで保つ。末尾に向かって上昇も下降もしない。図 2.7 は上昇型の例である。低く始まったピッチが、アクセント単位末に向かって上昇している。

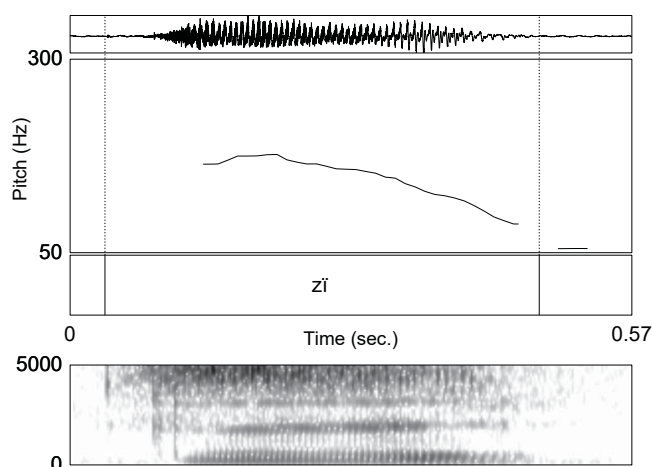


図 2.5: /zĩ\\/ 「血」

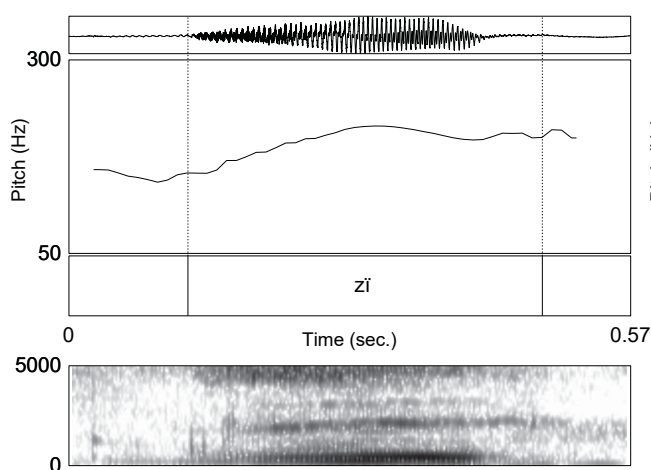


図 2.6: /zĩ̃/ 「乳」

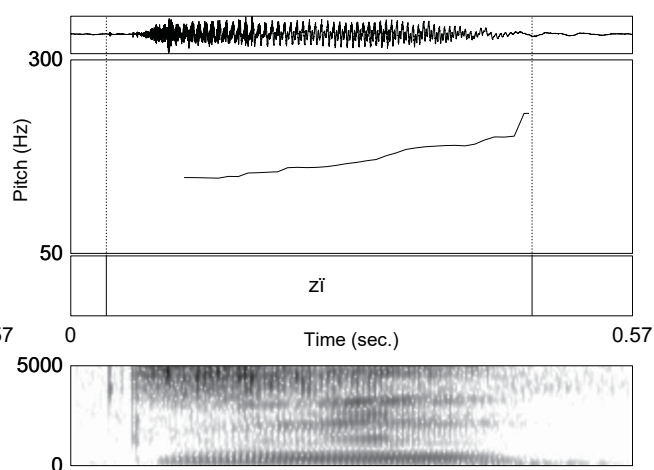


図 2.7: /zĩ̃/ 「土・地面」

本節では、まず、名詞と動詞のそれぞれの各アクセント型について 2.3.1 から 2.3.3 で詳しく述べる。複合語および属性動詞 (6.1) のアクセントは、これから述べる名詞・動詞のアクセントとは少し異なるため、2.3.4 で分けて記述する。次に 2.3.5 で、先行研究と本論文の立場の違いを述べる。最後に 2.3.6 で、アクセント体系の歴史的な変化について述べる。

2.3.1 下降型

下降型アクセントは、ピッチ下降があることが弁別的特徴である。この型に属するアクセント単位の基本的なピッチパターンは、高ピッチから始まり、末尾に向けて徐々に下降するものである。一方で、アクセント単位初頭に無声母音の実現する 2 音節 2 モーラ語の場合 (例えば /pana/ [p^hẽnẽ] 「鼻」 など)、残りの音節でピッチパターンを担う必要がある。従って、基本的なピッチパターンとは異なるパターンが観察される。例えば (2-106) の /pani/ では、(1) /ni/ すなわち 2 音節目で急激に下降するパターンと、

(2) /ni/のみ低いピッチで実現するパターンが観察される。いずれにせよ、弁別特徴としてピッチ下降が観察されるため下降型である。

名詞は、類別語彙(金田一 1974)の1, 2類(1, 2拍名詞)が³²、あるいは系列別語彙(松森 2010, 五十嵐他 2012 など)のA系列の語の多くが、この型に属する³³。動詞は、類別語彙で主に1類の動詞が属する。

(2-106)	/poo\	帆
	/kii\	毛
	/faa\	鞍
	/puci\	へそ
	/kaci\	風
	/musi\	虫
	/pani\	羽
	/takabu\	煙草
	/kipusi\	煙
	/sukara\	力
	/supusin\	ひざ

(2-107)	/kon\	買う
	/jagun\	焼く
	/nagun\	泣く
	/birun\	座る
	/bassin\	忘れる

下降型のピッチパターンを担うために長母音化規則が適用される場合がある(2.5.1)。(C)Nから成る語を単独で発話する場合には初頭音節が必ず長母音化する(例: /kii\「毛」)。他の形態素が後続し、1つのアクセント単位を成す場合には初頭音節は長母音化する場合とそのままの場合とがある(例: /kii=ndu\ ~ /ki=ndu\「毛が」)。

2.3.2 平進型

平進型アクセントは、ピッチが大きく上昇も下降もしないことが弁別特徴である。この型に属するアクセント単位のピッチは、高く始まり、その後大きなピッチ変動がない。任意で若干低めのピッチから始まることもある。任意で生じる若干低めのピッチは、実現するとしたら1音節目である。従って、アクセ

³² 類別語彙とは、本土諸方言間でアクセント対応が明らかな語群のことである。現代の日本の本土諸方言と文献資料(とりわけ、平安末期の漢和辞典である『類聚名義抄』の声点表示)における単語アクセントの対応に基づいて祖体系に建てられるアクセントの対立グループを「類」と呼び、その所属語彙(その対応を実現している単語)が「類別語彙」である(上野 2006)。

³³ 系列別語彙とは、琉球諸語の複数の方言におけるアクセント対応が明らかな語群のことである。本土方言における類別語彙の琉球諸語版である。祖方言に三型アクセント体系を設定し、それぞれのアクセント型に所属する語彙をA系列(語群)、B系列(語群)、C系列(語群)と呼ぶ。各方言によって、各系列の音調パターンや、系列の合流・分岐の仕方は異なる。詳しくは、松森(2010)、五十嵐他(2012)を参照されたい。

ント単位初頭に無声化した母音が実現する場合には、観察されない³⁴。名詞については、類別語彙の 3、4、5 類（1、2 拍名詞）、系列別語彙の B 系列および C 系列の語がこの型に属する。動詞については、類別語彙で主に 2 類の動詞がこの型に属する。以下、(2-108) に名詞、(2-109) に動詞の例を挙げる。無声子音音素あるいは母音音素で始まる語が多い。

- (2-108) /ki̯/ 木
 /ami̯/ 雨
 /imi̯/ 夢
 /iru̯/ 色
 /fuca̯/ 草
 /paton̯/ 鳩
 /katana̯/ 包丁
 /fuciri̯/ 薬
 /kangan̯/ 鏡
 /amasukuru̯/ 頭
- (2-109) /kun̯/ 来る
 /mun̯/ 思う
 /utin̯/ 落ちる
 /perun̯/ 入る
 /hakun̯/ 書く

平進型は、ピッチパターン実現のために最低 1 モーラあれば問題ないと言える。しかし、長母音化規則が適用される場合がある (2.5.1)。例えば「木」を意味する語は、単独の発話でも /ki̯/ と /kii̯/ が共に観察される。

2.3.3 上昇型

上昇型アクセントは、アクセント単位末尾に向かってピッチ上昇することが弁別的な特徴である。この型に属するアクセント単位の初頭は低ピッチから始まり、多くは末音節あるいは末モーラのみ高ピッチで実現する³⁵。

名詞については、類別語彙の 3、4、5 類（1、2 拍名詞）、系列別語彙の B 系列および C 系列の語がこの型に属する。所属する語の類と系列は、平進型と同様である。動詞については、類別語彙で主に 2 類の動詞が属する。以下、(2-110) に名詞、(2-111) に動詞の例を挙げる。有声子音で始まる語が多い。

- (2-110) /hii̯/ 家
 /nin̯/ 根

³⁴ 平進型に属するアクセント単位は、基本的に初頭が無声子音あるいは母音である。任意で生じる若干低めのピッチは、主に初頭が母音のアクセント単位で観察される。これまでに見つかっている初頭が有声子音のアクセント単位は /zii̯/ 「乳」のみである。

³⁵ 初頭から末尾にかけての漸次上昇の場合もある。

	/jun/	弓
	/zĩn/	お金
	/batta/	お腹
	/misju/	味噌
	/deguni/	大根
	/garasi/	カラス
(2-111)	/nun/	縫う
	/mirun/	見る
	/niirun/	握る
	/jumun/	読む

上昇型の一部のアクセント単位は、初頭でピッチが下降し、末尾に向けて再び上昇するというピッチパターンを示すことがある。初頭の分節音が鼻音である場合が多いが、初頭のピッチ下降と相関性があるのかは不明である。このようなピッチパターンが実現するアクセント単位には、/maasu/「塩」、/nanda/「涙」、/maami/「豆」、/minan/「貝」、/misikurumin/「耳」、/naubi/「あくび」、/mimizi/「ミミズ」、/gucimin/～/gucirumin/「脇」などの語がある。松森 (2015) は、初頭で下降してから上昇するというピッチパターンを当該アクセント型（本論文でいう上昇型）の重要な特徴として「下降上昇型」と呼んでいる。しかし、本論文では末尾に向けての上昇が唯一弁別的であり、初頭の下降は音韻的にはあくまでも任意であり、非弁別的であると考え。その根拠として、/maasu/「塩」や、/nanda/「涙」といった名詞は、高ピッチで始まる発音が多いものの、同じ環境で低ピッチで始まる発音も観察されることが挙げられる³⁶。図 2.8 および図 2.9 に上昇型のアクセントを持つ/minan/「貝」の音声波形・F0 曲線・スペクトログラムを示す。図 2.8 はアクセント単位初頭に下降がないパターンのものである。低ピッチから始まり、末尾にかけ上昇している。図 2.9 はアクセント単位初頭に下降があるパターンのものである。比較的高いピッチから始まり、/na/に向かって下降し、最後の/n/で上昇している。

³⁶ 名詞を単独で発話した場合のみ調査している。名詞単独ではない場合のピッチパターンについて、どちらのピッチパターンが多いかについては未調査である。

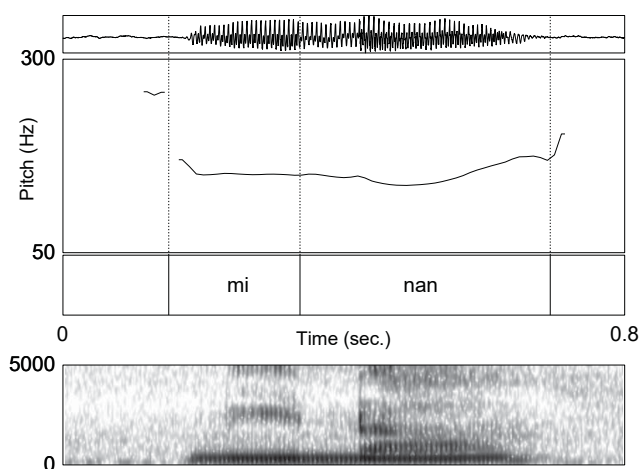


図 2.8: 初頭に下降がない/minan/「貝」

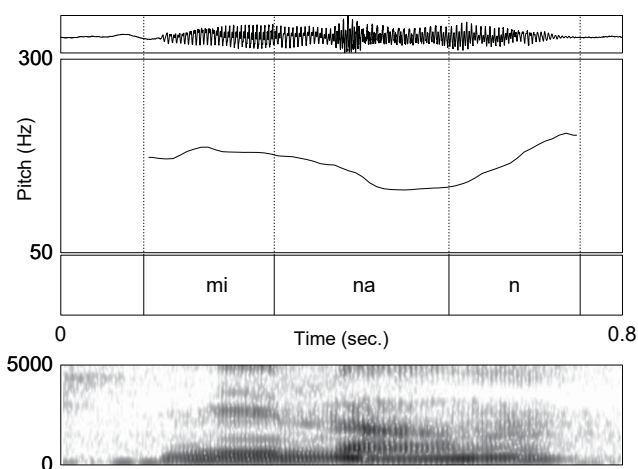


図 2.9: 初頭に下降がある/minan/「貝」

上昇型のピッチの変動に関して、注意する点が2つある。まず、下降型と同様に、ピッチパターンを担うために長母音化規則が適用されることがある(2.5.1)。CN から成る語、あるいは CNCN から成る語の語頭に任意のピッチ下降が生じる場合には、初頭音節が必ず長母音化する(例: /naari/「実」)、CNCN から成る語であっても、単に低ピッチから上昇する場合には初頭音節は長母音化する場合とそのまゝの場合とがある(例: /naari/ ~ /nari/「実」)。

次に、上昇型のアクセント単位が平進型のアクセント単位に先行する場合でかつ、この2つのアクセント単位を含む語が属性動詞である場合には、上昇型アクセント単位内にピッチの上昇が観察されない(2.3.4.2)。ピッチの上昇が観察されない理由として、(1) 上昇型アクセント単位末尾の高ピッチが平進型アクセント単位初頭の高ピッチと重なっている、あるいは(2) 後続する平進型アクセント単位の初頭で高ピッチが実現するため、上昇型アクセント単位の末尾の高ピッチを省略している可能性が考えられる。

2.3.4 複合語・属性動詞のアクセント

2.3.4.1 複合語

波照間方言の複合語のアクセントは、基本的に前部要素のアクセント型を複合語全体に保存する。想定されるすべての組み合わせ(3つのアクセント型×3つのアクセント型=9通り)の例を(2-112)から(2-120)に挙げる。すべて複合名詞の例である³⁷。

(2-112) 下降型+下降型

/nisi/「北」 + /kaci/「風」 → /nisi+kaci/「北風」

(2-113) 下降型+平進型

/isi/「石」 + /usi/「白」 → /isi+usi/「石白」

³⁷ 属性動詞を含まない複合動詞のアクセントは、複合名詞と同様に基本的に前部要素のアクセント型を複合語全体に保存すると思われる。例が少ないためさらに調査が必要である。

(2-114) 下降型+上昇型

/daa\ / 「あなた」 + hii\ / 「家」 → /da+hi\ / 「あなたの家」

(2-115) 平進型+下降型

/pe\ / 「南」 + /kaci\ / 「風」 → /pee+kaci\ / 「南風」

(2-116) 平進型+平進型

/ki\ / 「木」 + /usi\ / 「白」 → /ki+usi\ / 「木白」

(2-117) 平進型+上昇型

/pinari\ / 「左」 + /min\ / 「目」 → /pinari+min\ / 「左目」³⁸

(2-118) 上昇型+下降型

/jamatu\ / 「大和」 + /pitu\ / 「人」 → /jamatu+pitu\ / 「大和人」

(2-119) 上昇型+平進型

/maasu\ / 「塩」 + /kami\ / 「瓶」 → /maasu+kami\ / 「塩瓶」

(2-120) 上昇型+上昇型

/zii\ / 「土」 + /maami\ / 「豆」 → /zii+mami\ / 「ピーナッツ」

複合語の中にも、いくつかの語にアクセントの例外が認められる。例外とは、各要素のアクセントがそのまま実現する場合である。(2-121) から (2-123) は、形態統語的には1語だが、2つのアクセント単位を持つ例である。これらの形式を1語として扱う根拠については、形態統語的な自立性による(3.1.3)。複合語アクセントの例外として扱うものの組み合わせでは、後部要素が下降型の例のみ見つかった³⁹。なぜ後部要素が下降型のアクセントに限りこのような例外が見られるかについては、さらに調査が必要である。

(2-121) 上昇型+下降型

/misju\ / 「味噌」 + /turi\ / 「鳥」 → /misju\+duri\ / 「すずめ」

/baa\ / 「私」 + /maju\ / 「猫」 → /baa\+maju\ / 「私の猫」⁴⁰

³⁸ 麻生・小川 (2016) では、平進型+上昇型の例として /pinari+pan/ 「左足」が挙げられているが、/pan/ は平進型の例であるため、平進型+上昇型の例には当てはまらない。ゆえに麻生・小川 (2016) における扱いは間違いである。

³⁹ 後に 2.3.5.2 で挙げる複合語の例 (/takidun\ pitu\ / 「竹富人」) も同じく、後部要素が下降型である。

⁴⁰ (2-121b) の /baamaju/ では、1音節目で上昇は起こらず、/baa/ が単に高ピッチで実現する。従って、音声実現からは、平進型+下降型とも分析できる。しかし、/baa/ 「私」が単独で上昇型に属するため、上昇型+下降型と分析する。/baa/ に実現する高ピッチは、上昇型のピッチパターン末尾の高ピッチである。/baa/ が短母音化するため(2.3.3) 上昇が起こる余地がなかったと考える。一方で、全体として通常の下降型(例えば有声音始まりの3音節からなる下降型のアクセント単位 /judari/ 「よだれ」など)とは、ピッチパターンが異なる。ゆえに、前部要素の baa のアクセントがそのまま実現していると考えられる。

(2-122) 平進型＋下降型

/pẽ̞/「南」 + /murã̞/「村」 → /pẽ̞+murã̞/「南集落」⁴¹
 /pañ̄/「足」 + /simĩ̞/「爪」 → /pañ̄+simĩ̞/「足の爪」

(2-123) 下降型＋下降型

/daã̞/「あなた」 + /naã̞/「名前」 → /daã̞+naã̞/「あなたの名前」⁴²

2.3.4.2 属性動詞

属性動詞⁴³は、語幹の2つの内部要素がそれぞれのアクセント（下降型、平進型、上昇型）を持ち、語全体で2つのアクセント単位を持つ。この点で、先に述べた1語に1アクセント単位を持つ名詞・動詞のアクセントとは異なる。

以下(2-124)から(2-126)に属性動詞のうち、ha属性動詞の例を挙げる⁴⁴。

(2-124) 下降型と平進型

/agã̞\hã̞̄/ 「赤い」
 /tuusã̞\hã̞̄/ 「遠い」
 /niisjaã̞\hã̞̄/ 「苦い」
 /bagã̞\hã̞̄/ 「若い」

(2-125) 平進型と平進型

/maã̞̄\hã̞̄/ 「美味しい」
 /takã̞̄\hã̞̄/ 「高い」
 /isjagã̞̄\hã̞̄/ 「小さい」
 /misjã̞̄\hã̞̄/ 「良い」

(2-126) 上昇型と平進型

/marȭ̞\hã̞̄/ 「低い」
 /bjoȭ̞\hã̞̄/ 「痒い」
 /wassã̞̄\hã̞̄/ 「悪い」
 /karȭ̞\hã̞̄/ 「軽い」

⁴¹ 南集落の他、名石集落のことを/na(su)/murã̞̄/という。nasu 単独の意味が分からないため本文には載せていないが、/misjuduri/「すずめ」と同様、上昇型＋下降型のアクセントになっている。

⁴² 人称代名詞と下降型の組み合わせが、常にこのような例外になるかは未調査である。

⁴³ 属性動詞の形態的な特徴については、6.1を参照されたい。名詞と存在動詞が組み合わさった形式を由来とするが、句と呼べるほど各内部要素は自由ではない。複合的な語幹として分析する。

⁴⁴ 属性動詞には、ha属性動詞とsja属性動詞がある(6.1)。sja属性動詞も、ha属性動詞と同様に、語幹内に2アクセント単位を持つ。ha属性動詞の語幹末の音形/ha/が平進型で実現するのに対し、sja属性動詞の語幹末の音形/sja/は、下降型で実現する。例えばsja属性動詞の例に、/susoȭ̞sjã̞̄/「白い」がある。2アクセント単位を持つと考える理由は、ha属性動詞の理由と並行的な理由である。例えば、/susuubatã̞̄/「白旗」という語が見つかっており、/susu/(/oo/と/uu/の母音音素の交替についての詳細は分かっている。同様の例は2.5.6で示した。)は平進型アクセントを持っていると推測できからである(cf. /patã̞̄/「旗」)。ただし、sja属性動詞に関しては、調査が十分であるとは言えない。

上記例のうち、/niisjaaha/「苦い」、/isjagaha/「小さい」、/maroha/「低い」に、屈折接辞/-n/を付加した形式の音声波形・F0 曲線・スペクトログラムを図 2.10 から図 2.12 に挙げる。図 2.10 では、/niisjaa\でピッチは徐々に下降する。/han\で一気に上昇し、そのまま高ピッチで終わる。図 2.11 では、初頭が少し低めのピッチで始まり、その後高めのピッチのまま、末尾まで大きく上昇も下降もしない。図 2.12 では、/maro\のピッチは全体的に低めで、特に/ro\は低く、続く/han\で一気に上昇する⁴⁵。

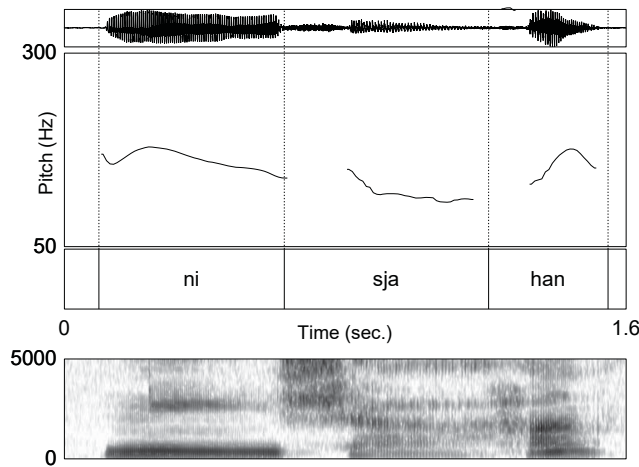


図 2.10: /niisja\han\/'「苦い」

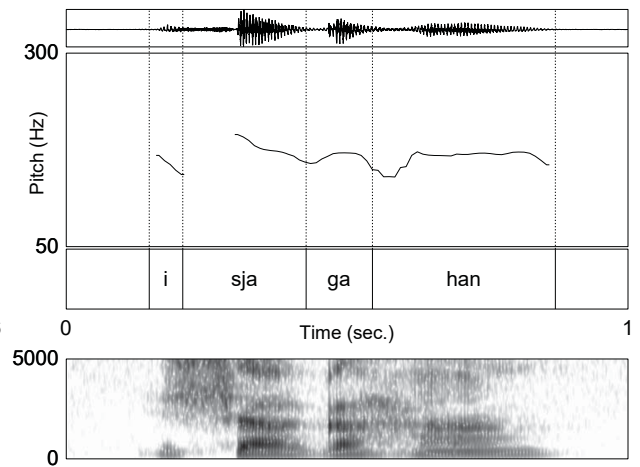


図 2.11: /isjaga\han\/'「小さい」

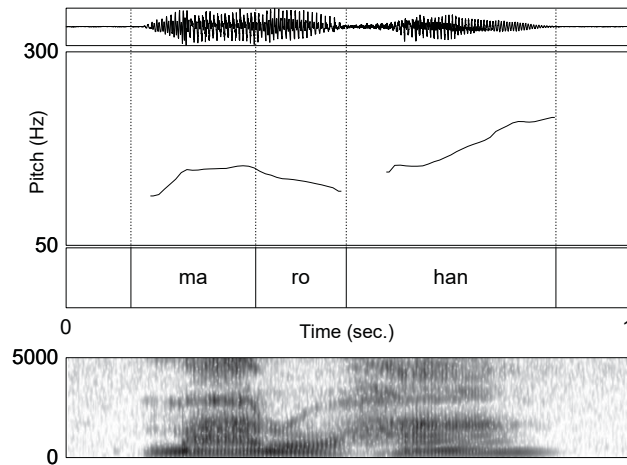


図 2.12: /maro\han\/'「低い」

属性動詞が、1 アクセント単位ではなく 2 アクセント単位からなると分析する理由は、(2-127) の/aga/を含む疑似複合名詞からの推測である。

⁴⁵ 上昇型のアクセント単位が平進型のアクセント単位に先行する属性動詞は、上昇型アクセント単位末尾のピッチの上昇が観察されない。後続する平進型アクセント単位の初頭で高ピッチが実現するため、上昇型アクセント単位の末尾の高ピッチを省略している可能性が考えられる (2.3.3)。

- (2-127) /agabata\ / 「赤旗」(cf. /pata\ / 「旗」)
 /agapana\ / 「赤花」(cf. /pana\ / 「花」)
 /agamisju\ / 「赤味噌」(cf. /misju\ / 「味噌」)
 /agadeguni\ / 「人参」(cf. /deguni\ / 「大根」)

(2-127) は、/aga/を含む疑似複合名詞である。複合語のアクセントは、前部要素のアクセントを語全体に保存することから、/aga/が下降型アクセントを持っていると言える。/aga/が下降型アクセントを持っているという結果は、(2-124) に挙げた/agaha/の/aga\ /と一致する。従って、/agaha/が2 アクセント単位からなると分析することは妥当である⁴⁶。

2.3.5 アクセントに関する先行研究

2.3.5.1 20 世紀後半に行われた調査結果によるもの

波照間方言のアクセントに関する先行研究は、秋永 (1960)、平山・中本 (1964)、平山他 (1967)、崎村 (1987)、平山 (1988) および久野 (2002) がある⁴⁷。ほとんどの先行研究は2型アクセントとして報告しており、平山 (1988) のみ、多型アクセントとして報告している⁴⁸。表 2.8 に、先行研究と本研究の立場を比較したものを挙げる。L は Low、H は High、F は Fall、R は Rising のピッチを示す⁴⁹。

⁴⁶ 仮に (2-124) の/aga/と/ha/を1つのアクセント単位と解釈するならば、(2-124) はアクセント単位初頭でピッチが下降し、末尾に向けて再び上昇するというパターンを示すため、上昇型の（任意で現れる）ピッチパターンと解釈される。しかし、この分析は妥当ではない。仮に上昇型であれば、初頭に、任意で現れるピッチの下降が観察されるパターンと、初頭に下降が現れない基本的なピッチパターンが観察されるはずである (2.3.3)。しかし (2-124) には、上昇型の基本的なピッチパターン、すなわち初頭に下降が現れないピッチパターンが観察されない。初頭には、必ずピッチの下降が観察される。従って、/agaha/ は2つのアクセント単位から成り立っており、それぞれの要素のアクセントが実現されていると分析するのが妥当であると考える。上昇型のピッチパターンに類似する (2-124) および (2-126) では、/ha/が必ず高ピッチで実現する。接辞/-n/を付加した/ha-n/で、最終モーラ/n/のみ高ピッチで実現するトークンが観察されていないこともこの分析の妥当性を後押しする。さらに、後に 2.3.6 で述べる、アクセント単位の初頭分節音の有声性によるアクセント型の予測にもおおそ一致する。それぞれ、下降型には初頭分節音の有声性は関係なく、平進型は無声子音あるいは母音始まりで、上昇型は有声子音始まりである。(2-124) に傾向はなく、(2-125) は、/maha/「美味い」と/misjaha/「よい」が有声子音始まりであるが、少なくとも/mahan/には、初頭の母音が脱落した可能性（例えば、/*umaha/など）が考えられる。(2-126) は、karoha「軽い」以外は有声音始まりである。

⁴⁷ この他に、アクセント体系を記したものではないが、波照間方言の多くの語に関して音調を記述した資料として沖縄県教育委員会 (1975) が知られている。

⁴⁸ 平山 (1988) は、2拍名詞に3つ、3拍名詞で5つ、4拍名詞で4つ、動詞に4つ、属性動詞に2つの型を認めている。ただし、3拍名詞の内、1つの型は複合語の例しか挙がっていない。実質3拍名詞に関しては4つの型である可能性がある。

⁴⁹ 原文では○（低ピッチ）、●（高ピッチ）、◐（下降調）◑（上昇調）で表記されている。

表 2.8: 先行研究における 2 拍 (2 音節) 名詞単独のアクセント型および音調と本研究との比較

先行研究	アクセント型 1	アクセント型 2	アクセント型 3
秋永 (1960)	HL	HH	
平山・中本 (1964) 平山他 (1967)	LL	LH	
崎村 (1987)	HL	LH, LL	
平山 (1988)	LL	LH, HH	LR
久野 (2002)	LF, HF, HL, LL	LH, HH	
	下降型	平進型	上昇型
本論文 (語単位)	F (HL, HF)	H (HH)	R (LH, LR, FH)

このように観察される音調パターンに違いがある理由として、(1) 調査語彙の偏りと (2) 島内の方言差が考えられる。まず、波照間方言は有声子音で始まる語が無声子音で始まる語に比べ少ない。例えば、秋永 (1960) で用いた 2 音節名詞の中心語彙 42 語中、有声子音で始まる語は 8 語であった。のちに 2.3.6 で指摘するように、波照間方言では上昇型に属する語彙のほとんどが有声子音音素で始まる。従って、調査語彙に有声子音音素で始まる語が少ないと上昇型のピッチパターン (LH など) が現れる可能性が減る。次に、地理的に離れているという理由から、富嘉とそれ以外の地区で方言差が生じている可能性がある。平山 (1988) や久野 (2002) では富嘉出身の話者のデータも用いており、観察される音調パターンの違いの原因とも考えられる。実際、北地区の母音音素 /ë/ に対応する富嘉地区の母音音素について研究を行ったパッパラルド (2012) を見ると、北・南地区と富嘉地区では /ë/ の音価が異なる (p. 34 注 14)。

以上の先行研究は、1960 年代から 1980 年代の調査結果に基づくものである。平山・中本 (1964) は、当時の 50 歳以上の話者が低平型 (LL) で発音するところを 20 歳代は頭高 (HL) で発音すると報告している。2007 年以降の調査結果からは 2 拍名詞のピッチパターンに関しては HL、HH、FH、LH の 4 つ、3 拍名詞に関しては HHH、LLH、HLH、HHL、HLL の 5 つの報告がある (麻生 2009, Aso 2010)。筆者の調査で同じ語形で確認したところ「明らかに LL」というピッチパターンをこれまでに確認できていない。

本論文では、表 2.8 でアクセント型 2 のピッチパターンとされてきた LH と HH (崎村 (1987) では LL) をミニマルトリプレットが見つかったことから別のアクセント型とし (表 2.7)、あくまで三型アクセント体系であるという立場をとる。四型アクセント体系の可能性については、次節で詳述する。

2.3.5.2 近年行われた調査結果によるもの

近年の調査結果による Ogawa and Aso (2012), 小川・麻生 (2015), 麻生・小川 (2016) では三型アクセント体系が主張され、さらに松森 (2015) によって四型アクセント体系の可能性が示唆されている。

松森 (2015) の四型アクセント体系 (a 型、b 型、c 型、x 型) について、以下に松森 (2015: 81) に挙げられている例を引用する⁵⁰。それぞれ、.: モーラ境界、]: ピッチ下降、[: ピッチ上昇を意味する⁵¹。「その下がり目の有無と位置の違いによって」4 種類の型を区別している。ただし、語単独で 4 種類の区別が明確であるという報告はなされていない。

a 型	mja.a.]gu	pi.tu	ga.ra...	(宮古人から～)
	ku.pa.]ma	pi.tu	ga.ra...	(小浜人から～)
b 型	[u.si.na.a	pi.tu	ga.ra...	(沖縄人から～)
c 型	ta.ru.ma]	pi.tu	ga.ra...	(多良間人から～)
	ta.ki.du.n]	pi.tu	ga.ra...	(竹富人から～)
x 型	ja.]ma.tu	pi.tu	ga.[ra...	(大和人から～)

本論文の立場では、a 型、b 型、x 型を、1 アクセント単位から成る複合語として、c 型を 2 アクセント単位から成る (例外的な) 複合語として分析する。従って、松森 (2015) は、本論文で 2 アクセント単位から成ると分析する複合語を、1 つのアクセント型として分析している。松森 (2015: 81) の例を本論文の立場でまとめたものを (2-128) から (2-131) に挙げる。

(2-128) a 型

/kupama\ / 「小浜」+ /pitu=gara\ / 「人から」→ /kupama+pitu=gara\ / 「小浜人から」

(2-129) b 型

/usuna\ / 「沖縄」 + /pitu=gara\ / 「人から」→ /usuna+pitu=gara\ / 「沖縄人から」

(2-130) c 型

/takidun\ / 「竹富」+ /pitu=gara\ / 「人から」→ /takidun+pitu=gara\ / 「竹富人から」

(2-131) x 型

/jamatu\ / 「大和」 + /pitu=gara\ / 「人から」→ /jamatu+pitu=gara\ / 「大和人から」

松森 (2015) の言う c 型を、2 アクセント単位から成る (例外的な) 複合語と分析する根拠は、後部要素の /pitu/ 「人」のピッチ変動の位置が、複合語でも単独でも変わらないからである。以下、図 2.13 および図 2.14 に (2-130)c 型と /pitu/ 「人」単独の音声波形・F0 曲線・スペクトログラムを示す。無声化が激しく、どちらの図でも /pitu/ の初頭音節 /pi/ の部分のピッチが測れないが、末音節 /tu/ の部分を見ると、ピッチの開始位置と下降具合が同じである。従って、/pitu/ 単独で発話された場合と同様に、/tu/ で下降していると考え (2.3.1)⁵²。

⁵⁰ 本論文と松森 (2015) の話者は別人だが、波照間島の中でも同じ地区に住む話者である。

⁵¹ 松森 (2015: 81) の (54) 波照間方言の四型アクセント (複合語から始まる韻律句その 4) に関して、モーラ境界に誤植と思われる箇所がある ([a 型] の ku.pa.]ma pi.tu ga.ra)。本文中では訂正した上で引用した。

⁵² 松森 (2015) の分析では、/pitu/ 「人」の手前に下降位置がある。/usuna/ 「沖縄」と /takidun/ 「竹富」について、同じ平進型アクセントを持つにもかかわらず、複合語での振る舞いが異なる。しかし /pitu/ 「人」が後続する以外に、この 2 つの振る舞いに違いは見いだせなかった (麻生・小川 2016)。

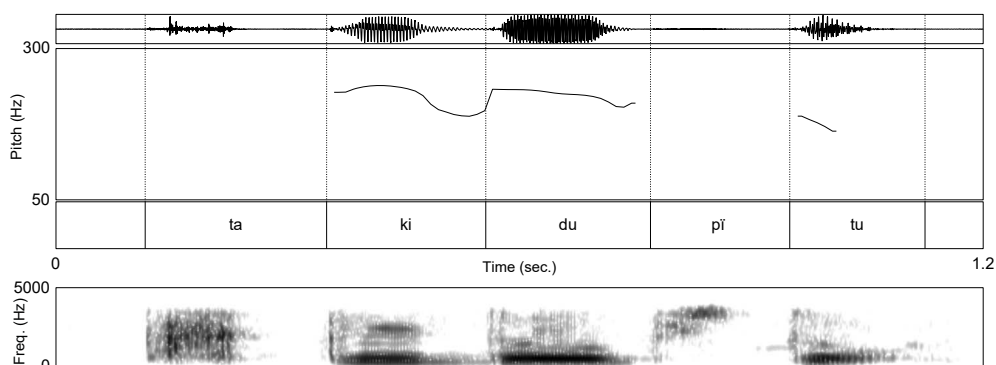


図 2.13: /takidu˩pitu˩/ 「竹富人」

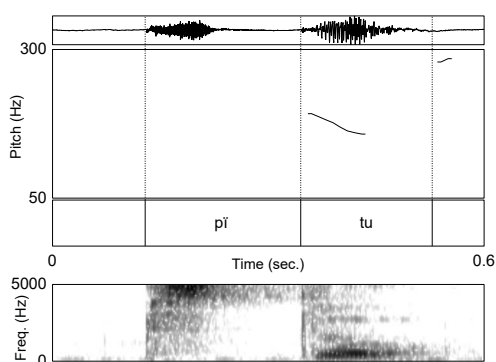


図 2.14: /pītu˩/ 「人」

2.3.6 アクセント型に所属する語彙の偏り

波照間方言の語彙がどのアクセント型に属するかは、系列別語彙に加え、語頭子音音素の有声性を考慮することで、かなり精密に予測することができる（表 2.9）。p. 54 注 33 で述べた通り、琉球祖方言に三型（A 系列/B 系列/C 系列）アクセント体系を仮定し、それぞれのアクセント型に所属する語彙のリストを系列別語彙と呼ぶ（松森 2010, 五十嵐 2016a など）。波照間方言では、系列別語彙 A は下降型、系列別語彙 BC のうち語頭分節音が無声子音あるいは母音の場合は平進型、系列別語彙 BC のうち語頭分節音が有声子音の場合は上昇型である。

表 2.9: 系列別語彙と語頭分節音に基づくアクセント型の分布

	語頭が無声子音音素か母音音素	語頭が有声子音音素
系列 A	下降型	
系列 BC	平進型	上昇型

具体的な語彙を表 2.10 に挙げる。五十嵐 (2016a) の最新版である五十嵐 (2016b) によって、系列 (A/B/C) が明らかなミニマルペアを挙げる。表中のハイフン (-) は該当するアクセント型の例が見つからないことを示す。

表 2.10: ミニマルペアの分布

音素配列	下降型	平進型		上昇型	
/pana/	/pana\ / 「鼻」	/pana\ / 「花」	-	-	-
/kii/	/kii\ / 「毛」	/kii\ / 「木」	-	-	-
/faa/	/faa\ / 「鞍」	/faa\ / 「蔵」	-	-	-
/sumu/	/sumu\ / 「下」	/sumu\ / 「肝」	-	-	-
/kee/	/kee\ / 「井戸」	-	/kee\ / 「卵」	-	-
/kaci/	/kaci\ / 「風」	-	/kaci\ / 「うに」	-	-
/usi/	/usi\ / 「牛」	-	/usi\ / 「白」	-	-
/zin/	/zin\ / 「膳」	-	-	/zin\ / 「金」	-
/nan/	/nan\ / 「名前」	-	-	/nan\ / 「波」	-
/juu/	/juu\ / 「魚」	-	-	/juu\ / 「湯」	-
/mee/	/mee\ / 「米」	-	-	-	/mee\ / 「前」
系列別語彙	A	B	C	B	C
語頭分節音	制限なし	無声子音あるいは母音		有声子音	

系列別語彙の系列は同じであっても、琉球諸語の各方言によって、各系列の音調パターンや、系列の合流・分岐の仕方は異なる。表 2.10 を見て言えることは、現在の波照間方言のアクセント体系が、系列 (A/B/C) の合流以外の、固有の変化を遂げているということである。すなわち、系列別語彙の B 系列と C 系列が合流し、さらにその合流した語彙群のアクセントが、語頭の子音音素の有声性によって分岐するという変化である⁵³。従って、これはアクセント／声調発生 (tonogenesis) であると言える。

アクセント／声調発生 (tonogenesis) と言っても、波照間方言で見られる子音の有声性によるアクセント／声調発生は、通言語的に見ると最もよく知られているタイプのものである⁵⁴。特に、東アジアおよび東南アジア地域の諸言語では古くから記述報告があり (Maspero (1912) など)、よく知られている例として北方モン・クメール諸語のクム語 (Svantesson 1989) が挙げられる⁵⁵。実験音声学的にも Hombert (1978), Hombert et al. (1979) によって、有声阻害音が引き金となり後続する母音が低ピッチと結びつきやすいことが示されている。波照間方言では、語頭分節音が母音の場合は、無声子音音素の場合と同じ振る舞いをする。無声子音の場合と同じ振る舞いをする理由として、アクセントの分岐が起きた段階では、母音音素の直前に (少なくとも音声的に) *[ʔ] が存在したことが考えられる⁵⁶。

このように、通言語的に最もよく知られているアクセント／声調発生の仕方とはいえ、日本のアクセント研究史においてこのようなタイプの報告は非常に少ない。波照間方言と同様の、分節音の有声性による

⁵³ 歴史的変化の過程について、詳細は麻生・小川 (2016) を参照されたい。

⁵⁴ tonogenesis のタイプには、先行する子音の有声性によるものの他、後続する子音によるもの、先行する子音の拡張声門性 (spread glottis)・狭窄声門性 (constricted glottis) によるもの、母音の長短によるもの、母音の狭めによるもの、母音の前方舌根性 (advanced tongue root) によるもの、ストレスとイントネーションによるものなどがある (Svantesson 2001, Kingston 2011)。

⁵⁵ クム語では、子音音素の有声・無声の対立がある南クム方言と、それらの対立がなく、音調が弁別的である北クム方言がある。北クム方言は、かつては子音音素の有声・無声の対立があったと考えられている。変化の過程で子音音素の有声・無声の対立を失い、代わりに無声子音に高ピッチ、(かつての) 有声子音に低ピッチが付与されたと考えられている。例えば、対応関係がある語を比較すると、南クム語で /kuŋ/ 「村」と /gaŋ/ 「家」は、北クム語でそれぞれ /kúŋ/ 「村」と /kàaŋ/ 「家」である (/´/ は、高ピッチ、/˘/ は低ピッチを表す)。

⁵⁶ 現代において、明確な [ʔ] は観察されない。

アクセント／声調発生の報告は、これまでに北琉球奄美語佐仁方言 (上野 1996, 2000) のみで、波照間方言は2例目となる。

一方で、分布が明らかであるのであれば、三型アクセント体系ではなく、二型アクセント体系と考えることも可能であるが、表2.7で挙げたとおり、現代では語頭分節音によって完全に相補分布しているわけではない。少ないながらもミニマルトリプレットあるいはミニマルペアが見つかったので、平進型と上昇型を完全に同じアクセント型（たとえば「非」下降型）とみなして、語頭音の違いでピッチパターンの表われ方が異なるだけだとする考え方はとらない。本論文では三型アクセント体系と分析する。しかし、下降型と平進型、あるいは下降型と上昇型のミニマルペアが複数存在するのに対し、平進型と上昇型のミニマルペアは、表2.7で挙げた/mu-n/「思う」と/mun/「麦」の1例のみである。ミニマルトリプレットについても、同じ表で挙げた2つ (/zi/と/sisjan/という音素配列を持つアクセント単位) しか見つかっていない⁵⁷。

2.4 イントネーション

2.4.1 では、疑問文と平叙文 (10.1) のイントネーションについて述べる。2.4.2 では、命題に対する話し手の意外性が込められた場合の強調イントネーションについて述べる。

2.4.1 平叙文と疑問文のイントネーション

波照間方言のイントネーションについて、詳細な調査はまだされていない。ここでは、これまでに分かっている平叙文・疑問文の基本的なイントネーションについて述べる。

波照間方言は、イントネーションだけで平叙文や疑問文を表すことはできない。例えば、文末の上昇ピッチを疑問文として用いない。疑問文の文末には、必ず下降型のアクセントを持つ疑問助詞が用いられる。そのため、疑問文の文末は必ず下降ピッチで実現するという特徴がある。

(2-132) と (2-133) に、上昇型のアクセントを持つ/mi/「見る」を用いた平叙文と疑問文の例を挙げる。それぞれの例文のピッチ曲線およびスペクトログラムを図2.15および図2.16に載せる。図2.15では、/mirun/「見る」全体で上昇型のアクセントが実現している。低ピッチで始まり、語末に向かってピッチが上昇している。一方、図2.16は、文頭の/kuri/は高ピッチから始まり、ピッチが下降している。/miru/「見る」で低ピッチから大幅にピッチが上昇し、文末の疑問を表す助詞/na/で高ピッチからピッチが急激に下降している。

(2-132) mir-u-n/.

見る-NPST-IND1

「見る。」

(2-133) kuri\ mir-u/ naa\?

これ 見る-NSPT Q

⁵⁷ /mu-n/「思う」および/zi/「乳」が平進型アクセントを持つことに関して、前者は歴史的に語頭音の脱落 ([u] など) があった可能性が考えられ、後者は子音音素が変化した可能性が考えられる (/c/>/z/)。

「これを見るか？」

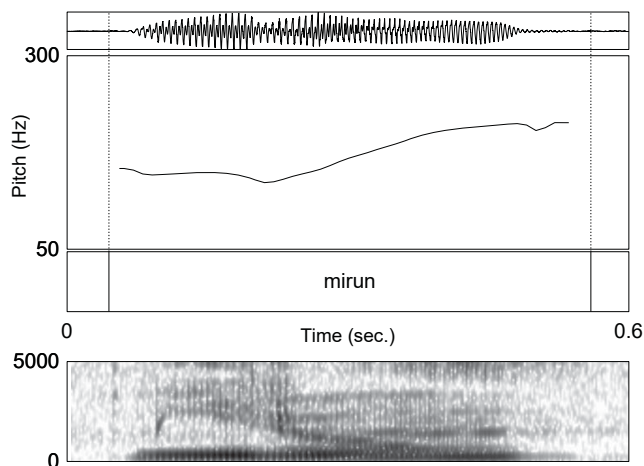


図 2.15: 平叙文のイントネーション 1

「見る。」

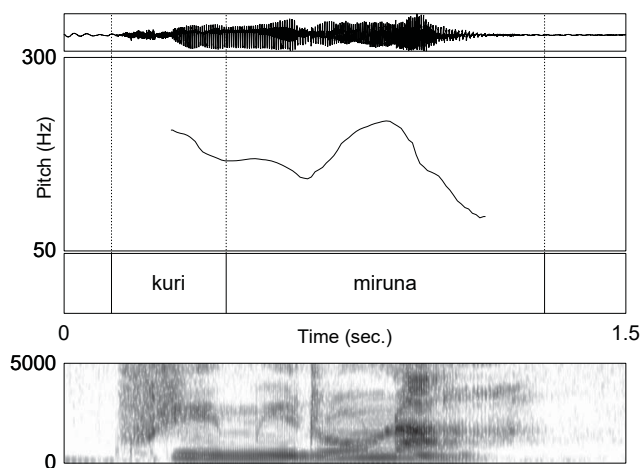


図 2.16: 疑問文のイントネーション 1

「これを見るか？」

一方、平叙文であっても、文末の動詞が下降型アクセントを持つ場合には、下降型のイントネーションが実現する。図 2.17 および図 2.18 に、平叙文 (2-134) と疑問文 (2-135) のピッチおよびスペクトログラムを載せる。

- (2-134) /kee¹ isjagahar-u¹ <pasokon>=si=ru¹ un baa/ benkjoo+si¹ bir-j
 こう 小さい-NPST パソコン=IND=FOC INTJ 1ST.SG 勉強 + する.CVB 継続 2-CVB
 ar-oo¹./
 継続 1-NPST.IND2
 「こんな小さいパソコンで私は勉強しているよ。」

- (2-135) /keeʃ isjagahar-uʃ <pasokon>=si=nduʃ benkjoo+siʃ bir-j aaʃ naaʃ?/
 こう 小さい-LK パソコン=IND=FOC 勉強 + する.CVB 継続 2-CVB 継続 1.NPST Q
 「こんな小さいパソコンで勉強しているのか？」

図 2.17 と図 2.18 を見比べると、どちらも文末で下降のアクセントが実現していることがわかる⁵⁸。平叙文なのか疑問文なのかは、イントネーションではなく、文末の助詞の種類によって判断される。

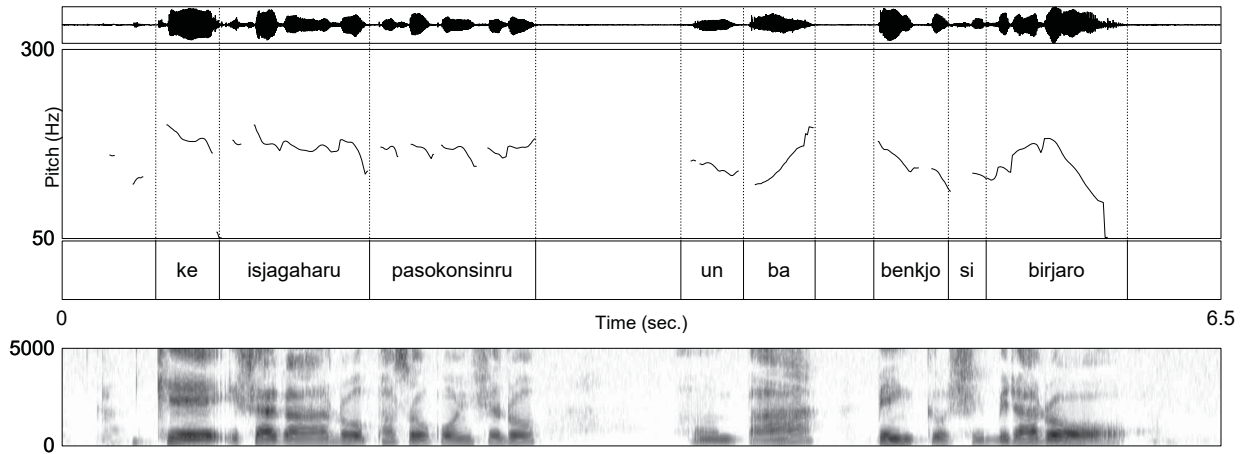


図 2.17: 平叙文のイントネーション 2

「こんな小さいパソコンで私は勉強しているよ。」

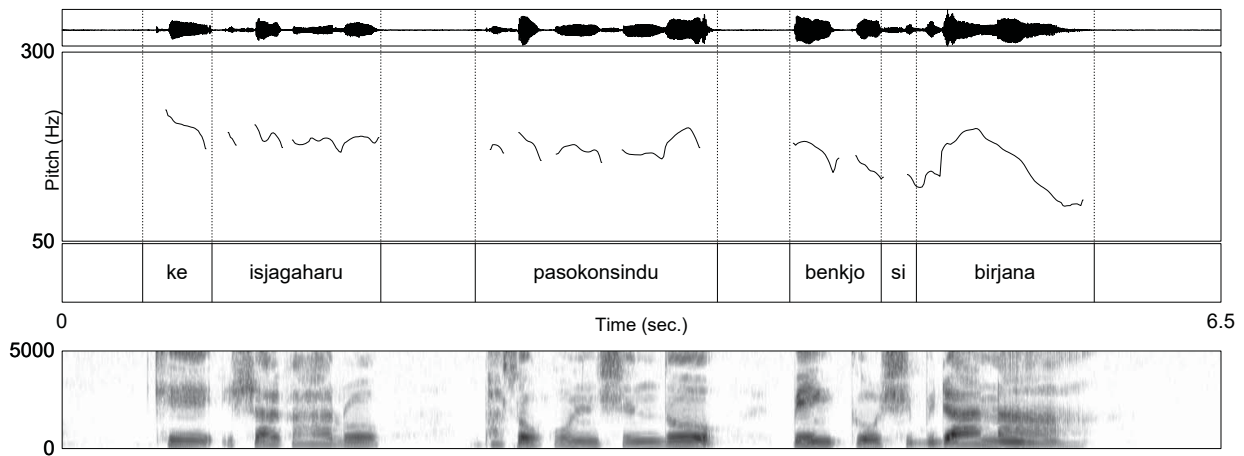


図 2.18: 疑問文のイントネーション 2

「こんな小さいパソコンで勉強しているのか？」

⁵⁸ (2-134) および (2-135) の継続補助動詞 2/bir/は、もともと/birʃ/「座る」という意味の動詞から文法化した語である。平叙文かつ肯定の場合、継続補助動詞 2/bir/は、継続補助動詞 1/a/と共に、必ず/bir-j a/（継続 2-cvb 継続 1）「～している」という組み合わせで用いられる。/a/は、後に 9.2.1 で述べる通り、下降型アクセントを持つ。/bir/と/a/の組み合わせのせいなのか定かではないが、本来であれば高ピッチから実現しそうな継続補助動詞 2/bir/のアクセントは必ず低ピッチから始まる（図 2.17、図 2.18）。平叙文の図 2.17 で、焦点標識 ndu の du に上昇と下降が観察されるのは、アクセントの強調イントネーション形と考えている（2.4.2）。

2.4.2 強調を表すイントネーション

強調を表すのに用いられるイントネーションがある。ここで言う強調とは、意外性や驚嘆と懷疑が入り混じる感情を指す。強調イントネーションは、アクセント単位にかかる。前節で述べた下降、平進、上昇の3つのアクセント型によって、それぞれ異なるピッチパターンがある。

3つのアクセント型のピッチパターンを模式化したものを図 2.19 から図 2.21 に挙げる。

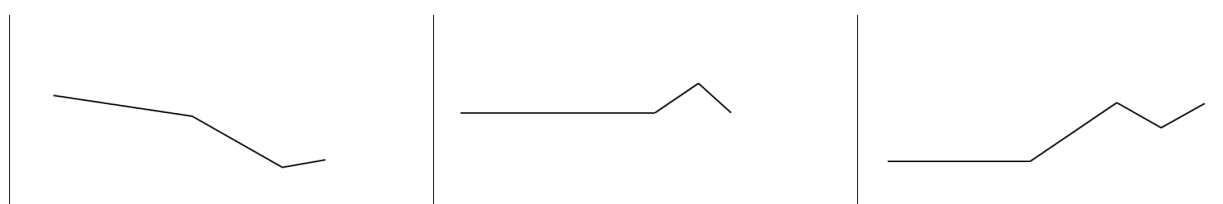


図 2.19: 下降型の強調イントネーション 図 2.20: 平進型の強調イントネーション 図 2.21: 上昇型の強調イントネーション

以下では、それぞれの実現形について述べる。

■下降型の強調イントネーション

下降型アクセントの強調イントネーションは、ピッチは下降しつつ、末モーラが長音化し、そこから若干のピッチの上昇が生じる。(2-136) は、なぞなぞを出題している際の発話である。E が出題者である。ヒントを聞いた Y が E の発言 (2-136a) の一部を繰り返し、下降型アクセントの強調イントネーションが実現する (2-136b)。この発話には、直前に提示された命題が、話し手 (Y) にとって意外であったことが含意される。強調イントネーションが実現するアクセント単位は、*siko-n* (使う-IND) 「使う」である。*siko* 「使う」は下降型のアクセントを持つ。

- (2-136) a. E: /hoo munu aran-u. midumu=ndu busa siko./
 食べ.NPST もの COP-NEG-NPST 女=FOC 沢山 使う.NPST
 「食べ物ではない。女がたくさん使う。」
- b. Y: /siko-n\?!/
 使う.NPST-IND1
 「使うだって?!」

図 2.22 に (2-136b) の音声波形・F0 曲線・スペクトログラムを挙げる⁵⁹。末モーラに注目されたい。

ピッチの変動は、末モーラすなわち確信法接辞 1 (6.4.4) /-n/ で生じる。/-n/ のはじめてでピッチが急激に下降し、その後、若干ピッチの上昇が起こる⁶⁰。

⁵⁹ /siko/ 「使う」は下降型アクセントを持つが、図中に示す通り、F0 曲線が語頭でも現れ、乱れた曲線が観察された。無声化している箇所には F0 曲線は現れないと考えられることから、自然談話から切り出した音声ファイルのため、雑音の可能性もある。より雑音の少ない音声ファイルを準備する必要がある。今後の課題とする。

⁶⁰ 通常の下降型のピッチパターンとは、下降の変化の幅が異なる可能性もある。

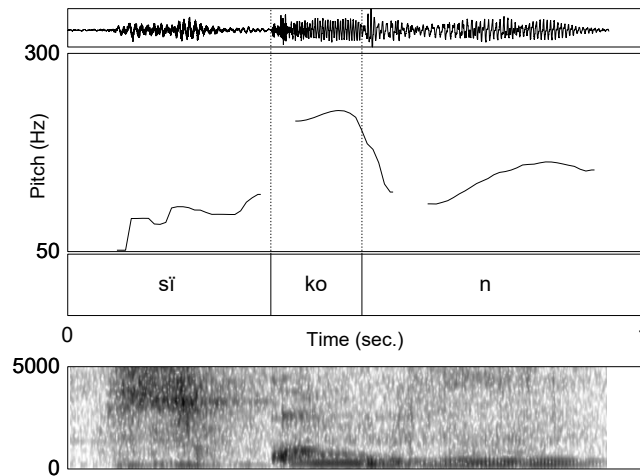


図 2.22: 下降型の強調イントネーション「使うだって?!」

■平進型の強調イントネーション

平進型アクセントの強調イントネーション形は、末モーラが長音化し、そこからピッチの上昇および下降が生じる。(2-137) もまた、なぞなぞを出題している際の発話である。S が出題者である。ヒントを聞いた E が S の発言 (2-137a) の一部を繰り返し、平進型アクセントの強調イントネーション形が実現する (2-137b)。この発話にも、直前に提示された命題が、話し手 (E) にとって意外であったことが含意される。強調イントネーション形が実現するアクセント単位は、pana=na (そば=LOC) 「そばに」である。pata 「そば」は平進型のアクセントを持つ⁶¹。

- (2-137) a. S: /kii=nu pata=na buu joo.../
 木=GEN そば=LOC1 いる.NPST DSC2
 「木のそばにいてね…」
- b. E: /kii=nu[]] pata=na[]]?!/
 木=GEN そば=LOC1
 「木のそばにだって?!」

図 2.23 に (2-137b) の音声波形・F0 曲線・スペクトログラムを挙げる。図中の=na のはじめに対応する F0 曲線に急激な下降および上昇が示されている。筆者の観察では、このようなピッチの下降と上昇は聞こえなかった。これは雑音の影響だと考え、この範囲の F0 曲線は考慮しないこととする⁶²。

ピッチの変動は、末モーラすなわち位格助詞 (8.7.5) /na/ で生じる。/na/ のはじめと (無視する範囲を越えた) ちょうど真ん中くらいを比べると、ピッチが高い。その後ピッチはやや下降し、/na/ のはじめのピッチの高さに戻り、その高さを保つ。

⁶¹ 格助詞 (接語) の多くはアクセントを持たない。先行する語と単位 (アクセント単位) を成し、先行する語のアクセントを全体に引き継ぐ。語とアクセント単位が一致しない例については、3.1.3 を参照のこと。

⁶² より雑音の少ない音声ファイルを準備し、Praat の設定を再考慮する必要がある。今後の課題とする。

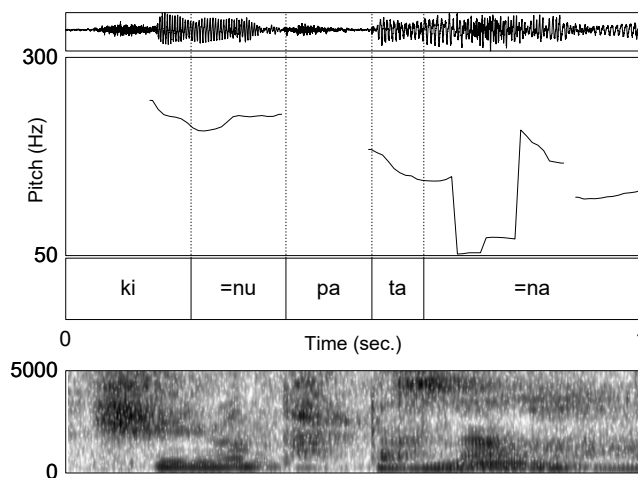


図 2.23: 平進型の強調イントネーション「木のそばにだって?!」

■上昇型の強調イントネーション

上昇型アクセントの強調イントネーション形は、末モーラで上昇が生じた後、一度下降し、さらにもう一度語末で上昇が生じる。(2-138) は面接調査から得られた例文である。一見、大和（本州）とはわからない地図を見ながら、実は大和であると正体を明かす場面での会話である。やはりこれまでの例文と同様に、B が A の発言 (2-138a) の一部を繰り返す。この発話にも、直前に提示された命題が、話し手 (B) にとって意外であったことが含意される (2-138b)。

(2-138) a. A: /kurj=a jamatu/

これ=TOP 大和

「これは大和だよ。」

b. B: /jamatu/?!/

大和

「大和だって?!」

ピッチの変動は、末モーラすなわち /tu/ で生じる。/jama/ に対応する F0 曲線は比較的低いピッチで進行し、/tu/ に対応する F0 曲線のはじめで急激に上昇する。その後ピッチが下降し、さらにもう一度上昇する。

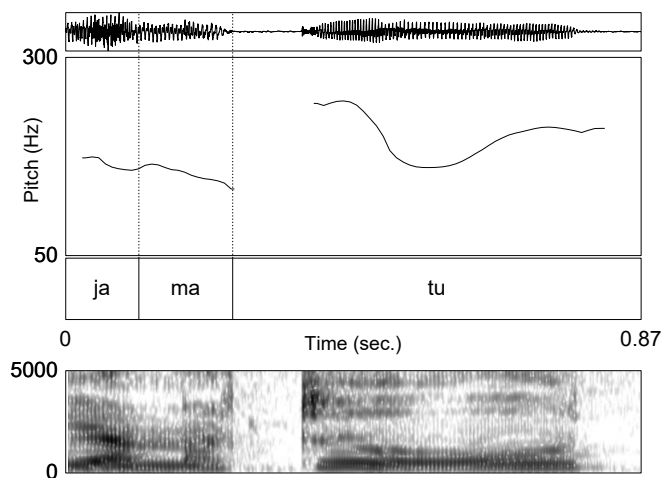


図 2.24: 上昇型の強調イントネーション「大和だって?!」

2.5 音韻規則

本節では特定の環境で適用される音韻規則について述べる。筆者が設定する音韻規則には次のようなものがある。

- アクセント実現のための同母音音素の挿入 (2.5.1)
- 子音音素間の母音音素脱落 (2.5.2)
- 母音音素の渡り音化 (2.5.3)
- 連濁 (2.5.4)
- 動詞語幹に含まれる母音音素の口蓋化 (2.5.6)

形態素境界に適用される音韻規則が多いため、形態素境界として、接辞境界に-（ハイフン）を、接語境界に=（イコール）を、複合語の要素境界に+（プラス）を、語境界に#（シャープ）をそれぞれ付す。

2.5.1 アクセント実現のための同母音音素の挿入

波照間方言にある3つのアクセント型 (2.3)、すなわち下降型\、平進型\、上昇型/のピッチパターンを実現させるための同母音音素の挿入規則を立てる。本規則は下降型あるいは上昇型の1モーラ語、および上昇型でかつ、初頭子音が鼻音の2モーラ語の初頭母音音素に必ず適用される。平進型の1モーラ語では任意で適用され、この場合単母音音素と同母音連続は自由変異として現れる。その他に、任意で適用される環境がいくつか見つかっている。一方で、アクセントに関わらず常に音声的長母音が実現する語をいくつか確認している。例えば、/oosja/「青い」は「あを」、/noosu/「直す」は「なほす」、/kee/「井戸」は「かは」、/pooči/「箒」は「ははき」、/moogi/「儲ける」は「まうく」（上代語辞典編修委員会1967）あるいは屋号（例えば/tamuree/「田盛」、/memugee/「前迎」、/kaccee/「勝連」など）である。これらの語は基底形に同母音連続を想定し、単母音と同母音連続の自由変異はないと分析するため、

本規則の適用対象外である。一部は歴史的に語中の摩擦音/h/や接近音/w/が脱落して生じた長母音や、2つの母音の連続から生じた長母音だと言える。

下降型のピッチパターンは、語頭から語末にかけて高ピッチから低ピッチへ変化するものである(2.3.1)。従って、本ピッチパターンを実現するために少なくとも2モーラ必要である。下降型の1モーラ語は、単独で実現する場合に本規則が必ず適用される⁶³。ダブルスラッシュ内に基底形を、シングルスラッシュ内には表層の音素を示す。

(2-139) //N\//→/NN\/

//po\//	→	/poo\/	帆
//ki\//	→	/kii\/	毛
//da\//	→	/daa\/	2ND.SG
//ho\//	→	/hoo\/	食べる (食べる.NPST)

上昇型に関しては、2つピッチパターンがある(2.3.3)。1つは、語頭から語末にかけて低ピッチから高ピッチに変化するものである。もう1つは高ピッチから低ピッチに変化し、語末あたりでまた高ピッチに変化するものである。従って、前者のピッチパターンを実現するためには少なくとも2モーラ、後者のピッチパターンを実現するためには少なくとも3モーラ必要である。後者のピッチパターンが実現する語は、鼻音始まりの語がほとんどである⁶⁴。上昇型の1モーラ語、あるいは後者のピッチパターンを実現する2モーラ語には本規則が必ず適用され、初頭音節に同母音音素が挿入される⁶⁵。

(2-140) //N^//→/NN^/

//ba^//	→	/baa^/	1st.SG
//hi^//	→	/hii^/	家
//me^//	→	/mee^/	前
//nabi^//	→	/naabi^/	鍋
//mami^//	→	/maami^/	豆

以上が必ず適用される環境である。本規則の適用対象となる語に、音韻的に従属的な形態素すなわち接辞や接語が後続した場合、あるいは別の語幹と複合する場合には、本規則の適用は任意である⁶⁶。例えば、(2-139)と(2-140)に挙げた語に接辞や接語が付加した場合の例を挙げる⁶⁷。

⁶³ 初頭母音が無声化(2.2.2)する場合は、ピッチ変動を明確にするために2音節目以降で本規則が適用されている可能性がある。しかし、明確な音声的長母音とは言い切れないため、本文に例を挙げなかった。下降型に関して、ピッチ下降にかかる長さの計測および一般化は今後の課題とする。

⁶⁴ 例外的に「野菜」を意味する//jasee//は、鼻音始まりではないにもかかわらず、本規則が適用され/jaasee/が実現する。

⁶⁵ 鼻音始まりの語は、前者のピッチパターンで実現することもある。その場合は、長母音化規則は適用されず、それぞれ/nabi^/, /mami^/で実現する。

⁶⁶ 接辞や接語、複合とは異なるが、下降型かつ1モーラの中止形動詞//he//「食べて」(6.3.2.4)に継続2の補助動詞(9.2.2)や継起助詞(11.4.2)等が後続する場合に、先行する動詞は本規則の適用外になる。例えば、he bir-j ar-oo (食べる.CVb 継続 2-CVb 継続 1-IND2)「食べているよ。」や he sita (食べる.CVb 継起)「食べて、…」である。birは(下降型だと考えられるが)低ピッチからはじまり、sitaは下降型アクセントを持っている。下降アクセントに低ピッチから始まる語が続く場合、あるいは下降型アクセントの語が連続する場合の規則の適用についてはさらに検討する必要がある。

⁶⁷ 母音音素が3つ連続することによる超重音節(1音節が3モーラから成る音節)は好まれないようで、/da/ (2ND.SG)に複数

- (2-141) //da\// → /daima\// あなた達 (2ND.SG-PL)
 //ho\// → /hota\~/~/hoota\// 食べた (食べる.PST)
 //me\// → /me=na\~/~/mee=na\// 前に (前=LOC1)
 //nabi\// → /nabi=nu\~/~/naabi=nu\// 鍋の (鍋=GEN)
 //bi\+turi\// → /bi+duri\~/~/bii+duri\// 雄鳥⁶⁸

平進型の場合は、語を通してピッチが変化しない (2.3.2)。平進型の1モーラ語に関する本規則の適用は、任意である⁶⁹。

- (2-142) //ki\// → /ki\~/~/kii\// 木
 //zi\// → /zi\~/~/zii\// 乳
 //a\// → /a\~/~/aa\// ある (ある.NPST)

下降型の一部の語と上昇型の一部の語で、基底で1モーラ語ではないにもかかわらず、本規則が任意で適用される例が見つかっている。前者は語頭で、後者は末尾の位置で本規則が適用される。以下ではこの2つの例を見る。

下降型の弁別的なピッチ変動は語頭からのピッチ下降である。この下降のピッチ変動を明確に出すために、CNCN から成る2音節2モーラ語で初頭音節に本規則が任意で適用される場合が見つかっている。

- (2-143) //gasi\// → /gasi\~/~/gaasi\// ～だけ
 //gobi\// → /gobi\~/~/goobi\// 沢山
 //bebi\// → /bebi\~/~/beebi\// 少し
 //tusa\ha\// → /tusa\ha\~/~/tuusa\ha\// 遠い⁷⁰

上昇型の弁別的なピッチ変動は語末にかけての上昇である。この上昇のピッチ変動を明確に出すために、CN(Co)CN から成る2音節語で (1) (鼻音以外の) 初頭音節に本規則が適用される場合と、(2) 末音節に本規則が適用される場合と、(3) どちらの環境にも適用される場合が見つかっている。いずれも任意である。

- (2-144) //basa\// → /basa\~/~/baasa\// 芭蕉

接辞/-ima/が付加する場合に本規則は適用されない (/daa-ima/)。一方で、母音音素2つと子音音素/n/から成る超重音節は実現することがある。例えば、累加助詞=n「も」を後続させる場合には、/ba=n/とも/baa=n/ (1st.SG=も)、/da=n/とも/daa=n/ (2ND.SG=も)とも実現する。超重音節について、すべて母音音素から成るものと子音音素が含まれるものによる違いについては、さらなる調査が必要である。

⁶⁸ //turi//は連濁の音韻規則で初頭の子音が有声化する (2.5.4)。「雄」「雌」を意味する//bi\//と//mi\//は、「鳥」を意味する//turi//と複合する際には本規則の適用は任意である (/bi+duri~/~/bii+duri/「雄鳥」、/mi+duri~/~/mii+duri/「雌鳥」)。しかし「牛」を意味する//usi\//と複合する際には、音声的長母音は実現しない (/bi+usi~/「雄牛」、/mi+usi~/「雌牛」)。後続する要素によって、任意で適用されるかそもそも規則が適用されないか、ゆれが観察される。

⁶⁹ 平進型の1モーラ語が/ki~/~/kii/で揺れている理由に、他の語の長さと同じ長さに揃えるという動機が働いている可能性も考えられる。

⁷⁰ //tusa//は属性動詞といって、形態統語的には必ず要素末に/ha/が実現するが、アクセントが実現する単位は/ha/の直前までである (2.3.4.2)。さらに//tusa//に含まれる//sa//は歴史的変化の途中で獲得した要素だと言われていることから (p. 145 注 6.1.2.2)、//tu//を1モーラ語 (形態素) として扱い、本規則が適用する必須の環境だと分析することができる。このような例は、他に//busa(ha)//「大きい」が/busa(ha)~/~/buusa(ha)/で見つかっている。

//gucce//	→	/gucce/~/guccee/	雄牛
//dore//	→	/dore/~/doree/	～だろう
//dura//	→	/dura/~/duraa/	～だよ
//bema//	→	/bema/~/beemaa/	私たち (1st.PL.INC)

本規則が任意で適用される例はあるものの、規則全体を変更する必要はないと考える。その理由は、現段階ではどのような規則を想定しても例外が生じるからである。例えば、音声的な短母音と長母音に関して、琉球諸語に広く見られる最小語制約 (下地 2018)、すなわち語は最小で 2 モーラなければならない、という観点から説明することも可能である。ただし、最小語制約という観点から記述する場合には「木」を意味する語を [ki:] と [ki] とも言える点や、「鍋」を意味する語を [ne:bi] と [nebi] とも言える点が説明できない。本論文では、ピッチ変動を担う場合に長母音化すると記述している⁷¹。

一方で本規則が任意で適用される範囲が広いため、今後、より汎用的な長母音と短母音の実現環境について更なる分析が期待される。常に音声的長母音が実現する語に関しても、問題がいくつか散見する。例えば歴史的に「かはら」から変化した /kaara/ 「瓦」は、単独では常に長母音で実現するにもかかわらず、複合語として用いられる場合に、現代では短母音で実現する (/bii+gara/ 「雄瓦」 /mii+gara/ 「雌瓦」)。これは (前部要素の) 音節初頭に同母音音素挿入規則を適用させた結果、後続する要素の母音の長さを保持しなくなった可能性や、波照間方言全体として長母音と短母音の区別が非弁別的になる過程にある可能性が考えられる。非弁別的になる過程にあると考えられる例は、例えば「かふ」から生じた /koo/ 「買う」である。/koo/ 「買う」は単独で用いられるときは音声的長母音で実現するが (例: /koo munu/ (買う.NPST 物) 「買う物」など)、音韻的に従属な形態素が後続すると音声的長母音は必須ではなくなり、短母音で実現する (例: /kon/ (買う.IND) 「買う」など)。従って、このような例に関しては、基底に //ko// を想定し、(2-139) に挙げた //ho// にも同様の分析を行った。以上のように、波照間方言の長母音と短母音の区別については、わからない点が残る。歴史的な変化と、現代の共時態を考慮した研究が今後の課題である⁷²。

2.5.2 子音音素間の母音/u/の脱落

語あるいは接語の形態素境界に /nu/ と /CN/ が連続して現れる場合でかつ、C が両唇鼻音 /m/ あるいは接近音 /j, w/ 以外の場合、子音音素 /n/ と /C/ の間の母音音素 /u/ が削除される音韻規則を立てる。この規則は、いくつかの例外の環境を除き、すべての形態素境界で適用される⁷³。

⁷¹ 基底形に同母音連続を想定し、ピッチ変動を担わない場合に母音音素が 1 つ削除される、あるいは (音韻的なものではなく) 音声的なバリエーションとして記述することも可能である。現段階では、波照間方言だけを見ればどの分析方法を採用しても構わないだろう。しかし、周囲の琉球諸語の最小語制約に見られる長母音化の規則を考慮し、短母音から長母音へ変化するという立場を採用した。

⁷² この他にも問題として挙げられるのは、動詞語幹に母音の渡り音化規則 (2.5.3) が適用される場合である。渡り音化規則が適用された結果、語内にピッチを担う母音が全く含まれなくなる場合、母音音素挿入規則は適用外となる (例: /ki/ (来る.CV) + /a/ (継続 1.NPST) → /kja/ 「来ている」)。アクセント型が実現しないにもかかわらず語と認定する理由は、問題となる語幹がその他の環境で並行的にアクセントを持つと考えられ、かつ渡り音化規則が適用される前の形式が明確に語と認定できるからである (例: /ki/~/kii/ 「来て」)。

⁷³ 例外の環境は 2 つある。1 つ目は、属格助詞=nu と後続する名詞の形態素境界である。なお属格が異形態=n で現れることがあるが、これは音韻的な環境ではなく組み合わせによると考える (8.7.9)。2 つ目は、/nuCN/ という音素連続中の /n/ が無

- (2-145) /nu/+/p/→/np/
 /jum-an-u/+/pacī/ → /juman#pacī/ 読まないはず
 /en-an-u/+/pacī/ → /enan#pacī/ 言わないはず
- (2-146) /nu/+/b/→/nb/
 /munu/+/=ba/ → /mun=ba/ 物を（物=TOP）
 /en-u/+/=ba/ → /en=ba/ 言うなら
- (2-147) /nu/+/t/→/nt/
 /munu/+/te/ → /mun#te/ ～ものだよ
- (2-148) /nu/+/d/→/nd/⁷⁴
 /jum-an-u/+/dore/ → /jum-an#dore/ 読まないはず
 /ng-an-u/+/dore/ → /ng-an#dore/ 行かないはず
- (2-149) /nu/+/c/→/nc/
 /jum-an-u/+/cju/ → /jum-an#cju/ 読まないとき
 /ng-an-u/+/=cja/ → /ng-an=cja/ 行かないと
 /s-an-u/+/=cja/ → /s-an=cja/ しないと
- (2-150) /nu/+/k/→/nk/
 /jum-an-u/+/kajaa/ → /jum-an#kajaa/ 読まないかね
 /=tenu/+/kutu/ → /=ten#kutu/ 読むということ
- (2-151) /nu/+/g/→/ng/
 /banu/+/=ga/ → /ban=ga/ 私に
 /jum-an-u/+/=gara/ → /jum-an=gara/ 読まないから
 /en-u/+/=gara/ → /en=gara/ 言うから
- (2-152) /nu/+/s/→/ns/
 /jum-an-u/+/saa/ → /jum-an#saa/ 読まないでしょう
 /en-u/+/sika/ → /en#sika/ 言うけど
- (2-153) /nu/+/n/→/nn/

声鼻音で実現する場合である。例えば/sunu/ [s^hu_{nu}]「着物」+/=ba/「を」は、規則が適用されず、/sunu=ba/「着物を」で実現する。

⁷⁴ 波照間方言の焦点助詞=ndu は、歴史的に主格標識=nu と焦点標識=du が融合したものであると考えられる（4.5.2）。/nu/+/d/→/nd/の音韻規則が適用された結果、=ndu（焦点助詞）へ変化したと考える（12.1）。

/ar-an-u/+ /naa/ → /ar-an#naa/ ないのか？

(2-154) /nu/+ /r/ → /nr/

/jum-an-u/+ /raa/ → /juman#raa/ 読まないね

/munu/+ /raa/ → /mun#raa/ ものだね

これまでに /nuC_iV/ の /C_i/ に、/f, z/ が現れる例は見つかっていない。

2.5.3 母音の渡り音化

動詞句内の語境界（9 章）、あるいは接語境界に、/i=a/, /i=o/, /e=a/ ⁷⁵ という母音連続が現れる場合、それぞれ先行する母音音素 /i, e/ が /j/ と交替する ⁷⁶。この規則を母音の渡り音化規則として認定する。先行する母音音素が /j/ と交替した結果、/j/ は核音ではなく、オンセットに含まれる渡り音として現れる ⁷⁷。

(2-155) および (2-156) に例を挙げる。/i=a/ と /e=a/ が現れる例は多いが、/i=o/ が現れる例は 2 例のみ見つかった。/i=a/ と /e=a/ は、特に主題助詞=a (12.2) ⁷⁸ と、継続を表す補助動詞 a (9.2.1) が用いられる環境で観察される。/i=o/ は、コピュラ動詞 /jari/ に丁寧の助動詞 /o/ が後続する場合にのみ見つかった。

(2-155) /i/+ /a/ → /ja/

/ku.ri/+ /a/ → /ku.rj=a/ これは

/u.ri/+ /a/ → /u.rj=a/ あれは

/ka.mi/+ /a/ → /ka.mj=a/ 間は

/ju.mi/+ /#an/ → /jumj#an/ 読んでいる

/gaa.si/+ /#aroo/ → /gaa.sj#a.roo/ ただ～（したい）だけだ

(2-156) /i/+ /o/ → /jo/

/ja.ri/+ /#oo/ → /ja.rj#oo/ ～です（か？）

/si/+ /#oo/ → /sj#oo/ していच्छやる

• /Ce/+ /a/ → /ja/

(2-157) /a.ra.he/+ /#an/ → /a.ra.hj#an/ 洗っている

/he/+ /#an/ → /hj#an/ 食べている

⁷⁵ 接語境界 (=) を例に挙げた。

⁷⁶ これまでの調査では、/ia, io, ea/ の母音連続を含む語は見つかっていない (2.2.8)。

⁷⁷ 本規則が適用された結果、語内にピッチを担う母音が全く含まれないことがある（例：/ki/（来る.CVB）+ /a/（継続 1.NPST）→ /kj a/「来ている」）。p. 75 の注 72 を参照されたい。

⁷⁸ 主題助詞は、異形態に /a/ と /ja/ がある。主題助詞に先行する音素が /i/ の場合、主題助詞は基本的に /a/ で実現する。しかし、ゆっくり発話する場合、/ja/ で現れる場合もある。

2.5.4 連濁

日本語研究において伝統的に「連濁」と呼ばれる音韻規則と同様の規則が、波照間方言にもいくつかの語で認められる。連濁とは、2つ以上の形態素が連続する際に、後続する形態素の第1拍目の清音が濁音になること(亀井他 1996)である。閉鎖音同士の交替と摩擦音と閉鎖音の交替が見つかっている。(2-158)から(2-162)に例を挙げる。(2-160)の/sumu+gukuru/「肝心」、(2-161)の/kacju+buni「鰹船」、および(2-162)の/naga+zara/「中皿」を複合名詞と分析する。それ以外の例は、前部要素単独の用法がなく、非生産的であるため分析しない⁷⁹。連濁の音韻規則が適用された上で化石化した語であると思われる。

(2-158) /t/→/d/⁸⁰

/turi/ 鳥	/biduri/ 雄鳥
	/miduri/ 雌鳥

(2-159) /p/→/b/

/pata/ 旗	/agabata/ 赤旗
	/sisubata/ 白旗

(2-160) /k/→/g/

/kaara/ 瓦	/biigara/ 雄瓦 ⁸¹
	/miigara/ 雌瓦
/kukuru/ 心	/sumu+gukuru/ 肝心

(2-161) /f/→/b/

/funi/ 船	/kacju+buni/ カツオ船
----------	-------------------

(2-162) /s/→/z/

/sara/ 皿	/kuzara/ 小皿
	/naga+zara/ 中皿
	/buzara/ 大皿

2.5.5 動詞語幹における形態素境界の母音融合

動詞語幹の形態素境界において、母音融合の音韻規則を立てる。動詞の語幹クラス1に非過去接辞と確信法接辞2が付加する場合に適用される。

⁷⁹ 疑似複合語とも言える。歴史的には複合語であった可能性が高い。

⁸⁰ /t/→/d/の交替と考えられる語に、/hedama/「食いしん坊」がある。歴史的に、/he/「食べ」に指小辞/-(n)tama/が後続した形式(例:食べっ子)である可能性が考えられる。しかし、動詞に直接名詞の接辞指小辞が付加する例を規則的に記述できないため、本論文中に例示しなかった。

⁸¹ 瓦の名称。2種類の瓦(雄瓦・雌瓦)で対になっており、組み合わせて屋根を葺く。

(2-163) /u-o/→/o/

/jum-**u**-oo/ (読む-NPST-IND2) → /jum-**oo**/ 読む
 /hak-**u**-oo/ (書く-NPST-IND2) → /hak-**oo**/ 書く
 /mu-**o**oo/ (思う-NPST-IND2) → /**moo**/ 思う

2.5.6 動詞語幹の非語幹末母音交替

動詞語幹の次末音節に、/si/あるいは/si/を含む場合、環境によって/si/は/si/と、/si/は/si/と交替する。これを動詞語幹の非語幹末母音交替規則として認める。本規則が適用される場合、/Ci, Cj, Ce/が後続する場合には/si/が実現し、それ以外の環境では/si/が実現する。(2-164) から (2-166) に例を挙げる。

(2-164) Ci が後続する場合とそれ以外の環境の場合

/sisi/	着て	/sisi/	着る
/siki/	聞いて	/siki/	聞く
/arasimi/	洗わせる	/arasi/	洗う

(2-165) Ce が後続する場合とそれ以外の環境の場合

/sike/	使って	/siko/	使う
--------	-----	--------	----

(2-166) Cj が後続する場合とそれ以外の環境の場合

/sisi/	着て	/sisi/	着る
/siki/	聞いて	/siki/	聞く
/siki/	使って	/siko/	使う

母音交替が生じる可能性として、交替の対象となる母音音素が特段指定されておらず、後続する音節の渡り音や母音音素によって音素が決まることも考えられる。なぜなら、名詞には規則が適用されるはずの音素配列を含む語が見つかったため、音素配列を守るために口蓋化が生じているとは考えにくいからである(例: /siken/ 「月」)。仮に、交替の対象となる母音音素が、特段に指定されていないと考える場合、(2-164) から (2-166) の/i/と/i/の交替の他、次の2つの名詞⁸²と、動詞で見ついている。先行する要素の母音音素が、後続する要素の接近音あるいは母音音素の影響で交替していると考えられる。

(2-167) a. /pisu/ 昼間 /pisiimari/ 正午
 b. /sisuubata/ 白旗 /sisoosjaha/ 白い

(2-168) /ngi/ 行く

/ngi/+/ -an/+/ -uta/ → /ng-an/+/ -uta/ → /ng-an-ata/ 行かなかった⁸³
 母音脱落

⁸² /pisiimari/ 「正午」では後部要素が、/sisuubata/ 「白旗」では前部要素が、現代では単独で用いられないため分析しない。疑似複合語とも言える。

次章以降、特別な理由がない限り音韻表記のスラッシュおよびアクセント記号については省略する。アクセントが弁別的である以上、例文等にアクセント記号を付与するのが最善と考えるが、現段階では語、あるいは語と接語単位でのアクセントは分かっている、文全体のイントネーションに関して詳しいことは分かっていない。さらに 2.3.4.1 で述べたような、複合語のそれぞれの要素でアクセント単位を持つ場合、あるいは2語以上から成る名詞句全体に1つのアクセント単位を持つ場合についても現象の観察にとどまっている。これらについてさらに分析を進めることと、アクセント記号付与の最善の方法に関しては今後の課題とする。

⁸³ /ngi/+an/に過去接辞/-uta/「行かなかった」を付加する場合、まず、/ngi/と/an/で語幹末母音/i/の脱落規則が適用される(/ng-an/)。次は、/ng-an/と/-uta/で形態素境界の母音/u/の脱落規則が適用され、普通/nganta/が実現する。しかし、稀に/nganata/で実現する。/nganta/と/nganata/の意味の違いは見られないが、音韻規則で一般化できなかったため、/u/と交替すると分析可能な母音音素/a/を、本論文では接辞/-a/(/ng-an-a-ta/)と分析している。ただし、詳細な分析はできていない。この現象は、例に挙げた否定接辞と過去接辞-utaの境界でのみ見られる(6-110)。

第 3 章

単位の認定

本章では記述に必要な単位について述べる。まず 3.1 では語・接辞・接語を認定する。次に 3.2 で語および接語について品詞分類を行う。

3.1 語・接辞・接語

3.1.1 語と接辞

波照間方言の語は、下降・平進・上昇のうち、いずれかのアクセント（2.3）を持つ単位である。一方で、アクセントを第一義的な基準とするが、いくつかの例に対しては形態統語的な基準を用いることがある。ただし例が少ないため、本論文では音韻的に定義する語（音韻語、Phonological word）とは別に形態統語的に定義する語（文法語、Grammatical word）を認めない（3.1.3）。

語を構成する要素は、語根と接辞に分けられる。このうち、語根は語の成立に必須の要素である。語は少なくとも 1 つ以上の語根を含む。接辞には語を完成させるのに必要な接辞とそうでない接辞がある。前者を屈折接辞、後者を派生接辞と呼び、語から屈折接辞を取り除いた形式を語幹と呼ぶ。屈折と派生の違いについては、6.3.1 を参照されたい。語を完成させるのに必要な接辞は、名詞類（人称代名詞、数詞）および動詞にのみ観察される。名詞類に観察される屈折接辞については 5 章を、動詞の個々の屈折接辞については 6.4 を参照されたい。

語内部の構造は、基本的に次の組み合わせである。括弧に示すとおり、接辞は複数現れうる。語根と示しているものは、多くの場合語幹と同じ形式である。1 語に複数の語根が現れる語を複合語あるいは複合語幹と呼ぶ。

- 語根単独
- 語根（-派生接辞…）-屈折接辞
- 語根-派生接辞
- 語根 + 語根

(3-1) 【語根単独】_{語幹}

a. sata
砂糖
「砂糖」

b. sii
手
「手」

c. baa
1st.SG
「私」

(3-2) 【語根（-派生接辞…）】_{語幹}-屈折接辞

a. pītu-ci
1-CLF. 一般
「1 つ」

b. jumu-n
読む-IND1
「読む」

c. jum-asī-n
読む-使役-IND1
「読ませる」

(3-3) 【語根-派生接辞】_{語幹}

a. ba-ima
1st-PL.EXCL
「私たち」

b. gokka-ntama
鶏-DIM
「ヒヨコ」

c. pītu-nta
人-所
「人の所」

(3-4) 【語根 + 語根】_{語幹}

a. sata+panbee
砂糖 + 天ぷら
「サータアンダギー」

b. sii+pan
手 + 足

「手足」

c. ba+hii

私 + 家

「私の家」

大多数の語は上に挙げた 4 つのいずれかの構造を持つが、語内に、入れ子のように複数の語幹が現れる場合がある。このように 1 語に複数の語幹が現れる語も複合語あるいは複合語幹と呼ぶ¹。

(3-5) [[語根-接辞]_{語幹}+[[語根]_{語幹} (-接辞…)]_{語幹}-屈折接辞

a. ng-i+boha-n

行く-SE+ 願望-IND1

「行きたい」

b. jum-i+misja-n

読む-SE+ よい-IND1

「来てよい」

c. num-i+s-an-u

飲む-SE+ 能力-NEG-NPST

「飲めない」

以後、特に語根を指す必要がない場合、単に語幹と呼ぶ²。

3.1.2 接語

拘束形態素でありながら語の内部要素とはみなせず、それにもかかわらずアクセント的には自立していない要素がある。これを語・接辞とは別に、接語と呼ぶ。語の内部要素（すなわち接辞）とは考えない理由を、琉球諸語宮古語伊良部島方言で接語を認定している下地 (2018) を参考に、次の 2 つの基準を用いて述べる。

- 内部要素の結束性の有無
- 共起制限の度合い

3.1.2.1 内部要素の結束性の有無

服部 (1950), Zwicky and Pullum (1983), Dixon and Aikhenvald (2002) によれば、語内部の要素と、語の外側の要素（句や節に後続している要素）の違いは、前者が決まった順序に従い要素が並んでおり、要素同士の入れ替えができないのに対し、後者は要素の入れ替え（移動や挿入）が可能である点だという。すなわち、ABC という要素の連続が観察される場合、BAC および ACB という入れ替えや別の独

¹ 下地 (2018) は、語内部に現れる複数の語幹を 1 つの語幹として「語幹核」と呼んでいる。

² 動詞と名詞類以外は屈折接辞を必要としないため、ほとんどの場合が語根単独が語幹であり語である。

立した語 X の挿入 (AXBC および ABXC) が可能であれば、その 3 つの要素は同一の語内部の要素ではなく、それぞれ形態統語的に自立している要素だと言える。

この基準に沿って、本論文で接語と認定する格助詞 (3.2.7, 8.7) のうち共格助詞=**tu** と、複数を表す接辞=**nzi** を代表として述べる。(3-6a) と (3-6b) は、共格助詞=**tu** を挟んで、語根の位置を入れ替えたものである。例文中の形態素 **buja** を A、**tu** を B、**bidu** を C、**ntama** を D、**nzi** を E と仮に呼ぶ。

(3-6) a. [**buja**]=**tu** [**bidu-ntama-nzi**]

おじいさん=COM 男-DIM-PL

AB CDE

「おじいさんと男の子達」

b. [**bidu-ntama-nzi**]=**tu** [**buja**]

男-DIM-PL=COM おじいさん

CDEB A

「男の子達とおじいさん」

ここで=**tu** (B) と=**nzi** (E) に注目する。仮に、=**tu** (B) が語内部の要素であるならば、(3-6b) でも AB で用いられるはずである。逆に、複数接辞の=**nzi** (E) が句に後続しているのであれば、(3-6b) でも句末に用いられるはずである。しかし、そのように実現しない。E は常に CDE の順番で用いられ、B は入れ替えが可能である。従って=**tu** (B) は、形態統語的に自立しており、語の外側すなわち句に後続している要素であり、一方=**nzi** (E) は語内部の要素であると言える。

さらに、=**nzi** の代わりに奪格助詞=**gara** (E) を用いた例を挙げる (3-7a)。=**gara** は、先ほど見た=**nzi** と異なり、必ず CDE の順で用いられるとは言えない (3-7b)。A と CD を入れ替えたとしても、E は必ず句末の位置で用いられる (3-7c)。

(3-7) a. [**buja**]=**tu** [**bidu-ntama**]=**gara**

おじいさん=COM 男-DIM=ABL

AB CDE

「おじいさんと男の子から」

b. *[**bidu-ntama=gara**]=**tu** [**buja**]

男-DIM=ABL=COM おじいさん=ABL

CDEB A

c. [**bidu-ntama**]=**tu** [**buja**]=**gara**

男-DIM-PL=COM おじいさん=ABL

CDB AX

「男の子達とおじいさんから」

この例から、奪格助詞=**gara** (E) は形態統語的に自立した要素であり、**buja=tu bidu-ntama-nzi** 「おじいさんと男の子たち」³ という名詞句 (8.6) に後続していると言える。

³ あるいは内部構造を入れ替えた **bidu-ntama-nzi=tu buja** 「男の子たちとおじいさん」

波照間方言の多くの格助詞、一部の接続助詞、焦点助詞、主題助詞、累加助詞は、この「X と Y (助詞)」の基準を用いて接語と認定できる⁴。

3.1.2.2 共起制限の度合い

接語は、3.1.2.1 で見た通り、語の外側に位置している。接語のホストが語幹であれば語幹の品詞に制限があるが、句や節がホストの場合、ある要素に先行する語、すなわち句末の品詞あるいは統語的役割にまで指定はない(下地 2018)。従って、先行する要素の品詞等に制限がなければ、句や節をホストとしていえる。(3-8) に例を挙げる。焦点助詞は名詞(項)にも動詞(述語)にも後続しうる。一方、複数接辞や過去接辞といった形式は、それぞれ名詞語幹あるいは動詞語幹にしか付加しない。なお焦点助詞は、先行する語と共にアクセント単位を形成する。従って、(3-8a) では ba「私」と、(3-8b) では jumi「読み」とアクセント単位を形成する。

(3-8) a. 項

ba=ndu sinsin.

1st.SG=FOC 先生

「私が先生です。」

b. 述語

jum-i=ndu s-oo.

読む-CVB=FOC する-NPST.IND2

「読む。」

3.1.2.1 と本節で挙げた 2 つの基準は、形態統語的自立性を認定する基準である。本基準を用いると、焦点助詞の他に一部の接続助詞、主題助詞、累加助詞、一部の形式名詞が接語と認定できる⁵。

以後、接語境界を= (イコール)、接辞境界を- (ハイフン) で示す⁶。波照間方言の接語は、助詞の一部として 3.2.7 に挙げた。

3.1.3 問題となる形式

3.1.1 の冒頭で、波照間方言の語を 1 アクセント単位持つ形式であると認定した。しかし、内部要素の結束性の有無や、共起制限の度合いといった形態統語的な基準(3.1.2.1, 3.1.2.2)に照らし合わせると語と呼びたいものの、アクセント単位の観点からはそう呼べない形式がいくつか見つっている。

このような分析の齟齬を解決する方法として、音韻語、文法語をそれぞれ別に認定する分析方法も考えられるが、波照間方言の場合は音韻語と文法語が重なる部分が大部分を占めるため、音韻語とは別に文法語を認定する分析方法は取らなかった。従って、以下に挙げる形式は例外として扱う。

問題となる形式は、2 アクセント単位からなるが例外的に 1 語と扱う語である。2 種類あり、1 つは一部の複合名詞で、もう 1 つは、近接過去接辞を含む動詞形式である。

⁴ その他の一部の助詞はアクセントを持つため、語と認定する。

⁵ 接語と認定できる助詞の内、格助詞を除くすべての助詞に本基準が適用できる。

⁶ 助詞の多くは接語である。しかし、すべての助詞が接語ではない。

複合名詞に関しては、2.3.4.1の(2-121)から(2-123)に例を挙げた。これらの複合名詞の前部要素と後部要素は、単独でも用いることができ、複合した際にもそれぞれのアクセント単位が実現する⁷。一方で、複合語幹として用いられる場合には、アクセント単位は前部要素と後部要素でそれぞれ実現するが、内部要素の結束性が高く、要素の入れ替えや移動(3.1.2.1)は不可能である。(2-121)の一部を(3-9)として再掲する。

(3-9) /misju/「味噌」 + /turi/「鳥」 → /misju/ + duri/「すずめ」

近接過去接辞を含む動詞形式は、多くの語に観察されるアクセント(2.3)では説明できないピッチパターンが観察される。しかし、先行する動詞語幹のアクセント型と別のアクセント型を持つ要素の組み合わせと分析できるため、後者をアクセントを持つ接辞と考える。近接過去接辞を含む動詞形式は、面接調査で数例確認できたのみで、機能をはじめ、後続する要素について十分な記述ができていない(6.4.3)⁸。後続する要素のアクセント型は、平進型か上昇型のどちらかである。(3-10)に例を挙げる。後部要素のアクセント型が定まらないため、ピッチを示すにとどめる。Hは高ピッチ、Lは低ピッチ、D(evoicing)は無声化を示す。

(3-10) /iri/「入れる」 + /-an/ → /ir+an(HLH)/「入れ終わった」
 /sis/「切る」 + /-jan/ → /sis+jan(HHH)/「切り終わった」
 /jum/「読む」 + /-jan/ → /jum+jan(LLH)/「読み終わった」

これらの形式を1語と分析する理由は、形態統語的自立性による(3.1.2.1, 3.1.2.2)。アクセントを一義的な語の基準に用いているが、このように音韻と形態に齟齬が見られる形式は少数であるため、例外として扱った⁹。

3.2 品詞分類

本論文では波照間方言の語に、動詞、名詞、指示連体詞、副詞、感嘆詞、指示様態詞の品詞を認める。表3.1に品詞分類の基準を提示する。まずは活用するかしないかで、活用するものを動詞と認定し、それ以外と区別する¹⁰。次に、活用しないもののうち、項として現れる句の主要部として用いられるものを名詞と認定する。動詞と名詞以外の形式のうち、項として現れる句の主要部のみを修飾するものを指示連体詞として、述語のみを修飾するものを副詞としてそれぞれ認定する。上記のすべての品詞の特徴を併せ持つ特殊な品詞を指示様態詞と認定する。表3.1の指示様態詞に示す△は、活用こそしないが動詞と同じ統語機能を持つということを意味する。さらに、上記の基準に当てはまらない形式のうち、それだけで用い

⁷ 2.3.4.1でも述べた通り、1語に2つのアクセント単位が現れる複合名詞の後部要素は常に下降型アクセントを持つ。なぜ後部要素が下降型のアクセントに限りこのような例外が見られるかについては、さらに調査が必要である。

⁸ 継続を表す動詞形式と音素配列が同じため、別の形式(補助動詞構文)で完了を示すことが多い。

⁹ 似たような例として、属性動詞が挙げられる。属性動詞は、歴史的に句構造を持つが、現代ではそれぞれの要素が自由ではない。従って、本論文では複合的な動詞語幹と分析する(6.1)。完全に1語と分析しない理由は、複合名詞に見られる例外とは異なり、内部要素がパターンを成しているからである。近接過去接辞を含む動詞形式については、今後分析が進み様々な例が観察されれば、継続の補助動詞構文(9.2.1)のように、2語と分析できる可能性もある。

¹⁰ 活用とは、ムード接辞、時制接辞、中止接辞といった屈折接辞を付加し、統語環境によって語尾を変化させることを指す。

ることができる形式を感嘆詞として認定する。このうち指示連体詞に属する語は2つ、指示様態詞に属する語は3つのみである。

この他、必ず他の語句と用いられ、句と句あるいは句と述語の関係や、話し手の態度を示す語や接語がある。それらの形式を助詞と呼ぶ。

表 3.1: 品詞分類の基準

	動詞	名詞	指示連体詞	副詞	指示様態詞	感嘆詞
活用する	○				△	
項として現れる句の主要部として現れる		○			○	
項として現れる句の主要部を修飾する			○		○	
述語を修飾する				○	○	
上記以外						○

品詞をまたぐ意味機能のカテゴリとして、指示語および疑問語を認める。指示語には、指示代名詞、指示連体詞、および指示様態詞の3つの品詞が含まれる。疑問語には、疑問代名詞と指示様態詞の2つの品詞が含まれる。このうち、指示代名詞も疑問代名詞も、名詞類に属する語である。これら2つの機能語については、まとめて7章で述べる。

3.2.1 動詞

動詞は、活用する語類である。動詞には一般動詞と属性動詞の下位分類を認め、属性動詞にはさらに ha 属性動詞と sja 属性動詞という下位分類を認める。一般動詞と属性動詞という下位分類の基準は、語幹末の音形の違いである。語幹末の音形式が ha あるいは sja のものは属性動詞、それ以外が一般動詞である。ha 属性動詞と sja 属性動詞という下位分類の基準も、語幹末の音形の違いである。ha 属性動詞と sja 属性動詞は成立過程に違いがあると考えられている。詳細は6章の動詞形態論で述べる。

3.2.2 名詞類

名詞類には次の下位分類を認める。

1. 代名詞

- 人称代名詞
- 再帰代名詞
- 指示代名詞
- 疑問代名詞

2. 語彙名詞

- 一般名詞
- 固有名詞

3. 数詞

この下位分類の基準は意味機能である。直示的な語を代名詞、数字を表す語を数詞、それ以外の語を語彙名詞とする。人称代名詞は数で屈折し、数詞は語幹単独では語として現れず、必ず類別接辞（屈折接辞）を必要とする点で、形態的にも特徴づけられる。

基本的に他の名詞を修飾する際には属格助詞=nu を用いるが、代名詞の一部の語は、他の名詞を修飾する際に複合法を用いる。代名詞および語彙名詞に付加しうる接辞には、指小接辞や複数接辞などがある。これらの接辞は、現れる場合もあれば、現れない場合もある。詳細は5章の名詞類と名詞形態論で述べる。

3.2.3 指示連体詞

指示連体詞にはこれまでに、遠称を表す **unu** 「あの、その」、近称を表す **kunu** 「この」の2語が見つまっている¹¹。直示的な語である。指示語としての意味機能は7.1を参照されたい。項として現れる句の主要部を修飾する語類である。

(3-11) **kunu utama**

この 子ども

「この子ども」

(3-12) **unu pītu**

あの 人

「あの人」

統語的特徴がはっきりしているものの、メンバーはこの2語のみである。**kunu**、**unu** は、もともと名詞由来の形式であった***u**、***ku** が、属格助詞=nu と用いられ続けた結果、修飾部専用の形式として化石化したものと推測できる。***u**、***ku** の同源と考えられる日本語古典語「そ」「こ」にかつて（7世紀～10世紀頃）「そが」「そを」、「こは」や「こを」といった他の助詞と共に用いられる用法があった（小学館2000）ことからその可能性は高い。現在では***u**、***ku** 単独では用いられることはなく、常に **nu** を内包した形式で用いられている。従って、現代の共時態を記述する文法では、本形式を（名詞ではなく）指示連体詞とし、さらに指示語のパラダイムに入れ、指示語語幹と役割を決定する接辞（派生接辞）から成る語として分析する（例：**u-nu**, **ku-nu**）。指示語のパラダイムに入れる分析方法を選択する理由は、同じ指示語に **u/ku** を含む指示名詞 **uri** 「あれ」、**kuri** 「これ」が見つまっているからである。これらの指示名詞も指示連体詞と並行的に指示語語幹と接尾辞（例：**u-ri** 「あれ」、**ku-ri** 「これ」）と分析する¹²。指示連体詞の実際の用法については、8章の名詞句で、指示語については7.1で述べる。煩雑さを避けるため、7.1以外では形態素境界を省略する。

¹¹ 不定を表す指示連体詞はない。「どの」を意味する不定の指示語には、**zaa** 「どこ」を用いる。

¹² 指示連体詞とは異なり、**-ri** の由来は不明である。

3.2.4 副詞

副詞は述語を修飾し得る、あるいは名詞節の補語に成り得る品詞である。共通した形態的特徴は見られない。例えば、**goobi**「沢山」は副詞である。以下の例文では述語 **o-ta te**「いらっしやった」を副詞 **goobi**「沢山」が修飾している。副詞を太字で示す。

- (3-13) uri-ma=n **goobi** o-ta te joo.
 あれ-PL=も 沢山 いらっしやる-PST DIR.EV1 DSC2
 「あの人達も沢山いらしたってばよ。」

これまでに見つかっている副詞を表 3.2 に挙げる。意味によって、量、時間、オノマトペ、その他に分類した。いくつかの副詞には、属性動詞（6.1）と歴史的に関連する形式がある¹³。オノマトペのみ、引用助詞 **1=ta** と一緒に用いられる。

¹³ 波照間方言には、動詞の他、副詞にも重複法（6.6.2）が歴史的に認められた可能性が高い。

表 3.2: 副詞

種類	形式	意味	(関連する形式)
量	(n)goobi	「沢山」	
	busa	「沢山」	busaha 「大きい」
	bebi	「ちょっと」	bebisja 「小さい」
	isjaga	「少し」	isjagaha 「少し」
	mansin	「いっぱい」	
	muru	「全部」	
時間	kissa	「とくに」	
	mabe, mabi	「もう少し」	
オノマトペ	zjancjan	「ピョンピョン」	
	zoroozoro	「ゾロゾロ」	
	gangan	「ガンガン」	
	gasaragasara	「ガシャガシャ」	
	gurukkagurukka	「ギッチラコ」	
その他	muruzanari ¹⁴	「皆で」	
	kitunari	「皆で」	
	befutanari	「私達 (INC) 2 人で」	be 「私達 (INC)」
	bafutanari	「(〜と) 私の 2 人で」	ba 「私」
	pīpī	「寒く」	pīsja 「寒い」
	peepe	「急いで」	peesja 「早い」
	naana	「長く」	naaha 「長い」
	takaataka	「高く」	takaha 「高い」
	maroomaro	「低く」	maroha 「低い」
	kumaakuma	「細かく」	kumaha 「細かい」
	acaaaca	「厚く」	acaha 「厚い」
	noosanoosa	「暖かく」	noosaha 「暖かい」
	busaabusa	「大きく」	busaha 「大きい」
	pikoopiko	「気を付けて」	pikoha 「気を付ける」
	muruumurusi	「(肌などが) モチモチな」	
	izanda	「ちゃんと」	
	deena	「とても」	
	muttu	「本当に」	

¹⁴ muruzanari 「皆で」、kitunari 「皆で」、befutanari 「私達 (INC) 2 人で」、bafutanari 「(〜と) 私 2 人で」には、語末に共通して nari という音形式が観察される。nari は、一見分析できそうであるが、nari に先行する形式、あるいは nari が単独では語として機能しないため、分析しない。

以下に、それぞれの副詞を用いた例文を挙げる。

(3-14) 量

- a. unu utama=ndu **goobi** nahe.

あの 子ども=FOC 沢山 産む.CVB

「その子どもが沢山（子どもを）産んで、…」

- b. be+sima=nu pïtu=a **busa** e=ru h-j ar-oo.

1ST.PL.INC+ 島=GEN 人=TOP 大勢 そう=FOC 食べる-CVB 継続 1-NPST.IND2

「波照間島の人は、大勢そうやって（冬瓜を）食べているよ。」

- c. da+hi=na=n **bebi** a-n.

2ND.SG+ 家=LOC1=も 少し ある.NPST-IND1

「あんたんちにもちょっとある。」

- d. sakumee=ja busahar-i, musime=ja **isjaga** mizi naga sik-a sita,...

お米=TOP 多い-CVB もち米=TOP 少なく 水 LOC3 漬ける-CVB 継起

「お米は多く、もち米は少なく、水につけて…」

- e. ki=nu ui naga nuburi meedarikaki naga **mansin** naari <o> ir-a...

木=GEN 上 LOC3 上る.CVB 前掛け LOC3 いっぱい 実 を 入れる-CVB

「木の上に登って前掛けにいっぱい実を入れて…」

- f. usitu=ja maa **mur**u ba=ga zirikkapaa=ta eni=ci

年寄=TOP INTJ 全部 1ST.SG=DAT1 ジリッカおばあさん=引用 1 言う.CVB=付帯 1

tur-i dar-u juu, sisaree.

通る-CVB 継続-NPST DSC3 INTJ

「年寄はまあみんな、私に『ジリッカおばあさん』と言って、（ここでは）通っていますよ、はい。」

(3-15) 時間

- a. e sika baa=n maa, **kissa** <zjuuicizi> nari sa nen doo.

そう 逆接 1ST.SG=も INTJ すっかり 11 時 なる.CVB? 完了.NPST DIR.EV5

「だけど私も（卒業式が終わったら）すっかり十一時になってしまったよ。」

- b. aai **mabe**.

INTJ もう少し

「いや、もう少し（惜しい）。」

(3-16) オノマトペ

- a. munu sis-j ar-u pïtu=nu en-ta nee ina=ci ngi pii=gara

物 知る-CVB 継続 1-NPST 人=NOM 言う-PST 様態 海=ALL 行く.CVB 岩場=ABL

zjancjan <to> bunc-asï-tar-a...

ピョンピョン と 渡る-使役-PST-条件 1

「物知りが言ったとおりに海に行き、岩場からピョンピョンと渡らせたら…」

- b. **midumu=ja zoroozoro=ta** paku <no> utama <o> nah-ja-ta cju.
 女=TOP ゾロゾロ=引用 1 蛇 の 子ども を 産む-DUR-PST HS1
 「女は、ゾロゾロと蛇の子を産んだとさ。」
- c. **naabi <o> gangan=ta** sik-i...
 ナベ を ガンガン=引用 1 置く-CVB
 「鍋をガンガンと置き（叩きつけ）…」
- d. **gasaragasara=ta** hak-i ci...
 ガシャガシャ=引用 1 掻く-CVB 付帯 2
 「ガシャガシャと掻きながら…」
- e. **gurukkagurukka=ta** maa funi...
 ギッチラコ=引用 1 INTJ 船
 「ギッチラコとまあ、船を（漕いで）…」

(3-17) その他

- a. **e** sita, **muruzanari** unu <toono> sima=nu pītu=tu saki num-i...
 そう 継起 全員で あの 大和の 島=GEN 人=COM 酒 飲む-CVB
 「そして、（島の人は）全員でその大和の人と酒を飲んで、」
- b. **kitunari** <kjooryoku> s-i ci...
 皆で 協力 する-CVB 付帯 2
 「皆で協力しながら…（頑張りましょう）」
- c. **befutanari** ng-a raa.
 私達 (INC) 2 人で 行く-INT DSC1
 「私達 2 人で行こうね。」
- d. **bujaa=tu** **bafutanari** ng-i+kosiba...
 おじいさん=COM 私 2 人で 行く-SE+ 来る. 条件 2
 「おじいさんと私の 2 人で行って来るから…」
- e. **takaataka=n** mur-i, **maroomaro=n** muir-u-n.
 高く=も 生える-CVB 低く=も 生える-NPST-IND1
 「（その植物は）高くも生えるし、低くも生える。」
- f. **kumaakuma** sis-iba.
 細かく 切る-IMP
 「細かく切りなさい。」
- g. **noosanoosa** s-i ci ng-i joo.
 暖かく する.CVB 付帯 2 行く-命令 DSC2
 「暖かくしながら行きなさいよ。」

- h. **muruumurusi** s-j ar-oo.
 モチモチな する-CVB 継続 1-NPST.IND2
 「(赤ちゃんの肌が) モチモチしている。」
- i. **naanaa** s-i sita...
 長く する-CVB 継起
 「(それは) 長くて…」
- j. **pikoopiko** s-i ng-i joo.
 気を付けて する-CVB 行く-IMP DSC2
 「気を付けて行きなさいよ。」
- k. **izanda** maa e=nu munu ma tur-i+he ki=ru maa.
 よく INTJ そう=GEN もの INTJ 取る-SE+ 食べる.CVB 理由 2=FOC INTJ
 「よくそんなものも取って食べたからね (そんな子どもを生んだね)」
- l. **deena...** uramisja s-i bir-j a-tar-oo.
 すごく うらやましい する-CVB 継続 2-CVB 継続 1-PST-IND2
 「すごくうらやましかったよ。」
- m. **muttu** ngi mir-an sika...
 本当に 行く.CVB 経験-NEG 逆接
 「本当に行ったことないけど…」

副詞に関して、副詞化接辞と、数詞語根が副詞内部に観察される例が見つかっている。いずれも例が少ない。まず、副詞化接辞は-na である。ただし、見つかっているのは次に挙げる 3 例のみである。数詞に付加し配分を表す例と (3-18)、動詞に付加する例である (3-19)。

- (3-18) a. mi-tari<no> biduntama=ga **pītu-sīn-na** naari<o> h-a-tar-oo.
 3-CLF. の 男の子=DAT1 1-CLF. 細-ADV LZ 実を あげる-DUR-PST-IND2
 「3 人の男の子に 1 つずつ実をあげたよ。」
- b. **pītu-ri-na**=ru ng-i per-air-oo.
 1-CLF. 人-ADV LZ=FOC 行く-CVB 入る-POT-NPST.IND2
 「1 人ずつ行って、入れる。」
- (3-19) unu pīn sitomuci **peesja-na** ug-a k-j a-ta te noa.
 その日 朝 早い-ADV LZ 起きる-CVB 接近-CVB 継続 1-PST 引用 2 HS2
 「その日、朝、早くに起きてきたそうだ。」

数詞語根は、名詞の前部要素として現れる (5.3)。例外的に、副詞に現れる例が 2 つ見つかっている。bafutanari 「私 2 人で」と befutanari 「私達 2 人で (INC)」である。それぞれ 1 人称代名詞 baa 「私」、bee 「私達 (INC)」と 2 を表す数詞語根 futa-が複合したと考えられる。この場合に用いられる接辞-nari

は、有生物の類別接辞-ri と関連がありそうではあるが、¹⁵、詳しくは分からない。例は (3-17c, d) に挙げた。

3.2.5 指示様態詞

指示様態詞は遠称 ee「ああ、そう」、近称 kee「こう」、不定を表す nee「どう」の3つである。いずれも様態を表す直示的な語である¹⁶。ee「そう」は、談話内ですでに言及された様態や状況を受ける照応詞としても機能する。統語的に名詞、指示連体詞、副詞、動詞（述語）といった品詞の特徴を併せ持つ、特殊な語類である。まず、名詞のような特徴としては（1）名詞節（4.1.2.2）のコピュラ補語として機能する、（2）属格助詞と組み合わせり別の名詞句の修飾部として機能する、という2点が挙げられる。以下に ee とコピュラ動詞が現れる例文と、ee が属格助詞で拡張される例をそれぞれ挙げる。

(3-20) ee ja-ta-n.

そう COP-PST-IND1

「そうだった。」

(3-21) e=nu panasi=ndu a-tar-oo.

そう=GEN 話=FOC ある-PST-IND2

「そんな話がありましたよ。」

一方で、指示連体詞のようにそのまま名詞句の修飾部として機能することもできる。ただし、例は (3-22) に挙げる表現でしか見つかっていない。

(3-22) e munu ke munu.

そうもの こうもの

「そんなものやこんなもの。」

副詞のように、述語を修飾する場合もある。

(3-23) usitu nar-u=cja ee jam-an paci.

年寄り なる-NSPT=条件3 そう 痛む-NEG 推量1

「年寄りになったら、そう痛まないはず。」

指示様態詞 e~ee は、接続助詞（3.2.7, 11 章）と組み合わせあって、節と節をつなぐ接続表現として用いられることが多い。接続助詞は動詞と組み合わせあって用いられるため、この点で動詞あるいは述語のような特徴を併せ持つと言える。これまでに見つかっている接続表現を (3-24) に挙げる。

(3-24) a. e gara daa=n tuci tur-u=cja...

そう 理由1 2ND.SG=も 年 取る-NPST=条件3

「(私は年を取ったら頭痛が減った。) だから、あなたも年を取ったら…(減る)」

¹⁵ この他に、muruzanari あるいは kitunari という語で見つかっている。どちらも「みんなで」を表す。muru は「みんな」を意味する。kitu に関してはよくわからない。

¹⁶ 直示的な語のうち、現場指示に用いられる直示的な語には、指示様態詞以外に名詞にもある (5.1)。

- b. **e ki=ndu un=gara** <sangacu sannici>=ja midumu-nda=ja...

そう 理由 2=FOC それ=ABL 3 月 3 日=TOP 女-PL=TOP

「(その女は 3 月 3 日に海で蛇の子を産んだ。) だから、それから 3 月 3 日には、女たちは…
(海へ行って体を清めた)」

- c. **e ci=ru pite=nagi ho-tar-oo.**

そう 付帯 2=FOC 畑=LOC2 食べる-PST-IND2

「そうやって畑で食べたよ。」

- d. **e bagi=ru nari or-oo.**

そう 限界=FOC なる.CVB 敬意-IND2

「これまでができますよ。(おしまいにしてください。)」

- e. **e sita utama mari munu=ja muru...**

そう 継起 子ども 生まれる もの=TOP 全部

「そして、子どもが生まれるものは全部…(虫や海の生き物だったそうだ)」

指示様態詞 **e** が動詞の条件接辞 2 (6.4.10) と累加助詞 (12.3.1) 融合し、逆接の接続語として化石化しているものも観察される。

- (3-25) <iroiro> a-n sika, **eban...** sibiru=ndu busa siko raa.

色々 ある.NPST-IND1 逆接 だけど ネギ=FOC 沢山 使う.NPST DSC1

「いろいろあるけど、だけど…、ネギをたくさん使うよ。」

ke「こう」や ne「どう」は、e「ああ・そう」と異なり、節と節をつなぐ接続表現として用いられることはない。しかし、e と同様に、ke、ne にも付帯状況を表す接続助詞 **ci** が後続する例が見つっている。

- (3-26) ba-ima=n e ci=ru nari k-j ar-oo.

1ST-PL=も そう 付帯 2=FOC なる-CVB 接近-CVB 継続 1-NPST.IND2

「私達もそんな風になってきているよ。」

- (3-27) ke ci=ru <nakajoku> s-i ci=ru...

こう 付帯 2=FOC 仲良く する-CVB 付帯 2=FOC

「こんな風に仲良くしながら…」

- (3-28) nee ci=ru misiki kajaa?

どう 付帯 2=FOC 見つける.NPST 自問

「どうやって見つけるかねえ。」

3.2.6 感嘆詞

感嘆詞は、発話の初頭に現れうる、応答、注意喚起、感嘆、挨拶といった語である。表 3.3 に主な感嘆詞を挙げる。

表 3.3: 感嘆詞

種類	形式	意味
応答	oo	「はい」
	hoo	「はい？」
	nn	「うん（年下に向かって）」
	aai	「いいえ」
	too	「もういい」
注意喚起	jaa	「ほら」「ねえ」
	sjee	「ほら」「ねえ」「さあ」
	see	「ほら」「ねえ」「さあ」
	sii	「ほら」「ねえ」「さあ」
	maa	「ほら」「まあ」「もう」
感嘆	aga	「あらまあ（驚いた時、痛いときなど）」
	agajaa	「あらまあ（驚いた時など）」
	bii	「うわあ（驚いた時など）」
同意	assajoo	「そうだね」「本当にね」
	gan	「そうだね」
	gantejoo	「そうだね」
挨拶	nihajuu	「ありがとう」
	sīsaree	「ごめん下さい」「ねえ」
	oritabori	「いらっしやい」「ようこそ」

感嘆詞の中には、感嘆詞同士が連続していると考えられるものもある。例えば、agajaa「あらまあ」は、aga「あらまあ」とjaa「ほら」と成ると考えることもできるが、agajaaの場合、agaとjaの間に音声的な途切れが現れず、アクセント単位が2つから成ると明確ではないため、1語として扱う。一方で、sii「ほら」とmaa「ほら」は、音声的な途切れが現れ、アクセント単位も別である。従って、siiとmaaは感嘆詞が連続していると考ええる。

(3-29) **sii, maa, ja=ci ng-a maa.**

INTJ INTJ 家=ALL 行く-INT INTJ

「ほらほら、おうちに帰りましょう、もう。」

sīsareeは、(3-30)に挙げるように「ごめん下さい」という意味で、部屋に入るときに男性が用いる言葉である。一方(3-31)に挙げるように、女性でも発話の最後に用いることもある。

(3-30) **sīsaree.**

INTJ

「ごめん下さい。」

(3-31) mana bagi=n tur-i dar-u juu, sīsaree.

今 限界=も 通る-CVB 継続 1-NPST DSC3 INTJ

「今までも（そういう名前で）通っているんですよ。ねえ？」

sīsaree「ごめん下さい」に対する応答表現に oritabori がある。この表現は分析可能であるが (3-32)、文字通りの意味はなさず、「いらっしやい」あるいは「ようこそ」という意味でしか用いられない。従って、当該表現は分析せず、感嘆詞として考える。

(3-32) or-i tabor-i.

いらっしやる-CVB 依頼-IMP

「いらっしやい。」(lit. いらっしゃってください)

3.2.7 助詞

助詞は、語と接語の場合がある。これまで挙げた品詞に属する語には、音節数の偏りは見られなかったが、助詞は、1 音節か 2 音節から成る形態素を基本とする。助詞には、下位分類として格助詞、接続助詞、モーダル助詞、疑問助詞、その他の助詞を認める。

格助詞を表 3.4 に、接続助詞を表 3.5 に、モーダル助詞を表 3.6 に、疑問助詞を表 3.7 に、その他の助詞を表 3.8 に、それぞれ日本語に対応する訳と共に挙げる。これらの助詞の機能の詳細について、格助詞は 8.7 を、接続助詞は 11 章を、モーダル助詞は 10.5.2 を、疑問助詞は 10.1.1 を、その他の助詞のうち、談話標識助詞については 10.6 を、それ以外は 12 章を参照されたい。

表 3.4: 格助詞一覧

名称	形式	意味
直格	∅	～が、～を
奪格	=ga)ra	～から
与格 1	=ga	～に
与格 2	=mu	～に
具格	=si	～で
位格 1	=na	～で
位格 2	nagi~nagj ~=gi	～で
位格 3	naga	～で
向格	=ga)ci	～へ
属格	=n(u)	～の
共格	=tu	～と

表 3.5: 接続助詞一覧

名称	形式	意味
引用 1	=ta	～と
引用 2	ten(u)	～と
列举	duu	～かどうか
逆接	sika	～けど
理由 1	gara	～だから
理由 2	ki	～だから
付帯	ci	～ながら
条件	=cja(ra)	～なら
限界	bagi	～まで
継起	sita	～て

表 3.6: モーダル助詞一覧

モーダル助詞		形式	意味
認識的モダリティ	推量 1	paci	～はず
	推量 2	saa	～でしょう
	推量 3	dore	～だろう
	自問	kajaa	～かな
	確信 1	te	～だってば
	確信 2	waa	～だよ
	確信 3	sita	驚くことに～だ
	確信 4	nu	間違いなく～だ
	確信 5	doo～doa～dura	～だよ
	伝聞 1	cju	～だそうだ
	伝聞 2	noa	～だそうだ
義務的モダリティ	後悔	munu	～なのに

表 3.7: 疑問助詞

名称	形式	意味
真偽疑問	naa	～か？
内容疑問 1	raa	～か？
内容疑問 2	baa	～か？
内容疑問 3	jaa	～か？

表 3.8: その他の助詞

名称	形式	意味
談話 1	raa	～ね
談話 2	joo	～さ、～よ
談話 3	juu	～です
焦点	=ndu	～が
主題	=ja	～は
累加	=n	～も
排除	gasi	～だけ

第 4 章

節

本章では、波照間方言の節の構造およびそれに関連する項目について述べる。まず節の基本構造について 4.1 で述べ、動詞節と名詞節についてそれぞれ 4.2 と 4.3 で述べる。次に 4.4 で文法関係について述べる。最後に、4.5 で波照間方言の格標示体系に関して述べる。節にはそれ自体で現れうる節と、別の主要部を必要とする節がある。前者を主節、後者を従属節と呼ぶ。本章では主に主節を扱う。従属節については 11 章で詳しく述べる。

4.1 節の基本構造

波照間方言の節は、任意の項と必須の述語から成る¹。(4-1) に節の構造を示す。角括弧で囲った部分が述語である。項および、述語末を占める助詞類は、必須ではないため、括弧で示した。

$$(4-1) \quad (\text{任意の項}) \cdots \left[\begin{array}{c} \text{主要部} \left\{ \begin{array}{l} (\text{モーダル助詞}) \\ (\text{疑問助詞}) \\ (\text{接続助詞}) \end{array} \right\} \end{array} \right] (\text{談話助詞})$$

述語の核となる部分（述語主要部）が動詞句か名詞句かによって、前者の節全体を動詞節、あるいは特に述語を指し示す場合には動詞述語（句）と呼び、後者を並行的に名詞節あるいは名詞述語（句）と呼ぶ。名詞述語句の主要部が、稀に指示様態詞で占められる場合がある。後に 4.1.2.2 で述べるように、述語句内にコピュラ動詞が用いられるため、本論文では述語主要部に指示様態詞が現れる場合も名詞述語句として扱う。

節の構造に関して波照間方言の特徴的な点は、直格項として機能する名詞句は音形を持つ助詞等で標示されず、そのまま用いられる点、すなわち中立型のアラインメントを持っている点である。従って、動作主なのか被動者であるかは、語順で示される。この点に関しては、4.5 で詳しく述べる。

¹ Predicate の訳として「述語」という用語を用いる。

4.1.1 項

節に表れる項を、統語的意味役割 (Semantico-syntactic roles) を持つ S、A、P 項 (Comrie 1978) として以下の通り設定し、区別する。

- S とは自動詞節における、唯一の必須項。
- A とは他動詞節における必須項のうち、最も動作主的な項。
- P とは他動詞節における必須項のうち、最も動作主的ではない項。

S、A、P 項を直格項と呼び、S、A、P 項以外に現れる項を斜格項と呼ぶ。基本的に、斜格項には音形を持つ格助詞が後続する。

項には、名詞を必須とする名詞句が現れる (詳細は 8 章を参照されたい)。名詞句の構造は (4-2) のようにまとめられる。

(4-2) 名詞句の構造
(修飾部) 名詞

名詞句が (4-2) で挙げた構造のまま用いられる場合は、基本的に S/A/P 項 (あるいは名詞述語主要部) のいずれかとして機能する。名詞句が斜格項として用いられる場合、名詞句の後ろに格助詞が後続する。名詞句に格助詞が後続する場合、それ全体を「拡張名詞句」(下地 2018) と呼ぶ。拡張名詞句の構造を (4-3) に挙げる。

(4-3) 拡張名詞句
(修飾部) 名詞 格助詞

4.1.2 述語

4.1.2.1 動詞述語

動詞述語を構成する動詞句は、次のいずれかの構造を持つ。

- 本動詞
- 本動詞 $\left\{ \begin{array}{l} \text{補助動詞} \\ \text{軽動詞} \end{array} \right\}$

本動詞と補助動詞あるいは軽動詞から成る動詞句は、特定の構文で現れる (9 章)。当該環境下では、本動詞にさらに「本動詞 補助動詞 (あるいは軽動詞)」の組み合わせが入れ子構造のように埋め込まれる。本動詞単独で用いられる場合には、本動詞が意味的にも形態的にも主要部であるが、本動詞と補助動詞あるいは軽動詞が用いられる場合には、本動詞が意味的主要部を、補助動詞あるいは軽動詞が形態的な主要部を担う。動詞述語が本動詞のみで占められる場合の例文を (4-4a) に、本動詞と補助動詞で占められる場合の例文を (4-4b) に挙げる。

- (4-4) a. usina nagi **ng-u-n**.
 沖縄 LOC2 行く-NPST-IND1
 項 本動詞
 「沖縄に行く。」
- b. <terebi> **mir-j ar-oo**.
 テレビ 見る-CVB 継続 1-IND2
 項 本動詞 補助動詞
 「テレビを見ているよ。」

4.1.2.2 名詞述語

名詞述語を構成する主要部は次のいずれかの構造をもつ。名詞句であることが多い。

- 名詞句 (コピュラ動詞)
- 指示様態詞 (コピュラ動詞)

コピュラ動詞は、音形を持つ接辞やモダリティ助詞などの担い手として働く。従って、それらを担う必要がない場合には現れない²。

名詞述語が名詞句のみで占められる場合の例文を (4-5a) に、名詞句とコピュラ動詞で占められる場合の例文を (4-5b) に挙げる。

- (4-5) a. baa **sinsin**.
 1st.SG 先生
 項 名詞句
 「私は先生だ。」
- b. baa **sinsin ja-ta-n**.
 1st.SG 先生 COP-PST-IND1
 項 名詞句 コピュラ動詞
 「私は先生だった。」

主要部が指示様態詞で占められる場合の例文は、4.3 で述べる。

4.2 動詞節

動詞述語に用いられる本動詞は、自動詞か他動詞か形態的に区別できない。従って、述語に直接関係づけられており、かつ格助詞を伴わない必須項が、最大で 1 つ現れるか、2 つ現れるかで自動詞と他動詞を区別する。前者を自動詞、後者を他動詞とし、動詞句に自動詞が用いられる節を自動詞節と他動詞が用いられる節を他動詞節と呼ぶ³。以下では、直格項が現れる例と、直格項と斜格項が現れる例を挙げる。

² コピュラ動詞が現れない基本的な環境は、名詞節が主節であり、かつ非過去肯定の場合である。例えば、(4-18a) などである。

³ ただし、項は必要がなければ形式として現れない (4.5.3)。

■自動詞節

自動詞節の基本的な構造を (4-6) に、例文を (4-7) に示す。項を角括弧、述語を太字で示す。述語に S 項が先行する。

(4-6) 自動詞節の構造

[S] 動詞述語

(4-7) [amasikuru] **jam-uta-n.**

頭 痛む-PST-IND1

S 述語

「頭が痛かった。」

以下に、項として働く名詞句に修飾部が現れる例 (4-8a)、述語に 2 つの動詞が現れる例 (4-8b)、自動詞節に疑問助詞が後続する例 (4-8c) をそれぞれ挙げる。述語を太字で記す。

(4-8) a. 修飾部を持つ名詞句項の例

[e munu] **nen-ta-n.**

そう もの ない-PST-IND1

S 述語

「そんなものはなかった。」

b. 複数の動詞から成る動詞句の例

[simuci] **jum-i sik-iba.**

本 読む-CVB 準備-IMP

S 述語

「本を読んでおけ。」

c. 疑問助詞が後続する例

[reiko] **ku naa?**

人名 来る.NPST Q

S 述語

「玲子は来るか？」

■他動詞節

他動詞節の基本的な構造を (4-9) に、例文を (4-10) に示す。項を角括弧、述語を太字で示す。A 項が P 項に先行し、A、P 項は共に述語に先行する。

(4-9) 他動詞節の構造

[A] [P] 動詞述語

(4-10) [baa] [fuciri] **num-oo.**

1ST.SG 薬 飲む-NPST.IND2

A P 述語

「私は薬を飲みます。」

項として働く名詞句に修飾部が現れ、他動詞節に接続助詞が後続する例を、(4-11) に挙げる。

(4-11) [ba-ima] [juda=nu kabari] **paag-i** **sita...**

1ST-PL 枝=GEN 皮 剥ぐ-CVB 継起
A P 述語

「私達は枝の皮を剥いで…」

斜格項は、自動詞節であろうと他動詞節であろうと、述語より前の任意の場所に位置する。(4-12) に自動詞節の例、(4-13) に他動詞節の例を示す。例中の角括弧内に括弧で示した名詞句は、筆者が補ったものであり、実際の発話には現れていない。

(4-12) 自動詞節

[(utama)] [sima=ci] **kaer-i=n** **k-un-u.**

子ども 島=ALL 帰る-CVB=も 接近-NEG-NPST
S 斜格 述語

「子どもは島に帰っても来ない。」

(4-13) 他動詞節

[(ba-ima)] [pīte nagj]=a [uri=si]=ru [suu] **ho-tar-oo.**

1ST-PL 畑 LOC2=TOP あれ=INS=FOC 汁 食べる-PST-IND2
A 斜格項 斜格項 P 述語

「(私達は) 畑ではあれ(ひょうたん)で汁を飲んだよ。」

斜格項には基本的に(音形を持つ)格助詞が後続するが、例外的な環境が3つある。(1) 時を表す名詞を主要部に持つ名詞句と、(2) 数詞が主要部に現れる名詞句、そして(3) 場所化接辞を含む名詞を主要部に持つ名詞句(5.4.2.3)は、斜格項であるにもかかわらず、音形を持つ格助詞が付加しないことがある⁴。

(4-14) に、時を表す名詞を主要部に持つ名詞句に格助詞が後続する例を、(4-15) に格助詞が後続しない例をそれぞれ挙げる。

(4-14) 格助詞が後続する例

[(baa)] [kjuu=gara] [baasa+nari] gaasi **ho-n.**

1ST.SG 今日=ABL 芭蕉 + 実 だけ 食べる.NPST-IND1
A 斜格 P 述語

「私は今日からバナナだけ食べる。」

(4-15) 格助詞が後続しない例

⁴ 上記以外の環境で、音形を持つ格助詞が付加しない斜格項の例は見つかっていない。

[daa] [acca] ng-u naa?

2ND.SG 明日 行く -NPST Q

S 斜格 述語

「あんたは明日行くのか？」

数詞が主要部に現れる名詞句かつ音形を持つ格助詞が現れない例には (4-16) が見つかっている。

(4-16) a. manabi=ja [(naari)] [mii-ci] a-ta siika...

今さっき=TOP 実 3-つ ある -PST 逆接

S 斜格 述語

「今さっきは（実が）3つあったのに…（今はない）」

b. [(naari)] [pitu-sin] ut-a nen-ta-n.

実 一-本 落ちる -CVB 完了 -PST-IND1

S 斜格 述語

「（実が）1つ落ちてしまった。」

場所化接辞を含む名詞を主要部に持つ名詞句の例については 5.4.2.3 を参照されたい。

4.3 名詞節

名詞節の基本的な構造を (4-17) に示す。名詞節を自動詞節の一種と考える。

(4-17) 名詞節の構造

[S] 名詞述語

S 項が名詞述語に先行する構造をもつ。名詞節であっても、動詞節の直格項と同様に、S 項には格助詞が後続しない。

名詞節の内部構造について、コピュラ動詞のみを述語と分析する立場も考えられる。しかし、コピュラ動詞が現れない環境を説明しきれないため、採用しない。その環境とは、波照間方言の場合、名詞節が主節であり、かつ非過去肯定の場合である。通言語的に特定の環境下でコピュラ動詞が現れないことがあるため (Dixon 2010: 180)、不自然な例外とは言えないが、本環境を網羅できない。

名詞節では、述語に項の帰属が表される。帰属とは、例えば職業や持ち主、様態、属性などである。

述語には、名詞句の他に指示様態詞が現れることがある。名詞述語に名詞句が現れる例を (4-18) に、指示様態詞が現れる例を (4-19) に挙げる。項を角括弧、名詞述語を太字で示す。例中の角括弧内に括弧で示した名詞句は、筆者が補ったものであり、実際の発話には現れていない⁵。

(4-18) 述語主要部に名詞句が現れる例

a. 職業

⁵ 名詞節の項は、実際の発話であまり現れない。

[baa] sinsin.

1st.SG 先生

S 述語

「私は先生です。」

b. 持ち主

[(uri)] nasama=nu sinu ja-ta-n.

あれ 人名=GEN 着物 COP-PST-IND1

S 述語

「あれはナサマの着物だった。」

c. 属性

[(uri)] ho+munu ar-an-u.

あれ 食べ + 物 COP-NEG-NPST

S 述語

「それは食べ物ではない。」

d. 属性

[(uri)] pīsīmari ja-ba=n...

あれ 昼 COP-条件 2=も

S 述語

「(それが) 昼間であっても…」

(4-19) 述語主要部に指示様態詞が現れる例

a. 様態

[(baa)] ee ja-ta-n.

1st.SG そう COP-PST-IND1

S 述語

「私はそうでした。」

b. 様態

[(uri)] ee ja-ta kajaa.

それ そう COP-PST 自問

S 述語

「(それは) そうだったかね。」

名詞述語に敬意を表す補助動詞を用いたい場合、名詞述語主要部を動詞述語の本動詞に埋め込み、補助動詞構文 (9.2) を形成する場合もある。その場合、コピュラ動詞は必須である。例えば、波照間方言で最もよく用いられる名詞節は相槌の疑問文 ee jarj oo naa 「そうなんですか」がある (10.1.1)。当該表現を分析したものを (4-20) に挙げる。コピュラ動詞 jari と補助動詞 oo が組み合わさって、述語末に疑問助詞

naa が用いられる⁶。

- (4-20) [(uri)] ee ja-rj oo naa?
 それ そう COP-CVB 敬意.NPST Q
 S [[述語主要部]本動詞 補助動詞]動詞句]述語
 「(それは) そうなんですか?」

コピュラ動詞は、時制やモダリティ助詞などの担い手として働き、それらを担う必要がない場合、例えば (4-18a) ではコピュラ動詞は現れないと述べた。基本的には名詞節が主節であり、かつ非過去肯定の場合である。しかし、このような環境でも、モダリティ助詞が述語末に現れる場合、コピュラ動詞を必要とすることがある。例えば、推量を表す助詞の中でも、paci はコピュラ動詞を必要とし、saa はコピュラ動詞を必要としない。

- (4-21) a. [urj]=a sinsin ja paci.
 あれ=TOP 先生 COP.NPST 推量 1
 「あれは先生のはず。」
 b. [uri]=ja sinsin saa.
 あれ=TOP 先生 推量 2
 「あれは先生でしょう。」

4.4 文法関係

波照間方言に主語、直接目的語および間接目的語を認定する。

4.4.1 主語

典型的には、必須項のうち 1 番目に位置し、S 項あるいは A 項 (4.2) になれるものを主語と呼ぶ。(4-22) では、助詞も何も後続しない必須項が 2 つ並んでいる。reiko 「玲子」は、必須項の 1 番目に位置し、最も動作主的な項すなわち A 項と認められるため、主語と呼ぶ⁷。

- (4-22) reiko sizuka sor-i k-j a-ta-n.
 人名 人名 連れる-CVB 接近-CVB 継続 1-PST-IND1
 「玲子がシズカを連れて来ていた。」

主語は (1) 尊敬の動詞のターゲットになれる⁸。そして、(2) duu 「自分」と同一指示関係にある、といった特徴を持つ。

⁶ jari は母音の渡り音化規則が適用され、jarj と交替する (2.5.3)。

⁷ 一方で、すべての節に必須項が⁸ (焦点標識は主題標識などの標識なしで) 用いられることは少ない。従って、プロトタイプのアプローチを認めつつも、様々な標識が後続することを念頭に、形式、意味役割、統語的役割など特徴の束を認め、最も当てはまる項を主語と認定する方法 (下地 2018) も考えられる。目的語類の認定も同様に、今後の課題とする。

⁸ 角田 (1991) では、尊敬の動詞のターゲットを、先行詞と呼んでいる。この他に、尊敬の動詞のターゲットを動詞との一致の一種とする見方もある (柴谷他 1982: 262)。

まず (1) に関して述べる。主語は、当該名詞句の指示対象が、話し手より目上であることが、尊敬動詞によって標示される⁹。

(4-23) は、70 代の発話者が、90 代の男性（おじいさん）と、60 代の男性（リュウセイ）について話す場合の例文である¹⁰。90 代の男性が主語の場合には、尊敬の動詞¹¹が用いられる (4-23a)。60 代の男性が主語の場合には、動作の対象が 90 代の男性であっても尊敬の動詞が用いられない (4-23b)。

- (4-23) a. **kaccee=nu buja** <rjuusee> sor-i or-j a-ta-n.
 屋号=GEN おじいさん 人名 連れる-CVB 接近 尊敬-CVB 継続 1-PST-IND1
 「勝連のおじいさんが、リュウセイを連れていらっしやっていた。」
- b. <rjuusee> **kaccee=nu buja** sor-i k-j a-ta-n.
 人名 屋号=GEN おじいさん 連れる-CVB 接近-CVB 継続 1-PST-IND1
 「リュウセイが、勝連のおじいさんを連れて来ていた。」

(2) について述べる。主語は、duu「自分」と同一指示関係になれる働きを持つ。(4-24) の例文では、duu「自分」は必ず主語であるマコトを指す。

- (4-24) <makoto> **amaa du=nu** kuruma naga nubus-i ng-uta-n.
 人名 姉 自分=GEN 車 LOC3 乗せる-CVB 乖離-PST-IND1
 「マコトはアマーを自分（＝マコト）の車に乗せて行った。」¹²

ただし、duu=nu kuruma naga「自分の車に」という名詞句は、主語の後に来るのが自然なようである。

- (4-25) <makoto> **du=nu** kuruma naga amaa nubus-i ng-uta-n.
 人名 自分=GEN 車 LOC3 姉 乗せる-CVB 乖離-PST-IND1
 「マコトは自分（＝マコト）の車にアマーを乗せて行った。」

なお、主語は意味役割や形式、情報構造では説明できない。まず、主語（S/A 項）は (4-24) のように動作主体であることもあれば、(4-26) に示すように、被動者である場合もあるため、意味役割では説明できない。

- (4-26) **baa** ija=gara tatag-ar-a-ta-n.
 1st.SG 父親=ABL 叩く-受身-DUR-PST-IND1
 「私は父親に叩かれた。」

次に、直格項を標示する形式が波照間方言にはないため、格形式では説明できない。最後に、主語は新情報にも旧情報にもなるため、情報構造では説明できない。次の例で、(4-27a) の uwa「豚」は新情報、(4-27b) の uwa「豚」は旧情報である。例 2-1)

⁹ 尊敬の動詞はこれまでに o(r)「いらっしやる」、osjoori「召し上がる」、nge(r)「召し上がる」が見つかっている。しかしながら、話者自身の高齢化に伴い目上の方が減り、日常会話に比べ、尊敬動詞を使用する機会は急速に失われつつある。

¹⁰ 90 代の男性と 60 代の男性の関係は、親子である。

¹¹ (4-23) から (4-25) に挙げる例文の述語は、補助動詞構文 (9.2) である。

¹² この場合の ama「姉」は、誰かの姉を指すわけではなく、通称名として用いられているので、アマーと訳した。

- 与格助詞 1=ga (8.7.2) あるいは与格助詞 2=mu (8.7.2) で標示され、かつ受領者を意味する項を間接目的語と呼ぶ。(4-31) に間接目的語の例を挙げる。

- (4-31) a. **ban=ga** karah-e.
 1ST.SG=DAT1 貸す-IMP
 「私に貸せ。」
- b. **pana=ga** mizi hir-u-n.
 花=DAT 水 あげる-NPST-IND1
 「花に水をやる。」
- c. **sizuka=mu** haa raa.
 人名=DAT2 あげる.INT DSC1
 「シズカにあげようね。」

4.5 格

本節では主に直格項を扱う。まず波照間方言の格標示体系を概観し、次に直格項がどのように標示されるかについて、類型的な特徴（アラインメント）と、その歴史的変遷について述べる。最後に談話内の直格項の表出環境について述べる。斜格項に付加しうる格助詞の個々の形式と機能については、8.7 で別に述べる。

4.5.1 格標示体系

格関係とは、名詞句とそれを支配する主要部要素（述語あるいは主要部名詞句）の関係であると定義する。格関係の1つ目は、項と述語の関係である。項のうち、直格項の格関係は語順で示され、斜格項の格関係は格標識で示される。直格項として機能する名詞句は音形を持つ形式で標示されず、そのまま用いられる。(4-28)を(4-32a)として再掲し、項の語順を入れ替えた例を(4-32b)に挙げる。(4-32a)では **tun** 「妻」がA、**butu** 「夫」はPである。一方、(4-32b)では名詞句 **butu** 「夫」がA、**tun** 「妻」がPである。

- (4-32) a. **tun butu** tum-a-n.
 妻 夫 探す-DUR.NPST-IND1
 「妻は夫を探している。」
- b. **butu tun** tum-a-n.
 夫 妻 探す-DUR.NPST-IND1
 「夫は妻を探している。」

斜格項は音形を持つ格標識によって主要部との関係が示される。例えば(4-33)に例を挙げる。名詞句 **hii** 「家」は位格標識=**na** により、述語に対して位置という意味関係を表している。

- (4-33) **hi=na** boo.
 家=LOC1 いる.NPST.IND2
 「家にいるよ。」

格関係の1つ目に述べた項と述語の関係に対し、格関係の2つ目は名詞句と主要部名詞（句）の関係である。被主要部名詞句が属格標識=nuで示される。(4-34)の名詞句 amaa「姉」は属格標識=nuにより主要部名詞 kui「声」に対して所有者という意味関係を表している。

- (4-34) ama=nu kui
 姉=GEN 声
 「姉さんの声」

表 4.1 に波照間方言の格標識を一覧にした。本論文では、格標識を格助詞として扱う。直格は基本的に音形を持たない。ただし、稀に S が=nu で標示されることがある。一部の存現構文¹³に保持している主格形式である。ほとんど用いられないため、括弧で記した。(4-35)に例を挙げる。詳細については 4.5.2 を参照されたい。

- (4-35) <okjakusan>=nu o=cjara...
 お客さん=NOM いらっしゃる.NPST=条件 3
 「お客さんがいらっしゃったら…」

斜格項に後続する格助詞には、奪格、与格 1、与格 2、具格、位格 1、位格 2、位格 3、向格、属格、共格がある。

表 4.1: 格標識の一覧

名称	形式	統語的意味役割・意味役割
直格	∅	S/A/P/名詞述語、時点、数量
(主格)	=nu	S
奪格	=(ga)ra	受身文の動作主、出所、比較対象
与格 1	=ga	使役文の被使役者、到達点
与格 2	=mu	到達点
具格	=si	道具、条件
位格 1	=na	位置
位格 2	nagi~nagj~=gi	位置
位格 3	naga	ターゲット
向格	=(ga)ci	目的地
属格	=n(u)	所有者
共格	=tu	並列、随伴

斜格項を標示する個々の格助詞の形式と機能については、8.7 を参照されたい。

¹³ 述語が存在を表す動詞や移動を表す動詞で占められる場合の文を指す。

4.5.2 格標示のアラインメント

格標示のアラインメント (Alignment) とは、S/A/P (4.1) がどのような形式で標示されるかグループ化したものである。アラインメントには、論理的には以下のものが考えられる (Comrie 1978) ¹⁴。

- S/A と P で、標示の仕方が異なるタイプ (主格対格型)
- S/P と A で、標示の仕方が異なるタイプ (能格絶対格型)
- S と A と P で、それぞれ標示の仕方が異なるタイプ (三立型)
- S/A/P の標示の仕方が同じタイプ (中立型)
- S と A/P で、標示の仕方が異なるタイプ (他動詞文中和型)

The world atlas of language structures online (WALS) によると、言語類型論的に中立型が最もよく観察され (98 言語)、主格対格型 (52 言語)、能格絶対格型 (32 言語) と続く。三立型 (4 言語)、他動詞文中和型 (4 言語) は稀である¹⁵。波照間方言はそのうちの、中立型のアラインメントを持つ。S/A/P の標示の仕方が同じといっても、波照間方言の場合は、特別な形式があるわけでも音形を持つ格標識を付加するわけでもない。名詞句末に、単に名詞そのものが現れるのみである。

(4-36) **baa** nuf-u-n.
1ST.SG 寝る-NPST-IND1
S 述語
「私は寝る。」

(4-37) **baa** sumuci jum-u-n.
1ST.SG 本 読む-NPST-IND1
A P 述語
「私は本を読む。」

4.5.2.1 琉球諸語の中での位置づけ

琉球諸語全体を見渡すと、主格対格型の言語、すなわち S/A と P で、標示の仕方が異なるアラインメントが圧倒的に多く観察される。その中で、波照間方言のアラインメントは、報告されている中では唯一の中立型である¹⁶。周辺に主格対格型が多く観察される中では、音形を持った形式が省略されているだけの可能性が考えられる。しかし波照間方言の場合、そのようには考えられない。根拠は次の 2 つである。

- 何かの形式の省略とは考えにくい。
- しばしば S/A 項に後続する焦点助詞や主題助詞といった別の形式を主格だと疑っても主格だとは考えにくい。

¹⁴ 論理的に考えられるグループ化の他、S が、時によって A や P と同じように標示されうる活格不活格型がある

¹⁵ The world atlas of language structures online (<https://wals.info/feature/98A#2/25.5/148.9>) による。

¹⁶ 波照間方言は、中立型と言う通言語的には全く珍しくないアラインメントを持つが、主格対格型が中心の琉球諸語内部では珍しい。一方で、主格対格型の中でも特に有標主格型と呼ばれるアラインメントは通言語的に珍しいが、琉球諸語内 (特に沖縄語) では珍しくないという状況がある。有標主格型は、WALS で (琉球諸語を除き) 6 言語とされている。

まず、波照間方言では、音形をもった別形式の省略とは考えにくい。なぜなら S/A/P および時あるいは数量を表す名詞句以外の斜格項には、基本的にはすべて格助詞が付加しているからである¹⁷。例えば、日本語東京方言の「今日学校（に）行ってね、…」という発話では、与格標識「に」は省略することも可能である。しかし波照間方言では、このような場合必ず向格助詞が付加し、省略することはできない。言い換えると、音形を持つ標識が付加しないことが直格項を表す標識であると言える¹⁸。

- (4-38) kjuu gaku=**ci** ng-i joo,
 今日 学校=ALL 行く-CVB DSC2
 「今日学校に行ってね、…」

次に、S/A 項にしばしば後続しうる助詞を主格標識や対格標識ではないかと疑っても、その可能性は低い。候補となる代表的な助詞には、焦点助詞=(n)du (12.1) および主題助詞=ja (12.2) がある。(4-39) に焦点助詞が S 項に後続する例を挙げる。

- (4-39) supusin=**du** jam-u-n.
 膝=FOC 痛む-NPST-IND1
 「膝が痛い。」

焦点助詞と主題助詞は、S/A 項にしばしば直接後続する。しかし、これらの助詞は以下の表 4.2 に示すとおり、分布範囲が広い。S/A 項の他、P 項、あるいは斜格項にも後続し、焦点助詞にいたっては、述語にまで後続し得る。従って、これらの助詞が直格項専用の形式（格標識）とは考えられない。(4-40) に焦点助詞が P 項に後続する例を挙げる。

- (4-40) pïmiza=ja **fuca=ndu** hoo.
 ヤギ=TOP 草=FOC 食べる.NPST.IND2
 「ヤギは草を食べる。」

表 4.2: 焦点・主題助詞の分布

	直格項	斜格項	動詞述語
焦点助詞	○	○	○
主題助詞	○	○	-

4.5.2.2 中立型に推移した歴史的背景

一方で、周囲を主格対格型の格組織を持つ方言で囲まれている中、波照間方言が中立型の格組織を持つようになったのは、焦点助詞=**ndu** に起因すると考えられる。**=ndu** は、もともと主格助詞 **nu** と焦点助

¹⁷ 言いよどみや言い間違いは含まない。

¹⁸ 例外が 2 つある。1 つは時間あるいは数量を表す名詞句である。通常、副詞的に機能する時間や数量を表す名詞句には、音形を持つ標識が付加しない。例えば (4-38) の kjuu 「今日」は名詞句ではあるが、格標識は後続しない。p. 103 の (4-15) を参照されたい。もう 1 つは場所を表す指示名詞 **na** 「そこ」である。例えば、**naa a-n** (そこ ある-IND) 「そこにある。」である。位格助詞 1 の出自と考えられる。詳しくは 8.7.5 を参照されたい。

詞 **du** という形式が結合した形であると考えられている (平山 1988)。八重山語の諸方言を見ても、主格標識が **nu**、焦点標識が **du** という形式であることが多い。従って、波照間方言もかつては主格対格型のアラインメントを持ち、主格標識が **nu**、焦点標識が **du** であった可能性が大きい。その後、波照間方言ではこの 2 つの形式の融合が進み、**=ndu** という 1 つの形式に変化したと考えられる。さらに **=ndu** が焦点標識と再解釈された結果、主格標識 **nu** が単独では用いられなくなり、中立型となったと考えるのが妥当であろう。つまり、主格標識 **nu** と焦点標識 **du** の文法化の段階として、以下の (1) から (3) の段階が想定できる。

- (1) **nu** と **du** がそれぞれ主格標識と焦点標識として機能し、主格標識が表出する多くの環境では、焦点標識を伴う **nudu** という形式で表出する段階
- (2) **nudu** に音韻変化が起こり **=ndu** という形式に変化する段階
- (3) **=ndu** が焦点標識として再解釈され、**=ndu** の適用環境が広がる段階

上記 3 つの段階は、歴史的に同じ祖方言から分かれたと言える八重山語白保方言 (1.3.2) を観察した結果からも支持できる。白保方言では現在、主格標識にのみ **ndu** という形式が用いられている (中川奈津子氏, 2017 p.c.)。これはまさに (2) の段階である。

周辺方言の推測から以外にも、内的再建によって **=nu** が再建できる。述語に **a(r)** 「ある」、**o(r)** 「いらっしゃる」という存在を意味する動詞が現れる節 (presentative construction / 存現構文) で、**S** が **=nu** で標示されることがある (4-41)。

(4-41) **S** が **=nu** で標示される例

- a. [jama]=na [maagi+ki]=**nu** a-tar-oo.
 山=LOC1 大きい + 木=NOM ある-PST-IND2
 斜格 S
 「山に大きな木がありました。」
- b. [<okjakusan>]=**nu** o=cjara..
 お客さん=NOM いらっしゃる.NPST=条件 3
 S 述語
 「お客さんがいらっしゃったら…」
- c. [midumu=ndu nar-u munu bidumu=ndu nar-an te kutu]=**nu**
 女=FOC なる-NPST もの 男=FOC なる-NEG.NPST 引用 2 こと=NOM
 S
 a baa?
 ある.NPST Q
 述語
 「女ができるものを男ができない、ということがあるか? (いや、ない)」

(4-41) の **S** を標示する **=nu** は、主格であると考えられる。ただし、存在や移動を表す動詞の **S** がすべて **=nu** で現れるわけではない¹⁹。

¹⁹ 他動詞文の **A** が **=nu** で標示されると分析できる例は、1 例見つかった。mee=gara miduntama=**nu** <zidensja>...

存現構文でのみ、Sの一部が=nuで標示されることについて、焦点助詞の意味機能の広がり方を考慮すると、以下(a)から(c)の段階を仮説として挙げられる。琉球諸語における焦点助詞の意味機能は、対比の機能から、他の機能に広がったと考える立場がある(下地 2015)。

- (a) (1) から (3) に挙げた文法化の段階 (1) では、対比の機能でのみ主格標識 nu と焦点標識 du の組み合わせが用いられていた。
- (b) (3) の段階で、焦点標識が対比以外の機能を獲得するまで、存現構文では、相変わらず主格標識 nu のみで用いられていた。
- (c) その後、焦点標識が対比以外の機能を獲得し、多くの環境で=ndu が用いられるようになったが、それまで主格標識 nu のみで用いられていた存在を表す文(存現文)の一部の S で、その痕跡が残っている。

このことは、筆者が話者と書き起こしを行う際、話者に談話内で=nuを用いた例文、例えば(4-41a)を聞き返すと、十中八九(4-42)のように=nuを=nduと言い換えることから、支持できる。(4-42)は、自然談話で得られた例文(4-41)を個別に聞き直したものである。焦点助詞=nduが対比以外の機能を獲得した現在(すなわち(3)の段階)では、自然談話内で=nuを用いていた箇所を、改めて聞かれると=nduに言い換えるという現象は至極自然である。

(4-42) jama=na maagi+ki=ndu a-tar-oo.

山=LOC1 大きい + 木=GEN ある-PST-IND2

「山に大きな木がありました。」

以上のとおり、波照間方言は歴史的に主格対格型のアラインメントであったが、主格標識と焦点標識の融合により、中立型のアラインメントへ変化したと考えられる。従って、現在では中立型が圧倒的優位であるが、任意の主格標識が散発的に現れうる。

4.5.3 談話内における直格項の表出環境

波照間方言の談話を観察すると、多くの項は表出しない。実際に、直格項のうち S/A 項はほぼ表出しない。表出する環境は(1)焦点が当たっている場合、(2)指示転換が起こる場合、そして(3)その他に分類できる。本節では2つの談話を観察しながら、直格項が表出する環境について述べる。

4.5.3.1 談話内における直格項の表出の有無とその形式

次の談話を用い、直格項(S/A/P)が表出するかしないか、表出するとしたらどのような形式であるかをまとめた。

nubur-i kuta sika... (前=ABL 女の子=NOM 自転車 乗る-CVB 接近.PST 逆接)「前から女の子が、自転車(に)乗ってきたけど…」本例は、接近するという点で、Aではなく、Sとも考えられる。さらに、<zidensja>「自転車」の後に不明瞭な個所があり、即座にAとは判断しかねる。この他の例文において、Aが=nuで標示される例がないかさらに調査する必要がある。=nuがSを標示するという点で、南琉球与那国語の古いデータ(Shimoji 2014)にも、同様の傾向、すなわち存現構文でSに=nuが後続するという傾向がみられる。ただし、与那国語の当時のアラインメントは活格不活格型(注14)であり、A/Sの標識として=ngaと=nuがあると考えられているため、状況は異なる。

- 3分半程度の自由会話、合計 72 節
- 3分半程度の昔話（独話）、合計 47 節

まず、S 項についての集計結果を表 4.3 に挙げる。表中の小計には、助詞の有無、種類によらず項が表出する場合の合計を記載した。∅ には、形式として表出しない場合の数字を挙げた。表出する項の合計数と表出しない項の数を記したセルを灰色で示す。「が」は、日本語の主格助詞である。それ以外の助詞について、焦点助詞は 12.1、主題助詞は 12.2、主格助詞については 4.5.2.2、累加助詞については 12.3.1、条件助詞については 11.3.2.1 をそれぞれ参照されたい。自由会話では、計 70 節のうち自動詞節は 54 節あり、表出した S 項は 22 個、表出しない S 項は 32 個であった。およそ半分の S 項が表出しない。昔話に関しても、同様の傾向がみられた。47 節のうち自動詞節は 28 節あり、表出した S 項と表出しない S 項はどちらも同じ 14 個であった²⁰。なお、実際に分析に使用したテキストは巻末の付録 B に収めた。

表 4.3: S 項の表出の頻度と形式

	自由会話	昔話
助詞なし	5	2
焦点助詞	6	7
主題助詞	4	5
主格助詞	1	0
累加助詞	3	0
条件助詞	1	0
「が」	2	0
小計	22	14
∅	32	14
自動詞節合計	54	28

表 4.4 に、自由会話の A/P 項についての集計結果を挙げる。表中の小計には、助詞の有無、種類によらず項が表出する場合の合計を記載した。縦軸が A 項に関する集計、横軸が P 項に関する集計である。∅ には、形式として表出しない場合の数字を挙げた。「を」は、日本語の対格助詞である。

自由会話の他動詞節は 16 節あった。灰色で示すセルは、A 項と P 項について、表出する項の合計数と表出しない項の数が記されている。すなわち、いずれの項も表出する節は 7 つ、A 項が表出せず、P 項のみ表出する節も 7 つ、いずれの項も表出しない節は 2 つ、A 項のみが表出し、P 項が表出しない節は 0 である。母数が少ないためはっきりとは言えないが、多くの P 項が表出することが見て取れる。

²⁰ 自由会話も 3 分半であるが、昔話と自由会話の話のスピードは全く異なる。そのため、合計の節数にも違いが出ている。

表 4.4: A/P 項の表出の頻度と形式（自由会話）

	P なし	P 焦点	P 主題	P 並列	P 「を」	小計	P∅
A 助詞なし	2	0	0	1	0	3	0
A 焦点助詞	0	0	0	0	0	0	0
A 主題助詞	2	0	0	1	0	3	0
A 主格助詞	0	0	0	0	0	0	0
A 累加助詞	0	0	0	0	0	0	0
A 条件助詞	1	0	0	0	0	1	0
小計	5	0	0	2	0	7	0
A∅	4	0	1	0	2	7	2
他動詞節合計							16

表 4.5 に、昔話の A/P 項についての集計結果を挙げる。昔話の他動詞節は 19 節あった。直前に挙げた表 4.4 と、表の見方は同じである。従って、いずれの項も表出する節は 2 つ、A 項が表出せず、P 項のみ表出する節は 10、いずれの項も表出しない節は 6 つ、A 項のみが表出し、P 項が表出しない節は 1 つである²¹。多くの P 項が表出する傾向は、先に見た自由会話からだけではなく、昔話でも見られた。

表 4.5: A/P 項の表出の頻度と形式（昔話）

	P なし	P 焦点	P 主題	P 累加	P 「を」	小計	P∅
A 助詞なし	0	0	0	0	0	0	0
A 焦点助詞	0	0	0	0	0	0	0
A 主題助詞	0	0	0	0	2	2	1
A 主格助詞	0	0	0	0	0	0	0
A 累加助詞	0	0	0	0	0	0	0
A 接続助詞	0	0	0	0	0	0	0
小計	0	0	0	0	2	2	1
A∅	6	1	0	0	3	10	6
他動詞節合計							19

自由会話と昔話で項が表出している環境を観察すると、多くは指示対象が予測不可能な場面で表出していると分析できる。指示対象が予測不可能な場面とは、(1) 指示対象が新しい情報である場合や、際立た

²¹ A 項のみが表出し、P 項が表出しない節の例は、続く節で P 項が表出する形で言い換えられている。従って、A 項が表出し P 項が表出しない例は、基本的には現れないと言える。付録 B.2 の (B2-15) および (B2-16) を参照のこと。

せたい情報である場合と、(2) 予測不可能な指示転換がある場合である。この2つの環境に加え、項と動詞の結びつきが強い場合に項が表出する環境を「その他」として、それぞれ記述する。なお、日本語からの借用と考えられる「が」と「を」を用いて表出する例に関しては分析対象から外す。

4.5.3.2 焦点が当たっている場合

指示対象が新しい情報である場合、あるいはある要素を他より際立たせる場合に項が表出する傾向がある。新情報であるという点や際立たせるという点は、焦点が当たっている場合と言い換えることができる(12.1)。前者の場合、表出する項は焦点助詞と組み合わせさせて表出する場合と、何の助詞も後続せず、項が単独で表出する場合がある。後者は助詞と組み合わせさせて表出する例のみ見つかった。以下に挙げる例では、表出している項を角括弧で示す。

■新しい情報である場合

(4-43) から (4-56) に、表出する項が新しい情報である場合の例を挙げる。S 項と P 項の場合が見つかり、S 項の場合、述語には、動詞 a(r)「ある」、o(r)「いらっしゃる」が見つかった²²。

(4-43) 項と焦点助詞で用いられる場合

- a. kuturami [jagumura... tenu mura]=ndu a-ta cju.
昔 ヤグムラ 引用 2 村=FOC ある-PST HS1
「昔、ヤグムラという村があったそうだ。」
- b. kjuu goobi [<kanzja>]=ndu o-ta te joo.
今日 沢山 患者=FOC いらっしゃる-PST DIR.EV1 DSC2
「今日、沢山患者がいらっしゃったってばよ。」

(4-44) 項単独で用いられる場合：S 項

- a. [<socugjoosiki>=ta hak-ar-a munu] a-tar-a...
卒業式=引用 1 書く-受身-CVB. 継続 1.NPST もの ある-PST-条件 1
「卒業式と書かれているものがあったから…」
- b. [<fukei> te munu] <mada> or-an kajaa=ta mu-i ci...
父兄 引用 2 もの まだ いらっしゃる-NEG.NPST 自問=引用 1 思う-CVB 付帯 2
「父兄というものもまだいらっしゃらないかなと思いながら…」
- c. e sita=ru kjuu na maa goobi ma [<kanzjasa>] o-ta
そう=継起=FOC 今日 そこ INTJ 沢山 INTJ 患者さん いらっしゃる-PST=DIR.EV1 DSC2
te joo.

「そしたら今日、そこ（診療所）にまあ、沢山、まあ、患者さんがいらっしゃったってばよ。」

(4-45) 項単独で用いられる場合：P 項

²² この他の存在を表す動詞には、に bu(r)「いる」、nen「ない」がある。

a. [sĩkur-u munu] sĩkur-iba=n sĩkur-iba=n...

作る-NPST もの 作る-条件 2=も 作る-条件 2=も

「作物を作っても作っても…（難儀していた）」

b. ...tur-u-n=ta [funi] sor-i ci k-j a-ta cju.

取る-NPST-IND1=引用 1 船 引っ張る-CVB 付帯 2 接近-CVB 継続 1-PST HS1

「（作物を）取りに船を引っ張ってきたそうだ。」

■際立たせたい情報である場合

(4-46) から (4-49) に、それぞれ焦点助詞、主題助詞、累加助詞、排他助詞と組み合わせさせて表出する直格項の例を挙げる。焦点助詞や主題助詞と組み合わせさせて項が表出する場合は対比の用法として (4-46a, b)、累加助詞と組み合わせさせて表出する場合は皆無の用法として解釈できる (4-46c)。

(4-46) funtu unu buja joo [du]=ndu sinsin saa.

本当 あの おじいさん DSC2 自分=FOC 先生 推量 2

「本当、あのおじいさんは（お医者さんがいるのに）自分が先生（気取り）だよ。」

(4-47) kjuu [<simuzureno> pĩtu]=a joo...goobi o-ta-n.

今日 すむずれの 人=TOP DSC2 沢山 いらっしゃったる-PST-IND1

「今日、（あなたはいなかったけれど）すむずれの人はね、沢山いらっしゃった。」

(4-48) ee sika te nu=n [<kuruma>]=n nen-u.

そう 逆接 引用 2 何=も 車=も ない-NPST

「そうだけどたって、何も車もない。」

(4-49) toonu sĩa=ci=ru [<osameru> kutu] gaasi=ru si...

大和の 島=ALL=FOC 納める こと だけ する.CVB

「大和の島に収めることだけをして…（働いていた）」

4.5.3.3 予測不可能な指示転換が起こる場合

談話中、予測不可能な指示転換が起こる場合には、直格項が表出する。指示転換とは、先行する節とこれに続く節で S/A/P 項の指示対象が交替することである。指示転換は S/A/P 項すべての場合に見ついている。例文中の角括弧で S/A/P 項を示す。表出しない S/A/P 項を ∅ で示す。

(4-50) は、先行する節で S 項が主題助詞と共に現れ、続く節の S 項が助詞なしで単独で現れる。先行する節の S 項の指示対象は「すむずれの人²³」、続く節の S 項の指示対象は baa「私」であり、指示転換が起こっている。(4-51) は、先行する節で S 項が焦点助詞と共に現れ、続く節の A 項が助詞なしで単独で現れる。

²³ すむずれとは、波照間島のデイサービスセンターの名前である。

- (4-50) a. kjuu [<simuzureno> pītu]=a joo... goobi o-ta-n.
 今日 すむずれの 人=TOP DSC2 沢山 いらっしゃる-PST-IND1
 S
 「今日すむずれの人はや…沢山いらっしゃった。」
- b. [baa] mata sitomuci joo...
 1st.SG また 朝 DSC2
 S
 「私はまた朝よ…（診療所に行こうとしたら）」
- (4-51) a. kjuu goobi [<kanzja>]=ndu o-ta te joo.
 今日 沢山 患者=FOC いらっしゃった-PST DIR.EV1 DSC2
 S
 「今日、沢山患者がいらっしゃってたってばよ。」
- b. ee sika [isjan] joo... [sunu]=n <zjunbi> si k-j a-n sika...
 そう 逆接 医者 DSC2 着物=も 準備 する.CVB 接近-CVB 継続 1.NPST-IND1 逆接
 A P
 「だけど、医者がよ、スーツも準備してきたけど…（自分には行けないはずと言っていた）」

(4-52) と (4-53) に、P 項が指示転換の対象となる例を挙げる。(4-52a) における A 項の指示対象は「村の人」、P 項は「納めること」である。(4-52b) の節における A 項の指示対象は引き続き「村の人」、P 項は「難儀」である。P 項において指示転換が起こり、(4-52b) の P 項「難儀」が助詞なしで単独で現れる。指示転換が起こらず、S/A/P 項が現れない箇所を ∅ で示す。

- (4-52) a. [mura=nu pītu]=ja... toonu sīma=ci=ru [<osameru> kutu] gaasi=ru si,
 村=GEN 人=TOP 大和の 島=ALL=FOC 納める こと だけ=FOC する.CVB
 A P
 「村の人は、大和の島に納めることだけをして、」
- b. [∅] deena [<nangi>] si ci=ru...
 たいそう 難儀 する.CVB 付帯 2=FOC
 A P
 「たいそう難儀しながら…（働いていたそうだ。）」
- (4-53) a. [sīma=nu pītu]=ja kjuu=nu juu=ja [kunu pītu-ima]<o>,
 島=GEN 人=TOP 今日=GEN 夜=TOP この 人-PL を
 A P
 「島の人は、今日の夜、この人達を、」
- b. [∅] [saki] num-ah-e...
 酒 飲む-使役-CVB
 A P
 「酒を飲ませて…（酔わせて眠らせる。）」

指示転換がなく、項が表出しない環境の代表的な例を (4-54) に挙げる。中止節や付帯状況を表す副詞節では、指示転換がない場合、項は表出しない²⁴。まず (4-54a) は中止節である。A 項として kunu mimdumu「この女」が、P 項として naabi「鍋」が現れる。続く (4-54b) は付帯状況を表す副詞節である。先行する節の A/P 項の指示対象を引き継ぐ (A → A、P → P)。(4-54c) でも A 項の指示対象を引き継ぎ、S 項として現れる (A → S)。

- (4-54) a. [kunu midumu]=ja haa=nu takadee nagi [naabi<o>] gangan=ta sik-i,
 この 女=TOP あそこ=GEN 高台 LOC2 鍋を ガンガン=引用 1 置く -CVB
 A P
 「この女はあちらの高台で鍋をガンガンと響かせ、」
- b. [Ø] [Ø] gasaragasara=ta hak-i ci
 ガシャガシャ=引用 1 掻く -CVB 付帯 2
 A P
 「(女は鍋を) ガシャガシャと掻きながら」
- c. [Ø] naagi ci ma, eg-uta cju.
 泣く .CVB 付帯 2 INTJ する -PST HS1
 S
 「(女は) 泣きながら、まあ、そうしていたそうだ。」

S 項が、直後の節において P 項と解釈される場合であっても、予測可能な場合、指示対象は表出しない。(4-55) に例を挙げる。先行する節は、理由助詞 1 に導かれる副詞節 (11.3.1.1) である。(4-55a) で S 項として bassa munu「忘れ物」が現れる。この指示対象は、続く (4-55b) の P 項の指示対象と同じである。

- (4-55) a. ...[bassa munu]=ndu aa gara
 忘れる .CVB. 継続 1.NPST もの=FOC ある .NPST 理由 1
 S
 「忘れ物があるから、」
- b. [Ø] [Ø] tur-i koohee...
 取る -CVB 接近 .INT
 A P
 「(自分がそれを) 取ってこよう、(と言ったそうだ。)」

4.5.3.4 その他：項と動詞の結びつきが強い場合

これまでに述べた 2 つの環境以外に、項が表出する環境として、項と述語の結びつきが強い組み合わせだと分析できるものがある。特に P 項で多い。

述語との結びつきが強いとは、(1) 頻繁に用いられる、あるいは (2) 項に対して述語動詞が限定されるという意味である。例えば、対象とする談話内から見つかったもので、前者と考えられるものには、(4-53)

²⁴ 指示転換があり、かつ項が表出しない環境の代表的なものは、述語動詞の意味によるもの、接続助詞の意味機能によるものである。

に挙げた *saki num* 「酒を飲む」や、*fuciri num* 「薬を飲む」、*fuciri ndi* 「薬を出す」がある。後者と考えられるものには、(4-52) に挙げた *nangi s* 「難儀する」や、*panasi s* 「話をする」、*denwa tur* 「電話を取る」という組み合わせがある²⁵。P 項が助詞を伴わず単独で現れる 15 例の内、およそ半分の 8 例がこれに当てはまる。

- (4-56) *ee sita muruzanari unu <toono> sima=nu pitu=tu [saki] num-i...*
 そう 継起 皆で あの 大和の 島=GEN 人=COM 酒 飲む-CVB
 「そして、みんなでその大和の島の人と酒を飲んで…」

- (4-57) *ha=ja joo kjuu... kunu [fuciri] num-an=cja joo...*
 REFL=TOP DSC2 今日 この 薬 飲む-NEG.NPST=条件 3 DSC2
 「自分はね、今日、この薬を飲まないとね… (死ぬ、と言った)」

²⁵ 対象とする談話からは P 項の例しか見つかっていないが、S 項もありうる。他の談話からのものであれば、例えば、S 項と動詞で *amasikuru jam* 「頭が痛い」、*bata nci* 「お腹がいっぱい」という組み合わせを動詞との結びつきが強い項と考える。

第 5 章

名詞類と名詞形態論

波照間方言の名詞類は、意味機能によって代名詞、語彙名詞、数詞の 3 つに分類できる。代名詞はさらに人称代名詞、再帰代名詞、指示代名詞、疑問代名詞に、語彙名詞は一般名詞と固有名詞に下位分類する。

- 代名詞
 - 人称代名詞
 - 再帰代名詞
 - 指示代名詞
 - 疑問代名詞
- 語彙名詞
 - 一般名詞
 - 固有名詞
- 数詞

本章ではまず上記に挙げた 3 つの名詞類について 5.1 から 5.3 で述べ、次に 5.4 で名詞の形態操作として観察される複合と接辞について述べる。

5.1 代名詞

代名詞とは、直示的な語を指す¹。特に会話時の話し手および聞き手、そして話し手でも聞き手でもない第三者を示す代名詞を人称代名詞（5.1.1）と呼ぶ。文脈の中で再帰的に用いられる代名詞を再帰代名詞（5.1.2）と呼ぶ。それ以外の特定の事物を指し示す代名詞を指示代名詞（5.1.3）と呼ぶ。特定のものではなく不定の事物に用いられる代名詞を疑問代名詞（5.1.4）と呼ぶ。

5.1.1 人称代名詞

波照間方言は、1 人称、2 人称、3 人称を区別する人称代名詞の体系を持つ。波照間方言には、「これ・あれ」といった語（指示名詞）とは別に、3 人称の形式が存在する。従って Bhat (2004: 134) による分類

¹ 直示的な語には、代名詞の他に指示様態詞と指示連体詞がある。指示語の体系については 7.1 を参照されたい。

では、3人称言語（three-person language）である。

人称代名詞は数（単数複数）で屈折する。屈折操作は、1人称は母音交替、あるいは母音交替と接辞付加（baa と bee/be-ma）で、2人称および3人称は接辞付加である²。

表 5.1 に一覧を挙げる³。括弧で示す形式は、1930年代の資料でのみ観察される形式で、現代は観察されない。

人称代名詞の複数形は、1人称複数包括形 be を除いて、単数形語根に複数接辞が付加した形式だと分析できる。1人称複数形には聞き手を含むかどうかで包括・除外の対立がある（be, be-ma vs. ba-ima）。複数形には複数形 1 と複数形 2 があり、他の名詞を修飾する際の形態操作が異なる。複数形 2 に用いられる複数接辞については、5.4.2.1 を参照されたい。

表 5.1: 人称代名詞と派生人称代名詞

	そのまま名詞を修飾可能		そのまま名詞を修飾不可能
	単数形	複数形 1	複数形 2
1 人称	baa, banu	包括	bee
		除外	-
			be-ma
			ba-ima(, banu-ma)
2 人称	daa(, danu)	-	da-ima(, danu-ma)
3 人称	usita	-	usita-nda

人称代名詞のうち、単数形と複数形 1 は、他の名詞を修飾する際、直接名詞と複合し、複合語を形成する。複数形 2 は属格=nu を後置し名詞句を構成する⁴。

(5-1) ba+hii, be+sima, daa+gaku, usita+hii

私 + 家 1ST.PL.INC+ 島 2ND.SG+ 学校 3RD.SG+ 家

「私の家、私達の島（波照間島）、あなたの学校、彼の家」

これらについて、単に並置されているという見方もできるが、ここでは複合語と分析する。なぜならアクセント単位が 1 つだからである。例えば (5-1) の ba+hii 「私の家」は、他の一般的な複合語と同様に 1 つのアクセント単位を成す（複合語のアクセントについては、2.3.4 を参照されたい）。分節音が同じでも、アクセントの違いにより、語の並置（による節の形成）なのか、1 つの名詞句（複合語）なのかが区別される。

(5-2) a. 名詞節

² これまで筆者が調査した例文や談話内には、人称代名詞が数で屈折「しない」という証拠は見つからなかった。従って、本論文では人称代名詞が数で屈折するという分析立場を取った。

³ 人称代名詞の分析方法に関して、本論文では人称代名詞を単数・複数として分析しているが、minimal-augmented として分析する方法も考えられる。副詞 (3.2.4) に befutanari 「私たち 2 人で」という単語が見つっている。befuta を双数の人称代名詞（「私たち 2 人」の意）と考えると、minimal-augmented として分析することが可能である。例えば、包括複数 be および双数 befuta を minimal として、be-ma を augmented と分析し、1 人称の baa を minimal として、ba-ima を augmented として分析する方法である。しかし、双数の人称代名詞と考えられる形式 befuta は、現代では befutanari でしか用いられていないようであるため、本論文では単数・複数という分析方法を選択した。

⁴ 再帰代名詞 ha、疑問代名詞 ta 「誰」も直接名詞と複合し複合語を形成する。一方、その他の代名詞や語彙名詞や数詞は、複数形 2 と同様に属格を後置し名詞句を修飾する。

baa(/) sinsin(∩).

1st.SG 先生

「私は先生だ。」

b. 複合語

baa+sinsin(/)

私 + 先生

「私の先生」

上の例でそれぞれ baa「私」は上昇型、sinsin「先生」は平進型のアクセントを持つ。単に並置されているだけであれば、どちらもそれぞれのアクセントが実現し、コピュラ節から成る文として分析できる(5-2a)。一方、baa「私」の上昇型のアクセントが、sinsin「先生」にまで拡張される場合がある(5-2b)。この場合、人称代名詞と後続する名詞は修飾関係、すなわち修飾部と被修飾部という関係を表す。このように、人称代名詞が他の名詞を修飾する際には複合語を形成する。「私のかわいいネコ」のような、人称代名詞の複合語の間に修飾部を挿入するような表現を対面調査したところ、baa+maju abarisja-n. (1st.SG+猫 美しい.NPST-IND1)「私の猫は美しい」という名詞句を用いた返答が返ってきた⁵。「私のかわいいネコ」のような構造の表現は言いにくい可能性はあるが、今後は、単に「私のかわいいネコ」ではなく「私のかわいいネコがどこにいるか知りませんか」というように文章内に埋め込んで詳しく調査する必要がある。

5.1.1.1 1 人称代名詞

1 人称単数の形式には、baa および banu という 2 つの形式がある。これらの 2 つの形式には、地域差や年代差とも言えない、多少の違いがこれまでに見つかっている。先に他の名詞を修飾する際に複合語を形成すると述べた。ba は複合し、他の名詞を修飾する一方で、banu が複合し、他の名詞を修飾する例は見つかっていない(例: banu+hii (私 + 家) とは言わない)。それ以外の 2 つの形式の分布は同じである。1 人称単数形に関して、波照間方言話者数人に単語調査を行ったところ、話者は必ずと言っていいほど baa と banu のどちらの形式も言及する⁶。

(5-3) a. baa ma bebi=ja sik-i mi-ta sika...

1st.SG INTJ 少し=TOP 聞く-CVB 経験-PST 逆接

「私はまあ、少しは聞いたことがあるけれど、…」

b. baa=mu=n bagar-an te jo raa.

1st.SG=DAT2=も 分かる-NEG.NPST DIR.EV1 DSC2 DSC1

「私にもわからないってばよね。」

c. ba=ga en-i or-i.

1st.SG=DAT1 言う-CVB 敬意-IMP

「私に言ってください。」

⁵ なお、通常、猫に abarisjaha「美しい」は使用しないようである。

⁶ 「私は baa というけど、banu という人もいる」(あるいは、その逆)と述べる。

- (5-4) a. **banu**=ja kjuu=nu funi=gara=ru k-j ar-oo.
 1ST.SG=TOP 今日=GEN 船=ABL=FOC 来る-CVB 継続 1-NPST.IND2
 「私は今日の船で着ました。」
- b. **banu**=n pantassahar-i ki...
 1ST.SG=も 忙しい-CVB 理由 2
 「私も忙しいから…」
- c. **banu**=ga en-i or-i.
 1ST.SG=DAT1 言う-CVB 敬意-IMP
 「私に言ってくださいね。」

1 人称複数の形式は **bee** である。**bee** は包括複数形である。包括形の典型的な例として挙げられるのが、波照間島を指す複合語である⁷。

- (5-5) **bee**+sima
 1ST.PL.INC+ 島
 「私達の島 (=波照間島)」

1 人称包括複数形の **bee** は、同じく 1 人称包括複数形の **be-ma** と分布は同じだと考えられるが、多少の違いが観察される。前者は主に複合語を形成する際に用いられ、後者は名詞句の主要部として用いる場合に用いられることが多い (5.4.2.1)。

5.1.1.2 2 人称代名詞

2 人称単数の形式は **daa** である。

- (5-6) a. **daa** mah-en-a-ta naa?
 2ND.SG 美味しい-NEG-?-PST Q
 「あんた、おいしくなかったか？」
- b. **daa** za=ga=ru o baa?
 2ND.SG どこ=DAT1=FOC いらっしゃる.NPST Q
 「あなたはどこへいらっしゃいますか？」
- c. **daa** fusar-u munu=gara irab-i or-i.
 2ND.SG 欲しい-NPST もの=ABL 選ぶ.CVB 敬意-IMP
 「あなたが欲しいものから選んでください。」

2 人称単数の形式は、文頭ではあまり用いられない。文頭で用いるとぶっきらぼうな印象があるようで、名前や一般名称が先行することが多い。

⁷ この語は、波照間方言話者以外とは用いることがないため、聞き手を含む包括形でほとんど語彙化している。その一方で、筆者のような調査者が聞き手にいる特殊な場合は、除外形を用いた形式、**ba-ima**=nu sima (1ST-PL=GEN 島)「私達の島」が用いられることがある。

(5-7) reiko=n joo, **daa**=n usitu nar-u=cja ee jam-an paci.

人名=も DSC2 2ND.SG=も 年寄 なる-NPST=条件 3 そう 病む-NEG.NPST 推量 1

「玲子もね、あんたも年寄になったら、(頭は) そう痛まないはず。」

(5-8) <hai> eiko ama, **daa** te <kekkonsiki> s-j a-ta te en
INTJ 人名 姉 2ND.SG 引用 2 結婚式 する-CVB 継続 1-PST 引用 2 言う.NPST
sita.

DIR.EV3

「はい、英子姉さん、あなたったら(驚くことに)結婚式をしたと言ったよね。」

現代では、2 人称単数として用いられる形式は **daa** であるが、1 人称単数 **banu** に対する 2 人称単数の形式 **danu** が 1930 年代の資料に報告されている (宮良 1980)。**danu** は現在用いられない。

5.1.1.3 3 人称代名詞

3 人称単数の形式は **usita** である⁸。**usita** は面接調査では得られるが、実際の会話ではこれまで観察されてない。面接調査で得られた唯一の例文を挙げる。

(5-9) **usita** maa fuusata=si panbee jag-u-n sika...

3RD.SG INTJ 黒砂糖=INS 天ぷら 焼く-NPST-IND1 逆接

「彼女は黒砂糖で天ぷら (アンダギー) を焼くけど、…」

3 人称専用の形式があるとはいえ、**usita** はほとんど観察されない。面接調査では指示代名詞 (5.1.3) **kuri** 「これ」、**uri** 「あれ」や、**kunu pïtu** 「この人」、**unu pïtu** 「あの人」といった、指示連体詞と **pïtu** (人) を用いた名詞句 (8.3) を使用する。(5-10) が指示代名詞、(5-11) が指示連体詞を含む名詞句の例である。

(5-10) **kurj**=a sinsin.

これ=TOP 先生

「これ (この人) は先生。」

(5-11) **unu pïtu**=ja sinsin.

あの人=TOP 先生

「あの方は先生。」

しかし、実際の会話では、島民のほとんどが互いを特定可能であるため、上記の形式はあまり用いられない。会話の初めでは、個人名や「屋号=**nu** 個人名 (あるいは親族名称)」という構造をもつ名詞句を基本的に用いる。それ以降の談話内では、指示連体詞に親族名称が後続するような形式を多く用いる (例: **unu ama/sjama/aboa/buja** 「あの姉さん/兄さん/母さん/おじいさん」など)。(5-12) に代表的な構造を 3 つ挙げる。(5-12a) は屋号に属格助詞が後続し、その後ろに個人名と親族名称を用いた名詞句であ

⁸ 3 人称単数の形式 **usita** の初頭音 **u** は、非近称の指示語 (7.1) の **uri** 「あれ」や **unu** 「あの」と関連している可能性も考えられる。従って、近称の指示語 **kuri** 「これ」や **kunu** 「この」と関連した **kusita** という形式も存在する可能性がある。

る。(5-12b) は屋号に属格助詞が後続し、その後ろに個人名のみが用いられる名詞句である。(5-12c) は屋号に属格助詞が後続し、その後ろに親族名称を用いる名詞句である。

- (5-12) a. tamuree=nu josi+ama
 屋号=GEN 人名 + 姉
 「田盛さんちの吉姉さん」
- b. patumee=nu sue
 屋号=GEN 人名
 「鳩間さんちの末さん」
- c. sikimee=nu paa
 屋号=GEN おばあさん
 「崎山さんちのおばあさん」

5.1.2 再帰代名詞

波照間方言には、人称に関係なく使用できる再帰代名詞 **duu**「自分」と、3人称専用の再帰的に用いられる再帰代名詞 **haa** がある。前者の形式 **duu** は、主語と同一指示関係にある。後者の単数形は **haa**、複数形が **ha-ima** である。**haa** は、談話上で導入された直近の3人称と同一指示関係である。遠称を表す場所指示名詞 **haa**「あちら」と形式が似ているため、本形式の由来である可能性がある。

duu に関しては複数形がこれまでの調査では観察されないため、代名詞の形態的特徴を共有しない。仮に **haa** と同様に再帰代名詞に分類した。(5-13) から (5-15) に **duu** を用いた例文を挙げる。(5-13) は1人称代名詞の再帰の例文である。(5-14) は2人称代名詞の再帰の例文である。(5-15) は3人称の再帰の例文である。

- (5-13) uzu<to tansudake ga moo> **du**=nu uja=gara <moratte>...
 布団と タンスだけが もう 自分=GEN 親=ABL もらって
 「(嫁ぐ時、私は) 布団とタンスだけをもう自分の親からもらって…」

- (5-14) buja, daa tee, e s-j a te **du**=nu <bjookito okjakuno>
 おじいさん 2ND.SG DIR.EV1 そう する-CVB 継続 1 DIR.EV1 自分=GEN 病気と お客様の
 za=ndu <daiichi> ja te en-tar-a joo...
 どこ=FOC 第一 COP.NPST 引用 2 言う-PST-条件 1 DSC2
 「おじいさん、あんたってば、そうしたらってば、自分の病気とお客さんのどちらが第一なのか? と言ったらさ…」

- (5-15) funtu unu buja jo, **du**=ndu sinsin saa.
 本当 あの おじいさん DSC2 自分=FOC 先生 推量 2
 「本当、あの おじいさんはさ、自分が先生 (一番偉いと思っている) でしょう。」

以下の例文に **haa** の例を挙げる。(5-16) は連続した談話である。話者が (5-16a) の文頭で **kaccee=nu nakasjaa**「勝連の次男」という3人称を導入し、彼の発言内容を (5-16b) および (5-16c) で引用している。

- (5-16) a. kaccee=nu nakasja=ndu kjuu or-j a-ta te jo raa.
 勝連=GEN 次男=FOC 今日 いらっしゃる-CVB 継続 1-PST DIR.EV1 DSC2 DSC1
 「勝連の次男坊が今日いらっしゃってたてばよね。」
- b. ha=ja joo, kjuu kunu fuciri num-an=cja,
 自分=TOP DSC2 今日 この 葉 飲む-NEG.NPST=条件 3
 「(その人が) 自分はさ、今日この葉を飲まなければ、」
- c. ha<o> sin-asī-n=ta.
 自分を 死ぬ-使役.NPST-IND1=引用 1
 「自分を死なす、と (言った)。」

単数形の再帰代名詞 **haa** は、人称代名詞の単数形および複数形 1 と同様に、名詞を修飾する際に複合語を形成する。(5-17) に、連続する談話から例を挙げる。昔は、人が亡くなったら部屋に大きな葉をひき、その上に寝かせ、体をきれいにするために、水を浴びさせたという。しかし、親族であっても故人の下半身に触れることは許されず、そのため、故人自身で身を清めさせたそう。 (5-17b) の **haa** は、(5-17a) で導入された 3 人称、すなわち **marah-j a pītu** (死ぬ-CVB 継続 1.NPST 人) 「故人」を指す。**haa** に属格助詞は用いられず、後続する語根と複合している。複数形 **ha-ima** は人称代名詞の複数形 2 と同様に属格助詞を後置させ名詞を修飾する。

- (5-17) a. marah-j a pītu=a... pīmizi=gara ir-a sita, acīmizi ir-a
 死ぬ-CVB 継続 1.NPST 人=TOP 冷水=ABL 入れる-CVB 継起 湯 入れる-CVB
 sita=ru... am-ah-e sita,
 継起=FOC 水浴び-使役-CVB 継起
 「亡くなった人は、冷水から入れて、湯を入れて、水浴びさせて、」
- b. haa+sita=nu munu=a haa+si muc-i ng-i haa+si=si=ru arah-e,
 再帰 + 下=GEN もの=TOP 再帰 + 手 持つ-CVB 乖離-CVB 再帰 + 手=INS=FOC 洗う-CVB
 「自分 (故人) の下のものは自分の手を持って行って、自分の手で洗って、」
- c. ee, ee jo-tar-o raa.
 そう そう COP?-PST-IND2 DSC1
 「そう、そうだったよね。」

5.1.3 指示代名詞

指示代名詞には、人物や事物を表すものと、場所を表すものがある。表 5.2 に人物や事物に用いられる指示代名詞を、表 5.3 に場所に用いられる指示代名詞をそれぞれ挙げる。前者は近称と非近称の 2 項対立であり、後者は近称、中称、遠称の 3 項対立である。

表 5.2: 指示代名詞（人・事物）

	近称	非近称
単数	kuri	uri
複数	kuri-ma kuri-nda	uri-ma uri-nda

表 5.3: 指示代名詞（場所）

	近称	中称	遠称
指示代名詞（場所）	mo	na	ha

人や事物を表す指示代名詞は、近称が **kuri**、非近称が **uri** である。話し手の目の前にあるものを指す場合、近称 **kuri** を用い、話し手の目の前にあるもの以外を指す場合は、非近称 **uri** を用いる。人を表す場合の指示代名詞の例については 5.1.1.3 も参照されたい。複数形に関しては、(5-19) が自然談話から得られたもので、他は、面接調査で形式のみが得られた。

(5-18) a. **kuri**=ja nuu jaa?

これ=TOP 何 Q

「これは何だ？」

b. **kuri** be+simā=na a mun raa.

これ 1ST.PL.INC+ 島=LOC1 ある.NPST もの DSC1

「これは、波照間島にあるものだね。」

c. be+simā=nu pītu=a sjaa **kuri** sike dar-oo.

1ST.PL.INC+ 島=GEN 人=TOP 毎日 これ 使う.CVB 継続 1-NPST.IND2

「波照間島の人は毎日これを使っているよ。」

(5-19) a. **uri**=ja nuu jaa?

あれ=TOP 何 Q

「あれは何だ？」

b. pīte nagj=a **uri**=si=ru suu ho-tar-oo.

畑 LOC2=TOP あれ=INS=FOC 汁 食べる-PST-IND2

「畑ではあれで汁を飲んだよ。」

c. **uri**-ma=n goobi o-ta te joo.

あれ-PL=も 沢山 いらっしゃる-PST DIR.EV1 DSC2

「あの人も沢山いらっしゃったってばよ。」

場所を表す指示代名詞には、近称、中称、遠称の3つの区別がある。近称の **mo** は、話し手のいる場所、あるいは所属する場所、中称の **na** は、相対的に話し手から遠く、聞き手に近い場所、そして遠称の **ha** は、話し手からも聞き手からも遠い場所を指す。

(5-20) a. tusaha=ki **mo**=ga bagi k-un-u.

遠い=理由 2 ここ=DAT1 限界 来る-NEG-NPST

「遠いからここまで来ない。」

- b. **mo**=a nisi+mura.

ここ=TOP 北 + 村

「ここは北集落だ。」

- c. **mo**=gi ha=gi=n sik-i sik-j a-n.

ここ=LOC2 あそこ=LOC2=も 置く-CVB 準備-CVB 継続 1.NPST-IND1

「あちらこちらにも置いてある。」

- (5-21) a. **na**=ga sik-iba.

そこ=DAT1 置く-IMP

「そこに置け。」

- b. **na**=gi e=nu panasi=ndu maa ici=n maa <tanosimi> si...

そこ=LOC1 そう=GEN 話=FOC まあ いつ=も まあ 楽しみ する.CVB

「そこでそんな話をして、いつでも楽しんで」

- c. ...<haitacu>=ndu **na**=ga moci k-j a-ta te joo.

配達=FOC こちら=DAT1 持つ.CVB 来る-CVB 継続 1-PST DIR.EV1 DSC2

「(荷物を) 配達 (員) がこちらに持ってきたんだってばよ。」

- (5-22) a. **ha**=ga ngi.

あそこ-DAT 行く-IMP

「あっちに行け。」

- b. **haa**=nu ina=nu pata=nu gama=nu siita=na...

あそこ=GEN 海=GEN そば=GEN 洞窟=GEN 下=LOC1

「向こうの海のそばの洞窟の下で、…」

- c. **ha**=ra mi-tari=nu utama-nzi=ndu ku-ta siika...

あそこ=ABL 3-CLF. 人=GEN 子ども-PL=FOC 来る-PST 逆接

「あちらから 3 人の子ども達が来たけれど、…」

品詞をまたぐカテゴリーとしての指示語全体に関しては、7.1 を参照されたい。

5.1.4 疑問代名詞

疑問代名詞には、人物を表す **taa** 「誰」、事物を表す **nuu** 「何」、場所を表す **zaa** 「どこ」、時間を表す **ici** 「いつ」、量を表す **uubi** 「いくつ・いくら」がある。**taa** 「誰」は、人称代名詞の単数形および複数形 1 と同様に、名詞を修飾する際に複合語を形成する。これらの疑問代名詞は、主に内容疑問文 (10.1.1.2) で、疑問部を明示する疑問語として用いられる。以下にそれぞれの例文を挙げる。

- (5-23) **ta**+hi=nu utama ja-ta kajaa.

誰 + 家=GEN 子ども COP-PST 自問

「誰のうちの子どもだったかね。」

- (5-24) nuu=nu panasĩ kajaa.

何=GEN 話 自問

「何の話かね。」

- (5-25) zaa=nu pĩtu kajaa.

何=GEN 人 自問

「どこの人かね。」

- (5-26) ici=nu panasĩ kajaa.

いつ=GEN 話 自問

「いつの話かね。」

- (5-27) uubi ja-ta raa?

いくら COP-PST Q

「いくらだったか？」

疑問語は、疑問代名詞の他に指示様態詞が含まれる。品詞をまたぐカテゴリーとしての疑問語全般に関しては7.2を、例文に関しては7.2および10.1.1をそれぞれ参照されたい。

5.2 語彙名詞

語彙名詞に一般名詞、固有名詞という下位分類を認める⁹。これは形態的なものではなく、意味的なものである。固有名詞は屋号や場所の名前などである(5-28)。

- (5-28) tamuree, memugee, kaccjee, simusukee, misiku

田盛 前迎 勝連 シムスケー ミシク

「田盛(屋号)、前迎(屋号)、勝連(屋号)、シムスケー(地名)、ミシク(地名)」

一般名詞と固有名詞に関して、固有名詞は通常修飾部を取らないといった特徴はあるものの、明確な分布の違いはない。語彙名詞が他の名詞を修飾する場合は、属格助詞=nuを用いる(8.7.9)。修飾名詞には=nuが後続し、被修飾名詞に先行する。詳しくは8.7.9あるいは8章を参照されたい。

- (5-29) pana=nu min, min=nu maju

鼻=GEN 穴 目=GEN 眉

「鼻の穴、目のマユ(眉毛)」

- (5-30) tamuree=nu busjama, kaccjee=nu buja

田盛=GEN 長男 勝連=GEN おじいさん

「田盛の長男、勝連のおじいさん」

⁹ 他の琉球諸語では、呼びかけられるか否かで呼称詞と一般名詞に分類し、記述的に有益な分類となる場合があるが(白田(2016)など)、波照間方言では今のところそのような証拠は見つかっていない。

5.3 数詞

語構成の観点から見ると、数詞はこれまで述べてきた代名詞や語彙名詞とは異なる。多くの数詞の内部構成は、「数詞語根-類別接辞」という2つの拘束形態素から成る。類別接辞は基本的に数詞に必要な接辞であるため、屈折接辞だと言える。

数詞の語根および、1から10までの数字を表5.4に、10以上の数詞と、語根を表5.5に挙げる。表5.6に大野 (1990) の類別接辞一覧を挙げる¹⁰。

表 5.4: 1 から 10 までの数詞

	語根	数え方
1	pītu	pītu-cī 「1 つ」 ¹¹
2	futa	futa-cī 「2 つ」
3	mii	mii-cī 「3 つ」
4	juu	juu-cī 「4 つ」
5	isī	isī-sī 「5 つ」
6	hnn	hnn-cī 「6 つ」
7	nana	nana-cī 「7 つ」
8	jaa	jaa-cī 「8 つ」
9	hakona	hakona-cī 「9 つ」
10	tuu	tuu 「10」

表 5.5: 10 以上の数詞

	数え方
10	tuu
11	tuu+pītu-cī
12	tuu+futa-cī
13	tuu+mii-cī
14	tuu+juu-cī
15	tuu+isī-sī
20	ninzu
30	sanzu
40	sīnzu
50	gunzu
60	ruguzu
70	nanazu, sīcīzu
80	pacīzu
90	kunzu
100	pjaagu

¹⁰ 表 5.6 は、大野 (1990) を参考に筆者が類別接辞の特徴によって独自に整理したものである

¹¹ 類別詞の種類による数詞語根の異形態は見つかっていない。

表 5.6: 類別接辞の一覧

特徴	類別詞	特徴	類別詞
有生物 人間	-(ta)ri, -(ta)rī	入れ物 碗	-mari
	-pītu	膳	-zin
動物	-(ga)ra	箱	-paku
無生物 植物	-mutu	その他 切れ	-kisi
果物	-sīn	握り (束) ¹²	-sifuku
船 (隻)	-(n)ona	束 ¹³	-sipuri
服 (反)	-tan	束 ¹⁴	-sika
土地 (田畑)	-masi	漕ぎ	-pa
家 (軒)	-giburi	束 ¹⁵	-marisi
品	-sina	口 (食事)	-fuci
行事	-musi	口 (歌の一節)	-kuci
食事 ¹⁶	-gi	升	-sja
形 平ら (枚)	-ira	合	-namori
細い (本)	-sīn	樽	-taru
丸い (個)	-gu		
対 (組)	-metu		

現在の波照間方言では、数詞語根単独では発話されない。ただし、基本的な、数を「一つ、二つ、三つ…」と数え上げる場合でのみ 10 の倍数の数詞語根には類別接辞が現れない (例: tuu 「10」)¹⁷。大野 (1990) では、数詞語根に近い形式で zii 「1」、taa 「2」、mii 「3」…という数え方を提示している。現在、この形式は現在神行事で 1 から 10 までを「一気に」唱える際にのみ用いられるため、やはり単独で発話を形成するとは言えない (5-31) ¹⁸。

(5-31) zii taa mii juu icu muu nana jaa hakona tuu

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

「ひい、ふう、みい、よ、いつ、む、ななや、ここの、とう」

類別接辞は、数えるものの特徴によって使い分けられる。例えば、基本的な数を「1 つ、2 つ、3 つ…」と数え上げる際に用いられるのは類別接辞-ci である。-ci は他にも、果物や籠、皿などを数える場合に用

¹² 苧や粟、米などを収穫する時に、握る動作によって作成される一握りの単位を指す。

¹³ 粟の収穫で 6 sifuku を束ねたものを 1 sipuri と呼ぶ。

¹⁴ 米の収穫で 2 sifuku を束ねたものを 1 sika と呼ぶ。

¹⁵ 粟は 10 sipuri、米は 10 sika 束ねたものを 1 marisi と呼ぶ。

¹⁶ 食事は「何食分用意する」や「何食食べた」という用法で使われることが予想されるが、詳細な意味や用法については不明である。

¹⁷ 日本語東京方言で言えば「いち、に、さん、し…」のような数え方を指す。

¹⁸ 例文では分かりやすいようにスペースを挿入した。大野 (1990) では「1」を dii で記している。ここでは本論文の他の表記と合わせ zii で記した。大野 (1990) では「5」を isi~ici と記しているが、筆者が観察したところ、icu であった。この違いは世代差によるものである可能性も考えられる。

いられる。人間には-(ta)ri~-(ta)ri が用いられ、鉛筆などの細いものには-(s)sin、動物には-(ga)ra が用いられる。括弧に記した形式は、語根ごとに用いられる場合と用いられる場合が決まっており、単に随意的なものではない（例：pitu-ri, futa-ri, mi-tari, ju-tari「一人、二人、三人、四人」など¹⁹）。-ci 以外の類別詞を用いる場合には、tuu「十」にも類別接辞が付加することがある（例：tu-ssin「10本」）。表 5.6 に挙げた類別詞のうち、mutu「基」、fuci「口」、marī「碗」、zin「膳」、paku「箱」、taru「樽」は語彙名詞が類別詞として転用されている。波照間方言の類別接辞に関しては、大野（1990）を参照されたい。

5.4 名詞の形態操作

波照間方言の名詞の形態操作には、複合と接尾辞付加が観察される。本節では 5.4.1 と 5.4.2 でそれぞれ複合と接尾辞付加について述べる。

5.4.1 複合

複合とは、複数の異なる自立的な要素、すなわち複数の語幹を合成する形態操作である。複数の語幹の内、先行する要素を前部要素、後続する要素を後部要素と呼ぶ。複合の結果生じる語を複合語と、その語が名詞である場合には複合名詞と呼ぶ。複数の語幹から成るが、1 語である。

波照間方言の複合名詞の内部構造は次のものが見つかっている²⁰。

- 代名詞語幹 + 語彙名詞語幹
- 語彙名詞語幹 + 語彙名詞語幹
- 動詞語幹 + 語彙名詞語幹

このうち、「代名詞語幹 + 語彙名詞語幹」の代名詞語幹に現れうるのは、人称代名詞の単数形および複数形 1、再帰代名詞、および疑問代名詞 taa「誰」である。全体を通して、人称代名詞の単数形および複数形 1 と語彙名詞語幹が複合する場合の生産性が最も高い。人称代名詞語幹と語彙名詞語幹の複合に比べると、語彙名詞語幹同士の複合名詞はあまり観察されない。動詞語幹と語彙名詞語幹にいたっては、さらに見つかっている例が少ない。

一部の代名詞が他の名詞を修飾する際には、他の名詞に先行する形で複合することを先に述べた。例えば (5-32) に挙げるような例がある。

- (5-32) ba+munu, be+munu, da+munu, ha+munu, ta+munu
 1st.SG+ 物 1st.PL.INC+ 物 2nd.SG+ 物 3sg. 再帰 + 物 誰 + 物
 「私の物、私達の物、あなたの物、(彼の) 自分の物、誰の物」

複合語であると判断する基本的な基準は、(1) 前部要素と後部要素の間に何も形態素が割り込まないことと、(2) 前部要素のアクセントが複合語幹全体に保存されるという音調的特徴である (2.3.4.1)。

語彙名詞語幹同士の複合語の例を挙げる。(5-33) は、下降型アクセントを持つ isi「石」と平板型アクセ

¹⁹ 5人以上には類別詞-pituを使用する。

²⁰ 動詞語幹が後部要素に現れる複合動詞に関しては 6.6.1 を参照されたい。

ントを持つ *usi*「臼」である。この2語が複合した例を (5-34) に挙げる。複合語 *isi+usi*「石臼」は *isi* と *usi* の間に何らかの形態素が割り込むことはなく、全体で、前部要素のアクセントすなわち下降型アクセントを持つ。

(5-33) a. *isi*(\)

石

「石」

b. *usi*(\)

臼

「臼」

(5-34) *isi+usi*(\)

石 + 臼

「石臼」

複合語と思われる語に2アクセント単位からなるものはいくつか見つかっており、それらの語は複合語アクセントの例外として残る (2.3.4.1)。例外として残る複合語は2.3.4.1で述べた通り、後部要素が下降型のアクセントを持つ傾向がある。

これまでに見つかっている動詞語幹と語彙名詞語幹の複合語は、*h-e+dama*(\ (食べる.*se*+子)「食いしん坊 (食べ+子)」、*nabi+hak-i+da* (鍋+掻く-*se*+田)²¹「ナベハキダ²²」の2語である²³。

複合語は、意味的な主要部を持つもの (内心複合語) と持たないもの (外心複合語) に分けられる。前者の場合、主要部は後部要素である。次に挙げる例は、内心複合語である。前部要素に方角、材質、用途、後部要素に場所、道具といった組み合わせが多く、以下のようなものが見つかっている。

(5-35) 内心複合語

a. 前部要素：方角

pee+kaci(\), *nisi+kaci*(\), *iri+mura*(\), *ari+mura*(\)

南 + 風 北 + 風 西 + 村 東 + 村

「南風、北風、西村、東村」

b. 前部要素：材質

ki+usi(\), *isi+usi*(\), *kii+paku*(\)

木 + 臼 石 + 臼 木 + 箱

「木臼、石臼、木箱」

c. 前部要素：用途

²¹ アクセントは上昇型の可能性が高いが、定かではない。3つの要素からなる複合語のアクセントについてはさらに調査の必要がある。

²² 地名

²³ 語彙名詞語幹+動詞語幹の複合語に見えるが、全体として名詞としてふるまう語に *si+fuk-u*「蜘蛛 (巣+吹く.*NPST*)」が見つかっている。末尾の *u* が非過去接辞なのか、名詞化接辞なのか現段階では分析しきれない。今後の課題とする。

ĩi+maari(⌈), suu+maari(⌈), misju+kami(⌈), maasu+kami(⌈)

米 + 碗 汁 + 碗 味噌 + 甕 塩 + 甕

「茶碗、汁碗、味噌甕、塩甕」

d. その他

sata+panbee(⌈), gokka+ke(⌈), pana+zii(\\)

砂糖 + 天ぷら 鶏 + 卵 鼻 + 血

「サータアンダギー、鶏卵、鼻血」

外心複合語には、以下のようなものが見つかっている。内心複合語に比べ、見つかっている例が少ない。外心複合語の中には、複合する 2 つの要素の意味が明白で並列しているものと（並列）、そうではないものに分けられる。それぞれの例を挙げる。

(5-36) 外心複合語

a. 並列

sii+pan(⌈), tun+butu(⌈), uja+fa(⌈)

手 + 足 妻 + 夫 親 + 子

「手足、夫婦、親子」

(5-37) a. 並列以外

simu+gukuru(⌈), zin+kani(⌈)

肝 + 心 銭 + 金

「心、お金」

5.4.2 接辞

名詞類に付加する接辞は、人称代名詞に付加する複数接辞と、数詞に付加する類別接辞（5.3）と以外は派生接辞である。本節では名詞類に付加する 3 つの接辞（複数接辞、指小接辞、場所化接辞）についてそれぞれ述べる。複数接辞は人称代名詞に付加する可否かで、屈折接辞か派生接辞か異なる。

5.4.2.1 複数接辞

複数接辞は、有生物のうち人間を表す名詞にのみ付加し、複数を表す。複数接辞には-(i)ma、-(n)da、-nzi の 3 つの形式がある。-(i)ma は、語幹末が a, o 以外の名詞語幹には-ma、それ以外の語幹には-ima が実現する。-(n)da は、語幹末が n の名詞には-da、それ以外の語幹には-nda が実現する。3 つの接辞のうち、-nzi は utama 「子ども」にのみ付加する接辞である。

表 5.7 に、複数接辞の形式と例を挙げる。一般的に、-(i)ma は、人称代名詞語幹および親族名称を表す語彙名詞語幹に付加する傾向がある。-(n)da は、3 人称代名詞語幹 usita 「彼ら」や、指示代名詞 uri 「あれ」kuri 「これ」、aboa~abo 「母」、ijaa 「父」などの一部の親族名称を表す語彙名詞語幹の他、親族名称以外の人間を表す語彙名詞（例：pĩtu 「人」、sinsin 「先生」など）に付加する傾向がある。

表 5.7: 複数接辞の付加例

形式	例	意味
-ima	ba-ima	「私達 (EXCL)」
	be-ma	「私達 (INC)」
	da-ima	「あなた達」
	ha-ima	「(彼ら) 自分達」
	pa-ima	「おばあさん達」
	buja-ima	「おじいさん達」
	abo-ima	「お母さん達」
	ija-ima	「お父さん達」
	uri-ma	「あれら」
	kuri-ma	「これら」
-nda	usita-nda	「彼ら」
	aboa-nda	「お母さん達」
	ija-nda	「お父さん達」
	pitu-nda	「人々」
	midumu-nda	「女達」
	bidumu-nda	「男達」
	uri-nda	「あれら」
	kuri-nda	「これら」
	sinsin-da	「先生達」
	utama-nda	「子ども達」
-nzi	utama-nzi	「子ども達」

表 5.7 を見ると (5-38) に挙げるとおり、aboa「母」、ija「父」、utama「子ども」等には同じ語に異なる形式の複数接辞が付加される例が見つかった。

- (5-38) a. abo-**ima** vs. aboa-**nda** 「お母さん達」
 b. ija-**ima** vs. ija-**nda** 「お父さん達」
 c. utama-**nda** vs. utama-**nzi** 「子ども達」

従って、語によりどの接辞が選択されるか一定の傾向はあるものの、それだけでは決まっていない可能性が考えられる。-(i)ma と-(n)da に関しては人称代名詞や呼称詞 (Silverstein (1976) の名詞句階層の上の方) に-(i)ma が付加しやすいということが挙げられる。その他にも、名詞が指し示す対象が話し手にとって目上かどうか基準になっている可能性も考えられる。これらについては、下地 (2018) でセマンティックマップを用い複数接辞の分布を記述したものがあつたため、このマップに当てはめ記述できる可能性が考えられる。そのためには、文脈に注意しながら²⁴ 複数形を再調査する必要がある。これに伴い、語

²⁴ 呼びかけの文脈なのか否かなど。

彙名詞の下位分類についても改変の可能性がある。今後の課題とする。

人称代名詞を用いる時には、単数か複数か、人数に応じた複数接辞が現れる。例えば、(5-39) は、3 人で会話している際、1 人が 2 人に対して発言したものである。この時、2 人称単数 *da* を用いては、どちらか一方に言ったことになり、2 人に言ったことにはならない。2 人に向けて言う場合には、必ず複数形が現れる。従って、屈折接辞として扱う。

- (5-39) a. *da-ima meegameniciŋgi daa saa.*
 2ND-PL 毎日 行く.CVB 継続.NPST 推量 2
 「あなたたちは毎日行っているんでしょう。」
- b. **daa meegameniciŋgi daa saa.*
 2ND.SG 毎日 行く.CVB 継続.NPST 推量 2

1 人称代名詞の派生複数形 *ba-ima* および *be-ma* には、聞き手を含むか否かという、包括・除外の違いがある²⁵。*be-ma* は、*bee* のみで包括複数の意味があるため、複数接辞 *-ma* は余剰的な要素と言える。まず以下に包括形 *bee-ma* の例文を挙げる。(5-40a) と (5-40b) は、話者同士が共有する経験を話しあう場面の発話であり、聞き手 (= 話者) を含む包括形 *be-ma* が用いられる。(5-40c) は昔話の中の、仲間への呼びかけの発話である。

- (5-40) a. *e ci=n be-ma nu=n s-an-u.*
 そう 付帯 2=も 1ST.PL.INC-PL 何=も する-NEG-NPST
 「だけど、私達は (その後) 何もしない。」
- b. *be-ma <ooensite kurerusane>.*
 1ST.PL.INC-PL 応援して くれるさね
 「私達は応援してあげるよね。」
- c. *be-ma pingir-air-u=ta.*
 1ST.PL.INC-PL 逃げる-POT-NPST=引用 1
 「(今なら) 私達は逃げられる、と。」

次に除外形 *ba-ima* の例文を挙げる。以下の例文は、複数の話者が、自分達の経験を筆者に語る談話からのものである。それぞれの例文で聞き手を含まない除外形が用いられる。

- (5-41) a. *sjama-ima baar-i ci ba-ima=ga e=nu panasī sīk-asī-tar-oo.*
 兄さん-PL 笑う-CVB 付帯 2 1ST-PL=DAT1 そう=GEN 話 聞く-使役-PST-IND2
 「兄さんたちは、笑いながら私達にそんな話を聞かせたんだよ。」
- b. *e si ba=n ba-ima <cjanto> sis-i da-tar-oo.*
 そう する.CVB 条件=も 1ST-PL ちゃんと 知る-CVB 継続 1-PST-IND2
 「それでも、私達はちゃんと知っていたんだよ。」

²⁵ 話者の直観によると、包括形 *bee* や *bee-ma* のほうが、*baa-ima* より親しみを感ずるという。

- c. **ba-ima**=n ee=ru sis-i ng-j a-ta tee.
 1ST-PL=も そう=FOC 着る.CVB 行く-CVB 継続 1-PST DIR.EV1
 「私達もそんな風に着て行ったってば。」

表 5.1 の派生複数形に挙げた形式のうち、1 人称単数 **banu** に対応する複数の形式 **banu-ma** と 2 人称単数 **danu** に対応する複数の形式 **danu-ma** が 1930 年代の資料に報告されている (宮良 1980)。しかし、筆者の調査の限りでは見つかっていない²⁶。

5.4.2.2 指小接辞

有生物を表す名詞に付加し、子どもを表す接辞-(n)tama が見つまっている。名詞語幹末が **n** の場合には -tama、それ以外には -ntama が実現する。「～の子」と訳せるため、これを指小接辞と分析する。例えば、otta「カエル」に指小辞を付加する形式 otta-ntama は、カエルの子ども、すなわちおたまじゃくしを意味する。

表 5.8: 指小接辞の付加例

形式	例	意味
-ntama	pīmiza-ntama	「子ヤギ」
	nman-tama	「子馬」
	gokka-ntama	「ひよこ」

-ntama という形式は、属格=nu に名詞 utama「子ども」が後続した形式が、文法化したものであると推測できる。指小接辞に関連する、もっとも頻繁に用いられる「男の子、女の子」を表す形式 biduntama「男の子」、miduntama「女の子」は、bidumu「男」、midumu「女」に指小接辞が付加したものと考えられる。語幹末の mu は削除され、語彙化している²⁷。

5.4.2.3 場所化接辞

名詞に付加し、「～のあたり」「～のところ」などと訳せる接辞-nta が見つまっている。場所化接辞と分析する。属格助詞=nu に場所を表す形態素²⁸が後置した形式が文法化したものと考えられる。(5-42) および (5-43) に例を挙げる。

- (5-42) a. e s-utar-a abo=ja udurugi, munu sis-j ar-u pītu-nta=ga
 そう する-PST-条件 1 母さん=TOP 驚く.CVB もの 知る-CVB 継続 1-NPST 人-所=DAT1
 sondan si ng-ja-ta cju.
 相談 する.CVB 乖離-DUR-PST HS1

²⁶ このことから、banu の nu が、4.5.2 でも問題となる主格標識 nu とは分析しにくい。理由は、格標識に複数接辞が後続するとは考えられないからである。

²⁷ 語幹末の mu のうち、先に母音 u が削除され（子音音素間の母音脱落音韻規則（2.5.2）による。）bidum-ntama になり、鼻音の m と n が同化し、n が実現し bidu-ntama に変化したと考えられる。

²⁸ ただし、ta 単独で場所を表す語例は今のところ見当たらない。

「そうしたらお母さんは驚いて、物知りの人の所に相談しに行ったとさ。」

b. paka-nta=ga ee=ru or-utar-oo raa.

墓-所=DAT1 そう=FOC いらっしゃる-PST-IND2 DSC1

「(葬式の時は人々が) 墓の所にそうやっていらっしゃったよね。」

(5-43) a. kajo-nta a naa?

人名-所 ある.NPST Q

「カヨの所にあるか？」

b. ndi+per-i+suu tukuru-nta=ru ar-oo.

出る + 入る-SE+ する.NPST 所-所=FOC ある-IND2

「(人が) 出入りする所らへんにあるよ。」

ホストとなる名詞は有生無生を問わない (5-42b)。移動を表す動詞 *ngi* 「行く」、*o(r)* 「いらっしゃる」では場所接辞の直後に与格助詞が現れる (5-42)。一方、存在を表す動詞 *a(r)* 「ある」が場所接辞に後続する場合、(普通現れる) 位格助詞=*na* が現れない (5-43)。なぜこのようなことが起こるのかについて、場所接辞が現れる例文の他、存在動詞と位格助詞の関連についてもさらに調査する必要がある。

第 6 章

動詞形態論

本章では、6.1 で動詞の基本的な構造を提示した後、動詞の語幹クラスについて 6.2 で述べる。次に 6.3 では動詞が語としてどのような形式で用いられるか、屈折形式について述べる。動詞にかかる形態操作は接辞付加がほとんどである。屈折接辞と派生接辞の形式と機能について 6.4 および 6.5 で述べ、最後に 6.6 で接辞付加以外の形態操作すなわち複合と重複について述べる。

6.1 動詞の基本構造

動詞には一般動詞と属性動詞を認める。属性動詞にはさらに ha 属性動詞と sja 属性動詞という下位分類を認める。表 6.1 に一般動詞と属性動詞の語根例を挙げる。

表 6.1: 一般動詞と属性動詞

一般動詞	属性動詞	
	ha 属性動詞	sja 属性動詞
jum 「読む」	agaha 「赤い」	misjaha 「よい」
hak 「書く」	takaha 「高い」	sanisjaha 「うれしい」
ng 「行く」	maroha 「低い」	keesjaha 「きれい」
nah~nasï 「産む」	busaha 「大きい」	abarisjaha 「美しい」
arah~arasï 「洗う」	isjagaha 「小さい」	oosjaha 「青い」
iri~ir 「入れる」	tuusaha 「遠い」	fuusjaha 「黒い」
ndi~nd 「出る」 etc.	sïkaha 「近い」 etc.	sïsoosjaha 「白い」 etc.

一般動詞と属性動詞について、以下で述べる。

6.1.1 一般動詞

一般動詞のうち、文を終止できる動詞の構造を (6-1) に挙げる。波括弧内に挙げた接辞同士は共起しないことを意味する。さらに、否定接辞に後続する波括弧内の、2つの角括弧で示した A の接辞群と B の接辞群も互いに共起しないことを意味する。例えば、同じ A 群の接辞でも非過去接辞と確信法接辞は、別の波括弧の接辞同士なので共起しうるが、同一波括弧内の確信法接辞 1 と 2、あるいは A 群の非過去接辞と B 群の命令法接辞は共起しえない。近接過去接辞は、確信法接辞 1 と共起する例のみが確認されているため、ここでは丸括弧で示した。

動詞の形態操作のほとんどが接辞の付加である。複合動詞の場合、語根に動詞拡張接辞が付加し、さらに語根が後続する。

(6-1) 一般動詞の基本構造

$$\left(\begin{array}{c} \text{語根} - \text{使役接辞} \left\{ \begin{array}{l} - \text{受身接辞} \\ - \text{可能接辞} \end{array} \right\} - \text{否定接辞} \left\{ \begin{array}{l} \text{A} \left[\begin{array}{l} - \text{非過去接辞} \\ - \text{過去接辞} \\ (- \text{近接過去接辞}) \end{array} \right] \left\{ \begin{array}{l} - \text{確信法接辞 1} \\ - \text{確信法接辞 2} \end{array} \right\} \\ \text{B} \left[\begin{array}{l} - \text{命令法接辞} \\ - \text{意志法接辞} \\ - \text{禁止法接辞} \end{array} \right] \end{array} \right\} \end{array} \right)$$

6.1.2 属性動詞

6.1.2.1 構造

次に属性動詞の基本構造を (6-2) に挙げる。

(6-2) 属性動詞の基本構造

$$\text{ha/sjaha を含む複合的な語幹} - \text{使役接辞} - \text{否定接辞} \left\{ \begin{array}{l} - \text{過去接辞} \\ - \text{非過去接辞} \end{array} \right\} \left\{ \begin{array}{l} - \text{確信法接辞 1} \\ - \text{確信法接辞 2} \end{array} \right\}$$

属性動詞については、注意されたい点が2つある。1つ目は、属性動詞は従来、形容詞と分析されてきた形式であるが、語尾を観察した結果、本論文では動詞として分類するという点である。2つ目は、動詞として分類するものの、属性動詞語幹にはアクセント単位が2つ観察されるという点である。

まず1つ目について述べる。動詞として分析する理由は、属性動詞が存在動詞 a(r) と全く同じ動詞形態論的特徴を有するからである。属性動詞語幹内の ha/sjaha に先行する部分は Shimoji (2008) の言う PC 語根 (Property Concept Root) と呼べる。ha/sjaha の由来については、明確ではないものの、ha は、存在動詞 a(r) 「ある」と全く同じ動詞形態論的特徴を有することから存在動詞を由来としている可能性が高い。sjaha の sjah については、近隣の言語との接触 (6.1.2.2) 以外にも、動詞 s 「する」の中止形 s-j 「して」と継続を表す補助動詞 a(r) 「～している」からなる補助動詞構文であった可能性も考えられる¹。

¹ 一部の sjah 属性動詞では、si~sj までを語幹と分析できることがある。例えば oosja(ha) 「青い」には、oos-i 「青く」、keesjah

本論文では、PC 語根に **ha** が後続する属性動詞を **ha** 属性動詞、**sjaha** が後続する属性動詞を **sja** 属性動詞と呼ぶ。**sja** 属性動詞の語幹末 **ha** は、現れる場合と現れない場合がある²。

次に、2 つ目について述べる。歴史的に名詞と存在動詞が組み合わさった形式を由来とする名残から、属性動詞語幹にはアクセント単位が 2 つ観察される (2.3.4.2)³。

しかし、自立語が 2 つ並ぶ「句」と呼べるほど自由ではない。現代では句全体が化石化しているため、分析の際に 1 語なのか句なのか決め難いという背景がある。筆者は属性動詞語幹について、動詞に準ずる複合的な語幹として分析し、属性動詞語幹と呼ぶ。その根拠は (1) 形式末尾が動詞の屈折形式をとることと (2) 内部構造が密接であるためである。動詞語幹そのもの、すなわち 1 語として分析しない理由は、アクセントの例外として考えるには、これまでのアクセントの例外 (特定の複合名詞の数例や、由来がある程度明確な接辞と分析できるもの) とは異なる性質を持つからである。属性動詞の内部要素はパターンを成している。従って、アクセントの例外とは分析しがたい。

6.1.2.2 属性動詞の歴史的特徴

ha 属性動詞と **sja** 属性動詞の成立の過程についてはかりまた (2009) を参照されたい。かりまた (2009) は、波照間方言と八重山語石垣白保方言 (1.3.2) の属性動詞⁴ を 60 語程度比較した。その結果、もともと **ha** 属性動詞のみ存在していたが、近隣の言語と接触することでそれ以外の語幹形式が生まれたと結論付けた。従って、属性動詞の中では **ha** 属性動詞がもともとあった形式で、**sja** 属性動詞は **ha** 属性動詞が成立した後、属性動詞に組み込まれたと言える。なお、かりまた (2009) は属性動詞の語幹末に **saha**, **sjaha**, **sja**, **sa** を認めている。このうち、筆者の調査では **sa** のみで現れる語彙は見つかっていない。ただし、(1) 語幹末が **saha** の場合に、**ha** が脱落する例と、(2) **sjaha** の場合にさらに **sa** が後続する例が見つかっている。前者の例は 2 つ見つかっている。**wassaha** 「悪い」と **busaha** 「大きい」に関して **wassa** 「悪い」、**busa** 「多く」である。

(6-3) **wassaha-n.**

悪い.NPST-IND1

「悪い。」

(6-4) **wassa kutu ar-an-u.**

悪い こと COP-NEG-NPST

「(何も) 悪いことはない。」

busa 「多く」は副詞として機能する。**sjaha** の後ろに **sa** が後続する例は複合語の後部要素としてのみ用いられる前望を意味する **gisjaha** である (6.6.1)。

「きれい」には、**kees-i** 「きれいに」という形式 (6.3.2.4) が見つかっている。例) **ina=ja oos-i zinto=ja takaha-n.** (海=TOP 青い-CVB 空=TOP 高い-IND1) 「海は青く、空は高い。」**kees-i fuk-i sita...** (きれい-CVB 拭く-CVB=継起) 「きれいに拭いて…」

² 基本的には自由変異である。否定接辞が付加するときのみ必ず **ha** が現れる。

³ 名嘉真 (1992) は、琉球諸語の属性を表す語に「名詞と存在動詞 (ある)」(サアリ型)、「動詞の連用形と存在動詞 (ある)」(クアリ型) という成り立ちを想定し、琉球諸語における分布を調査した。名嘉真 (1992) によると、波照間方言の **ha** 属性動詞は、サアリ型だという。しかし近年、クアリ型と分析する見方もある (かりまた 2009)。

⁴ かりまた (2009) では「形容詞」と呼んでいる。

(6-5) ami=ndu fi+gisja-sar-oo.

雨=FOC 降る + 前望.NPST-?-IND2

「雨が降りそうだ。」

日本語古典文法に認められる形容詞には、ク活用・シク活用があり、かつては意味によって所属する語彙が分かれていた(山本 1955)。琉球諸語の属性を表す動詞語幹が「名詞と存在動詞(ある)」(サアリ型)を由来とする場合、ク活用・シク活用の別があると言われている。上村 (1961)を見ると、北琉球沖縄語首里方言はサアリ型で、2種類の活用(sa活用、sja活用)がそれぞれク活用、シク活用に対応している。しかし、波照間方言の属性動詞語幹は上記で述べた通り、接触により複数の語幹形式が生じたとされていることからク活用・シク活用の別はない(かりまた 2009)。例えば、Dixon (1982)の示す形容詞の意味特徴のうち、大きさ(DIMENSION)に関する語に、busaha「大きい・多い」とbebisja「小さい・少ない」がある。前者はha属性動詞に、後者はsja属性動詞に分類される。さらに、活用の違いであれば、語幹内のhaやsjaより前の音形がhaとsjaのいずれの場合にも現れることが考えられるが、これまでに色(COLOR)に関する語に1例(agaha/agasja「赤い」)見つかったのみである。

属性動詞を形容詞として独立させることで、日本語あるいは他の琉球諸方言との比較研究が容易に行えるという利点はあるが、波照間方言に関して言えば、繰り返しになるが、属性動詞と一般動詞、特に存在を表す動詞a(r)「ある」と全く同じ形態論的特徴を有する。a(r)「ある」以外の一般動詞とは、軽動詞構文での分布が若干異なる程度である。属性動詞語幹末に同じ音形(haやsja)が共通して見られるという形態的特徴や、若干の分布の違いがあるため、別のカテゴリーとして認めることも可能ではあるが、本論文ではこれらを軽微な違いと捉え、現代では動詞とは別に形容詞という品詞を設けることはせず、動詞の一部として扱う。

6.2 語幹クラス

動詞語幹に後続する接辞の異形態の現れ方に関して、大きく4つのパターンが観察される。この4つのパターンを動詞の語幹クラスとして認める。

まず6.2.1で、各クラスの形式について述べ、次に6.2.2で、規則的な活用クラスに当てはまらない不規則動詞語幹について述べる。最後に6.2.3では、波照間方言の活用クラスについて扱っている先行研究と本研究の分析の立場の違いについて述べる。

6.2.1 各クラスの形式

各語幹クラスの例を表6.2に挙げる。表にはそれ以上分析できない動詞語幹形式を挙げた。それ以上分析できない動詞語幹にのみ、語幹の異形態すなわち交替語幹を認める。交替語幹はクラス2と3にのみ現れる、他のクラスにはない(表中のハイフン(-)で示す)。語幹に交替語幹がある場合、もう一方の基本的な語幹を「基本語幹」と呼ぶ。複合する際に用いられる語幹形式を基本語幹とした。

表 6.2: 語幹クラス

	語幹 意味	交替語幹	異形態	
			非過去接辞	中止接辞
クラス 1	jum 「読む」	-	-u	-i
	hak 「書く」	-		
	ng 「行く」	-		
クラス 2	arah 「洗う」	aras(i)	-∅	-e
	nah 「産む」	nas(i)		
	marah 「死ぬ」	maras(i)		
クラス 3	iri(r) 「入れる」	ir	-∅/-u	-a
	ndi(r) 「出る」	nd		
	uti(r) 「落ちる」	ut		
クラス 4	agaha(r) 「赤い」	-	-∅/-u	-i
	takaha(r) 「高い」	-		
	maroha(r) 「低い」	-		

クラス 2 の交替語幹は、非過去接辞、過去接辞、あるいは禁止法接辞のいずれかを語幹の直後に付加する場合に必ず現れる。例えば、arasī-∅（洗う-NPST）「洗う」、arasī-ta（洗う-PST）「洗った」、arasī-na（洗う-PROH）「洗うな」である。クラス 2 の交替語幹末の i は、確信法 2 接辞-oo が直接後続する際、母音同士が融合し現れないため括弧に入れた。クラス 3, 4 の語幹末に示す括弧内の r は、現れる場合と現れない場合がある。

クラス 3 の語幹末の r は、(1) 非過去接辞として-u が付加する場合、⁵ (2) 非過去接辞に確信法 2 接辞-oo が付加するする場合、(3) 命令法接辞が付加する場合の、3 つの環境で現れる。クラス 4 の語幹末の r は、(1) 非過去接辞に確信法接辞-oo が後続する場合と、(2) 中止接辞が後続する場合の 2 つの環境で現れる。クラス 3 の交替語幹は、中止接辞-a が後続する場合に用いられる。

クラス 2, 3, 4 に付加する非過去接辞は環境によって音形を持たない。音形を持たない接辞は、活用表以外の例文等では必要がない限り基本的に示さない。

語幹に派生接辞が付加し語幹をさらに拡張する場合、交替語幹とは認めないが、見た目には交替語幹と同じような接辞の異形態が現れる。例えば、(6-6) に挙げるクラス 1 の語幹に使役接辞を付加する場合、使役接辞には、異形態として-ah や-asī などといった形が現れる。これは、クラス 2 の基本語幹と交替語幹の形式（例：arah/arasī「洗う」）と並行的に考えられる (6-7)。使役接辞はクラス 2 語幹形成接辞とも言える⁶。

⁵ iri-∅（入れる-NPST）と irir-u（入れる-NPST）はどちらも「入れる」という意味である。意味的に 2 つに違いは見出せない。

⁶ 派生接辞（例えば使役接辞など）を付加した語幹は、そうではない語幹と比べると多少異なる点が観察される。このような微細な違いは、別語幹と呼ぶ程の違いではないと考えられるため、既存の語幹クラスに分類し記述する。

(6-6) jum-uta-n

読む-PST-IND1

「読んだ」

(6-7) a. jum-ah-e

読む-使役-CVB

「読ませて…」

b. jum-asï-ta-n

読む-使役-PST-IND1

「読ませた」

6.2.2 不規則動詞語幹

規則的な語幹クラスの他に、不規則動詞語幹がいくつか見ついている。表 6.3 に、これまでの調査で見つかった不規則動詞語幹の一覧を挙げる。

表 6.3: 不規則動詞語幹の一覧

語幹	意味	交替語幹	どの語幹クラスと同じ異形態を用いるか	
			非過去接辞	中止接辞
k	「来る」		1	1
s	「する」		1	1
en	「言う」		1	1
mu	「思う」		2	1
nu	「縫う」		2	1
h	「食べる」	ho	2	2
k	「買う」	ko	2	2
sik~sik	「使う」	siko	2	2
mi(r)	「見る」		3	1
o(r)	「いらっしゃる」		3	1
bu(r)	「いる」		3	1
hi(r)	「あげる」	h	3	1
a(r)	「ある」		3	1
nen	「ない」		3	3
ja(r)	コピュラ動詞		3	1

不規則動詞語幹のうち、mu「思う」、nu「縫う」が同じ振る舞いを、h「食べる」、k「買う」、sik~sik「使う」が同じ振る舞いを見せるが、メンバーが少ないため、1つの活用クラスとは認めなかった。この

5つの動詞に関しては、動詞の形態音韻規則を設け、クラス1の動詞語幹に分類することも可能である。例えば「食べる」を意味する動詞語幹を *h* ではなく *ha* とし、形態素境界に *a-i* の連続があった場合に母音が融合し、*e* が実現するという規則を立てれば、*ha-i* (食べる-CVB) → *he* 「食べて」を導くことが可能である。*mu* も同様に、形態素境界に *u-u* の連続があった場合に母音が融合し、*u* が実現するという規則を立てれば、規則を立てれば、*mu-uta* (思う-PSI) → *muta* 「思った」を導くことが可能である。本論文では、音韻規則の数を増やすより、不規則動詞語幹を増やす記述方法を選択した。その理由は、それぞれ3つ (*h* 「食べる」、*k* 「買う」、*sik*~*sik* 「使う」)、と2つ (*mu* 「思う」、*nu* 「縫う」) の語幹しか見つかっていないからである。今後このような動詞語幹が増えれば、音韻規則を立て、クラス1の動詞語幹に分類することも考えられる。

不規則といえども、これらの動詞語幹は全く不規則な振る舞いをするわけではなく、部分的に規則的な活用クラスの特徴を持つ。p. 147 の表 6.2 に挙げた非過去接辞、否定接辞、中止接辞が、不規則動詞語幹でどのように現れるかも合わせて示す。当該セルにはクラス番号を記した⁷。例えば、*h* 「食べる」、*k* 「買う」、*sik*~*sik* 「使う」は、基本的にクラス2と同様の活用の振る舞いを見せる。異なる点は、交替語幹の形式である。*mi(r)* 「見る」、*o(r)* 「いらっしゃる」など、語幹末に *r* が現れる語幹はクラス3に似ているが、一部でクラス1と同じ活用をする。*s* 「する」と *en* 「言う」は、ほとんどクラス1と同じ活用をするが、前者は母音音素の挿入の音韻規則が適用されることがあるため、後者は語幹末音 *n* に後続する母音が削除されることがあるため、不規則動詞語幹とした。

詳しい形式については、巻末の付録 A 「不規則動詞の活用表」を参照されたい。不規則動詞語幹のグロスの振り方について、他の活用クラスと同様の接辞異形態が現れる場合にのみ、形態素分析をしてグロス振る。

6.2.3 語幹クラスに関する先行研究

波照間方言の動詞活用クラスについては、大きく語幹末音による分類 (平山他 1967, 杉村 2003) と後続する接辞の形式による分類 (加治工 1998, 麻生 2009) を取る立場がある。前者は語幹の末音が子音か母音かという基準に重きを置き、まず子音と母音に二分する方法であるが、内部でさらに子音音素による分類が行われ、結果的にクラスの細分化⁸が行われている。一方、後者の分類方法は、語幹にどの接辞の異形態を付加するかによって分類する方法である。それにより、加治工 (1998) では6つ、麻生 (2009) では5つのクラスを設けている。

本論文では、後者の立場から動詞語幹について分類を行い、メンバーが少ないクラスについては不規則動詞として扱った。しかし、結果的に前者の観点も網羅しているとも言える。子音語幹に2種類 (語幹末が *h/si* か、それ以外か)、母音語幹に2種類 (語幹末が *i* か、*a* か) 認めている。しかし、その内容は単に語幹末の分節音ではなく、後続する接辞の異形態や交替語幹の現れ方を検討した結果によって導かれたものである。

⁷ クラス4の語幹は複合的な語幹であるので、どの語幹クラスと同じ異形態を用いるか考慮する対象から外した。「ある」を意味する *a(r)* には、否定接辞は付加しない。しかし、他はクラス4とおなじである。

⁸ 平山他 (1967) では子音クラスで10、母音クラスで4つ。この中に本論文でいうクラス4 (属性動詞) は含まれない。

6.3 動詞の屈折形式

6.3.1 屈折と派生

本論文では、語が置かれる統語的な環境（統語的関連性（syntactic relevance））によって出現が決まるカテゴリーを屈折と呼ぶ。波照間方言の動詞は単独で用いられる場合、次のいずれかの統語環境で用いられる。(1) 主節末（文末）(2) 連体節末 (3) 副詞節末 (4) 中止節末および補助動詞構文の V1、の4つの環境である。それぞれの環境で必ず出現する接辞を屈折接辞と呼び、動詞全体を屈折形式と呼ぶ。屈折接辞以外の接辞を派生接辞と呼ぶ。例えば (6-8) に、動詞が単独で主節末に用いられる例を挙げる。

- (6-8) a. baa usina=ci ng-u-n.
 1ST.SG 沖縄=ALL 行く-NPST-IND1
 「私は沖縄に行く。」
- b. baa usina=ci ng-asi-tar-oo.
 1ST.SG 沖縄=ALL 行く-使役-PST-IND1
 「私は（子どもを）沖縄に行かせたよ。」
- c. usina=ci ng-iba.
 沖縄=ALL 行く-IMP
 「私は（子どもを）沖縄に行かせたよ。」

(6-8) ではそれぞれ *ngun*, *ngasitaroo*, *ngiba* という屈折形式が用いられている。まず共通しているのは、確信や命令を表すムード接辞である。次に、確信を表す場合には、必ず非過去や過去といった時制を表す接辞が先行している。このことは、主節末に現れるどの動詞を見ても共通して言える。従って、主節末という統語環境の屈折接辞は、ムード接辞および（確信を表す場合には）時制接辞である。(6-8b) の使役接辞は (6-8a, c) に現れないという点で出現が任意である。従って、使役接辞は派生接辞である。

(1) から (4) の環境で用いられる屈折形式は合計で 10 個ある。(1) 確信形 1、確信形 2、命令形、禁止形、意志形 (2) 時制形 (3) 条件副動詞形 1、条件副動詞形 2、付帯副動詞形 (4) 中止形である。これらの屈折形式は接（尾）辞付加の形態操作を受けている。以下、6.3.2 でそれぞれの屈折形式と屈折接辞について述べる。

一方で、統語的関連性で屈折を認定するといっても、観察されるすべての接辞を屈折接辞と派生接辞に明確に二分することは困難である⁹。(6-9) に、p. 144 で挙げた一般動詞の基本構造を再掲する。

(6-9) 一般動詞の基本構造（再掲）

⁹ 一般的に、屈折と派生を区別する際に、ある操作（波照間方言で言えば接辞法）の「義務性（obligatoriness）」や「統語的関連性（syntactic relevance）」、「適応可能性（applicability）」などが上位の基準に挙げられることが多い (Booij 2006, Haspelmath and Sims 2010)。

$$\left. \begin{array}{l} \text{語根} - \text{使役接辞} \left\{ \begin{array}{l} - \text{受身接辞} \\ - \text{可能接辞} \end{array} \right\} - \text{否定接辞} \end{array} \right\} \left\{ \begin{array}{l} \text{A} \left[\begin{array}{l} - \text{非過去接辞} \\ - \text{過去接辞} \\ (- \text{近接過去接辞}) \end{array} \right] \left\{ \begin{array}{l} - \text{確信法接辞 1} \\ - \text{確信法接辞 2} \end{array} \right\} \\ \text{B} \left[\begin{array}{l} - \text{命令法接辞} \\ - \text{意志法接辞} \\ - \text{禁止法接辞} \end{array} \right] \end{array} \right\}$$

語根に対する承接順で見ると、現在派生接辞と認定している接辞のうち、使役接辞は節末に用いられるなどの動詞語幹にも現れうる¹⁰。一方、否定接辞は主節末、連体節末、副詞節末に現れる動詞語幹に現れうる。中止節末に用いられる動詞語幹には限定的に観察されるのみである(6.5.4)。近接過去接辞は主節末に用いられる動詞語幹にのみ現れうる¹¹。従って、少なくとも使役接辞は様々な統語環境で語幹を拡張するという点で派生接辞として認定できる。

問題は否定接辞と近接過去接辞である。この2つの接辞は共起することではなく、近接過去接辞にいたっては過去接辞と非過去接辞と共起する例も見つかっていない。否定接辞は4つの環境のうち3つで現れ、残る1つの環境でも限定的とはいえ観察されるので、使役接辞と同様に派生接辞と仮に認定する¹²。近接過去接辞が中止節末に用いられる動詞語幹で観察されないのは、この接辞自体が歴史的に中止形と、後続する動詞の融合から生じた接辞であるという可能性が理由として考えられる(6.4.3)。従って、近接過去接辞は屈折接辞か派生接辞かという議論では例外として扱うべきものであるかもしれない。屈折接辞か派生接辞かという二分法を採用する場合には、非過去接辞および過去接辞と共起する例が見つからないことを優先し、近接過去接辞を屈折接辞と仮に認定する。受身接辞と可能接辞に関しては、例が少ないためはっきりとは区別できないが、承接順を見るとこれらの接辞は否定接辞の前に位置しうるため、仮に派生接辞として認定する。

6.3.2 各動詞形式

本節では各屈折形式について述べる。個々の屈折接辞の形式と機能については、次節(6.4)を参照されたい。

6.3.2.1 確信形 1、確信形 2、命令形、禁止形、意志形

確信形 1、確信形 2、命令形、禁止形、意志形は単独で主節述語として用いられ、文を終止できる。確信形の屈折接辞は2つある。時制接辞(非過去接辞、過去接辞、近接過去接辞)および確信法接辞(確信法接辞 1、確信法接辞 2)である。命令形、禁止形、意志形の屈折接辞は、それぞれ命令法接辞、意志法接辞、禁止法接辞である。確信形 1、確信形 2、命令形、禁止形、意志形の屈折形式の動詞構造を、(6-10)

¹⁰ 例は得られていないが、受身接辞も副動詞形に現れる可能性は高い。

¹¹ 近接過去接辞は、6.4.3で述べる通り、これまでの調査で明らかになっていることが少ない。従って、連体節末に用いられる動詞語幹で観察される可能性も十分考えられる。音調と意味を注意深く観察しながら調査する必要がある。今後の課題である。

¹² 日本語(東京方言)でも否定接辞の扱いは難しく、風間(1992)では派生接辞としながらも、適応可能性という点では準屈折形式と呼べるとも述べている。

に挙げる。語幹に後続する A が確信形 1 および確信形 2 の動詞構造で、B が命令形、禁止形、意志形の動詞構造である。

$$(6-10) \quad \text{語幹} \left\{ \begin{array}{l} A \left[\begin{array}{l} \left\{ \begin{array}{l} - \text{非過去接辞} \\ - \text{過去接辞} \\ (- \text{近接過去接辞}) \end{array} \right\} \left\{ \begin{array}{l} - \text{確信法接辞 1} \\ - \text{確信法接辞 2} \end{array} \right\} \end{array} \right] \\ B \left[\begin{array}{l} - \text{命令法接辞} \\ - \text{意志法接辞} \\ - \text{禁止法接辞} \end{array} \right] \end{array} \right\}$$

(6-11) 主節述語

a. sunu **sīs-u-n.**

着物 着る-NPST-IND1

「服を着る。」

b. sunu **sis-iba.**

着物 着る-IMP

「服を着ろ。」

確信法接辞 1、確信法接辞 2、命令法接辞、意志法接辞、禁止法接辞の 5 つの接辞を合わせてムード接辞と呼ぶ。確信法接辞 1、2 が付加される場合にのみ、時制接辞が必須要素として確信法接辞に先行して現れる。ただし時制接辞のうち、近接過去接辞は確信法接辞 1 とのみ共起しうる。表 6.4 に 5 つの動詞形式を 4 つのクラスごとに挙げる。クラス 1 は jum 「読む」、クラス 2 は arah 「洗う」、クラス 3 は iri 「入れる」、クラス 4 は agaha 「赤い」の語幹をそれぞれ例にした。ハイフン (-) は見つからないことを意味する。一覧には屈折接辞を付加した形式のみ載せる。なお表中の一部の非過去接辞の異形態-ø は、音形を持たない接辞であり、音韻レベルでは見えないものである。これらの接辞-ø については、パラダイムを示す際にのみ記載し、例文中では記載しない。語幹側のグロスにドットで区切り並記する。クラス 1 の確信法 2 非過去形では、非過去接辞-u が後続する確信法接辞 2-oo と融合する (2.5.5)。この場合は接辞側のグロスにドットで区切り並記する。

表 6.4: 確信形 1、確信形 2、命令形、禁止形、意志形

	ムード	時制	形式	意味
クラス 1	確信法 1	非過去	jum-u-n	「読む」
		過去	jum-uta-n	「読んだ」
		近接過去	jum-ja-n	「今読み終わった」
	確信法 2	非過去	jum-oo	「読む」
		過去	jum-utar-oo	「読んだ」
	命令法		jum-i(ba)	「読め」
	意志法		jum-a	「読もう」
	禁止法		jum-una	「読むな」
クラス 2	確信法 1	非過去	arasī-Ø-n	「洗う」
		過去	arasī-ta-n	「洗った」
		近接過去	arah-ja-n	「今洗い終わった」
	確信法 2	非過去	aras-oo	「洗う」
		過去	arasī-tar-oo	「洗った」
	命令法		arah-e(ba)	「洗え」
	意志法		arah-a	「洗おう」
	禁止法		arasī-na	「洗うな」
クラス 3	確信法 1	非過去	iri-Ø-n/irir-u-n	「入れる」
		過去	iri-ta-n	「入れた」
		近接過去	ir-a-n	「今入れ終わった」
	確信法 2	非過去	irir-oo	「入れる」
		過去	iri-tar-oo	「入れた」
	命令法		iri-ba/irir-iba	「入れろ」
	意志法		ir-a	「入れよう」
	禁止法		iri-nna	「入れるな」
クラス 4	確信法 1	非過去	agaha-Ø-n	「赤い」
		過去	agaha-ta-n	「赤かった」
		近接過去	-	
	確信法 2	非過去	(agahar-oo)	「赤い」
		過去	agaha-tar-oo	「赤かった」
	命令法		-	
	意志法		-	
	禁止法		-	

6.3.2.2 時制形

6.3.2.1 で述べた確信形 1 からムード接辞を取り払ったものを時制形と呼ぶ。時制形は、唯一の必須の要素として時制接辞が動詞語幹に付加される。連体形ではなく時制形と呼ぶ理由は、助詞を後続することによって、連体節のみならず、文末終止の機能を持つ形式だからである。(6-12) に時制形の動詞構造を挙げる。近接過去接辞が明確に付加していると認定できる時制形の例は見つかっていないため、表には入っていない。

$$(6-12) \quad \text{語幹} \left\{ \begin{array}{l} - \text{過去接辞} \\ - \text{非過去接辞} \end{array} \right\}$$

表 6.5 に動詞形式の一覧を挙げる。終止形と同様に、クラス 1 は **jum** 「読む」、クラス 2 は **arah** 「洗う」、クラス 3 は **iri(r)** 「入れる」、クラス 4 は **agaha(r)** 「赤い」の語幹をそれぞれ例にした。-は見つかっていないことを意味する。クラス 2 は交替語幹が現れる。一覧には屈折接辞を付加した形式のみ載せる。なお表中の一部の非過去接辞- \emptyset は、音形を持たない接辞であり、音韻レベルでは見えないものである。この非過去接辞- \emptyset については、パラダイムを示す際にのみ記載し、例文中では記載しない。語幹側のグロスにドットで区切り並記する。

表 6.5: 時制形

	時制	形式	意味
クラス 1	非過去	jum-u	「読む」
	過去	jum-uta	「読んだ」
クラス 2	非過去	arasī- \emptyset	「洗う」
	過去	arasī-ta	「洗った」
クラス 3	非過去	iri- \emptyset /irir-u	「入れる」
	過去	iri-ta	「入れた」
クラス 4	非過去	agaha- \emptyset	「赤い」
	過去	agaha-ta	「赤かった」

時制形は基本的に次の環境で用いられる。

- 単独で連体節述語として用いられる (8.4)
- モダリティ助詞に先行して主節述語として用いられる (10.5.2)
- 接続助詞に先行して副詞節述語として用いられる (11.3)

(6-13) 連体節述語

jum-u **pītu**

読む-NPST 人

「読む人」

(6-14) 主節述語

hi=gara **ndi-ta** saa.
 家=ABL 出る-**PST** 推量 2

「家から出たよね。」

(6-15) 副詞節述語

usitu **nar-u=cja...**
 年寄り なる-**NPST**=条件 3

「年寄りになったら（頭痛は治る）」

基本的に、時制形が単独で主節述語として用いられることはないが、例外的に時制形単独で主節述語として用いられる環境が2つ見つかっている。(1) 節内の先行する項に焦点助詞が付加されている、いわゆる「係り結び」と呼ばれる環境の場合と(12.1.3)、(2) 否定非過去の場合である(10.2)。前者はこれまでに10例程度観察されたのみである。

(6-16) 係り結び・主節述語

midumu=**ndu** busa **siko**.
 女=FOC 沢山 使う.**NPST**

「(それは) 女が沢山使う。」

(6-17) 否定非過去・主節述語

baa **ng-an-u**.
 1st.SG 行く-**NEG-NPST**

「私は行かない。」

6.3.2.3 条件副動詞形 1、条件副動詞形 2、付帯副動詞形

条件副動詞形 1、条件副動詞形 2、付帯副動詞形は、必須の要素としてそれぞれ条件接辞 1、条件接辞 2、付帯接辞が動詞語幹に付加される形式である。この3つの接辞を合わせて副動詞接辞と呼ぶ。(6-22) にこれらの動詞形式の構造を挙げる。

$$(6-18) \quad \text{語幹} \left\{ \begin{array}{l} - \text{過去接辞} - \text{条件 1 接辞} \\ - \text{条件 2 接辞} \\ - \text{付帯接辞} \end{array} \right\}$$

副動詞接辞のうち、条件接辞 1 は、必ず過去接辞に先行される。条件接辞 2 は、先行する語幹のクラスが 1 の場合には-iba、クラス 2 の場合には-eba、クラス 3, 4 の場合には-ba が実現する。クラス 3 は語幹に r が現れクラス 1 と同様の-iba が実現することもある。付帯接辞は、先行する語幹のクラスが 1 の場合

に-incana、クラス2の場合には-encana、クラス3の場合には交替語幹に-ancana が実現する。クラス4に付帯接辞が付加する例は見つかっていない。

表6.6に条件副動詞形1、条件副動詞形2、付帯副動詞形の動詞形式を挙げる。クラス1はjum「読む」、クラス2はarah「洗う」、クラス3はiri(r)「入れる」、クラス4はagaha(r)「赤い」の語幹をそれぞれ例にした。一覧には屈折接辞を付加した形式のみ載せた。

表 6.6: 条件副動詞形1、条件副動詞形2、付帯副動詞形

	副動詞接辞	形式	意味
クラス1	条件1 接辞	jum-uta-ra	「読んだら」
	条件2 接辞	jum-iba	「読めば」
	付帯接辞	jum-incana	「読みながら」
クラス2	条件1 接辞	arasī-ta-ra	「洗ったら」
	条件2 接辞	arah-eba	「洗えば」
	付帯接辞	arah-encana	「洗いながら」
クラス3	条件1 接辞	iri-ta-ra	「入れたら」
	条件2 接辞	iri-ba/irir-iba	「入れれば」
	付帯接辞	ir-ancana	「入れながら」
クラス4	条件1 接辞	agaha-ta-ra	「赤かったら」
	条件2 接辞	agaha-ba	「赤いなら」
	付帯接辞	-	

副動詞形は、副詞節述語(11.3)として用いられる。

(6-19) mo=ga **k-utar-a** zootuu=ta en-oo.

こちら=DAT1 来る-PST-条件1 上等=引用1 言う-NPST.IND2

「こちらに来たら上等だと言うよ。」

(6-20) **ng-iba** joo, <denwa> k-j a-ta te joo.

行く-条件2 DSC2 電話 来る-CVB 継続1-PST DIR.EV1 DSC2

「(葬式に出席しようと)行ったらさ、電話が来ていたんだってばよ。」

(6-21) atasīma... **asīp-incana** ng-i kooso-n.

一時 遊ぶ-付帯1 行く-CVB 来る.NPST-IND1

「一時、遊びながら行ってきます。」

6.3.2.4 中止形

中止形は、必須の要素として中止接辞が動詞語幹に付加される形式である¹³。(6-22) に中止形の動詞構造を挙げる。

(6-22) 語幹 – 中止接辞

中止接辞は、先行する語幹のクラスが 1, 4 の場合に -i、クラス 2 の場合には -e、クラス 3 の場合には交替語幹に -a が実現する。クラス 4 の語幹には、r が現れる。

表 6.7 に中止形の動詞形式を挙げる。これまでに挙げた屈折形式と同様に、クラス 1 は jum 「読む」、クラス 2 は arah 「洗う」、クラス 3 は iri(r) 「入れる」、クラス 4 は agaha(r) 「赤い」の語幹をそれぞれ例にした。一覧には屈折接辞を付加した形式のみ載せた。

表 6.7: 中止形

	形式	意味
クラス 1	jum-i	「読み」
クラス 2	arah-e	「洗い」
クラス 3	ir-a	「入れ」
クラス 4	agahar-i	「赤く」

中止形は、次の環境で用いられる。

- 中止節述語として用いられる (11.4)
- 接続助詞に先行して副詞節述語として用いられる (11.3)
- 補助動詞あるいは軽動詞に先行してそれぞれ補助動詞構文、軽動詞構文を形成する (9 章)¹⁴

(6-23) 中止節述語

midumu-nda=ja ina=ci **ur-a**, sii+pan **arah-e**,
 女-PL=TOP 海=ALL 降りる-CVB 手 + 足 洗う-CVB

「女たちは海に降りて、手足を洗って、… (岩場を跳んだそうだ。)」

(6-24) 副詞節述語

e=nu munu tur-i **he** ki=ru maa e=ci ma...
 そう=GEN もの 取る-CVB 食べる.CVB 理由 2=FOC INTJ そう=SIM INTJ

「そういうものを取って食べるから、まあ、そうしながら… (そんな子どもを産んだね。)」

¹³ 中止形に否定接辞が付加する場合については、6.5.4 を参照されたい。否定中止形の補助動詞構文における (本動詞としての) 使用は未調査である。

¹⁴ ただし、クラス 4 の動詞語幹に限っては、副動詞形ではなく例外的に語幹そのものが用いられると分析する (9.2.1, 9.3)。

(6-25) 補助動詞構文の主動詞

<zikan> kuu bagi=n **mac-i** bir-j a-tar-oo.
 時間 来る.NPST 限界=も 待つ-CVB 継続 2-CVB 継続 1-PST-IND2

「時間が来るまで待っていたよ。」

6.4 屈折接辞

本節では、動詞語幹に付加する個々の屈折接辞の形態を述べる。

6.4.1 過去接辞

過去接辞は-uta(r)～-ta(r)である。クラス2に過去接辞が後続する際には、交替語幹を用いる。クラス1の動詞語幹に過去接辞が付加する際には-uta(r)、クラス2から4の動詞語幹に過去接辞が付加する際には-ta(r)が実現する。過去接辞に後続する接辞が母音始まりの場合に、それぞれ-utar, -tarが実現する。クラス1の動詞語幹 jam「痛む」、クラス2の動詞語幹 arah「洗う」の交替語幹 arasi、クラス3の動詞語幹 ndi「出る」、クラス4の動詞語幹 takaha「高い」を用いて例を挙げる。

(6-26) クラス1

jam-**uta-n**
 痛む-PST-IND1
 「痛んだ」

(6-27) クラス2

arasi-**ta-n**
 洗う-PST-IND1
 「洗った」

(6-28) クラス3

ndi-**ta-n**
 出る-PST-IND1
 「出た」

(6-29) クラス4

takaha-**ta-n**
 高い-PST-IND1
 「高かった」

過去接辞は、発話時を基準とし、出来事・状態が発話時以前のある時点で生じたこと、あるいは生じていたことを意味する。例えば、(6-30a)では、発話時点を基準にし、発話時以前のある時点で出来事が生じたことを意味する。一方、(6-30b)では、発話時点を基準にし、発話時以前のある時点で出来事が生じていたことを意味する。詳しくは10.3を参照されたい。

(6-30) a. baa sunu arasi-**tar-o**.

1st.SG 着物 洗う-PST-IND2

「私は着物を洗ったよ。」

b. baa sunu arah-j a-**tar-o**.

1st.SG 着物 洗う-CVB 継続 1-PST-IND2

「私は着物を洗っていたよ。」

過去接辞を含む時制形が文末に現れる際、語末に母音 **u** が現れる例がこれまでに 2 例見つかった¹⁵。音節構造を整えるために挿入される母音なのか等、今後検討する必要がある。

- (6-31) mugasĩ haa=na fuka+mura=nu pĩte=na nabihakida te=nu tana=ndu
 昔 あそこ=LOC1 外 + 村=GEN 畑=LOC1 地名 引用 2=GEN 田=FOC
 a-tar-u.
 ある-PST-?

「昔あちらに、フカ村の畑に、ナビハキ田という田んぼがあった。」

- (6-32) daa=ndu baa tatag-ja-tar-u.
 お前=FOC 1st.SG 叩く-DUR-PST-?
 「お前が私を叩いた。」

6.4.2 非過去接辞

非過去接辞は **-u** ~ **-ø** である¹⁶。クラス 1 の動詞語幹に付加する際、非過去接辞に確信法接辞 **1-n** が後続する場合に **-u** が実現する¹⁷。確信法接辞 2 が後続する場合には、**-u** と **-o** が融合し、**-oo** で実現する。クラス 2 から 4 の動詞語幹に付加する際には **-ø** が実現する。

なお、パラダイムとしては非過去接辞として **-ø** は存在するものの、音形がない。従って、パラダイムとして列挙する以外に、特に比較する必要がない場合には例文等で **-ø** を標示しない。本節では過去接辞と比較しやすいように標示する。クラス 1 の動詞語幹 **jam** 「痛む」、クラス 2 の動詞語幹 **arah** 「洗う」の交替語幹 **arasĩ**、クラス 3 の動詞語幹 **ndi** 「出る」、クラス 4 の動詞語幹 **takaha** 「高い」を用いて例を挙げる。

(6-33) クラス 1

jam-u-n
 痛む-NPST-IND1
 「痛む」

(6-34) クラス 2

arasĩ-ø-n
 洗う-NPST-IND1
 「洗う」

¹⁵ 焦点助詞が先行し、時制形が末尾に現れることを、係り結びと呼ぶ (12.1.3)。

¹⁶ 不規則動詞語幹に母音音素の挿入の音韻規則 (2.5.1) が適用され、**-uu** という異形態が現れることがある。本異形態が現れる場合は、形態素分析を行わず、グロスはドット (.) 区切りで並記する。

¹⁷ クラス 3, 4 の動詞語幹末に **r** が現れる場合は、クラス 1 の語幹に準ずる異形態が用いられる (6.2.1)。クラス 4 の動詞語幹末に **r** が現れるのは、時制形 (6.3.2.2) に限られる。

(6-35) クラス 3

- a. ndi-Ø-n
出る-NPST-IND1
- b. ndir-u-n
出る-NPST-IND1
「出る」

(6-36) クラス 4

- a. takaha-Ø-n
高い-NPST-IND1
- b. takahar-u
高い-NPST
「高い」

非過去接辞は、発話時を基準とし、出来事・状態が発話時以降のある時点で生じること、あるいは発話時点を含む時点で生じていることを意味する。例えば、(6-37a) では、発話時点を基準にし、発話時以降のある時点で出来事が生じることの意味する。一方、(6-37b) では、発話時点を基準にし、発話時を含む時点で出来事が生じていることを意味する。

(6-37) a. baa s̄imuc̄i jum-u-n.

1st.SG 本 読む-NPST-IND1
「私は本を読む。」

b. baa s̄imuc̄i jum-j a-Ø-n.

1st.SG 本 読む-CVB 継続 1-NPST-IND1
「私は本を読んでいる。」

6.4.3 近接過去接辞

近接過去接辞を付加した動詞形式については、面接調査で得られたもののみで、実際の談話における使用については分かっていない¹⁸。従って、まず形式と機能について、これまでの調査で分かっていることを述べ、次に同音異形態である継続の補助動詞構文との関係、および由来となる形式に関する仮説を述べる。

近接過去接辞は-(j)a である。クラス 1 および 2 の語幹には-ja、クラス 3 は交替語幹に-a を付加する。クラス 4 の語幹には付加しない。活用クラス 1 の動詞語幹 budur 「踊る」、クラス 2 の語幹 arah 「洗う」、クラス 3 の語幹 iri 「入れる」、不規則動詞語幹 h 「食べる」を用いて、例を挙げる。

近接過去接辞を付加した動詞は、節に示されたイベントがちょうど終了したこと、あるいはすでに終わった後であることを表す。このようにイベントが達成されたことを示すため、近接過去と呼ぶ。非過去接辞と、過去接辞と共起する例はこれまでの調査では見つかっていない。詳しい意味や分布については不明な点が多く、今後の調査により明らかにする必要がある。

¹⁸ 継続の補助動詞構文 (9.2.1) の形式と混同し、見逃している可能性は十分に考えられる。

(6-38) クラス 1

- a. budur-u-n
踊る-NPST-IND1
「踊る」
- b. budur-ja-n
行く-RCTPST-IND1
「踊り終わった」

(6-39) クラス 2

- a. arasi-n
洗う.NPST-IND1
「洗う」
- b. arah-ja-n
洗う-RCTPST-IND1
「洗い終わった」

(6-40) クラス 3

- a. iri-n
入れる.NPST-IND1
「入れる」
- b. ir-a-n
入れる-RCTPST-IND1
「入れ終わった」

(6-41) 不規則語幹

- a. ho-n
食べる.NPST-IND1
「食べる」
- b. h-ja-n
食べる-RCTPST-IND1
「食べ終わった」

本接辞を付加した形式のアクセントは、語幹と屈折接辞（近接過去接辞以降の要素）のアクセント単位が別であると考えられる。これまでに見つかっている近接過去接辞が付加された語幹のうち、下降型アクセントを持つ語幹 *iri* 「入れる」、平進型アクセントを持つ語幹 *sis* 「切る」、上昇型アクセントを持つ語幹 *jum* 「読む」の例を、継続補助動詞 1 に非過去接辞と確信法接辞 1 を付加した形式と比べて挙げる¹⁹。無声化したモーラには D(evoicing) を記す

(6-42) *iri*(N) 「入れる」

- a. i.ra.n
H.L.H
「入れ終わった」(cf. *ir-a-n* (入れる-RCTPST-IND1))
- b. i.ra.n
H.H.L
「入れている」(cf. *ir-a-n* (入れる.CVB. 継続 1.NPST-IND1))

(6-43) *sis*(T) 「切る」

- a. si.sja.n
D.H.H
「切り終わった」(cf. *sis-ja-n* (切る-RCTPST-IND1))

¹⁹ *sis* 「切る」に関して、継続接辞と確信法接辞 1-n が共起する例は得られなかった。クラス 3 の動詞語幹に継続補助動詞 1 が後置される場合、クラス 3 の中止接辞-a と継続補助動詞 1a が融合し単に a で実現する。従って、この場合スペースやハイフンで区切ることができないため、ドット区切りで CVB. 継続 1 とグロスを取る。

b. si.sja.roo

H.H.L

「切っている」(cf. sis-j ar-oo (切る-CVB 継続 1-NPST.IND2))

(6-44) jum(/)「読む」

a. ju.mja.n

L.L.H

「読み終わった」(cf. jum-ja-n (読む-RCTPST-IND1))

b. ju.mja.n

L.H.L

「読んでいる」(cf. jum-j a-n (読む-CVB 継続 1.NPST-IND1))

近接過去接辞を付加した動詞の次末モーラに L、末モーラに H のピッチが実現することから、近接過去接辞は平進型あるいは上昇型アクセントを持つ形態素から文法化したと考える。

これまで例で見てきたように、確信法接辞 1 を付加した形式でのみ、意味と形式の両方から近接過去接辞と継続の補助動詞構文の 2 つをはっきり区別できる例が見つかっている。確信法接辞 2 を含む場合では、継続と近接過去の例のペアは今のところ見つかっていない。

(6-45) a. bu.du.rja.roo

H.H.H.L

「踊っている。」(cf. budur-j ar-oo (踊る-CVB DUR.NPST-IND))

b. * bu.du.rja.roo

L.L.L.H

継続と近接過去の意味の違いは、ピッチパターンの違いだけでも表せる。しかし、継続の補助動詞構文の場合はピッチパターンに加えて、(6-43)「切る」の例に挙げたように、確信法接辞 2 を付加することでより違いを明確化する傾向がある。近接過去の場合、(6-45)に挙げたように確信法接辞 2 は付加しない²⁰。以下 (6-46) に sisi(V)「着る」の例を挙げる。

(6-46) a. si.sja.roo

D.H.L

「(寒いから 3 枚も) 着ている」(cf. sis-j ar-oo (着る-CVB 継続 1-NPST.IND2))

b. si.sja.n

D.L.H

「着終わった (着た)」(cf. sis-ja-n (着る-RCTPST-IND1))

最後に、継続の補助動詞構文との関係と、由来となる形式に関する先行研究の仮説について述べる。継続の補助動詞は、検討の余地はあるものの、存在動詞 a(r)「ある」を由来していると推測した (9.2.1)。

²⁰ 確信法接辞 1 と確信法接辞 2 の違いは、これまでの調査で明らかにできなかった (6.4.4, 6.4.5)。今後の課題である。

しかし、同じ分節音から成る近接過去接辞の由来については、まだ明らかではない。Lau (2014) は、波照間方言を含めたいくつかの八重山語の下位方言について、この継続と近接過去にあたる形式の由来について検討している。Lau (2014) は近接過去接辞-ja について、由来となる形式は不確かではあるものの、単純に異なる時期に存在動詞 a が文法化したのではないか、という可能性を示唆した。さらにそれぞれのアクセントは、その当時の（存在を表す動詞 a 「ある」の）アクセントが引き継がれているのではないかと結論付けた。この仮説は、継続の補助動詞構文と近接過去接辞が付加した形式が、同じ分節音の連続で実現しているという点では否定できない。一方で、Lau (2014) には、継続の補助動詞と近接過去接辞の相対的な成立順についての言及はない。9.2.1 で述べる通り、継続の補助動詞については bu(r) 「いる」を由来とする説も考えられる。この仮説の場合、音韻変化に確証はないものの、継続の補助動詞と近接過去接辞（さらには同じく a(r) 「ある」を由来としている ha 属性動詞）のアクセントに関しては統一的に説明可能である。いずれの仮説にもさらなる検討が必要である。

6.4.4 確信法接辞 1

確信法接辞 1 は -n である。確信法接辞 1 は、ムード接辞の 1 つ (6.3.2.1) であり、かつ対事的モダリティのうち、確信を表すモダリティ要素として分析する (10.5.2)。クラス 1 の動詞語幹 ng 「行く」、クラス 2 の動詞語幹 arah 「洗う」の交替語幹 arasi、クラス 3 の動詞語幹 ndi 「出る」、クラス 4 の動詞語幹 maha 「美味しい」を用いて例を挙げる。

(6-47) クラス 1

- a. ng-u-n
行く-NPST-IND1
「行く」
- b. ng-uta-n
行く-PST-IND1
「行った」

(6-48) クラス 2

- a. arasi-n
洗う.NPST-IND1
「洗う」
- b. arasi-ta-n
洗う-PST-IND1
「洗った」

(6-49) クラス 3

- a. ndi-n
出る.NPST-IND1
「出る」
- b. ndi-ta-n
出る-PST-IND1
「出た」

(6-50) クラス 4

- a. maha-n
美味しい.NPST-IND1
「美味しい」
- b. maha-ta-n
美味しい-PST-IND1
「美味しかった」

確信法接辞は (1) 話し手の直接体験 (6-51)、(2) 話し手の確実な予定 (6-52) を表す機能を持つ。これらの機能に関して、詳しくは 10.5.1.1 を参照されたい。

(6-51) 話し手の直接体験

pak-u siku=n amasikuru=a jam-uta-n.
吐く-NPST 程度=も 頭=TOP 痛む-PST-IND1

「(私も昔は) 吐くほど頭が痛かった。」

(6-52) 話し手の確実な予定

amaa, <zibun> ici=ru k-u-n jo.
姉 自分 いつ=FOC 来る-NPST-IND DSC2

「姉さん、自分はいついつに来るよ (と電話が来た)。」

6.4.5 確信法接辞 2

確信法接辞 2 は-oo である。確信法接辞 2 も、確信法接辞 1 と同様にムード接辞の 1 つ (6.3.2.1) であり、かつ対事的モダリティのうち、確信を表すモダリティ要素として分析する (10.5.2)。クラス 1 の動詞語幹 ng 「行く」、クラス 2 の動詞語幹 arah 「洗う」の交替語幹 arasi、クラス 3 の動詞語幹 ndi 「出る」、クラス 4 の動詞語幹 maha 「美味しい」を用いて例を挙げる。クラス 1 の動詞語幹に非過去接辞と確信法接辞 2 が並ぶ場合、母音 (-u と-oo) が融合し-oo が実現する。クラス 2 の動詞語幹に直接非過去接辞 (-∅) と確信法接辞 2 が並ぶ場合も、語幹末母音 i と確信法接辞 2 が融合し、-oo が実現する。クラス 4 の動詞語幹 maha 「美味しい」に直接非過去接辞と確信法 2 が後続する形式は見つかっていない²¹。

(6-53) クラス 1

- a. ng-oo
行く-NPST.IND2
「行く」
- b. ng-utar-oo
行く-PST-IND2
「行った」

(6-54) クラス 2

- a. aras-oo
洗う-NPST.IND2
「洗う」
- b. arasi-tar-oo
洗う-PST-IND2
「洗った」

(6-55) クラス 3

- a. ndir-oo
出る-NPST.IND2
「出る」
- b. ndi-tar-oo
出る-PST-IND2
「出た」

(6-56) クラス 4

- a. maha-tar-oo
美味しい.NPST-PST-IND2
「美味しかった」

²¹ クラス 4 の非過去で確信法-o が用いられる例には、busaha-ro (大きい-IND) 「大きい」が唯一見つかっている。

確信法接辞は (1) 話し手の直接体験 (6-57)、(2) 話し手の確実な予定 (6-58) を表す機能を持つ。これらの機能に関して、詳しくは 10.5.1.1 を参照されたい。

- (6-57) pīte nagi=ja uri=si=ru suu ho-tar-oo.
 畑 LOC2=TOP あれ=INS=FOC 汁 食べる-PST-IND2
 「畑ではあれ（ひょうたん）で汁のおかずを食べたよ。」

- (6-58) fui nar-iba sis-oo.
 冬 なる-条件 2 着る-NPST.IND2
 「冬になったら着るよ。」

6.4.6 命令法接辞

命令法接辞は、-i(ba)~e(ba)~ba である²²。クラス 1 の語幹には -i(ba) が、クラス 2 の語幹には -e(ba) が、クラス 3 の語幹は語幹末に r が現れる場合には -iba が、現れない場合には -ba がそれぞれ実現する。クラス 4 の語幹に命令法接辞は付加されえない。クラス 1 とクラス 2 の語幹には、ba を含まない -i~e という形式が実現する場合がある。クラス 1 の動詞語幹 ng 「行く」、クラス 2 の動詞語幹 sīk-ah （聞く-使役）「聞かせる」、クラス 3 の動詞語幹 iri 「入れる」を用いて例を挙げる。

(6-59) クラス 1	(6-60) クラス 2	(6-61) クラス 3
ng-i/ng-iba 行く-IMP 「行け」	sīkah-e/sīk-ah-eba 聞く-使役-IMP 「聞かせろ」	iri-ba/irir-iba 入れる-IMP 「入れろ」

命令法接辞は、聞き手に対する話し手の要求 (10-23) や願望 (6-63) を表す。命令法接辞の機能について、詳しくは 10.1.2 を参照されたい。

- (6-62) 話し手の要求

ba=ga sīk-ah-eba.
 1ST.SG=DAT1 聞く-使役-IMP
 「私に聞かせなさい。」

- (6-63) 話し手の願望

ba=ga sīk-ah-e tabor-i.
 1ST.SG=DAT1 聞く-使役-CVB 依頼-IMP
 「私に聞かせてください。」

²² 不規則動詞には -u(ba) が異形態として見つかっている。k-uba/k-u （来る-IMP）「来い」

命令法接辞のうち **ba** が含まれる異形態は、後に 6.4.10 で述べる条件接辞 2 と同じ形式である。従って異なる分析も可能であるが、そのような分析は取らない。例えば、命令法接辞に **-i~-e~-∅** という異形態を認め、命令文では命令形その他、条件副動詞形 2 を用いることができるという分析が可能である。本論文では (1) クラス 3 の語幹に **ba** を含まない命令法接辞の異形態がないことと、(2) **ba** を含む異形態と含まない異形態のどちらの形式を用いた場合でもニュアンスが変わらないことから (例: **ng-iba** と **ng-i** 「行け・行きなさい」)、**ba** を含もうが含むまいが命令接辞と分析し、条件接辞 2 は別形式として認める。

6.4.7 意志法接辞

意志法接辞は **-a** である。²³ クラス 1 の動詞語幹 **ng** 「行く」、クラス 2 の動詞語幹 **sik-ah** (聞く-使役) 「聞かせる」、クラス 3 の動詞語幹 **iri** 「入れる」を用いて例を挙げる。

(6-64) クラス 1

ng-a
行く-INT
「行こう」

(6-65) クラス 2

sik-ah-a
聞く-使役-INT
「聞かせよう」

(6-66) クラス 3

ir-a
入れる-INT
「入れよう」

意志法は、話し手の意志および聞き手への勧誘を表す。感嘆詞 **raa** としばしば共起する²⁴。

(6-67) 勧誘

- a. **kunu kosī he mir-a raa.**
この お菓子 食べる.CVB 経験-INT DSC1
「このお菓子を食べてみようね。」
- b. **maazī ng-a.**
一緒 行く-INT
「一緒に行こう。」

(6-68) 意志

- a. **mugasī=gara a-ta panasī sik-ah-a raa.**
昔=ABL ある-PST 話 聞く-使役-INT DSC1
「昔からあった話を聞かせようね。」
- b. **bassa munu=ndu aa=gara tur-i koh-e.**
忘れる.CVB. 継続 1.NPST もの=FOC ある=理由 1 取る-CVB 接近-INT
「忘れたものがあるから取ってこよう (と女が言った)。」

意志法接辞および次に述べる禁止法接辞は、例があまり多くない。

²³ 不規則動詞には **-e** という異形態も見つかっている (6-67b)

²⁴ (6-68b) の **koh-e** 「～てくる」は、不規則動詞語幹である。

6.4.8 禁止法接辞

禁止法接辞は-(u)na～-nna である。クラス 1 語幹に後続する場合、-una が実現する。クラス 2 語幹に後続する場合、交替語幹に-na が実現する。クラス 3 の語幹には-nna が実現する。クラス 4 の語幹には付加しない。クラス 1 の動詞語幹 ng 「行く」、クラス 2 の動詞語幹 arah 「洗う」の交替語幹 arasi、クラス 3 の動詞語幹 iri 「入れる」を用いて例を挙げる。

(6-69) クラス 1

ng-una

行く-禁止

「行くな」

(6-70) クラス 2

arasi-na

洗う-禁止

「洗うな」

(6-71) クラス 3

iri-nna

入れる-禁止

「入れるな」

禁止法は、聞き手に対する、話し手の否定の命令を表す。禁止法接辞には、命令法接辞の願望のような(6.4.6)、強要性の弱いお願いを表すことはない。意志法接辞と同様に、禁止法の接辞を含む例はあまり多くない。詳しくは 10.2 を参照されたい。

6.4.9 条件接辞 1

条件接辞 1 は-a である。条件接辞が付加する場合、必ず条件接辞に過去接辞が先行する。クラス 1 の動詞語幹 jum 「読む」、クラス 2 の動詞語幹 arah 「洗う」、クラス 3 の動詞語幹 iri 「入れる」、クラス 4 の動詞語幹 agahar 「赤い」を用いて例を挙げる。

(6-72) クラス 1

ng-utar-a

行く-PST-条件 1

「行ったら」

(6-73) クラス 2

arasi-tar-a

洗う-PST-条件 1

「洗ったら」

(6-74) クラス 3

iri-tar-a

入れる-PST-条件 1

「入れて」

(6-75) クラス 4

agaha-tar-a

赤い-PST-条件 1

「赤かったら」

条件接辞 1 が現れる動詞形式を条件副動詞形 1 と呼ぶ (6.3.2.3)。条件副動詞形 1 が従属節の述語として用いられる場合、従属節は、主節に示される事象をもたらす条件や理由を示す。詳しくは 11.3.2.2 を参照されたい。

(6-76) 条件

mo=ga **k-utar-a** zotuu=ta en-o.

こちら=DAT1 来る-PST-条件 1 上等=引用 1 言う-NPST.IND2

「こちらに来たら上等だと言うよ。」

(6-77) 理由

min=nu naa=n akas-i zankaman **ja-tar-a** baa udurug-i...

目=GEN そこ=も 赤い-CVB あちこち COP-PST-条件 1 1st.SG 驚く-CVB

「目のそこ（らへん）もあちこち赤くしていたから私は驚いて…」

6.4.10 条件接辞 2

条件接辞 2 は-(i)ba～-eba である。それぞれ先行する語幹のクラスが 1 の場合に-iba が、クラス 2 の場合に-eba が、クラス 3 の場合に-ba、あるいは r が現れる語幹に-iba が、クラス 4 の場合に-ba が、それぞれ実現するクラス 1 の動詞語幹 jum 「読む」、クラス 2 の動詞語幹 arah 「洗う」、クラス 3 の動詞語幹 iri 「入れる」、クラス 4 の動詞語幹 agahar 「赤い」を用いて例を挙げる。

(6-78) クラス 1

ng-iba

行く-条件 2

「行けば」

(6-79) クラス 2

arah-eba

洗う-条件 2

「洗えば」

(6-80) クラス 3

iri-ba/irir-iba

入れる-条件 2

「入れれば」

(6-81) クラス 4

agaha-ba

赤い-条件 2

「赤ければ」

条件接辞 2 が現れる動詞形式を条件副動詞形 2 と呼ぶ（6.3.2.3）。条件副動詞形 2 が従属節の述語として用いられる場合、従属節は、主節に示される事象をもたらす条件を示す。詳しくは 11.3.2.3 を参照されたい。

(6-82) **ng-iba** jo, <denwa> k-j a-ta te jo.

行く-条件 2 DSC2 電話 来る-CVB 継続 1-PST DIR.EV1 DSC2

「（葬式に出席しようと）行ったらさ、電話が来てたんだってばよ。」

6.4.11 付帯接辞

付帯接辞は、-incana～-encana～-ancana である。それぞれ先行する語幹のクラスが 1 の場合に-incana が、クラス 2 の場合に-encana が、クラス 3 の場合、交替語幹に-ancana がそれぞれ実現する。クラス 4 の例は見つかっていない。クラス 1 の動詞語幹 jum 「読む」、クラス 2 の動詞語幹 arah 「洗う」、クラス 3 の動詞語幹 iri 「入れる」を用いて例を挙げる。

(6-83) クラス 1

ng-incana

行く-付帯 1

「行きながら」

(6-84) クラス 2

arah-encana

洗う-付帯 1

「洗いながら」

(6-85) クラス 3

ir-ancana

入れる-付帯 1

「入れながら」

付帯接辞が現れる動詞形式を付帯副動詞形と呼ぶ (6.3.2.3)。付帯副動詞形が従属節の述語として用いられる場合、従属節は主要部に示される事象の付帯状況を表す。詳しくは 11.3.3.2 を参照されたい。

(6-86) utama-nzi=ja... h-encana haa=ga kaer-i=sa nen-tar-o.

子ども-PL=TOP 食べる-付帯 1 あちら=DAT1 帰る-CVB=? 完了-PST-IND2

「子どもたちは（果実を）食べながら、向こうに帰ってしまったよ。」

6.4.12 中止接辞

中止接辞は、-i～-e～-j～-a である。それぞれ先行する語幹のクラスが 1 の場合に-i～-j が、クラス 2 の場合に-e～-j が、クラス 3 の場合、交替語幹に-a が、クラス 4 の場合、語幹末に r が現れ-i が、それぞれ実現する²⁵。母音の渡り音化規則 (2.5.3) が適用される場合にクラス 1 とクラス 2 で-j が実現する。

クラス 1 の動詞語幹 jum 「読む」、クラス 2 の動詞語幹 arah 「洗う」、クラス 3 の動詞語幹 iri 「入れる」、クラス 4 の動詞語幹 agahar 「赤い」を用いて例を挙げる。

(6-87) クラス 1

ng-i

行く-CVB

「行って」

(6-88) クラス 2

arah-e

洗う-CVB

「洗って」

(6-89) クラス 3

ir-a

入れる-CVB

「入れて」

(6-90) クラス 4

agahar-i

赤い-CVB

「赤く」

中止接辞が現れる動詞形式を中止形と呼ぶ (6.3.2.4)。中止形は、中止節の述語として現れる場合と、副動詞構文および軽動詞構文の主動詞として現れる場合がある。詳しくは 11.4 を参照されたい。

²⁵ 不規則動詞語幹 mu 「思う」、nu 「縫う」などにも-i が実現する。

6.5 派生接辞

本節では、動詞語幹を拡張する派生接辞の個々の接辞の形態について、語根への承接順に述べる。複合の際に現れる語幹拡張接辞については最後に述べる。

6.5.1 使役接辞

使役接辞は、大きく *as(i)* と *mi* の2系統ある。すなわち、*-as(i)~asi~ah* と、*-m(i)~mir~mah* である。先行する語幹クラスと直後に現れる接辞の初頭分節音によって、どの異形態が現れるか決まる。

まずクラス1,3の動詞語幹には *as(i)~asi~ah* が付加する。後続する接辞が使役接辞、受身接辞、可能接辞、非過去接辞、過去接辞、禁止接辞の場合には *-as(i)*、それ以外の継続接辞、近接過去接辞、否定接辞、意志接辞、命令接辞、中止接辞の場合には *-ah* が実現する。*-as(i)* が実現する環境で母音始まりの接辞が後続する場合に *-as* が、それ以外の環境で *-asi* が実現する。*-asi* が実現する環境下で、後続する接辞の初頭母音の音価によっては、母音の渡り音化の音韻規則が適用され、*-asi* が実現する(2.5.3)。

一方、クラス2の動詞語幹には *-m(i)~mir~mah* が付加する。命令法接辞が後続する際に *-mah* が実現し、非過去接辞として *-u* が実現する場合には *-mir* が実現する。それ以外の環境で *-mi* が実現する。ただし、*-mi* が実現する環境で、母音始まりの接辞が後続する場合には、*-m* が実現する。

表6.8と表6.9に一覧を挙げる。直後に現れる接辞の箇所には、頭文字のみを示す²⁶。クラス4には使役接辞は付加しない。

表 6.8: 使役接辞の異形態 (ahe 系統)

語幹クラス	直後に現れる接辞	
	使・受・可・非・過・禁	継・近・否・意・命・副
1, 3	<i>-as(i)~asi</i>	<i>-ah</i>

表 6.9: 使役接辞の異形態 (語幹クラス2)

語幹クラス	直後に現れる接辞		
	命	非 (-u)	それ以外
2	<i>-mah</i>	<i>-mir</i>	<i>-m(i)</i>

クラス2の語幹末にはすでに *ah* や *asi* などが分節音として含まれているため、重複回避の補充法として、*mi* 系統の異形態が用いられていると分析できる²⁷。

²⁶ それぞれ、使役、受身、可能、継続、近接過去、否定、意志法、非過去、過去、禁止法、命令法、副動詞である。表6.8のうち、使役接辞が2つ並ぶ場合、先行する使役接辞は必ず他動詞化の機能を持つ。

²⁷ なお、クラス2に使役接辞が後続し、直後に否定接辞あるいは意志法接辞が現れる場合、*-mir* という異形態 (*arasi-mir-un-u/arasi-mir-a*) が想定されるが、これまでの調査では網羅しきれなかった。今後の課題である。

まず、クラス 1, 3 の語幹に使役接辞を付加した例を、ng「行く」、hak「書く」、uti「落ちる」の動詞語幹を用いて挙げる。クラス 1, 3 の語幹が使役接辞で拡張された語幹はクラス 2 に準ずる。使役接辞で拡張された語幹が複合語の前部要素として現れる場合、クラス 2 の語幹と似た形式が実現する (cf. arah「洗う」と ng-ah「行かせる」)。使役接辞を付加した語幹は、クラス 2 の語幹と並行的に考えられる。ただし、受身接辞あるいは可能接辞と共に起る際、-ah で現れることが予測される環境で、-as が実現することがある。使役接辞の異形態-asi が現れる例は、(6-96b) に挙げる。-as が現れる例は、(6-102) および (6-107) に挙げる。-as が含まれる例は、これまでにこの 2 例が見つかったのみである。異なるのはこの点のみであるため、基本的にはクラス 2 として扱う。

(6-91) クラス 1

- a. ng-u-n
行く-NPST-IND1
「行く」
- b. ng-asī-n
行く-使役-NPST-IND1
「行かせる」
- c. ng-ah-an-u
行く-使役-NEG-NPST
「行かせない」
- d. ng-ah-e
行く-使役-CVB
「行かせて」

(6-92) クラス 1

- a. hak-u-n
書く-NPST-IND1
「書く」
- b. hak-asī-n
書く-使役-NPST-IND1
「書かせる」
- c. hak-ah-an-u
書く-使役-NEG-NPST
「書かせない」
- d. hak-ah-e
書く-使役-CVB
「書かせて」

(6-93) クラス 3

- a. uti-n
落ちる-NPST-IND1
「落ちる」
- b. ut-asī-n
落ちる-使役-NPST-IND1
「落とす」
- c. ut-ah-an-u
落ちる-使役-NEG-NPST
「落とさない」
- d. ut-ah-e
落ちる-使役-CVB
「落として」

次に、クラス2の語幹に使役接辞を付加した場合の例を、arah「洗う」²⁸、nah「産む」、nd-ah「出す」の動詞語幹を用いて挙げる。nd-ah「出す」は、語幹内にすでに使役接辞を含む（クラス2に準ずる）語幹である。

- (6-94) a. arasi-n
洗う.NPST-IND1
「洗う」
b. arasi-mi-n
洗う-使役.NPST-IND1
「洗わせる」
c. arasi-mir-u-n
洗う-使役-NPST-IND1
「洗わせる」
d. arasi-m-a-n
洗う-使役-RCTPST-IND1
「洗わせた」
e. arasi-mah-e
洗う-使役-IMP
「洗わせろ」

- (6-96) a. nd-asi-n
出る-使役.NPST-IND1
「出す」
b. nd-asi-mi-n
出る-使役-使役.NPST-IND1
「出させる」
c. nd-asi-mir-u-n
出る-使役-使役-NPST-IND1
「出させる」

- (6-95) a. nasi-n
産む.NPST-IND1
「産む」
b. nasi-mi-n
産む-使役.NPST-IND1
「産ませる」
c. nasi-mir-u-n
産む-使役-NPST-IND1
「産ませる」

mi系統の使役接辞によって拡張された語幹は、クラス3に準ずると考える。なぜなら、クラス3の基本語幹と交替語幹と並行的に分析できるからである（cf. iri-n「入れる」と arasi-mi-n「洗わせる」）。唯一異なる点は、命令法接辞が付加される場合、クラス3であれば arasi-mir-i（洗う-使役-IMP）という形式が期待されるが、このような形式は観察されず、arasi-mah-eが実現する点である²⁹。従って、基本的

²⁸ (6-94b)の交替語幹 arasiの末母音の口蓋化（arasi）は、動詞語幹に含まれる母音の口蓋化（2.5.6）の音韻規則による。

²⁹ -mahに含まれる ahは、語幹クラス1,3が使役接辞で拡張され、かつ命令法接辞が直後に現れる場合の異形態と同じである。従って、命令法接辞を付加するために語幹を拡張したという分析も可能である（arasi-m-ah-e（洗う-使役-SE-IMP）「洗

にはクラス 3 として扱う。

使役接辞は、項構造を変更する操作のうち、使役者項を増やす機能を持つ³⁰。本機能に関しては、10.7.2 を参照されたい。

(6-97) a. 使役接辞なし

utama sumuci jum-u-n.
 子ども 本 読む-NPST-IND1
 動作者項
 「子どもが本を読む。」

b. 使役接辞あり

baa utama=ga sumuci jum-asĩ-n.
 1ST.SG 子ども=DAT1 本 読む-使役.NPST-IND1
 使役者項 被動者項
 「私は子どもに本を読ませる。」

6.5.2 受身接辞

受身接辞は-ar である。派生接辞の中でも、受身接辞と次に述べる可能接辞は使用される頻度が少ない。特に受身接辞に関しては、面接調査でも受身の形式そのものを聞き出すことが困難であった。このため、形式を網羅的に提示することが難しい。ここでは、これまでに見つかった形式を提示する。例文の (a) に受身接辞を含まない動詞形式を、(b) に受身接辞を含む動詞形式を挙げる。受け身接辞を含む動詞形式は、しばしば継続の補助動詞構文内で「～されている」という意味で用いられており、次に挙げる例でもほとんどがこれに当てはまる。このような場合、受け身接辞に付加する中止接辞-a と、中止接辞に後続する継続補助動詞 1a が融合し、a で実現することに注意されたい。

(6-98) クラス 1

- a. hak-u-n
 書く-NPST-IND1
 「書く」
- b. hak-arar-u munu
 書く-受身.CVB. 継続 1-NPST もの
 「書かれている (もの)」

(6-99) クラス 1

わせろ)」。本論文ではひとまず-mah をこれ以上分析できない形態素として認定するが、今後全体を見て分析を変える可能性がある。

³⁰ 本論文の使役者項の導入には、他動詞化も含む。

a. sac-u-n

刺す-NPST-IND1

「刺す」

b. itu sac-arar-u pari

糸 刺す-受身.CVB. 継続 1-NSPT 針

「糸が刺されている針 (lit. 糸が通されている針)」³¹

(6-100) クラス 1

a. sikur-u-n

作る-NPST-IND1

「作る」

b. sikur-ar-a bir-j a-n

作る-受身-CVB 継続 2-CVB 継続 1.NPST-IND1

「作られている」

(6-101) 不規則語幹

a. ho-n

食べる.NPST-IND1

「食べる」

b. h-ara-n

食べる-受身.CVB. 継続 1.NPST-IND1

「食べられた」

(6-98b) から (6-101b) で継続接辞が-a で実現することと、(6-100b) で、中止接辞が-a で実現することを踏まえると、おそらく受身接辞で拡張された語幹はクラス 3 に準ずると考えられる。仮にそうだとしたら、受身接辞の異形態に -ari、-arir という形式が今後見つかる可能性がある。

使役接辞との組み合わせの例は、以下の例文で 1 つ見つかっている。

(6-102) unu utama=ja haa+abo=gara munu h-as-ar-un-ta cju.

あの 子ども=TOP REFL+ 母=ABL もの 食べる-使役-受身-NEG-PST HS1

「あの子どもは自分の母親からご飯を食べさせられていなかったそうだ。」

受身接辞は、項構造を変更する操作のうち、被動者である P 項を唯一項、すなわち S 項とする機能をもつ。本機能に関する詳細は、10.7.1 を参照されたい。

(6-103) a. 受身接辞なし

³¹ 「針が糸を通して」からの関係節化の可能性、すなわち「糸を通して針」の可能性も考えられる。

[ijaa] [baa+ututu] tatag-j a-ta-n.

父 私 + 弟 叩く -CVB 継続 1-PST-IND1

A (動作主体) P (被動者)

「父は私の弟(妹)を叩いていた。」

b. 受身接辞あり

[baa+ututu] [ijaa=gara] tatag-ara-ta-n.

私 + 弟 父 叩く -受身.CVB. 継続 1-PST-IND1

S (被動者) 斜格 (動作主体)

「私の弟(妹)は父から叩かれていた。」

6.5.3 可能接辞

可能接辞は異形態に -ai(r), -ar が見つかっている。直後に非過去接辞が現れる場合には -ai あるいは -air が、過去接辞が現れる場合には -ai、否定接辞が現れる場合には -ar が実現する。その他の接辞が後続する例は見つかっていない。否定接辞が現れる場合には、受身接辞が付加された形式と同じ形式となる。クラス 4 の語幹には付加しえない。可能接辞を付加した語幹は、クラス 3 の基本語幹と交替語幹の関係と並行的に分析できる (cf. iri(r) 「入れる」と ng-ai(r) 「行ける」)。

以下にクラス 1 の動詞語幹 ng 「行く」、クラス 2 の動詞語幹 arah 「洗う」、不規則動詞語幹 h 「食べる」を用いて例を挙げる³²。グロスには POT (Potential) を用いる。

(6-104) クラス 1

a. ng-u-n

行く -NPST-IND1

「行く」

b. ng-air-u-n

行く -POT-NPST-IND1

「行ける」

c. ng-ai-ta-n

行く -POT-PST-IND1

「行けた」

d. ng-ar-un-u

行く -POT-NEG-NPST

「行けない」

(6-105) クラス 2

a. arasi-n

洗う .NPST-IND1

「洗う」

b. arah-air-u-n

洗う -POT-NPST-IND1

「洗える」

c. arah-ai-ta-n

洗う -POT-PST-IND1

「洗えた」

d. arah-ar-un-u

洗う -POT-NEG-NPST

「洗えない」

³² h 「食べる」に可能接辞と過去接辞が共起する例に関して、h-ai-ta (食べる -POT-PST) という形式が予測されるが、未調査である。今後の課題とする。

(6-106) 不規則語幹

a. h-o-n

食べる-NPST-IND1

「食べる」

b. h-air-u-n

食べる-POT-NPST-IND1

「食べられる」

c. h-ar-un-u

食べる-POT-NEG-NPST

「食べられない」

使役接辞との組み合わせの例は、以下の例文で1つ見つかっている。

(6-107) mo=ra nd-as-air-u-n.

ここ=ABL 出る-使役-POT-NPST-IND1

「ここから出せる。」

可能接辞は、節に示されるイベントが実行可能であることを表す。動作主体の能力、あるいは動作主体の能力以外の、様々な要因による可能性が表せる。例えば (6-108) は、動作主体の足の速さ、すなわち動作主体の能力が要因である。一方、(6-109) は、食べ物かどうかわからないものに対し、食べ物かどうかを尋ねる場面の例文である。これは、動作者の能力ではなく被動者の性質が要因である。

(6-108) bee-ma pïngir-air-u-n=ta...

1ST.PL.INC-PL 逃げる-POT-NPST-IND1=引用 1

「私達は逃げられると（思って）…」

(6-109) kurj=a h-air-u munu naa?

これ=TOP 食べる-POT-NPST もの Q

「これは食べられるものか？」

6.5.4 否定接辞

否定接辞の異形態は-an, -un, -en とである。先行する語幹クラスによってどの異形態で現れるか異なる。クラス 1, 2 には-an、クラス 3 には-un、クラス 4 には-en がそれぞれ実現する。クラス 1 の動詞語幹 jum 「読む」、クラス 2 の動詞語幹 nd-ah 「出す」、クラス 3 の動詞語幹 bassi 「忘れる」、クラス 4 の動詞語幹 goha 「怖い」を用いて例を挙げる³³。

³³ 非過去で否定の動詞形式に確信法接辞が付加される例は見つかっていない（例：*ng-an-u-n（確信法 1）、*ng-an-oo（確信法 2）など）。否定接辞を付加した非過去の動詞形式は、(6-116) に挙げるように、例外的に、命題的モダリティ（以下、モダ

(6-110) クラス 1

- a. **jum-an-u**
読む-NEG-NPST
「読まない」
- b. **jum-an-ta-n**
読む-NEG-PST-IND1
「読まなかった」

(6-111) クラス 2

- a. **nd-ah-an-u**
出る-使役-NEG-NPST
「出さない」
- b. **nd-ah-an-ta-n**
出る-使役-NEG-PST-IND1
「出さなかった」

(6-112) クラス 3

- a. **bass-un-u**
忘れる-NEG-NPST
「忘れない。」
- b. **bass-un-ta-n**
忘れる-NEG-PST-IND1
「忘れなかった」

(6-113) クラス 4

- a. **goh-en-u**
怖い-NEG-NPST
「怖くない」
- b. **goh-en-ta-n**
怖い-NEG-PST-IND1
「怖くなかった」

稀に、否定接辞と過去接辞が連続する際に、接辞の間に母音 a が現れることがある。現段階では 2 つの形式の意味の違いはないと考える³⁴。

- (6-114) a. **ng-an-ta-n**
行く-NEG-PST-IND1
- b. **ng-an-a-ta-n**
行く-NEG-?-PST-IND1
「行かなかった」

否定接辞に後続する接辞は、多くが時制接辞であるが、中止接辞も付加しうる。否定接辞が付加した語幹には、中止接辞としてクラス 3 語幹のように -a が実現する。必ず理由助詞 2=ki と共に用いられる。

- (6-115) **ng-an-a=ki...**
行く-NEG-CVB=理由 2
「(方向がうまく) 行かないから… (別の道で行った)」

否定接辞は、語幹の持つ語彙的意味に対して、否定の極性を表す。詳細については、10.2 を参照されたい。

リティ要素)を表す形式なしで、すなわち時制形(6.3.2.2)で述語として機能することができる。一方、(6-117)で確信法の接辞が現れるように、否定接辞に過去接辞が後続する場合は、モダリティ要素が必須である。過去接辞が後続する場合には確信法 1 と 2 のどちらの形式もある(例: **ng-an-ta-n** (確信法 1)、**ng-an-tar-oo** (確信法 2) など)。どちらも「行かなかった」を意味する。

³⁴ 接辞の間に現れる母音 a に関して、母音交替(2.5.6)あるいは変化の名残である可能性がある。例えばコピュラ動詞 **ja(r)** が後続した形式が否定過去の由来であることが考えられる(***ng-an (j)a-ta-n** > **ng-ana-ta-n** > **ng-an-ta-n**)。今後さらに調査する必要がある。

(6-116) 非過去

sima=ga kaer-i=n k-un-u.
 島=DAT1 帰る-CVB=も 来る-NEG-NPST

「島に帰っても来ない。」

(6-117) 過去

en-an-ta-n.
 言う-NEG-PST-IND1

「言わなかった。」

6.5.5 語幹拡張接辞

語幹拡張接辞は、動詞語幹が前部要素として複合する際、クラス 1, 2 の場合に現れる接辞である (6.6.1)。それぞれクラス 1 の場合に -i が、クラス 2 の場合に -e が現れる。クラス 3 には現れない。クラス 4 を前部要素とする複合語は見つかっていない。本形態素を中止接辞すなわち屈折接辞と分析しない理由は、複合語の後部要素と共にアクセント単位を成し、1 語だと認められるからである³⁵。

クラス 1 の動詞語幹 jum 「読む」、クラス 2 の動詞語幹 arah 「洗う」を用いて例を挙げる。

(6-118) クラス 1

ng-i+boha-n
 行く-SE+ 願望.NPST-IND1

「行きたい」

(6-119) クラス 2

arah-e+boha-n
 洗う-SE+ 願望.NPST-IND1

「洗いたい」

6.6 接辞以外の動詞形態操作

波照間方言の動詞に関わる形態操作は、これまでに述べてきた接辞の付加が圧倒的に多い。しかし接辞以外にも、2 つ以上の語根から 1 つの語幹を形成する複合法 (6.6.1) が観察される。複合法に加え、歴史的には語幹の一部を重複して語幹を形成する重複法が存在していたと考えられる (6.6.2)。

6.6.1 複合

複合とは、2 つ以上の語根から 1 つの語幹を形成する形態法を指す。1 つの語幹を形成していると判断する基準は、アクセントである³⁶。名詞の複合法については、すでに 5.4.1 で述べた。動詞の複合には、これまでに「動詞語幹+動詞語幹」で 1 語幹を形成する例が見つかった。これを複合動詞と呼ぶ。先行

³⁵ 一方で中止形はそのもので 1 アクセント単位を成し、1 語だと認められる。ただし、複合語の後部要素が属性動詞の場合、前部要素のアクセント型は（語全体ではなく）属性動詞中の ha/sja の直前まで拡張される。詳しくは 6.6.1 を参照されたい。

³⁶ 語を定義する基準については 3.1.1 を参照されたい。

する動詞語幹を前部要素、前部要素に後続する動詞語幹を後部要素と呼ぶ。生産的な複合動詞は、後部要素が *boha* 「～したい」、*misjaha* 「～してよい」、*sis* 「～できる」で見ついている。*boha* と *misjaha* は属性動詞で、*sis* は一般動詞である。この3つ以外に生産的に複合動詞を形成する後部要素は少数である。

前部要素の形式には、動詞の語幹クラスにより、語幹拡張接辞が現れる (6.5.5)。基本的には語幹拡張接辞以外の接辞を含まない語幹が用いられるが、稀に語幹拡張接辞の直前に使役接辞が付加した語幹が複合動詞の前部要素として用いられることがある。³⁷ クラス4の動詞語幹が前部要素となる複合動詞は、これまでにみつっていない。後部要素は複合動詞全体の屈折の役割を担うため、環境により適切に屈折する。願望を表す動詞語幹 *boha* 「～したい」³⁸ を後部要素に持つ複合動詞の前部要素に、クラス1の動詞語幹 *ng* 「行く」、クラス2の動詞語幹 *arah* 「洗う」、クラス3の動詞語幹 *iri* 「入れる」を用いた例を挙げる。

(6-120) クラス1

ng-i+boha-n
行く-SE+ 願望.NPST-IND1
「行きたい」

(6-121) クラス2

arah-e+boha-n
洗う-SE+ 願望.NPST-IND1
「洗いたい」

(6-122) クラス3

iri+boha-n
入れる + 願望.NPST-IND1
「入れたい」

2.3.4.1 で述べた通り、基本的な複合語のアクセントは、前部要素のアクセント型を複合語全体に保存するのだが、後部要素が属性動詞の場合、完全に「全体に保存する」とは言えない。なぜなら、属性動詞は語幹に2アクセント単位を持つからである (2.3.4.2)。属性動詞の語幹は、PC 語根と語幹末音節とでアクセント型が異なる。属性動詞語幹が複合動詞の後部要素として機能する際の、アクセントが保存される範囲を (6-123) に角括弧で示す。括弧は前部要素と後部要素をそれぞれ示す。形態的な単位、すなわち「PC 語根と語幹末音節 (*ha/sja* など)」とアクセント単位、すなわち「前部要素 + PC 語根」に齟齬が見られる。

(6-123) [(前部要素) + (PC 語根) 語幹末音節]

例えば、下降型アクセントを持つ動詞 *h* 「食べる」を例に、ムード形と (6-124a)、複合動詞のムード形の例を挙げる。複合動詞の例 (6-124b) では、*h-e+bo* でアクセント単位を成し (下降型)、*ha-n* でまた1アクセント単位を成す (平進型)。

³⁷ その他の接辞 (例えば受身接辞や可能接辞) が語幹に付加し、複合動詞を形成する例は見つっていない。

³⁸ 語幹末音節の分節音が *ha* であるので、*ha* 属性動詞と考えるが、単独で用いられる例は見つっていない。

- (6-124) a. ho-n(\\)
 食べる.NPST-IND1
 「食べる」
- b. he+bo(\\)ha-n(\\)
 食べる.SE+ 願望.NPST-IND1
 「食べたい (おなかが空いた)」

6.6.1.1 願望

boha を後部要素に持つ複合動詞は、動作主体の願望を表す。「～したい」と訳せる。動作主体の願望という点で、話し手の聞き手に対する願望を表す命令法接辞 (6.4.6)、あるいは意志法接辞 (6.4.7) と異なる。boha の由来は不明であるが、語幹末に ha という形式を含み、他の属性動詞と並行的に考えられるため、属性動詞だと分析する³⁹。

- (6-125) a. na=ga ng-i+boha-n.
 そこ=DAT1 行く-SE+ 願望.NPST-IND1
 「そこに行きたい。」
- b. mizī iri+boha-n.
 水 入れる + 願望.NPST-IND1
 「水を入れたい。」
- c. kuri he+boha naa?
 これ 食べる.SE+ 願望.NPST Q
 「これを食べたいのか？」

6.6.1.2 許可

misjaha を後部要素に持つ複合動詞は、節に示されるイベントに対する許可を表す⁴⁰。「～してよい」と訳せる。misjaha は sja 属性動詞「よい」を由来とする。

- (6-126) a. na=ga ng-i+misja naa?
 そこ 行く-SE+ 許可.NPST Q
 「そこに行ってよいか？」
- b. ki+misja-n.
 来る.SE+ 許可.NPST-IND1
 「来ていいよ。」

³⁹ 可能性として、「欲しい」を意味する属性動詞の fusaha がある。連濁の音韻規則 (2.5.4) f→b を考慮すると、関連している可能性はある。

⁴⁰ sja 属性動詞の語幹末音節 ha は現れる場合と現れない場合がある (6.1)。

(6-127) mizi iri+misja naa?

水 入れる + よい.NPST Q

「水を入れてよいか？」

6.6.1.3 能力

sis を後部要素に持つ複合動詞は、イベントを遂行する能力を、動作主体が持ち合わせていることを表す。可能接辞 (6.5.3) が動作主体の能力、あるいは動作主体の能力以外の、様々な要因による可能性が表せる一方、複合動詞は、動作主体の能力を表す例のみ見つかっている。これまでに、非過去の例のみ見つかっており、過去接辞を付加した例は未調査である。過去接辞を付加した例に関しては、今後の課題とする。

sis の由来は、「知る」を意味する一般動詞である可能性が高い⁴¹。ただし、否定接辞が付加する際、一般動詞では見られない形式が実現する。複合動詞の後部要素では、通常想定される形式 sis-an⁴²に加え、s-an⁴³という形式が用いられることがある。このため、文法化が進み、否定の時は sis-an の他に s-an も許容するのか、あるいは由来が異なるのかは現段階では不明である。(6-128) に例を挙げる。

(6-128) a. baa ui+sis-j a-n.

1ST.SG 泳ぐ.SE+ 能力-CVB 継続.NPST-IND1

「私は泳げる。」

b. ui+sis-an-u/ui+s-an-u.

泳ぐ.SE+ 能力-NEG-NPST

「泳げない。」

c. saki num-i+s-an-u.

酒 飲む.SE+ 能力-NEG-NPST

「酒を飲みきれない。(下戸である、の意。)」

d. jaasee iri+sis-j a-n.

野菜 入れる + 能力-CVB 継続.NPST-IND1

「(高いところにあるかごに) 野菜を入れられる。」

6.6.1.4 その他

この他に、生産的ではないものの見つかっている複合動詞に、ndi+peri「出入りする」、mu+ndi「思いつく」⁴⁴、f-i+gisjaha「降りそう」、uti+gisjaha「落ちそう」、mabuti+gisjaha「転びそう」がある⁴⁵。

⁴¹ sis はそのまま用いられることはなく、否定接辞が付加しない場合は、sis-j a (知る-CVB 継続 1)「知っている」という補助動詞構文が必ず用いられる (9.2.1)。この他の候補には、sis「切る」がある。

⁴² 初頭音節に含まれる母音 i は、2.5.6 で述べた動詞語幹の非語幹末母音交替規則によって、i から i に変化したものである。

⁴³ s-an は、s「する」に否定接辞を付加した形式と同じである。

⁴⁴ mu「思う」は不規則動詞語幹である。

⁴⁵ gisjaha を含む複合語では、-sar という形式が後続することがある。sa は歴史的には属性動詞の語幹の一部であった可能性がある (p. 145, 注 6.1.2.2)。歴史的な変化について調査を進める必要がある。なお、-sar が現れない形式 (例: uti+gisjaha-n (落ちる + 前望.NPST-IND1)) でも用いられる。

- (6-129) pītu=nu ndi+per-i...
 人=NOM 出る + 入る.CVB
 「人が出入りして…」
- (6-130) e, mu+nd-a k-j a-n.
 そう 思う + 出る-CVB 接近-CVB 継続 1.NPST-IND1
 「そう、思い出してきた。」
- (6-131) ami=ndu f-i+gisja-sar-oo.
 雨=FOC 降る-SE+ 前望.NPST-?-IND2
 「雨が降りそうだ。」
- (6-132) uti+gisja-sar-oo.
 落ちる + 前望.NPST-?-IND2
 「落ちそうだ。」

6.6.1.5 派生接辞なのかあるいは複合語の後部要素なのか

これまでに述べた複合動詞について、アクセントから1つの語幹を成しているという判断は可能である。しかし、本論文で複合動詞の後部要素と呼んでいる形式の一部が派生接辞である可能性について述べていない。本節では派生接辞ではないと分析する理由について述べる。

生産的に複合動詞を作る3つ後部要素のうち、misjahaは属性動詞として「よい」という意味を表し、複合動詞語幹の後部要素として用いられた場合にも「～してよい」という意味を表す点で、複合の典型例と呼べる(6.6.1.2)。一方で、bohaは属性動詞として用いられる例は見つかっていない。sis「知る」に関しては、一般動詞として用いられるものの、複合動詞語幹の後部要素として用いられた場合に「～できる」という意味を表し、元来の意味を保持しているわけではない。従って、bohaあるいはsisを(派生)接辞として分析することが可能である。

しかし、misjahaを含み、これらの形式に先行する動詞語幹には共通して語幹拡張接辞(6.5.5)が付加することがわかっている。本論文では、misjaha, boha, sisに語彙的な文法化の程度に差はあるものの、共通する形式面を優先する。語幹拡張接辞を付加することを複合と接辞の違いと考え、bohaもsisもどちらも複合語の後部要素として扱う。

6.6.2 重複

重複法とは、語幹の一部を繰り返し、語幹を形成する形態法を指す。波照間方言には歴史的に重複法が認められた可能性がある。しかし、現代では一部の語彙にその痕跡が観察されるのみである。重複法が施された形式で化石化したと分析できる。動詞に関しては、これまでにsja属性動詞で3語見つかっている。

(6-133) から(6-135)に、重複法を施されていると考えられる属性動詞の例を挙げる。kesja～keesjaha「きれい」、sanisjaha「うれしい」、niisjaha「似ている」である⁴⁶。

⁴⁶ 重複した形式が、基盤となる形式に先行するのかが後行するのかに関しての判断は、例が少ないため難しい。しかし、仮にPC

(6-133) keekesja-n.

とてもきれい.NPST-IND1

「とてもきれいだ。」 cf. keesjaha 「きれいだ」

(6-134) saniisanisja-n.

とてもうれしい.NPST-IND1

「とてもうれしそうだ。」 cf. sanisjaha 「うれしい」

(6-135) niiniisja-n.

とても似ている.NPST-IND1

「とても似ている。」 cf. niisjaha～nisisjaha 「似ている」

この他に、副詞でも重複法を施されたと分析できる語がいくつか見つかっている。副詞に関しても、すでに化石化したものと考えられる。これらの語は、p. 89 の 3.2.4 に挙げた⁴⁷。

語根を重複し語頭に付加すると分析する。語頭に付加する PC 語根末に同母音連続がない場合には、同母音音素を挿入すると分析できる。

⁴⁷ 例えば、1 音節語の PC 語根に関しては、naaha 「長い」に関連して naanaa 「とても長く」、pesjaha～peesjaha 「早い」に関連して peepee 「とても早く」、piisjaha 「寒い」に関連して piipii 「とても寒く」がある。2 音節語の PC 語根に関しては、takaha 「高い」に関連して takaataka 「とても高く」、pikoha 「気を付ける」に関連して pikopiko 「とても気を付けて」、maroha 「短い」に関連して maromaro 「とても短く」、acaha 「厚い」に関連して acaaaca 「とても厚く」、kumaha 「細かく」に関連して kumaakuma 「とても細かく」がある。

第 7 章

品詞をまたぐカテゴリー

本章では、品詞をまたぐカテゴリーとして認める指示語と疑問語についてそれぞれ 7.1 と 7.2 で述べる。指示語は、直示的な語のうち指示的に用いられる語を指す。指示語には、指示代名詞、指示連体詞、および指示様態詞の 3 つの品詞が含まれる。疑問語は、内容疑問文の中で疑問部分を明示するのに用いられる語を指す。疑問語には、疑問代名詞と指示様態詞の 2 つの品詞が含まれる。このうち、指示代名詞も疑問代名詞も、名詞類に属する語である。

7.1 指示語

波照間方言の直示的な語のうち、指示的に用いられる語すなわち指示代名詞 (5.1.3)、指示連体詞 (3.2.3)、および指示様態詞 (3.2.5) を、同じ機能を持つ語としてまとめ、指示語と呼ぶ。指示代名詞には、人物や事物を表す語と場所を表す語がある。表 7.1 に人物や事物を表す指示代名詞と指示連体詞、指示様態詞の一覧を、表 7.2 に場所を表す指示代名詞の一覧をそれぞれ挙げる。前者には近称と非近称の区別があり、後者には近称、中称、遠称の区別がある。

表 7.1: 指示語（人・事物）

	近称	非近称
指示代名詞・単数	ku-ri	u-ri
指示代名詞・複数	ku-ri-ma ku-ri-nda	u-ri-ma u-ri-nda
指示連体詞	ku-nu	u-nu
指示様態詞	ke	e

表 7.2: 指示語（場所）

	近称	中称	遠称
指示代名詞・場所	mo	na	ha

周辺の方言を含む琉球諸語の多くの方言では、指示語に近称、中称、遠称の 3 項対立が多く見られ、その語根は、近称が ku、中称が u、遠称が (k)a であるものが多い。波照間方言では指示場所名詞を除き、近称と非近称の 2 項対立に変化したと言える。波照間方言の近称には文節音として k(u) が含まれるため、

周辺方言と音対応が見られる。非近称に関しては、物体の指示語と指示連体詞には周辺方言の中称語根 *u* との音対応が見られるが、指示様態詞に関する対応は不明である。指示場所名詞に関しては、周辺方言との音対応がない¹。以下では、まず2項対立の指示語の形式と機能について述べ、続いて3項対立の指示語の形式と機能について述べる。

2項対立の指示代名詞は、近称が *kuri*、非近称が *uri* である。話し手の目の前にあるものを指す場合、近称 *kuri* を用い、話し手の目の前にあるもの以外を指す場合は、非近称 *uri* を用いる。以下に例文を挙げる。例文は、5.1.3 に挙げたものと同じである。

(7-1) a. *kuri=ja nuu jaa?*

これ=TOP 何 Q

「これは何だ？」

b. *kuri be+sima=na a mun raa.*

これ 1ST.PL.INC+ 島=LOC1 ある.NPST もの DSC1

「これは、波照間島にあるものだね。」

c. *be+sima=nu pïtu=a sjaa kuri sike dar-oo.*

1ST.PL.INC+ 島=GEN 人=TOP 毎日 これ 使う.CVB 継続 1-NPST.IND2

「波照間島の人は毎日これを使っているよ。」

(7-2) a. *uri=ja nuu jaa?*

あれ=TOP 何 Q

「あれは何だ？」

b. *pïte nagj=a uri=si=ru suu ho-tar-oo.*

畑 LOC2=TOP あれ=INS=FOC 汁 食べる-PST-IND2

「畑ではあれで汁を飲んだよ。」

c. *uri-ma=n goobi o-ta te joo.*

あれ-PL=も 沢山 いらっしゃる-PST DIR.EV1 DSC2

「あの人達も沢山いらっしゃったってばよ。」

指示連体詞 (3.2.3) は、近称が *kunu* 「この」、非近称が *unu* 「あの、その」である。指示連体詞が修飾部を占める場合、修飾部と主要部の関係は、直示的な位置関係と対象を表す。話し手に近いものを指す場合に近称 *kunu* 「この」を用い、話し手から遠いものを指す場合に遠称 *unu* 「あの・その」を用いる。

(7-3) *kunu midumu*

この 女

¹ 石垣四箇方言 (宮城 2003)、竹富方言 (西岡・小川 2011)、黒島方言 (原田 2015) などの周辺の八重山方言で、場所を表す指示名詞は、*ku* (近称) / *u* (中称) / *(k)a* (遠称) と音対応のある形式が見つかっている。その他に、奄美語 (Niinaga 2014, 白田 2016)、宮古語 (Shimoji 2008, 林 2013) などでも同様の形式が報告されている。波照間方言の場所名詞に関して、基本的には *mo/na/ha* という周辺方言とは音対応がない形式を主に用いるものの、*zankaman* 「どこもかしこも・あちこち」という意味を表す語が見つかっており、語中に遠称を表す指示場所名詞 *ka-ma* を見出すことができる。一部の語にのみ、音対応のある形式が残っている可能性がある。

「この女」

(7-4) **unu** bidumu

あの 男

「あの男」

例えば、(7-3) は話し手の近くにいる女性を指し、(7-4) は話し手から遠い男性を指す。聞き手の位置は関与しない。位置関係は場所に限らず、時間的な位置関係も表しうる。遠称 **unu** 「あの・その」の例のみ見つかった。時間的な位置関係を表す場合は、発話時以前かつ先行文脈で述べられたイベントの生じた時間を表す²。

(7-5) a. [**unu**] basi

あの 時

「あの時」

b. [**unu**] <zidai>

あの 時代

「あの時代」

c. [**unu**] <toozi>

あの 当時

「あの当時」

指示様態詞 (3.2.5) は、近称が **kee** 「こう」、非近称が **ee** 「ああ、そう」である。話し手に近い様態を表す場合に近称 **kee** を用い、話し手から遠い様態を表す場合に遠称 **ee** を用いる。後者は昔の様態について用いられることが多い。

(7-6) a. **kee** sikur-iba.

こう 作る-IMP

「(作り方を見せながら) こう作りなさい。」

b. mugasi=a **ee** ja-ta-n.

昔=TOP そう COP-PST-IND

「昔はそんな風でした。」

指示語のうち、場所を表す指示代名詞にのみ、近称、中称、遠称の3つの区別がある。近称の **moo** は、話し手のいる場所、あるいは所属する場所、中称の **naa** は、相対的に話し手から遠く、聞き手に近い場所、そして遠称の **haa** は、話し手からも聞き手からも遠い場所を指す。以下に例文を挙げる。例文は、5.1.3 に挙げたものと同じである。

(7-7) a. tusaha ki **mo**=ga bagi k-un-u.

遠い 理由 2 ここ=DAT1 限界 来る-NEG-NPST

「遠いからここまで来ない。」

² 発話時以降を表す例は見つかっていない。テキストの種類による可能性も考えられる。

- b. **mo**=a nisi+mura.
 ここ=TOP 北 + 村
 「ここは北集落だ。」
- c. **mo**=gi ha=gi=n sik-i sik-j a-n.
 ここ=LOC2 あそこ=LOC2=も 置く-CVB 準備-CVB 継続.NPST-IND1
 「あちらこちらにも置いてある。」
- (7-8) a. **na**=ga sik-iba.
 そこ=DAT1 置く-IMP
 「そこに置け。」
- b. **na**=gi e=nu panasi=ndu maa ici=n maa <tanosimi> si...
 そこ=LOC1 そう=GEN 話=FOC まあ いつ=も まあ 楽しみ する.CVB
 「そこでそんな話をして、いつでも楽しんで」
- c. ...<haitacu>=ndu **na**=ga moc-i k-j a-ta te joo.
 配達=FOC こちら=DAT1 持つ-CVB 来る-CVB 継続 1-PST DIR.EV1 DSC2
 「(荷物を) 配達 (員) がこちらに持ってきたってばよ。」
- (7-9) a. **ha**=ga ngi.
 あそこ-DAT 行く-IMP
 「あっちに行け。」
- b. **haa**=nu ina=nu pata=nu gama=nu siita=na...
 あそこ=GEN 海=GEN そば=GEN 洞窟=GEN 下=LOC1
 「向こうの海のそばの洞窟の下で、…」
- c. **ha**=ra mi-tari=nu utama-nzi=ndu ku-ta siika...
 あそこ=ABL 3-CLF. 人=GEN 子ども-PL=FOC 来る-PST 逆接
 「あちらから 3 人の子ども達が来たけれど、…」

7.2 疑問語

疑問語は内容疑問文 (10.1.1.2) において、疑問部を明示する語としてまとめられる。疑問代名詞 (5.1.4) および、様態指示詞 (3.2.5) の *nee* 「どう」を当該機能を持つ語としてまとめ、疑問語と呼ぶ。表 7.3 に疑問語の一覧を挙げる。

表 7.3: 疑問語

	形式	意味
疑問代名詞	taa	誰
疑問代名詞	nuu	何
疑問代名詞	zaa	どこ・どちら
疑問代名詞	ici	いつ
疑問代名詞	uubi	いくつ・いくら
様態指示詞	nee	どう

以下にそれぞれの疑問語を用いた例文を挙げる。この他に疑問語を使用した例文は 10.1.1.2 を参照されたい。

(7-10) taa 「誰」

- a. **ta**=ndu ng-uta raa?
 誰=FOC 行く-PST Q
 「誰が行ったのか？」
- b. **ta**+hi=ga=ci ng-j a-ta raa?
 誰 + 家=DAT1=ALL 行く-CVB 継続 1-PST Q
 「誰の家に行ってたのか？」
- c. **ta**=ndu sinsin naa?
 誰=FOC 先生 Q
 「誰が先生か？」

(7-11) nuu 「何」

- a. **nu**=ndu fusar-i o baa?
 何=FOC 欲しい-CVB 敬意.NPST Q
 「何が欲しいですか？」
- b. **nuu**=si=ru sikur-j a baa?
 何=INS=FOC 作る-CVB 継続 1.NPST Q
 「何で作っているか？」
- c. **nuu**=nu jaasee sike baa?
 何=GEN 野菜 使う.CVB Q
 「何の野菜を使うか？」

(7-12) zaa 「どこ」

- a. **za**=ndu accaha baa?
 どこ=FOC 暑い.NPST Q

「どちらが暑いですか？」

- b. **za=ga=ru** o baa?

どこ=DAT1=FOC いらっしゃる.NPST Q

「どこにいらっしゃいますか？」

- c. **za=nu** sīma=na a baa?

どこ=GEN 島=LOC1 ある.NPST Q

「どこの島にあるか？」

(7-13) **icī** 「いつ」

- a. **icī=ndu** misja baa?

いつ=FOC よい.NPST Q

「いつがよいですか？」

- b. **icī=ndu** k-j a-ta raa?

いつ=FOC 来る-CVB 継続-PST Q

「いつ来ていたのか？」

- c. **urj=a** **icī** ja-ta naa?

あれ.TOP いつ COP-PST Q

「あれはいつだったかね？」

(7-14) **uubi** 「いくら・いくつ」

- a. **uubi** jarj oo baa?

いくつ COP.CVB 敬意.NPST Q

「いくらですか？」

- b. **uubi** ja-ta raa?

いくら COP-PST Q

「いくらだったか？」

(7-15) **nee** 「どう」

- a. **nee=nu** masamunu=ndu siko-ta raa?

どう=GEN ごちそう=FOC 作る-PST Q

「どんなごちそうを作ったか？」

- b. **nee** jarj oo baa?

どう COP.CVB 敬意.NPST Q

「どうですか？」

- c. **nee=nu** panasī suu kajaa.

どう=GEN 話 する.NPST 自問

「どんな話をするかね。」

第 8 章

名詞句

名詞句は、基本的に (8-1) のように分析できる。

(8-1) (修飾部) 主要部

必須となる主要部には名詞が現れ、主要部名詞に対して修飾部が先行する。基本的に括弧内の修飾部は非必須要素である。本論文では、主要部が修飾部を持たない場合、すなわち名詞 1 語であっても、発話内で統語機能を果たす名詞を指す際には、名詞句と呼ぶ。

直格項 (S/A/P 項) あるいは名詞述語は、名詞句がそのまま用いられるが、斜格項として用いられる名詞句には、音形を持つ格助詞が後続する。名詞句に格助詞が後続する場合、それ全体を「拡張名詞句」(下地 2018) と呼ぶ。拡張名詞句の構造を (8-2) に挙げる。

(8-2) (修飾部) 主要部 格助詞

波照間方言の名詞句は、次の構造を取りうる。このうち、1 から 5 の構造は修飾部と主要部の関係は従位関係だが、6 の構造のみ等位関係である。構造としては修飾部と主要部と記載したが、意味的な従属関係はない。5 の構造のみ、例外的に修飾部が必須である。

1. [名詞句=属格助詞]_{修飾部} 主要部
2. [指示様態詞]_{修飾部} 主要部
3. [指示連体詞]_{修飾部} 主要部
4. [連体節]_{修飾部} 主要部
5. 修飾部 [形式名詞]_{主要部} あるいは修飾部 [=形式名詞]_{主要部}
6. [名詞句=共格助詞]_{修飾部} 主要部

本節では 1 から 6 の名詞句の構造について 8.1 から 8.6 で記述し、その後、斜格項の格関係を示す格助詞について 8.7 で述べる。

8.1 修飾部に名詞句と属格助詞が現れる場合

最も一般的な名詞句の修飾部は、名詞句に属格助詞=nu (8.7.9) が後続する形式である。修飾部名詞句の主要部には、名詞のうち普通名詞と数詞が現れる¹。以下の例文では、修飾部を角括弧、修飾部名詞句の主要部を太字で示す。(8-3) を例にとると、全体の名詞句の主要部は **ama**「姉」であり、この主要部を **tamuree** という名詞句が修飾している。修飾部に現れる名詞句の主要部は **tamuree**「田盛(屋号)」である。

(8-3) 普通名詞

[**tamuree=nu**] **ama**
 屋号=GEN 姉さん
 [主要部=属格]_{修飾部} 主要部
 「田盛さんちの姉さん」

(8-4) 数詞

[**mi-tari=nu**] **utama-nzi**
 3-CLF. 人=GEN 子ども-PL
 [主要部=属格]_{修飾部} 主要部
 「3 人の子ども達」

修飾部として機能する名詞句は、すでに 8.7.9 で述べた通り、主要部名詞に対して主に以下の意味関係を表す。

- 所属とメンバーの関係
- 数と対象の関係
- 所有者と被所有者の関係
- 全体と一部の関係
- テーマと対象の関係

例えば (8-3) は、メンバー (**ama**「姉」) の所属 (**tamuree**「田盛(屋号)」) を、(8-4) は指示対象 (**utama-nzi**「子ども達」) の数 (**mi-tari**「3 人」) を表す。その他の例は、8.7.9 の (8-100) から (8-102) を参照されたい。

修飾部として機能する名詞句に、さらに別の名詞句が修飾部として現れうる。例えば (8-5) に例を挙げる。(8-5a) は、これまでの例と同様に、主要部名詞 1 つから成る名詞句によって修飾される名詞句である。一方 (8-5b) は、(8-5a) の修飾部として機能する名詞句 **ama=nu** (姉=GEN)「姉さんの」を、さらに名詞句 **tamuree=nu** (屋号=GEN)「田盛の」で修飾した例である。

¹ 人称代名詞が他の名詞を修飾する場合、複合してしまうためここでは扱わない (5.1.1)。

- (8-5) a. [ama=nu] kui
 姉さん=GEN 声
 [主要部=属格]_{修飾部} 主要部
 「姉さんの声」
- b. [[tamuree=nu] ama=nu] kui
 屋号=GEN 姉さん=GEN 声
 [[主要部=属格]_{修飾部} 主要部=属格]_{修飾部} 主要部
 「田盛の姉さんの声」

このように、名詞句による修飾は、入れ子構造になることが可能であり、修飾部をさらに修飾することが比較的自由にできる。これまでの調査で得た談話内において、最も長い名詞句による修飾部は、4つの名詞句から成るものである (8-6)²。

- (8-6) [[[[haa=nu] ina=nu] pata=nu] gama=nu] sita=na...
 あちら=GEN 海=GEN そば=GEN 洞窟=GEN 下=LOC1
 [[[[主要部=属格]_{修飾部} 主要部=属格]_{修飾部} 主要部=属格]_{修飾部} 主要部=属格]_{修飾部} 主要部=位格
 「あちらの海のそばの洞窟の下に… (住んでいたそうだ)」

修飾部として機能する名詞句の主要部は、項として機能する名詞句と同様に、名詞句以外の修飾方法も受けることが可能である。例えば、指示連体詞による修飾 (8.3) を受けた名詞句が、他の名詞句の修飾部として機能する例を (8-105) に挙げる。

- (8-7) [unu isipanza=nu] uraza nagi...
 あの 一番座=GEN 裏座 LOC2
 [[指示連体詞]_{修飾部} 主要部=属格]_{修飾部} 主要部 位格
 「その一番座³の裏座で…」

8.2 修飾部に指示様態詞が現れる場合

名詞句の修飾部には、指示様態詞が現れうる。指示様態詞は、遠称 e「そう」、近称 ke「こう」、不定を表す nee「どう」の3つである (3.2.5)。指示様態詞が主要部名詞を修飾する際、2通りの構造が観察されている。(1) 指示様態詞に属格=nu が後続する場合 (8-8) と、(2) 単に主要部の前に並置する場合 (8-9) である。以下に示す例文では、修飾部を角括弧、修飾部として機能する指示様態詞を太字で示す。

- (8-8) [e=nu] panasi
 そう=GEN 話
 [指示様態詞=属格] 修飾部 主要部
 「そんな話」

² (8-6) は、[[haa=nu] [[ina=nu] pata=nu] gama=nu] sita「あちらの、海のそばの洞窟の下」という解釈、すなわち haa=nu が、ina=nu pata=nu gama を修飾していると解釈することも可能である。しかし、ここでは例に挙げた通りの解釈である。

³ 一番座とは、門を入った所の右手にある部屋のことである。裏座はその後ろにある部屋を指す。

- (8-9) [e] munu
 そう もの
 [指示様態詞]_{修飾部} 主要部
 「そんなもの」

指示様態詞が修飾部を占める場合、先行文脈にある指示対象の様態を表す。現場指示の場合は、会話場面にある人や物の様態を表す。現場指示や、近くを指す場合に kee、それ以外に ee を用いる。例えば (8-10) は、昔話を語り終わった場面での例文である。話の内容を聞き手と共有しているため、遠称の指示代名詞 ee「そう」は、昔話の内容全体を指す。便宜的に項を括弧で示す。

- (8-10) [e=nu] panasĩ=ndu a-tar-oo.
 そう=GEN 話=FOC ある-PST-IND2
 ([指示様態詞=属格]_{修飾部} 主要部)_{項=焦点} 述語
 「そんな話がありました。」

ee と kee の区別に関しては、明確な線引きができない場合がある。例えば、(8-10) の修飾部 ee=nu（そう=GEN）「そんな」を、近称の指示様態詞 kee「こう」(8-11) に変えても、大きな意味の違いは観察されない。

- (8-11) [ke=nu] panasĩ
 こう=GEN 話
 「こんな話」

指示対象を共有していない場合（特定しない場合や不明である場合）には、不定を表す指示様態詞 nee「どう」が用いられる。(8-12) に、不定を表す nee「どう」が修飾部を占める例を挙げる。主要部名詞 masamunu「ごちそう」の様態は、聞き手と共有されていない。

- (8-12) [ne=nu] masamunu
 どう=GEN ごちそう
 「どんなごちそう（を作ったか?）」

指示様態詞が単に主要部名詞の前に置かれる例は、ee munu「そんなもの」あるいは kee munu「こんなもの」という表現でのみ見つかっている。

- (8-13) [e] munu [ke] munu
 そう もの こう もの
 「そんなものやこんなもの」

指示様態詞が修飾部として機能する場合、さらなる修飾は受けない。

8.3 修飾部に指示連体詞が現れる場合

名詞句の修飾部には、指示連体詞が現れうる。指示連体詞は、遠称 unu「あの・その」と近称 kunu「この」の2つである(3.2.3)。指示連体詞が修飾部に現れる場合、指示連体詞は単に主要部名詞の前に置か

れる。以下に示す例文では、修飾部すなわち指示連体詞を角括弧と太字で示す。

- (8-14) a. **[unu]** pĭtu
 あの 人
 [指示連体詞]_{修飾部} 主要部
 「あの 人」
- b. **[unu]** utama
 あの 子ども
 [指示連体詞]_{修飾部} 主要部
 「あの 子ども」
- c. **[unu]** koosi
 あの 菓子
 [指示連体詞]_{修飾部} 主要部
 「あの 菓子」
- (8-15) a. **[kunu]** pĭtu-ima
 この 人-PL
 [指示連体詞]_{修飾部} 主要部
 「この 人達」
- b. **[kunu]** utama
 この 子ども
 [指示連体詞]_{修飾部} 主要部
 「この 子ども」
- c. **[kunu]** koosi
 この 菓子
 [指示連体詞]_{修飾部} 主要部
 「この 菓子」

指示連体詞の前に、さらに修飾部が現れる例は見つかっていない。

8.4 修飾部に連体節が現れる場合

8.4.1 基本的な構造

名詞句の修飾部には、節も現れうる。このように名詞句の修飾部に表れる節を連体節と呼ぶ。連体節の述語には、動詞の時制形（6.3.2.2）が現れる。以下に示す例文では、修飾部として機能する連体節を角括弧で、連体節の主要部を太字で示す。

- (8-16) [daa **hoo**] munu
 2ND.SG 食べる.NPST もの
 [項 述語]_{修飾部} 主要部

「あなたが食べる物」

- (8-17) [kjuu k-j aa] pïtu
 来る-CVB 継続 1.NPST 人
 [述語]修飾部 主要部
 「今日来てる人」

連体節で修飾される場合、修飾部は、対象となる主要部の様態や属性など様々な関係を表す。例えば(8-16)では、対象となる主要部 *munu* 「もの」の属性、(8-17)では動作様態を表す。指示様態詞と異なる点は、連体節の方がより具体的な動作を表す点である。

修飾部を、動詞ではなく節と分析する理由は、動詞が項を取りうるからである。例えば以下に示す(8-18)では、*sikur-j a* (作る-CVB 継続 1.NPST) 「作った」という述語は *baa* 「私」という A 項を取る。(8-19)は、*amasikuru* 「頭」という S 項を取る。(8-20)は、それぞれ *pimiza* 「ヤギ」、*munu* 「もの」という P 項を取る。

- (8-18) [baa sikur-j a] munu
 1st.SG 作る-CVB 継続 1.NPST もの
 [A 述語]修飾部 主要部
 「私が作ったもの。」

- (8-19) [amasikuru jam-u] munu
 頭 痛む-NPST もの
 [S 述語]修飾部 主要部
 「頭が痛むこと」

- (8-20) a. [pimiza safuk-j ar-u] bidumu
 ヤギ 引っ張る-CVB 継続 1-NPST 男
 [P 述語]修飾部 主要部
 「ヤギを引っ張っている男」
 b. [munu sis-j ar-u] pïtu
 もの 知る-CVB 継続 1-NPST 人
 [P 述語]修飾部 主要部
 「物を知っている人 (物知り)」

■内の関係と外の関係

連体節は、主要部に対し内の関係を表す場合と外の関係を表す場合がある。内の関係とは、名詞句の主要部が連体節述語内の動詞に対する意味役割を担っている関係を指す。外の関係とは、名詞句の主要部が連体節述語内の動詞に対して何も意味役割を担っていない関係を指す。

例えば、(8-21a)に内の関係を表す連体節の例文を挙げる。(8-21a)では、連体節述語は *jag-j ar-u* (焼く-CVB 継続 1-NPST) 「焼いている」、名詞句の主要部は *bujaa* 「おじいさん」である。それを平叙文にしたものが(8-21b)である。*bujaa* 「おじいさん」は、述語 *jag-j ar-oo* (焼く-CVB 継続 1-NPST.IND2) 「焼いているよ」の A 項である。

(8-21) 内の関係

a. 連体節

[juu jag-j ar-u] buja
 魚 焼く-CVB 継続 1-NPST おじいさん
 [P 述語]修飾部 主要部 A
 「魚を焼いているおじいさん」

b. 平叙文

buja juu jag-j ar-oo.
 おじいさん 魚 焼く-CVB 継続 1-NPST.IND2
 A P 述語
 「おじいさんが魚を焼いているよ。」

一方、外の関係を表す連体節では、(8-21)のように連体節を平叙文にすることはできない。(8-22)に外
 の関係を表す連体節の例文を挙げる。名詞句の主要部 kaa「匂い」は連体節の主要部 jagjaru「焼いてい
 る」に対して何の意味役割も担わない。

(8-22) 外の関係

[juu jag-j ar-u] kaa
 魚 焼く-CVB 継続 1-NPST 匂い
 [P 述語]修飾部 主要部
 「魚を焼いている匂い」

■連体節に他の修飾要素が先行する例

連体節に、指示様態詞と指示連体詞が先行する例が見つかっている。指示様態詞が先行する例を (8-23)
 に、指示連体詞が先行する例を (8-24)⁴に挙げる。それぞれ、話し手と聞き手の目の前にある場所 duu
 「所」、と菓子 koosi「菓子」について話しているため、どちらも近称が用いられている。指示様態詞 kee
 は、後続する名詞句 sipaha duu「狭い所」を、指示連体詞 kunu もまた後続する名詞句 maha sj aru
 koosi「おいしそうな菓子」をそれぞれ修飾する。

(8-23) kee [[sipaha] duu] nagi ja-ba=n...
 こう 狭い.NPST 所 LOC2 COP-条件 2=も
 指示様態詞 [[述語]修飾部 主要部] 位格
 「こんな狭い所であっても…」

(8-24) kunu [[maha s-j ar-u] koosi]
 この おいしい する-CVB 継続 1-NPST 菓子
 指示連体詞 [[述語]修飾部 主要部]
 「この美味しなお菓子」

⁴ (8-24)の述語は、複数の動詞を含む動詞句から成る(9章)。

いずれの例も、(1) 連体節が「指示様態詞／指示連体詞 主要部」から成る名詞句に埋め込まれていると分析する可能性と、(2) 連体節内部の要素として分析する可能性がある。本論文では(1)として分析する。なぜなら指示様態詞や指示連体詞に属性動詞を修飾する機能は見つかっていないからである。

8.4.2 特殊な構造

修飾部に現れる連体節中の助詞と述語が融合し、文法化した形式として、引用助詞 2 (tee~ten(u)「～という」)がある(11.1.2)。引用助詞 2 が名詞句の修飾部に現れる構造を、特殊構造として記述する。この構造では、名詞句や節に引用助詞 2 が後続し、名詞句の修飾部に現れる⁵。

この修飾部を連体節の特殊構造として述べる理由は、引用助詞 2 が歴史的に、=ta enu「～と言う」すなわち、引用助詞 1 (=ta「～と」)と、連体節の述語として現れる en「言う」の時制形 en-u(言う-NPST)が融合した形式だからである。現在は見つかっていないが、仮に連体節による修飾を受けた場合の名詞句の例を(8-27a)に挙げる⁶。融合の対象となる引用助詞 1 と連体節述語を下線で示す。この2つの形式の融合により te という新たな形式が生じた(8-27b)。修飾部の構造は、連体節の基本構造(8.4.1)では説明できないが、歴史的な観点から連体節の一種として扱う⁷。なお、(8-27)に挙げる例の意味は、どちらも同じである。

(8-25) a. *[koosi=ta en-u] munu

菓子=引用 1 言う-NPST もの

b. [koosi te] munu

菓子 引用 2 もの

「お菓子というもの」

本特殊構造では、主要部名詞には munu「もの」のような抽象的な意味を持つ名詞や(8-26)、panasi「話」(8-27)、mura「村」といった名詞が現れる(8-28)。修飾部が主要部名詞の具体的な内容を表すと言える。日本語では「(修飾部)という(主要部)」と訳せる。例えば(8-26)であれば、修飾部は主要部 munu「もの」の内容を表す。

(8-26) [<fukei> te] munu

父兄 引用 2 もの

「父兄というもの」

(8-27) [nabihakida ten] panasi

ナビハキダ 引用 2 話

「ナビハキダという話」

⁵ 節と引用助詞 2 の組み合わせでは、節は主に補文節として認められる(11.1)。名詞句の修飾部として現れる節の例は少ない。

⁶ =ta enu munu「～というもの」という3つの形態素の連続は見つかっていない。現代では常に te munu で実現するようである。

⁷ 見かけ上、修飾部には「名詞句と引用助詞 2」あるいは「節と引用助詞 2」という組み合わせが可能である。従って、修飾部に名詞句か節が現れる、と記述することも可能である。しかし、名詞句と節が現れるのは、歴史的には連体節だったからであるので、連体節の特殊構造としてまとめて記述する立場を選択した。

(8-28) [jagumura tenu] mura

地名 引用 2 村

「ヤグムラという村」

特殊構造の多くの場合、名詞と引用助詞 2 の組み合わせであるが、稀に、名詞句や節が引用助詞 2 と組み合わせり修飾部として現れることがある。

(8-29) 名詞句と引用助詞 2

[<kekkonsiki>=nu <siki> te] munu

結婚式=GEN 式 引用 2 もの

「結婚式の、式というもの」

(8-30) 節と引用助詞 2

[[be+sima <o> sikur-ja-ta cju] tenu] panasi

1ST.PL.INC+ 島 を 作る-DUR-PST HS1 引用 2 話

「波照間島を作ったそうだという話」

8.5 主要部に形式名詞が現れる場合

名詞句の中には、8.1 から 8.4 で述べたような基本的な名詞句構造と並行的に分析できるものの、修飾部が必ず現れる名詞句がある。このような構造を持つ名詞句の主要部に現れる形式は、修飾部がない単独の形式では用いられないことがないが、名詞句全体としての分布は、他の名詞句と同じである。従ってこの名詞句構造の主要部に現れる形式を、形式的な主要部名詞すなわち形式名詞として分析する。形式名詞は、語である場合と接語である場合がある。

形式名詞は 11 ある。抽象的な意味から、具体的なものを表す形式まである。これまでに *basī*~*basj* (時点)、*kami* (期間)、*kutu* (事柄)、*mun(u)* (事物)、*nee, jo* (様態)、*sīku*~*siku* (程度)、*duu*~*duri* (場所)、*sjaami* (予定)、*=muni* (言葉)、*=sima* (島) が見つかっている。このうち、*mun(u)* はモーダル助詞 (10.5.2) として文法化しつつある例が見つかっている。例を挙げる際には、修飾部を角括弧で示す。

8.5.1 時点を表す形式名詞

時を表す形式名詞は、*basī*~*basj* である。主題助詞=*a* が後続する際に *basj* が実現し、それ以外の環境で *basī* が実現する。*basī*~*basj* は、時点を示す。主に、主題助詞=*a* が後続し、「～の時は」という意味で用いられる。

(8-31) a. *aaii, joo maa [siko] basj=a siko-n sika maa.*

INTJ DSC2 INTJ 使う.NPST 時=TOP 使う.NPST-IND1 逆接 INTJ

「いや、ね、ま、使う時は使うけど、もう。」

- b. [unu] **basj**=a <sekken> te munu nen doo=cja.
 あの 時=TOP 石鹼 引用 2 もの ない.NPST DIR.EV5=条件 3
 「あの当時は石鹼というものがなかったら。」
- c. iiba=si=ru jar-er-oo, [unu] **basj**=a maa.
 ちょうど=INS=FOC COP-?-IND2 あの 時=TOP INTJ
 「ちょうどですよ、あの時はもう。」

主題標識が後続しない場合もあるが、例は多くない。

- (8-32) a. <kekkonsiki> ja te [<kantan> ja-ta] **basī** raa.
 結婚式 COP.NPST 引用 2 簡単 COP-PST 時 DSC1
 「結婚式だったって、簡単だった時代だよ。」
- b. [per-i kuu] **basī**=n <cjanto> sis-i da-ta <kara>...
 入る-CVB 接近.NPST 時=も ちゃんと 知る-CVB 継続 1-PST から
 「入ってくる時もちゃんと知っていたから…」
- c. [sina aa] **basī** <jurja> ami fu-iba=ndu zootuu.
 太陽 ある.NPST 時 よりは 雨 降る-条件 2=FOC 上等
 「(農作業は) 太陽がある時よりは、雨が降った方が上等だ。」

8.5.2 期間を表す形式名詞

期間を表す形式名詞は、kami~kamj である。kamj は主題助詞=a が後続する際に実現し、それ以外の環境で kami が実現する。kami~kamj は、ある一定の期間を示す。

以下に例を示す。(8-33) に挙げる例文のように「~(する)頃」とも訳せれば、主題助詞が後続し「~(する)と」(8-34) や、具格助詞が後続し「~(する)間に」(8-35) などと訳せることがある。

- (8-33) [isjagahar-u] **kami**=nu panasī
 小さい-NPST 間=GEN 話
 「小さい頃の話」
- (8-34) a. [kunu itu <tadori> ng-u] **kamj**=a... pari=ndu min naga sac-ar-a
 この 糸 辿り 行く-NPST 間=TOP 針=FOC 目 LOC3 刺す-受身-CVB
 bir-j a-ta cju.
 継続 2-CVB 継続 1-PST HS1
 「この糸を辿って行くと、…針が(蛇の)目に刺さっていたそうだ。」
- b. [ng-an] **kamj**=a bagar-an-u.
 行く-NEG.NPST 間=TOP 分かる-NEG-NPST
 「行かないとわからない。」

- (8-35) [ba=ndu isasīma=ci ng-i kuu] **kami**=si, daa <benkjoo> goobi si
 1ST.SG=FOC 石垣島=ALL 行く-CVB 接近.NPST 間=INS 2ND.SG 勉強 沢山 する.CVB
 sik-i joo.
 準備-IMP DSC2
 「私が石垣に行ってくる間に、お前は勉強沢山しておきなさいよ。」

kami が最も使用される場面は、接続表現の *ee su kamj=a* (そう する.NPST 間=TOP) 「そうしているうちに」である。

- (8-36) [e su] **kamj**=a midumu=ja parum-i=sa nen-ta cju.
 そう する.NPST 間=TOP 女=TOP 孕む-CVB=? 完了-PST HS1
 「そうしているうちに、娘は孕んでしまったとき。」⁸

8.5.3 事柄を表す形式名詞

事柄を表す形式名詞は、**kutu** である。**kutu** が名詞句主要部に現れる場合、「～(する) こと」という意味で用いられる。修飾部に指示様態詞が現れる例と連体節が現れる例を、それぞれ (8-37) と (8-38) に挙げる。

- (8-37) [e=n] **kutu**
 そう=GEN 事
 「そんなこと」
- (8-38) a. [nu=ndu sisoosja] **kutu**=nu a baa?
 何=FOC 白い.NPST 事=NOM ある.NPST Q
 「何が白いという事があるか? (白くないでしょ)」
- b. [<tamago takusan> a-n ten] **kutu**=nu ar-an sika...
 たまご 沢山 ある.NPST-IND1 引用 2 事=NOM ある-NEG.NPST 逆接
 「たまごが沢山あるということはないけれど…」

8.5.4 物事を表す形式名詞

物事を表す形式名詞は、**mun(u)** である。子音音素間の母音脱落 (2.5.2) の音韻規則が適用される場合に **mun** が、それ以外の環境で **munu** が実現する。**mun(u)** は、物事や人物、出来事など幅広く事柄を表す。「～(する) もの」と訳せる。修飾部に名詞句と属格助詞が現れる例、指示様態詞が現れる例、連体節が現れる例を、それぞれ (8-39) から (8-41) に挙げる。

- (8-39) [ina=nu] **munu**
 海=GEN もの

⁸ 例文中の=sa は、完了の補助動詞構文 (9.2.3) で頻繁に用いられる形態素であるが、詳しい分析は進んでいない。

「海の生き物」

- (8-40) a. [e] **munu** nen-ta-n.
 そう もの ない-PST-IND1
 「(当時) そんなものはなかった。」
- b. [nee=nu] **munu** ja-ta...
 どう=GEN もの COP-PST
 「どんなものだった、(と言えればいい)」
- (8-41) a. paa=si=ru [hoo] **mun** sim-i...
 葉=INS=FOC 食べる.NPST もの 包む-CVB
 「葉っぱで食べるものを包んで…(持って帰った)」
- b. [sunu te] **mun** ar-iba...
 着物 引用 2 もの ある-条件 2
 「着物というものがあれば…(着たけれど)」

8.5.5 様態を表す形式名詞

様態を表す形式名詞には、*nee* と *joo* の 2 種類ある。後者の例が少なく、これまでに見つかったのは 1 例である。前者の *nee* は、「～(する) 通りに」や、「～(する) 様に」のように訳せる。(8-42) から (8-44) に例文を挙げる。

- (8-42) [mu-ja] **nee** joo fuka=ga ndir-ar-un-u.
 思う-DUR 様態 DSC2 外=DAT1 出る-POT-NEG-NPST
 「思う通りにね、外に出られない。」
- (8-43) [munu sis-j ar-u pïtu=nu en-ta] **nee**...
 もの 知る-CVB 継続 1-NPST 人=GEN 言う-PST 様態
 「物知りの人が言った通りに、(海に行き岩場をピョンピョンと渡らせたなら…)」
- (8-44) [kuturami num-uta] **nee** num-an-u.
 昔 飲む-PST 様態 飲む-NEG-NPST
 「昔飲んだ様には(薬を)飲まない。」

基本的には上記の例のように修飾部に連体節が現れるが、修飾部に名詞単独が現れる例が 2 例と、指示様態詞が単独で現れる例が 1 例見つかっている。(8-45) から (8-47) に例を挙げる。この名詞句構造は例外的である⁹。

- (8-45) [tokkin+nari] **nee** e da sika...
 グアバ+実 様態 そう FOC.COP 逆接

⁹ *nee* は、疑問を表す指示様態詞 *nee* 「どう」(3.2.5) と形式が同じである。従って、歴史的に名詞ではなく指示様態詞である可能性もある。

「グアバの実みたいだけど、」

(8-46) [mana] **nee** jam-an-u.

今 様態 痛む-NEG-NPST

「今みたいには痛まない」

(8-47) a. kunu pīmiza kunu naarī ho-n=ta=ru eg-u kajaa.

この ヤギ この 実 食べる.NPST-IND1=引用 1=FOC する-NPST 自問

「このヤギはこの実を食べようとしているのかな。」

b. [e] **nee** dar-oo raa.

そう 様態 FOC.COP-NPST.IND2 DSC1

「そうみたいだね。」

joo は、具格助詞=si が後続し「～の様に」と訳せる。日本語からの借用語の可能性も考えられる。見つかっている 1 例を (8-48) に挙げる。

(8-48) [na=ra <zjooki> nd-un-u] joo=si keesi nta=si nuur-i sita...

そこ=ABL 蒸気 出る-NEG-NPST 様=INS きれいに 粘土=INS 塗る-CVB 継起

「そこから蒸気が出ないように、きれいに粘土で塗って、…」

8.5.6 程度を表す形式名詞

程度を表す形式名詞は、siku~siku である。専ら e su siku (そう する.NPST 程度) という固定表現で用いられ、「それほど」という意味を表す。それ以外の用例はほとんど見つからない。

siku を含む名詞句に後続する述語には、必ず否定接辞が現れる。(8-49) に例を挙げる。

(8-49) a. [e su] **siku** busah-en-u raa.

そう する.NPST 程度 大きい-NEG-NPST DSC1

「それほど大きくないよ。」

b. zīn [e su] **siku** ar-an-ba=n kukuru=nu keesjaha pītu tumi

お金 そう する.NPST 程度 ある-NEG-条件 2=も 心=GEN きれい.NPST 人 探す.NPST

duraa.

DIR.EV5

「お金はそれほどなくても心のきれいな人を(夫に)探すんだよ。」

e su siku (そう する 程度) という表現以外では、向格助詞が後続する例が 1 例見つまっている (8-50)。

(8-50) [nu=ta=n moan] **siku**=ci kaer-i=sa nen-u.

何=引用 1=も 思う.NEG.NPST 程度=ALL 帰る-CVB=? 完了-NPST

「何とも思わないで、帰ってしまった。」

8.5.7 場所を表す形式名詞

場所を表す形式名詞は、**duu**~**duri** である。例が多くなく、2つの形式の現れ方に関しては未だ不明な点が多い。**duu**~**duri** は場所を示す。位格助詞と組み合わさって用いられる例 (8-51)、累加助詞と組み合わさって用いられる例 (8-52a, b) がみついている。いずれも「所」と訳せる。

- (8-51) **kee** [sɪpaha] **duu** nagi ja-ba=n...
 こう 狭い.NPST 所 LOC2 COP.NPST-条件 2=も
 「こんな狭い所でだけでも…」

- (8-52) a. <jononaka> [ke=n] **duri**=n ar-i...
 世の中 こう=GEN 所=も ある-CVB
 「世の中にはこんな所もあって…」

- b. **be**+**sima** **nee** [aa] **duri**=n a-n.
 1ST.PL.INC+ 島 様態 ある.NPST 所=も ある.NPST-IND1
 「波照間島のように、(土釜が) ある所もある。」

8.5.8 予定を表す形式名詞

予定を表す形式名詞に **sjaami** がみついているが、例は1例のみである。**sjaami** は「~のつもり」と訳せる。

- (8-53) [ha<o> sin-asɪ] **sjaami** naa=ta en-tar-a joo...
 自分を 死ぬ-使役 つもり Q=引用 1 言う-PST-条件 1 DSC2
 「自分を死なせるつもりか? と言ったからさ、…」

8.5.9 「言葉」「島」を表す形式名詞

形式名詞は、接語の場合もある。これまでに=**muni**「言葉」、=**sima**「島」で1例ずつみついている。しかし、それぞれ「大和の言葉」、「私たちの島」という組み合わせでしかみつっていない。(8-54) と (8-55) にこれまでに見つかった2例を挙げる。アクセント単位は1つにまとまる。名詞句末にアクセント記号を記す。

- (8-54) jamatu=nu=**muni**/
 「大和の言葉」(cf. jamatu/「大和」、muni/「言葉」)

- (8-55) ba-ima=nu=**sima**/
 「私達の島」(cf. baima/「私達」、sima/「島」)

8.6 名詞句が共格助詞を介し並列する場合

名詞句の構造としては修飾部と主要部と分析できるが、意味的には列挙を意味し、修飾部と主要部という従属関係が成り立たない名詞句がある。このような名詞句構造の場合、修飾部名詞句には共格助詞 **tu**「と」(8.7.10) が後続する。当該名詞句同士の関係を等位関係と呼ぶ。

(8-106) に例を挙げる。**abo**「母親」と **midumu**「女」は意味的に修飾関係にはない。関係は対等である。以下に挙げる例文では、それぞれの名詞句の主要部を太字で示し、名詞句を角括弧で示す。

- (8-56) [[**abo**=tu] **midumu**]=ndu bu-ta cju.
 母=COM 女=FOC いる-PST HS1
 [主要部=共格]_{修飾部} 主要部
 「(昔) お母さんと娘がおったとき。」

並列する名詞句は、それぞれ修飾部を持つことが可能である。(8-57) と (8-58) に例を挙げる。(8-57) は、名詞句による修飾を受ける名詞句同士の並列である。(8-58) は、連体節を修飾部に持つ名詞句と、名詞句を修飾部に持つ名詞句の並列である。

- (8-57) [[[keesee=nu] **buja**=tu] [[keesee=nu] **paa**]]
 屋号=GEN おじいさん=COM 屋号=GEN おばあさん
 [[[主要部=属格]_{修飾部} 主要部=共格]_{修飾部} [[主要部=属格]_{修飾部} 主要部]_{主要部} 名詞句
 「貝敷のおじいさんと、貝敷のおばあさん」

- (8-58) [[**bebisjar-u munu**=tu] [[<cjuu>bara=nu] **munu**]]
 小さい-NPST もの=COM 中くらい=GEN もの
 [[修飾部 主要部=共格] [[主要部=属格]_{修飾部} 主要部]_{主要部} 名詞句
 「小さいものと、中くらいのもの」

8.7 格助詞

波照間方言の直格項の格関係が語順で示されること、および存現構文の一部に主格助詞として=nu が用いられることは、すでに 4.5 で述べた。一方で斜格項の格関係は格標識で示される。p. 110 の表 4.1 を表 8.1 として再掲する。このうち、斜格項に後続する格助詞の形式と機能について 8.7.1 から 8.7.10 で述べる。

表 8.1: 格標識の一覧（再掲）

名称	形式	統語的意味役割・意味役割
直格	∅	S/A/P/名詞述語、時点、数量
(主格)	=nu	S
奪格	=(ga)ra	受身文の動作主、出所、比較対象
与格 1	=ga	使役文の被使役者、到達点
与格 2	=mu	到達点
具格	=si	道具、条件
位格 1	=na	位置
位格 2	nagi~nagj~=gi	位置
位格 3	naga	ターゲット
向格	=(ga)ci	目的地
属格	=n(u)	所有者
共格	=tu	並列、随伴

8.7.1 奪格

奪格助詞は=(ga)ra である。=ra は、場所を表す指示名詞 moo「ここ」、naa「そこ」、haa「あそこ」と組み合わさる際に実現し、それ以外の名詞類には=gara が実現する¹⁰。奪格助詞が後続した斜格項は、述語に対し以下のような関係性を表すことができる。

- 出所
- 比較対象
- 受身の動作者

■出所

奪格助詞が後続する斜格項は、述語の意味により出発地点、開始時刻、情報源といった様々な意味を表すことができる。中核的な意味として「出所」とまとめられる。

(8-59) から (8-62) に例を挙げる。例えば (8-59) では、名詞句 jamatu「大和」は、述語で示される行為、k-j ar-oo（来る-CVB 継続 1-NPST.IND2）「来ました（lit. 来ています）」に対して出発地点を表す。

(8-59) 出発地点

ba jamatu=gara k-j ar-oo.
1st.SG 大和=ABL 来る-CVB 継続 1-NPST.IND2

「私は大和（本州）から来ました。」

¹⁰ 不定指示名詞 zaa「どこ」には、=gara が実現する。

(8-60) 開始時点

acca=**gara** h-an-u.

明日=ABL 食べる-NEG-NPST

「明日から食べない。」

(8-61) 情報源

ama=**gara** sik-uta-n.

姉さん=ABL 聞く -PST-IND1

「姉さんから聞いた。」

(8-62) 開始点

nee=nu panasī=**gara** pazimi baa?

どんな=GEN 話=ABL 始める.NPST Q

「どんな話から始めるか？」

■比較対象

奪格助詞が後続する斜格項は、比較対象（基準）を表すことができる。(8-63) から (8-65) に例を挙げる。例えば (8-63) では、名詞句 *uja* 「親」は、述語で示される行為 *ng-u-n* (行く-NPST-IND1) 「行く」(意訳すると「死ぬ」) に対し、比較の基準となる対象を表す。

(8-63) *uja=gara peesja-na ng-u-n=cja nar-an-u.*

親=ABL 早い-ADVLZ 行く-NPST-IND1=条件3 なる-NEG-NPST

「親より早く逝ってはいけない。」

(8-64) *daa baa=gara taki takaha-n.*

2ND.SG 1ST.SG=ABL 丈 高い.NPST-IND1

「お前は私より背が高い。」

(8-65) *daa=gara buja ja gara...*

2ND.SG=ABL おじいさん COP.NPST 理由1

「あなたよりおじいさん（年上）だから…」

■受身の動作者

奪格助詞が後続する斜格項は、受身接辞を付加する動詞述語に対して、動作主体を表すことができる¹¹。(8-66) と (8-67) に例を挙げる。例えば (8-66) の名詞句 *maju* 「猫」は、述語で示される行為 *h-ar-a-n* (食べる-受身-DUR.NPST-IND1) 「食べられた」の動作主体である。

¹¹ 受身接辞を付加する動詞が述語に現れる文は、平叙文に対して、項を減らす場合と、項を増やす場合がある (10.7.1)。

(8-66) maju=**gara** h-ar-a-n.

猫=ABL 食べる-受身-DUR.NPST-IND1

「猫に食べられた。」

(8-67) ija=**gara** tatag-ar-a-ta-n.

父=ABL 叩く-受身-DUR-PST-IND1

「父親にたたかれた。」

8.7.2 与格 1

与格助詞 1 は=ga である。与格助詞 1 は節の主要部に対して以下のような関係性を表す。

- 到達点
- 使役文の被使役者

■到達点

与格助詞が後続する斜格項は、述語の意味により、行為の受け手、目的地といった意味を表すことができる。中核的な意味を「到達点」と分析する。(8-68) から (8-70) に例を挙げる。例えば (8-68a) の eiko「英子」は、述語で示される行為、batahe (渡す.IMP)「渡せ」の受け手である。

(8-68) 行為の受け手

a. eiko=**ga** batah-e.

人名=DAT1 渡す-IMP

「英子に渡しなさい。」

b. ban=**ga** karah-e.

1st.SG=DAT1 貸す-IMP

「私に貸しなさい。」

c. pana=**ga** mizi hir-u-n.

花=DAT1 水 あげる-NPST-IND1

「花に水をあげる。」

d. usitu=ja maa muru ba=ga zirikka paa=ta eni=ci

年寄=TOP INTJ 全部 1st.SG=DAT1 ジリッカ おばあさん=引用 1 言う.CVB=付帯 1

tur-i dar-u juu, sisaree.

通る-CVB 継続-NPST DSC3 INTJ

「年寄はまあみんな、私に『ジリッカおばあさん』と言って、(ここでは)通っていますよ、はい。」

(8-69) 目的地

- a. kee=**ga** ng-u-n.
井戸=DAT1 行く-NPST-IND1
「井戸に行く」
- b. na=**ga** sik-iba.
そこ=DAT1 置く-IMP
「そこに置きなさい」
- c. higumari s-i fuka=**ga** ndir-ar-un-u.
家籠り する-CVB 外=DAT1 出る-POT-NEG-NPST
「家にこもっていて、外に出られない。」

(8-70) 接触面

suu ma, birikanapaa=**ga** sim-i,
汁 INTJ クワズイモの葉=DAT1 包む-CVB

「汁ものはまあ、クワズイモの葉に包んで、…（持って帰った）」

行為の受け手に関して、人を対象に hi「あげる」という動詞を用いる場合は、与格助詞 1 ではなく、与格助詞 2 (8.7.3) の形式=**mu** が用いられる。

述語に移動を表す動詞が現れる場合、その述語に対し目的地を表しうる格助詞には、与格助詞 1 の他に、向格助詞がある (8.7.8)。与格助詞 1 と向格助詞は、共起しうる（名詞句の）主要部名詞に、ある程度相補分布が見られる。これまでに、与格助詞 1 が後続する名詞には、方向を表す名詞、例えば、ari「東」、iri「西」、pee「南」、nisi「北」、ui「上」、sita(ri)「下」fuka「外」、あるいは場所を表す指示名詞 mo「ここ」、na「そこ」、ha「あそこ」、za「どこ」その他の名詞では、ke「井戸」などが見つかっている。

この他に、与格助詞が後続する斜格項は、到達点の拡張された意味として、比較対象を表す例がある。この場合、述語には属性動詞 niisjaha~nisisjaha「似ている」が現れる。(8-71) に例を挙げる。例えば (8-71a) では、名詞句 isimusï「動物」は、述語 nisisjaha-n (似ている.NPST-IND1)「似ている」の比較の基準となる対象である。

(8-71) 比較対象

- a. isimusï=**ga** nisisjaha-n.
動物=DAT1 似ている.NPST-IND1
「(動物ではないが) 動物に似ている。」
- b. daa aboa=**ga** nisisjaha-n raa.
2ND.SG 母=DAT1 似ている.NPST-IND1 DSC1
「あんたお母さんに似ているね。」

■使役の被使役者

与格助詞が後続する斜格項に現れる名詞句の指示対象が、人間かつ述語に使役接辞を付加する動詞が現

れる場合、与格助詞が後続する斜格項は、述語に対する被使役者を表す¹²。(8-72) と (8-73) に例を挙げる。例えば (8-72) の名詞句 daa「あなた」は、節の主要部で示される行為、sik-asï（聞く-使役.NPST）「聞かせる」の被使役者である。

- (8-72) da=ga sik-asï munu aa kajaa.
 2ND.SG=DAT1 聞く-使役.NPST もの ある.NPST 自問
 「あんたに聞かせるもの（話）はあるかね。」

- (8-73) <doosoosjee>=ga masamunu h-ah-an-ta naa?
 同窓生=DAT1 ご馳走 食べる-使役-NEG-PST Q
 「(あんたは) 同級生にご馳走を食べさせなかったか？」

8.7.3 与格 2

与格助詞 2 は=mu である。与格助詞 2 が後続する斜格項を含む節の述語には、動詞 hi「あげる」が現れる場合と、bagari「わかる」が現れる場合がある。前者の場合、与格助詞が後続する斜格項は、述語に対し受け手という関係性を、後者の場合、経験者という関係性を表す。斜格項の指示対象には、人間を表す例のみ見つかっている。人間以外に hi(r)「あげる」という動詞が用いられる場合には、与格助詞 1 が用いられる (8-68c)。

(8-74) と (8-75) に例を挙げる。例えば (8-74a) で、名詞句 sino「シノ」は、述語で示される行為、haa（あげる.INT）「あげよう」の受け手である。(8-75) の名詞句 baa「私」は、述語に示される行為、bagar-an te（分かる-NEG.NPST DIR.EV1）「わからないってば」の経験者である。

- (8-74) 受け手
 a. sino=mu haa raa.
 人名=DAT2 あげる.INT DSC1
 「シノにあげようね。」
 b. baa=mu=n hir-i.
 1ST.SG=DAT2=も あげる-IMP
 「私にもくれ。」

- (8-75) 経験者
 baa=mu=n bagar-an te joo raa.
 1ST.SG=DAT2=も 分かる-NEG.NPST DIR.EV1 DSC2 DSC1
 「私達にもわからないってばよ、ねえ。」

¹² 使役接辞を付加する動詞が述語に現れる文は、平叙文に対して、項を増やす (10.7.2)。

8.7.4 具格

具格は=si である。具格助詞が後続する斜格項は、述語に対し以下のような関係性を表す。

- 道具
- 条件

■道具

具格助詞が後続する斜格項は、述語の意味により、材料、手段、道具などを表す。中核的な意味は「道具」である。(8-76) から (8-78) に例を挙げる。例えば (8-76) では、名詞句 tokkin「グアバ」は、述語で示される行為 sĭkur-j a-ta-n（作る-CVB 継続 1-PST-IND1）「作っていた」の材料である。

(8-76) 材料

tokkin=si maasĭ sĭkur-j a-ta-n.
グアバ=INS 箸 作る-CVB 継続 1-PST-IND1

「(昔は) グアバ (の葉) で箸を作っていたよ。」

(8-77) 道具

haa+saccĭ=si keesi fuk-i sita,
REFL+ 手ぬぐい=INS きれいに 拭く-CVB 継起

「自分の手拭いできれいに拭いて、…」

(8-78) 手段

funi=si k-j ar-oo.
船=INS 来る-CVB 継続 1-NPST-IND2

「船で来たよ。」

具格助詞は、しばしば duu「自分」(8-79) あるいは、人数をあらわす名詞句 (8-80) に後続し、「自分で」「何人で」という意味も表すことができる。手段という意味を拡張させたと分析できる。

(8-79) duu=si=ru sa=n sĭkur-i num-utar-oo.
自分=INS=FOC 茶=も 作る-CVB 飲む-PST-IND2
「自分でお茶も作って飲んだよ。」

(8-80) mi-tari ju-tari=si kumi sĭkur-i sita,
3-CLF. 人 4-CLF. 人=INS 組 作る-CVB 継起
「3 人、4 人で組を作って、…」

■条件

期間を表す形式名詞 *kami*、あるいは様子を表す形式名詞 *joo* に具格助詞が後続する例が見つかった (8.5)。このような構造で現れる名詞句は、述語に対しそれぞれ期間と様子という関係性を表す。(8-81) と (8-82) に例を挙げる。例えば (8-81) では、名詞句 *ba=ndu isasima=ci ng-i kuu kami* (1ST.SG=FOC 石垣島=ALL 行く-CVB 来る.NPST 間) 「私が石垣に行ってくる間」は、述語に示される行為「勉強しておく」期間を表す。

- (8-81) *ba=ndu isasima=ci ng-i kuu kami=si, daa <benkjoo> goobi si*
 1ST.SG=FOC 石垣島=ALL 行く.CVB 来る.NPST 間=INS 2ND.SG 勉強 沢山 する.CVB
sik-i joo.
 準備-IMP DSC2

「私が石垣に行ってくる間に、お前は勉強沢山しておきなさいよ。」

- (8-82) *na=ra <zjooki> nd-un-u joo=si, nta=si keesi nuur-i sita,*
 そこ=ABL 蒸気 出る-NEG-NPST 様=INS 土=INS きれいに 塗る-CVB 継起
 「そこから蒸気が出ないように、土できれいに塗って、…」

8.7.5 位格 1

位格助詞 1 は *=na* である¹³。位格助詞 1 が後続する斜格項は、述語に対して位置を表す。

位格助詞 1 が後続する斜格項は、述語に対して様々な位置を表すことができる。(8-83) から (8-86) に例を挙げる。例えば (8-83) では、名詞句 *daa+katamuta* 「あなたの隣」は、述語 *boo* (いる.NPST.IND2) 「いる」の存在位置である。

- (8-83) 存在位置

daa+katamuta=na boo.
 2ND.SG+ 隣=LOC1 いる.NPST.IND2

「あんたの隣にいるよ。」

- (8-84) 行為が行われる位置

¹³ 位格助詞 1 は、場所を表す指示名詞 *naa* 「そこ」と形式が似ている。さらに、場所指示名詞と位格助詞 1 の組み合わせのうち、*na* 「そこ」に *=na* が付加する例は見つかっていない。*na* を用いて、「そこに」の意味を表したい場合、*na* 単独で同様の意味を表す。例) *naa a-n.* (そこ ある.NPST-IND1 「そこにある。」) 従って、形式と共起制限から場所指示名詞 *na* が位格助詞の由来である可能性も考えられるが、本論文ではこのような立場は取らない。なぜなら、八重山語の下位方言 (例えば、石垣四箇方言 (宮城 2003)、竹富方言 (西岡・小川 2011)、黒島方言 (原田 2015) など) で、波照間方言の *=na* と由来が同じと考えられる位格助詞が見ついているものの、場所を表す指示名詞に *na* のような形式は見つかっていないからである。これらの方言で場所を表す指示名詞は、*uma/kuma* といった形式であり、この形式は琉球諸語全体に見られる形式である (例えば、奄美語 (Niinaga 2014, 白田 2016)、宮古語 (Shimoji 2008, 林 2013) など)。仮に場所を表す指示名詞 *naa* 「そこ」を由来としていると考える場合、指示代名詞 *naa* から位格 *=na* が成立し、その後、他方言では指示代名詞が *na* から琉球全体に見られる形式に置き換えられたことになる。従って、場所指示名詞 *naa* を由来とする可能性は低いと言える。

unu hi=**na** unu midumu=ja nee da-tar-oo, zaa=gi nuf-utar-oo=ta...
 あの 家=LOC1 あの 女=TOP どう ある.FOC-PST-IND2 どこ=LOC2 寝る-PST-IND2=引用 1

「あの家では、あの女はどうだったよ、どこどこで寝ていたよ、と…（話していたそうだ）」

(8-85) 行為の向かう位置

pe: <jooki>=**na** ir-a sita,
 灰 容器=LOC1 入れる-CVB 継起

「灰を容器に入れて、…」

(8-86) 時間的位置

saguja=ja joo, pītu=nu nuf-j a-n kajaa=ta muu <zikan>=**na**=ru
 夜這い=TOP DSC2 人=GEN 寝る-CVB 継続 1.NPST-IND1 自問=引用 1 思う 時間=LOC1=FOC
 per-i ku te joo raa.
 入る-CVB 来る.NPST DIR.EV1 DSC2 DSC1

「夜這いはね、人が寝ているかなと思う時間に入ってくるんだってばよ、ね。」

8.7.6 位格 2

位格助詞 2 は **nagi**~**nagj**=**gi** である。異形態のうち=**gi** は、場所を表す指示名詞に後続する。それ以外の名詞には、基本的に **nagi** が実現する。**nagi** が現れる環境で、主題助詞の異形態=**a** が後続する場合にはのみ **nagj** が現れる¹⁴。

位格助詞 2 が後続する斜格項は、述部に対して行為の位置を表す。(8-87) から (3-18) に例を挙げる。例えば (8-87) では、名詞句 **rooka**「廊下」は、述語に示される行為、**nuf-uta-n**（寝る-PST-IND1）「寝た」の位置である。

(8-87) <**rooka**> **nagi** nuf-uta-n raa.
 廊下 LOC2 寝る-PST-IND1 DSC1
 「廊下で寝たよね。」

(8-88) **pīte nagj**=a <supun> te munu nen-u.
 畑 LOC2=TOP スプーン 引用 2 もの ない-NPST
 「畑にはスプーンというものはない。」

(8-89) **mo=gi** <**kaeru**>=ja nuu=ta=ru en baa?
 ここ=LOC2 カエル=TOP 何=引用 1=FOC 言う.NPST Q
 「ここ（波照間島）で、『カエル』は何と言いますか？」

¹⁴ 母音の渡り音化の音韻規則による (2.5.3)。

(8-90) ha=gi... num-j ar-u fuciri

あそこ=LOC2 飲む-CVB 継続 1-NPST 薬

「あちらで飲んでいた薬」

おそらく位格助詞 2 は、歴史的に場所を表す指示名詞 naa「そこ」を由来とすると推測できる。なぜなら場所を表す指示語に位格助詞 2 を付加する形式は、位格助詞 2 と同形式であるからである (8-91)。しかし、変化の方向として、行為の位置の中称を意味する nagi「そこで」という語から文法化して=gi になったのか、あるいは歴史的に=gi が後続する naa=gi (そこ=LOC)「そこで」という形式から nagi に変化したのかについては、今のところわからない。

(8-91) na=gi e=nu panasi=ndu maa ici=n maa <tanosimi> sii...

そこ=LOC2 そう=GEN 話=FOC まあ いつ=も まあ 楽しみ する.CVB

「そこでそんな話をまあ、いつも楽しみにして、…」

8.7.7 位格 3

位格助詞 3 は naga である。位格助詞 3 が後続する斜格項は、述語に対し移動先、接触点などの意味を表す。中核的な意味を「ターゲット」とまとめる。

(8-92) と (8-84) に例を挙げる。例えば (8-92a) では、名詞句 meedarikaki「前掛け」は、述語に示される行為、ir-a (入れる-CVB)「入れて」の移動先である。

(8-92) 移動先

a. ki=nu ui naga nubur-i meedarikaki naga mansin naari<o> ir-a...

木=GEN 上 LOC3 上る-CVB 前掛け LOC3 いっぱい 実を 入れる-CVB

「木の上に登って前掛けにいっぱい実を入れて…」

b. kagu naga mata pis-i iri kajaa.

カゴ LOC3 また 拾う-CVB 入れる.NPST 自問

「カゴにまた（実を）拾って入れるかね。」

(8-93) 接触点

kata naga atar-j a-ta-n.

肩 LOC3 当たる-CVB 継続 1-PST-IND1

「肩に当たった。」

位格助詞 3 の成立過程については 2 通り考えられる。まず、位格助詞 3 が名詞 naga「中」を起源とする立場である。仮に naga「中」が由来であった場合、名詞 naga「中」に与格助詞 naga が付加する例が見つかっており、文法化、すなわち格助詞化していると考えられる。

(8-94) <kucu>=nu naga naga per-j a duu...

靴=GEN 中 LOC3 入る-CVB 継続 1.NPST 引用 3

「靴の中に入ったか… (それとも…)」

もう一つの可能性として、例文 (8-69b) のように、場所を表す指示名詞 **naa**「そこ」(あるいは位格助詞 **1=na**) に与格助詞 **1=ga** が付加したものを起源とすることが考えられる。

いずれも形式的に同じであり、どちらの可能性であっても意味的に行為が行われる場所、しかもより絞り込まれた場所を表すため、どちらを起源とするかは現段階では分からない。

8.7.8 向格

向格助詞は **=(ga)ci** である。**=gaci** は **hii**「家」が先行する場合にのみ実現する。向格助詞が後続する斜格項は、述語に対して目的地を表す。述語には、**ng**「行く」、**o(r)**「いらっしゃる」、**kaer**「帰る」、**uri**「降りる」など、移動を表す動詞が多く見られる。(8-95) と (8-96) に例を挙げる。例えば (8-95) では、名詞句 **isasima**「石垣島」は、述語に示される行為、**ng-an-ta-n** (行く-NEG-PST-IND1)「行かなかった」の目的地である。

(8-95) **isasima=ci ng-an-ta-n.**

石垣島=ALL 行く-NEG-PST-IND1

「石垣島に行かなかった。」

(8-96) **ja=ci or-a ma.**

家=ALL いらっしゃる-INT INTJ

「おうちに帰りましょうよ、ねえ。」

(8-97) **daa kjuu=a ta+hi=gaci ng-i unu ama zaa+zaa nuf-u ten gara,**
2ND.SG 今日=TOP 誰 + 家=ALL 行く-CVB あの 姉さん どこ + どこ 寝る.NPST 引用 2 理由 1

「お前は今日は誰々の家に行って、あの姉さんがどこどこに眠っているというから、…」

目的地を表す格助詞には、向格助詞の他に与格助詞 **1** (8.7.2) がある。向格助詞と与格助詞 **1** は、付加しうる名詞句にある程度の相補分布が見られる。8.7.2 で述べたことをもう一度述べると、名詞句主要部に、方向を表す名詞、場所を表す指示名詞、その他特定の名詞 (例えば **kee**「井戸」) が現れる場合、与格助詞 **1** で拡張され、その他の名詞が現れる場合には向格助詞 **=ci** で拡張される傾向がある。

8.7.9 属格

属格助詞は **=n(u)** である。基本的に **=nu** が実現するが、特定の名詞との組み合わせる場合に **=n** が実現する。属格助詞が後続する斜格項は、名詞句の主要部名詞に対し次の関係性を表す。述語に対する関係性は表さない点で、これまでに述べた格助詞とは異なる。

- 所属とメンバーの関係
- 数と対象の関係
- 所有者と被所有者の関係
- 全体と一部の関係
- テーマと対象の関係

例えば (8-98) の名詞句の修飾部 **tamuree**「田盛 (屋号)」は、名詞句の主要部名詞 **ama**「姉」の所属を表す。(8-99) の名詞句の修飾部 **mii-tari**「3 人」は、名詞句の主要部名詞 **biduntama**「男の子」の数を表す。

(8-98) 所属とメンバーの関係

tamuree=nu ama
 屋号=GEN 姉さん
 「田盛さんちの姉さん」

(8-99) 数と対象の関係

mi-tari=nu biduntama
 3-CLF. 人=GEN 男の子
 「3 人の男の子たち」

その他の例を (8-100) から (8-102) に挙げる。

(8-100) 所有関係

[sjama=nu] <zitensja>
 兄=GEN 自転車
 「兄の自転車」

(8-101) 全体・部分の関係

[naari=nu] kabari
 実=GEN 皮
 「果物の皮」

(8-102) 内容の限定

[saguja=nu] panasi
 夜這い=GEN 話
 「夜這いの話」

異形態=**n** が現れる例は、身体部位を表す名詞句 3 例 (8-103) と、家畜に関する名詞句 1 例 (8-104)、食べ物に関する名詞句 1 例 (8-105) が見つまっているのみである¹⁵。

(8-103) 身体部位を表す名詞句

¹⁵ 名詞の場所化接辞-**nta** (5.4.2.3) は、属格助詞に場所を表す形態素が後置した形式が文法化したものだと考えられる。

a. **si=n** simi

手=GEN 爪

「手の爪」

b. **fuci=n** pan

口=GEN 歯

「口の歯¹⁶」

c. **fuci=n** sĭpa

口=GEN そば

「口のそば（唇）」

(8-104) 家畜に関する名詞句

uwa=n hii

豚=GEN 家

「豚の家（豚小屋）」

(8-105) 食べ物に関する名詞句

su=n su

汁=GEN 汁

「汁物」

8.7.10 共格

共格助詞は=tu である。共格助詞は名詞句の主要部名詞の他、述語に対しても関係を表しうる。前者の場合、共格助詞が後続する斜格項は、主要部名詞と共に 1 つのグループであることを表す¹⁷。後者の場合、述語に対し随伴という関係性を表す。

(8-106) では、名詞句の修飾部 **abo** 「母」と主要部名詞 **midumu** 「女」は、1 つのグループであることを表す。

(8-106) **abo=tu** midumu

母=COM 女

「お母さんと娘」

(8-107a) では、名詞句 **sĭma=nu** pĭtu（島=GEN 人）「島の人」は、述語に示される行為、**numi** 「飲み」の随伴者である。

¹⁶ pan は「歯」の他、「足」も意味する。どちらの pan を指しているか明確にするために「口の」を明言していると考えられる。

¹⁷ 主要部名詞に対し（修飾部と主要部という）従属関係が成り立たない場合にグループであることを表す。従属関係が成り立たない場合を名詞句の等位接続と呼ぶ。詳しくは 8.6 を参照されたい。

(8-107) 随伴

- a.
- sima=nu pïtu=tu saki num-i...*

島=GEN 人=COM 酒 飲む.CVB

「島の人と一緒に酒を飲んで、…」

- b.
- kokkoo<no> basju <ookiku> sis-i sita, <sooki>=tu bagah-e ci=ru joo,
焼香の時 大きく 切る-CVB 継起 ソーキ=COM 沸かす-CVB 付帯 2=FOC DSC2
mo=nu pïtu=ja... busa e=ru h-j ar-oo.*

こちら=GEN 人=TOP 沢山 そう=FOC 食べる-CVB 継続 1-NPST.IND2

「焼香の時は、(冬瓜を)大きく切って、ソーキ(豚肉)と一緒に沸かしてね、この人は…
大勢そうやって食べているよ。」

共格助詞が名詞句の主要部名詞に対して関係を表す場合、すなわち1つのグループであると解釈される場合、主要部名詞にも共格助詞が後続する場合がある。(8-108)に例を挙げる。例えば、(8-108a)は、名詞句 *bujaa*「おじいさん」と *okan*「オカン」のどちらにも共格助詞が後続する。共格助詞が1つ現れる場合と2つ現れる場合での意味の違いは、今のところ見当たらない。

- (8-108) a.
- buja=tu <okan>=tu obi=ndu o-ta te.*

おじいさん=COM オカン=COM だけ=FOC いらっしゃる-PST DIR.EV1

「おじいさんとオカンと、それだけがいらっしゃったってば。」

- b.
- utama=tu miduntama=tu=ndu igebari s-i...*

子ども=COM 女の子=COM=FOC 交差 する-CVB

「子どもと、女の子と、交差して…」

第 9 章

複数の動詞から成る動詞句

本章では、動詞句に 2 つ以上の動詞が現れる特殊な述語構造について述べる (4.1)。このような動詞句は、次の 2 種類である。

- 語彙的意味を表す本動詞と、アスペクトやモーダルな意味を表す動詞から成るもの
- 語彙的意味を表す本動詞と、s「する」、a(r)「ある」、nen「ない」という動詞から成るもの

前者の動詞句を含む述語構造を補助動詞構文、後者を軽動詞構文と呼ぶ。本節では、まず 9.1 で形式について述べ、9.2 と 9.3 で、補助動詞構文と軽動詞構文についてそれぞれ述べる。補助動詞構文に現れるアスペクトやモーダルな意味を表す動詞を補助動詞と、軽動詞構文に現れる s「する」、a(r)「ある」、nen「ない」という動詞を軽動詞とそれぞれ呼ぶ。

9.1 形式

補助動詞構文と軽動詞構文のいずれも、内部の動詞の形式は、一般動詞の場合、(9-1) に示すと通りの形式で現れる。

(9-1) [本動詞_{中止形} 補助動詞あるいは軽動詞_{屈折}]動詞句

先行する本動詞が中止形で実現し、後続する補助動詞あるいは軽動詞が環境により屈折する。本動詞には語彙的意味を表す動詞が現れることから意味的な主要部であり、補助動詞あるいは軽動詞が形態的な主要部である。

本動詞に属性動詞が現れることもある¹。その場合には、一般動詞とは動詞形式が異なる。本論文では、属性動詞が本動詞に現れる場合、例外的に屈折接辞を伴わない語幹そのものが用いられていると分析する²。

¹ 継続の補助動詞構文と各軽動詞構文である。

² 属性動詞は、語幹そのものと非過去形の時制形が同じ音形を持つため、本動詞で現れる形式を時制形だと分析することも可能である (例: takaha vs. takaha-Ø)。時制形と分析せずに、屈折接辞を伴わない形式であると分析する理由は、本動詞で非過去接辞を認めた場合、単に形式的な分析になってしまうからである。補助動詞構文あるいは軽動詞構文では、形態的な主要部として補助動詞あるいは軽動詞が時制などを担うため、本動詞で非過去接辞を認める分析はあまり意味をなさない。従って、本論文では無理に分析せず、仮に例外的に語幹そのものが用いられると分析する。一つの可能性として、語幹が別の品詞

9.2 補助動詞構文

これまでに見つかっている補助動詞を表 9.1 に示す³。

表 9.1: 補助動詞の一覧

語幹	機能	主な訳	語彙的な意味
a(r)~ da(r)	継続	～している	ある
bir	継続	～している	座る
nen	完了	～してしまった	ない
k	接近	～してくる	来る
ng	乖離	～していく	行く
mi(r)	試行	～したことがある ～してみる	見る
sik	準備	～しておく	置く
hi(r)	受益	～してあげる	あげる
o(r)	敬意 接近	～していらっしゃる	いらっしゃる
tabor	依頼	～してくださる	差し上げる

補助動詞の多くは、それ自身が語彙の意味を持つ動詞から派生したものであると考えられる。表 9.1 の語彙的な意味の列に示すように、継続を表す補助動詞は biri「座る」から、完了を表す補助動詞は非存在を表す nen「ない」から派生したと考えられる。いずれも語彙の意味は失われている。

(9-2) a. bir「座る」

na=ga **bir-iba.**

そこ=DAT1 座る-IMP

「そこに座りなさい。」

b. biri（継続の補助動詞）

に転生していると分析することが考えられる。このように例外的に屈折接辞を伴わない語幹そのものが用いられていると分析できるものに、理由を表す副詞節 (11.3.1.2) の述語に属性動詞が用いられる場合が見つまっている (p. 283 注 4)。理由動詞 2 (ki) に先行する動詞は通常中止形であるが、属性動詞の場合は語幹そのもの、あるいは非過去時制形と同じ音形を持った形式が用いられる (例: tusaha ki (遠い/遠い.NPST 理由 1) 「遠いので」、abarisja ki (美しい/美しい.NPST 理由 1) 「美しいので」)。この問題については、他の現象と合わせてさらに調査する必要がある。

³ この他に、補助動詞と考えられる形式にイベントの完了を表す buti がある。ただし、由来となる形式が不明であるうえ、h「食べる」という動詞でしか用例が見つかっていないため、一覧には載せなかった。これまでに次の 2 例を観察した。he but-a-n. (食べる.CVB 完了?-RCTPST-IND1) 「(全部) 食べ終えた。」 he buti-ba. (食べる.CVB 完了?-IMP 「(全部) 食べてしまいなさい。」

na=ga bir-i **bir-iba.**
 そこ=DAT1 座る-CVB 継続 2-IMP

「そこに座っていなさい。」

(9-3) a. nen 「ない」

nu=n **nen-u.**
 何=も ない-NPST

「何もない。」

b. nen (完了の補助動詞)

bass-a **nen-u.**
 忘れる-CVB 完了-NPST

「忘れてしまった。」

以下では、それぞれの補助動詞について 9.2.2 から 9.2.10 で記述する。補助動詞構文を太字で示す。

9.2.1 継続を表す補助動詞 1 a(r)~da(r)

継続を表す補助動詞に、a(r)~da(r) がある。これを継続補助動詞 1 と呼ぶ。継続補助動詞 1 は、存在動詞 a(r)「ある」を由来とする形式と、歴史的に焦点標識*du と、それに後置される存在動詞が融合した形式がある⁴。後者を焦点助詞との融合と考える理由の 1 つとして、本補助動詞が確信法接辞を取る場合、dar-oo の例のみ見つかっているということが挙げられる。節に焦点標識が含まれており、かつ述語の動詞が確信法を取る場合、必ず確信法接辞 2 が選択されるという特徴がある (12.1)。本補助動詞も同様に、確信法を取る場合、dar-oo あるいは da-tar-oo というように必ず確信法接辞 2 が選択され、確信法接辞 1 (-n) と共起する例は見つかっていない。一方で前者はそのような制限は受けない。このことから、後者 da(r) は、焦点標識*du と存在動詞 a(r)「ある」が融合したものに由来していることが支持される⁵。

本補助動詞は、次に挙げる 3 つの機能を持つ。

- 述語に示されるイベントの継続を表す機能

⁴ 現在、波照間方言の焦点標識は=ndu である。これは属格助詞 nu と焦点標識*du から成り立っている (平山 1988) と考えられている (4.5.2)。この場合の融合は、接語と (接語に後置される) 動詞との融合によって生じたものとする。焦点標識*du は、現在の焦点助詞が接語であることから接語であったと推測する。接語は先行する語とアクセント単位を成すため (3.1.2)、後置される形式との融合は、普通に考えると不自然とも言える。しかし、同じように接語とそれに後置される動詞との融合の例に、引用助詞 2 の te~ten(u) も見つかっている (11.1.1)。引用助詞 2 は、接続助詞 ta と、ta に後置された動詞 eni「言う」の時制形 en-u (言う-NPST) が融合したものである。従って、このような融合は波照間方言でさほど不自然ではない。

⁵ もう一方で、「ある」を意味する存在動詞ではなく、存在動詞 bu(r)「いる」に由来している可能性も考えられる。その理由は、「ある」を意味する存在動詞は平進型アクセントを持つのに対し、継続の補助動詞 1 が「いる」と同様の下降型アクセントを持つからである。本仮説は、八重山語の各方言の同様の意味を表す同様の形式の分析と並行的である。例えば、石垣四箇方言では完了と継続は同じ文節音の連続で実現し、アクセントで区別する (鈴木 2001)。一方で、焦点助詞を挿入することにより、それぞれ迂言的な表現が実現し、継続を表す形式の由来が明らかである。例えば、uke:n\「起きている」と uke:n\「起きた」が、それぞれ uke: duri (起きて roc. いる) と uke: dari (起きて roc. ある) に言い換えられる。従って、前者は「いる」を、後者は「ある」を由来としていると考えられている。本仮説は、周辺方言と同様の変化であることと、下降型アクセントを持つという点で可能性がある。ただし、音韻変化という点で確証は得られていない。初頭子音の b は脱落するにしても、u>a への変化の確証はない。さらに検討する余地がある。

- 述語に示されるイベントの結果継続を表す機能
- 習慣

a(r) と da(r) の機能的な違いはこれまでの調査で明確にはならなかった。a(r) と da(r) を分け、例文を挙げる。

(9-4) 継続 a(r)

- a. pīmiza **safuk-j** **ar-u** bidumu
 ヤギ 引っ張る-CVB 継続 1-NPST 男
 「ヤギを引っ張っている男」
- b. mana jaasee **ira-n**.⁶
 今 野菜 入れる.CVB. 継続 1.NPST-IND1
 「今野菜を入れている。」
- c. baa mana **h-j** **ar-oo**.
 1ST.SG 今 食べる-CVB 継続 1-NPST-IND2
 「私は今食べているよ。」

(9-5) 継続 da(r)

- a. mana **jum-i** **dar-oo**.
 今 読む-CVB 継続 1-NPST-IND2
 「今読んでいるよ。」
- b. mana jaasee **ir-a** **dar-oo**.
 今 野菜 入れる-CVB 継続 1-IND2
 「今野菜を入れているよ。」
- c. e siba **misja da** tee.
 そう する. 条件 2 よい 継続 1.NPST DIR.EV1
 「そうしたらいいってば。」 cf. misja-n 「よい」

(9-6) 結果継続 a(r)

- a. sīnu=ndu **k-j** **ar-oo**.
 昨日=FOC 来る-CVB 継続 1-NPST-IND2
 「(私は) 昨日来ました。(そして今もいます)」
- b. kadu **sikur-j** **a** munu
 角 作る-CVB 継続 1.NPST もの
 「角を作っている (=四角い) もの」

⁶ クラス3の語幹が継続補助動詞1の構文で用いられる場合、語境界で母音が融合する。ir-a a (入れる-CVB 継続1) > ira (入れる.CVB. 継続1)。

c. uciza+pitu gaasi jub-j a-ta paci joo.

兄弟 + 人 だけ 呼ぶ-CVB 継続 1-PST 推量 1 DSC2

「(結婚式には) 兄弟だけ呼んでいたはずよ。」(lit. 招待していた)

(9-7) 結果継続 da(r)

a. daa muru sis-i da tee.

2ND.SG 全部 知る-CVB 継続 1.NPST DIR.EV1

「あんた全部知っているってば。」

b. bass-a da-ta naa?

忘れる-CVB 継続 1-PST Q

「忘れているか？」

(9-8) 習慣 a(r)

a. be+sima=nu pitu=a busa e=ru h-j ar-oo.

1ST.PL.INC+ 島=GEN 人=TOP 沢山 そう=FOC 食べる-CVB 継続 1-NPST.IND2

「波照間島の人は、大勢そうやって(冬瓜を)食べているよ。」

b. mun=du sik-j ar-oo.

麦=FOC 使う-CVB 継続 1-NPST.IND2

「(普通) 麦を使っているよ。」

c. du=nu <cukemonu> s-j ar-u rakkjon

自分=GEN 漬物 する-CVB 継続 1-NPST らっきょう

「自分の漬けているらっきょう」

(9-9) 習慣 da(r)

a. meegamenici hara=ga ng-i, bir-i dar-oo.

毎日 あちら=DAT1 行く-CVB 座る-CVB 継続 1-NPST.IND2

「毎日あそこに行って、座っているよ。」

b. da-ima meegamenici ng-i daa saa.

2ND-PL 毎日 行く-CVB 継続 1.NPST 推量 2

「あんた達は毎日行っているでしょう。」

本補助動詞構文では、本動詞に一般動詞だけではなく、属性動詞も現れうる (9-4b)。 (9-10) に、ha 属性動詞の例と、中止形を持つ sja 属性動詞の例を挙げる。どちらの場合も、(9-4b) と同様に状態の継続を意味する。属性動詞は語彙の意味として恒常的な状態の意味を既に含むため、単独で用いられるのと、継続の補助動詞と組み合わせられて用いられるのとで意味に大きな違いは見出せなかった⁷。9.1 で述べた通り、属性動詞が本動詞に現れる場合には、例外的に屈折接辞を伴わない語幹そのものが用いられる。

⁷ 本動詞に継続補助動詞 1 が後続する補助動詞構文の他に、軽動詞 a(r)「ある」が後続する軽動詞構文でも本動詞に属性動詞が現れうる (9.3.2)。これもまた、属性動詞 1 語で述語を成す場合と、属性動詞と継続補助動詞 2 から成る補助動詞構文との意味の違いが明らかではない。従って、属性動詞の内部要素、継続の補助動詞、軽動詞の 3 つの形式すべてが歴史的に同じ形式すなわち存在を表す動詞 a(r)「ある」を由来していることを示唆している可能性が考えられる (6.1 で述べた通り、属性動

- (9-10) a. **takaha dar-oo.**
 高い 継続 1-NPST.IND2
 「高いよ。」 cf. takaha-n
- b. **oos-i dar-oo.**
 青い-CVB 継続 1-NPST.IND2
 「青いよ。」 cf. osja-n
- c. **sisoos-i dar-oo.**
 白い-CVB 継続 1-NPST.IND2
 「白いよ。」 cf. sisosja-n

継続補助動詞 1 には次の共起制限がある。(1) 否定接辞とは共起しない、(2) 時制に関わらず、必ず継続の補助動詞構文で用いられる動詞語幹がある、という 2 点である。

(2) については、これまでに 2 つの動詞が見つまっている⁸。sis-j a 「知っている」⁹ と tura 「穏やかだ」¹⁰ である。以下に、sis-j a 「知っている」の例を挙げる。(9-11a) に挙げるように、否定接辞を付加した場合に sis-j a 「知っている」の語根は sis であると分析できる。なぜなら、否定接辞がクラス 1 語幹に付加する異形態-an を取るからである。しかし、否定接辞が付加されない場合、必ず (9-11b) に挙げるように継続の補助動詞構文で用いられ、(9-11d) の動詞形式は認められない。このように、常に補助動詞構文で用いられる動詞語幹がある。

- (9-11) a. **sīs-an-u**
 知る-NEG-NPST
 「知らない。」
- b. **sis-j a-n**
 知る-CVB 継続 1.NPST-IND1
 「知っている。」
- c. **sis-i**
 知る-CVB
 「知って (副動詞形)」

詞も存在を表す動詞 a(r) 「ある」を由来とする形式だと考えられる)。しかしアクセントは、属性動詞の内部要素と軽動詞が同じ平進型で、継続の補助動詞のみ下降型である。従って、属性動詞の内部要素と継続の補助動詞はアクセント型が異なるため、属性動詞語幹の内部構造を継続の補助動詞構文とは認めない。

*takaha a-n (高さ (?) 継続.NPST-IND1) > takaha-n (高い. 継続.npst-IND1)

⁸ 補助動詞には継続補助動詞 2bir、能力補助動詞 sis がある。p. 144 の注 1 で、sja 属性動詞語幹に含まれる ja を、中止接辞と継続補助動詞構文と分析できると述べた。しかし、ここでは必ず補助動詞構文と分析できる場合のみを対象としているため、sja 属性動詞は含めない。

⁹ 語幹 sisu の母音 i が、-j (あるいは i) の前で i に変化するのは、母音の渡り音化の音韻規則 (2.5.6) による。

¹⁰ クラス 3 の動詞語幹である。クラス 3 の語幹が継続補助動詞 1 の構文で用いられる場合、語境界で母音が融合する。tur-a a (穏やか-CVB 継続 1) > tura (穏やか.CVB. 継続 1)。

- d. * siſ-u-n
知る-NPST-IND1

9.2.2 継続を表す補助動詞 2 biri

継続補助動詞 2 の biri は、「座る」を意味する bir を由来とする。中止形以外の肯定では、常に継続補助動詞 1 (9.2.1) の補助動詞構文内で用いられる (bir-j a (継続 2-CVB 継続 1))¹¹。継続補助動詞 2 は、以下の機能を持つ。

- イベントの継続を表す機能
- イベントの結果継続を表す機能
- 習慣

(9-12) 継続

- a. ija=ndu naari **tur-i** **bir-j** **a-ta** siſa...
父=FOC 実 取る-CVB 継続 2-CVB 継続 1-PST 逆接
「親父さんが実を取っていたけれど…」
- b. **mac-i** **bir-an-ta-n.**
待つ-CVB 継続 2-NEG-PST-IND1
「待っていなかった。」
- c. **ir-a** **bir-j** **ar-oo.**
入れる-CVB 継続 2-CVB 継続 1.NSPT-IND2
「入れているよ。」

(9-13) 結果継続

- a. e ki zootuu te **en-i** **bir-j** **ar-oo.**
そう 理由 2 上等 引用 2 言う-CVB 継続 2-CVB 継続 1-NPST.IND2
「そうだから、上等だねと言っているよ。」
- b. na=ga **nuf-i** **bir-j** **ar-oo.**
そこ=DAT1 寝る-CVB 継続 2-CVB 継続 1-NPST.IND2
「そこで寝ているよ。」

(9-14) 習慣

- a. jamatu+pitu **he** **bir-j** **a-n.**
大和 + 人 食べる.CVB 継続 2-CVB 継続 1.NPST-IND1
「大和（内地の）人が食べている。」

¹¹ 常に継続の補助動詞 1 構文を用いる動詞は、継続の補助動詞 2 に限らない。常に継続補助動詞 1 の構文を用いる動詞語幹に関しては、9.2.1 を参照されたい。

b. kee... he bir-i...

そう こう 食べる.CVB 継続 2-CVB

「そうこう食べていて… (生活には困っていないけれど)」

9.2.3 完了を表す補助動詞 nen

完了補助動詞は **nen** である。**nen** は、非存在を表す動詞 **nen** 「ない」に由来する。補助動詞 **nen** は、イベントの完了を表す。さらに本構文では、話し手や聞き手の予期しないことが生じたという事が含意される。

(9-15) e su kami=ja midumu=ja parum-i nen-ta cju.

そう する.NPST 間=TOP 女=TOP 孕む-CVB 完了-PST HS1

「そうしているうちに、女は孕んでしまったとさ。」

完了の補助動詞を含む述語は、それだけで完了すなわち動作が終わったことを示すため、過去の接辞が付加されないことがある。(9-16) の例では、発話時点で動作は既に終了している。

(9-16) a. ng-i nen-u.

行く-CVB 完了-NPST

「行ってしまった。」

b. nd-a par-i nen ki...

出る-CVB 乖離-CVB 完了.NPST 理由 2

「出て行ってしまったから…」

話者の感覚では、補助動詞 **nen** に過去接辞を付加する場合、より昔の出来事である気がするようである。確かに、補助動詞に過去接辞が現れる (9-15) などは、昔話からの例文であるため、この感覚と合致する。しかし、一概には言えないため¹²、どのような環境で過去接辞が付加されるのか、されないのかについてはさらに調査が必要である。

稀に、=sa という形態素が主動詞に後置されることがある。これまでの調査では機能を明らかにすることができなかった。=sa がなくても意味は変わらないようである。

(9-17) a. e sika ba=n maa, kissa <zjuuicizi> nar-i=sa nen doo.

そう 逆接 1ST.SG=も INTJ すぐに 11 時 なる-CVB=? 完了.NPST DIR.EV5

「だけど、私も、ほら、すぐに 11 時になってしまったんだよ。」

b. ha=ga kaer-i=sa nen-tar-oo.

あちら=DAT1 帰る-CVB=? 完了-PST-IND2

「あちらに帰ってしまったよ。」

¹² 例えば、次に挙げる (9-17b) にも過去接辞が現れるが、昔話ではない。話し手が鑑賞した映像について語っている場面である。なお、同じ発話場面で過去接辞が現れない例文も見つかっている (9-17c)。

- c. *murū naari=ja kupur-a=sa nen-u.*
 全部 実=TOP こぼす-CVB=? 完了-NPST
 「実はこぼしてしまった。」

9.2.4 接近を表す補助動詞 k

接近補助動詞 **k** は「来る」を意味する動詞 **k** に由来する。離れた場所から、参照点に接近することを表す。参照点は、基本的に話し手の家や、話し手のいる場所である。すなわち話し手のホームグラウンドと解釈できる。以下 (9-18) から (9-20) に動作主と参照点別に例を挙げる。

(9-18a) は、話し手がどこから何かを持って、話し手の場所にあることを意味する。(9-18b) は、話し手が他の家に行き、話し手の家に戻ったことを意味する。

(9-18) 動作主体：話し手

a. 参照点：話し手の場所

na=ga muc-i k-j a-n sika...
 そこ=DAT1 持つ.CVB 接近-CVB 継続 1.NPST-IND1 逆接
 「(私は) そこに持って来ているけど…」

b. 参照点：話し手の家

<taigee sjeedaini> *buna si sita ba-ima kaer-i k-j a-tar-oo.*
 大概 盛大に お祝い する.CVB 継起 1ST-PL 帰る-CVB 接近-CVB 継続 1-PST-IND2
 「とても盛大にお祝いして、私達は帰って来たよ。」

(9-19a) は、聞き手が台所でゆで卵を作って（沸かして）、話し手の位置に戻ることを意味する。(9-19b) は、聞き手が何かを持って、話し手の家を訪れることを意味する。

(9-19) 動作主体：聞き手

a. 参照点：話し手の場所

gokka+ke=ta=n bagah-e kuba.
 鶏 + 卵=引用 1=も 沸かす-CVB 接近.IMP
 「(お前は) たまごでも沸かして来い。」

b. 参照点：話し手の家

atu=gara muc-i kuba.
 後=ABL 持つ-CVB 来る.IMP
 「あとで (あなたが) 持ってきてなさい。」

(9-20) は、第三者が動作主体の場合である。

(9-20) 動作主体：第三者・参照点：話し手の場所

tamuree=nu ama **kaer-i** **k-j** a-n kajaa?

田盛=GEN 姉 帰る-CVB 接近-CVB 継続 1.NPST-IND1 自問

「(家の明かりを見ながら) 田盛の姉さんは帰ってきてるかな？」

接近の補助動詞は、場所の移動のみならず、時間的な変化や抽象的な変化にも用いることができる。

(9-21) usitu **nar-i** **ki...**

年寄り なる-CVB 接近.CVB

「(私は) 年寄りになってきて… (頭痛の回数が減った)」

(9-22) e **mu+nd-a** **k-j** a-n.

そう 思う + 出る-CVB 接近-CVB 継続 1.NPST-IND1

「そう、思い出してきた。」

9.2.5 乖離を表す補助動詞 ng

乖離補助動詞 **ng** は「行く」を意味する動詞 **ng** に由来する。乖離補助動詞 **ng** は、参照点から離れることを表す。参照点は、基本的に話し手の家か、話し手のいる場所である。すなわち話し手のホームグラウンドと解釈できる。以下 (9-23) から (9-25) に動作主と参照点別に例を挙げる。

(9-23a) は、話し手と聞き手を含む動作主体が、話し手のいる場所から離れ、他の場所に行くことを意味する。(9-23b) は、話し手が着物を着て、話し手の家を離れ他の場所に行ったことを意味する。

(9-23) 動作主体：話し手

a. 参照点：話し手の場所

unu sima=ci **pĩng-a** **ng-a**.

あの 島=ALL 逃げる-CVB 乖離-INT

「あの島に逃げよう。」

b. 参照点：話し手の家

ba-ima=n ee=ru **sis-i** **ng-j** a-ta te.

1ST-PL=も そう=FOC 着る-CVB 乖離-CVB 継続 1-PST DIR.EV1

「私達もそうやって着て行ったんだってば。」

(9-24a) は、聞き手が話し手のいる場所から離れ、他の場所に行くことを意味する。(9-24b) は、聞き手が話し手からもらったものを持って、話し手の家を離れ他の場所に行くことを意味する。

(9-24) 動作主体：聞き手

a. 参照点：話し手の場所

ha=ga **muc-i** **ng-i**.

あちら=DAT1 持つ-CVB 行く-IMP

「あっちに持っていけ。」

b. 参照点：話し手の家

atu=gara **muc-i** **ng-i**.

後=ABL 持つ-CVB 行く-IMP

「後で持っていけ。」(lit. 持って帰れ)

(9-25) は、動作者が第三者の場合であり、少々特殊である。(9-25a) は、映像を見ながら、第三者である動作主体がヤギを引っ張りながら、遠ざかる場面を解説したものである。(9-25b) は、昔話の中で、第三者である動作主体（男）が、出ていく場面の一節である。この例の場合は、第三者の元々いた場所を、話し手の視点でホームグラウンドとして捉え、上に挙げた例と同様に、話し手のホームグラウンドから離れると解釈できる。

(9-25) 動作主体：第三者参照点：話し手の位置

a. pīmiza **safuk-i** **ng-oo** raa.

ヤギ 引っ張る-CVB 乖離-NPST.IND2 DSC1

「ヤギを引っ張って行くね。」

b. **nd-a** **ng-u** fuci=n bagar-an-u.

出る-CVB 乖離-NPST 口=も 分かる-NEG-NPST

「(女は、その男の) 出て行く方向もわからない。」

乖離を表す補助動詞 **ng** の他、同じ移動を表す動詞 **par** 「走る」に、乖離を意味する用法が 1 例見つかっている (9-26)。(9-26) には走るという意味が含まれない。このため、**par** が補助動詞として文法化している途中にあると考えられる。

(9-26) **nd-a** **par-i** nen ki...

出る-CVB 走る-CVB 完了.NPST 理由 2

「出て行ってしまったから…」

9.2.6 経験を表す補助動詞 **mi(r)**

経験補助動詞 **mi(r)** は、**mi(r)** 「見る」を由来とする。本補助動詞は、動作主体のイベントの経験、あるいは試行を意味する。(9-27) に経験を意味する例、(9-28) に試行を意味する例を挙げる。

(9-27) 経験

a. <mada> giigi e=nu panasī **sik-i** **mir-an-u**.

まだ はっきり そう=GEN 話 聞く-CVB 経験-NEG-NPST

「まだはっきりとその話を聞いたことはない。」

b. **muttu ng-i** **mir-an** sika...

本当に 行く-CVB 経験-NEG.NPST 逆接

「本当に行ったことはないけど…」

(9-28) 試行

- a. unu koosi he mir-a raa.
 あの菓子 食べる.CVB 経験-INT DSC1
 「そのお菓子を食べてみようね。」
- b. nu=ru si mii daraa.
 何=FOC する.CVB 経験.NPST 引用3
 「何をしてみようかね。」

9.2.7 準備を表す補助動詞 sik

準備補助動詞 sik は「置く」を意味する sik に由来する。本補助動詞は、イベントが何か他のことのために準備されていることを表す。(9-29) に例文を挙げる。

- (9-29) a. mo=gi ha=gi=n sik-i sik-j a-n.
 ここ=LOC2 あそこ=LOC2=も 置く-CVB 準備-CVB 継続 1.NPST-IND1
 「あちこちにも置いておいてあるよ。」
- b. mjata=nu samensiŋa naga muc-i ki sik-i sita...
 前=GEN 軒下 LOC3 持つ-CVB 接近.CVB 準備-CVB 継起
 「前の軒下に持ってきておいて…」
- c. ta+hi=nu munu=ta=ru <ucusi> sik-j a kajaa.
 誰+家=GEN もの=引用 1=FOC 写し 準備-CVB 継続 1.NPST 自問
 「誰の家のものと写しておいているかね。」

9.2.8 受益を表す補助動詞 hi(r)

受益補助動詞 hi(r) は「あげる」を意味する動詞 hi(r) に由来する。本補助動詞は、イベントが誰かのためになされることを表し、受益者を含意する。

以下 (9-30) と (9-31) に例を挙げる。a に受益者を含意する文、b に受益者を含意しない例をそれぞれ挙げる。例えば、(9-30a) は受益者を含意し、述語に示されるイベントが、男の子のためになされたことを意味する。一方、(9-30b) は受益者を含意せず、特定の誰かのために行われたことではないことを意味する。

- (9-30) a. unu utama-nzi=ndu kagu naga naari<o> muuru piŋ-i, ir-a
 あの子ども-PL=FOC カゴ LOC3 果実を 全部 拾う-CVB 入れる-CVB
 ha-tar-oo.
 受益.CVB. 継続 1-PST-IND2
 「その子どもたちは（男の子のために）カゴに実を全部拾って入れてあげていたよ。」
- b. unu utama-nzi=ndu kagu naga naari<o> muuru piŋ-i, iri-tar-oo.
 あの子ども-PL=FOC カゴ LOC3 果実を 全部 拾う-CVB 入れる-PST-IND2

「その子どもたちはカゴに実を全部拾って入れたよ。」

(9-31) a. baa sunu arah-e ha-ta-n.

1st.SG 着物 洗う-CVB 受益.CVB. 継続 1-PST-IND1

「私は着物を（子どものために）洗ってあげていた。」

b. baa sunu arah-j a-ta-n.

1st.SG 着物 洗う-CVB 継続 1-PST-IND1

「私は着物を洗っていた。」

9.2.9 敬意を表す補助動詞 o(r)

敬意補助動詞 o(r) は、o(r)「いらっしゃる」に由来する。o(r)「いらっしゃる」は、k「来る」、ng「行く」、bu(r)「いる」のような語彙的意味を含み、かつ動作主体が目上の場合に用いられる一般動詞である(4.4)。動詞自体は、クラス3に準ずる不規則語幹である(付録A)。

本補助動詞は次の2つの機能を持つ。本補助動詞は一般動詞 o(r)「いらっしゃる」と同様に、動作主体が目上である環境の場合が多いが、目下の動作主体であっても用いられる¹³。このため、尊敬ではなく、敬意という名称を用いた。

- 動作主体に対し、敬意を表す機能
- 動作主体への敬意および、動作主体が参照点に近づくことを表す機能

2つ目の動作主体が参照点に近づくことを意味することがある。本例は少ない¹⁴。単に動作主体に対して敬意の意味を表す場合には「敬意」というグロスを、敬意に加えて、接近という意味を含む場合には、「接近」というグロスを用いる。

まずはじめに、目上の動作主体に対して用いられる例を(9-32)に、目下の動作主体に対して用いられる例を(9-33)に挙げる。

(9-32) 目上に対して

a. botara=cja en-i or-i

疲れる.CVB. 継続.NPST=条件3 言う-CVB 敬意-IMP

「疲れているならおっしゃって下さい。」

b. da-ima sik-i oo naa?

2ND-PL 聞く-CVB 敬意.NPST Q

「あなたたちはお聞きになりましたか？」

c. mana=nu be+sima=nu pïtu=nu en-i or-u nee...

今=GEN 1ST.PL.INC+ 島=GEN 人=NOM 言う-CVB 敬意-NPST 様態

¹³ 目上というのは、話し手を基準に年上を指す。目下は、話し手を基準に、同等あるいは年下を指す。

¹⁴ 動作主体が参照点に近づくことを表す補助動詞には、他に接近補助動詞 ki がある(9.2.4)。接近の補助動詞 ki は、o(r)「いらっしゃる」が持つ語彙的意味の1つである ki「来る」という動詞を由来とする。

「今の波照間島の人がおっしゃるように…」

(9-33) 目下に対して

- a. suu=ta mu-i ci kangee or-i.
 汁=引用 1 思う-CVB 付帯 2 考える.CVB 敬意-IMP
 「汁物と思いながら考えて下さい。」
- b. amasikuru=ndu jam-i oo naa?
 頭=FOC 痛む-CVB 敬意.NPST Q
 「頭が痛いですか？」

敬意の補助動詞は、コピュラ動詞に後続し、名詞述語を内包する動詞句を成すことができる (9-34)。

- (9-34) a. ee jar-j oo naa?
 そう COP-CVB 敬意.NPST Q
 「そうなんですか？」
- b. nuu jar-j oo baa?
 何 COP-CVB 敬意.NPST Q
 「何でいらっしゃるんですか？」

(9-35) に挙げる表現でのみ、コピュラ動詞が時制形で現れる例が見つかった。

- (9-35) ee jar-u o-tar-oo.
 そう COP-NPST 敬意-PST-IND2
 「そうでしたよ。」

最後に、動作主体が参照点に接近していることを表す例を挙げる。

- (9-36) kaccee=nu buja <rjuusee> sor-i or-ja-ta-n.
 屋号=GEN おじいさん 人名 連れる-CVB 接近-DUR-PST-IND1
 「勝連のおじいさんが、リュウセイを連れていらっやっていた。」

9.2.10 依頼を表す補助動詞 tabor

依頼補助動詞 tabor は tabor 「差し上げる」に由来する。tabor 「差し上げる」は、hi(r) 「あげる」のような語彙的意味を含み、かつ動作主体が目上の場合に用いられる一般動詞である。本補助動詞は、基本的に目上に対する依頼を示す。目上というのは、話し手を基準に年上を指す。基本的には目上の動作主体に対して用いられるが、目下を含む不特定多数に対しても用いられることがあるため、動作主体への敬意および、依頼を表すと考える。グロスには単に「依頼」と記す。敬意の補助動詞も命令文では依頼を表しうするため (9-32a)、tabori との違いの解明については今後の課題とする。(9-37) に例を挙げる。

- (9-37) a. abo-ima, bebi panasī sīk-ah-e tabor-i.
 母-PL 少し 話 聞く-使役-CVB 依頼-IMP

「お母さん方、少し話を聞かせてください。」

b. **osjoor-i** **tabor-i**

召し上がる-CVB 依頼-IMP

「召し上がってください。」

c. **or-i** **tabor-i.**

いらっしゃる-CVB 依頼-IMP

「いらっしゃってください。」(lit. ようこそ)¹⁵

依頼の意味はなく、無生物に対して当該補助動詞が用いられた例が1例観察された(9-38)。このような機能の詳しい調査に関しても、また今後の課題とする。

(9-38) <baiten>=nu katamuta=na=ru **ar-i** **tabor-oo.**

売店=GEN 横=LOC1=FOC ある-CVB 依頼-IND2

「(それは) 売店の横にございますよ。¹⁶」

9.3 軽動詞構文

同じ述語内に本動詞と s「する」、a(r)「ある」、nen「ない」のいずれかの軽動詞が現れる構文を軽動詞構文と呼ぶ。軽動詞(Light verb)と呼ぶ理由は、当該動詞の語彙的意味はほとんどなく、かつ補助動詞のようにアスペクトやモーダルな意味を表さないからである。

軽動詞構文は、本動詞と軽動詞の間に焦点助詞や累加助詞、排他助詞などの助詞が現れる場合に用いられる迂言的な表現である。基本的に次の組み合わせが観察される。

- 一般動詞 助詞 軽動詞 s
- ha 属性動詞 助詞 軽動詞 a(r) / nen

sja 属性動詞に関しては、一般動詞に準ずる中止形を持つ sja 属性動詞は軽動詞 s「する」と、それ以外の sja 属性動詞は nen「ない」と軽動詞構文を成す例が見つかっている。sja 属性動詞が a(r)「ある」と軽動詞構文を成す例は見つかっていない。本論文では、ha 属性動詞が本動詞に現れる場合、例外的に屈折接辞を伴わない語幹そのものが用いられていると分析する(p. 219 注 2)。

9.3.1 軽動詞 s

本動詞として一般動詞が用いられ、軽動詞に s「する」が後続する軽動詞構文では、軽動詞に一般用法では見られない s「する」の異形態 sis, sis が観察される。この2つの異形態については、現れる環境が限られているため、最後に述べる。

¹⁵ お客さんに対する挨拶の定型表現。

¹⁶ (9-38) は、なぞなぞの出題における例文である。

(9-39) に焦点助詞が現れる例を、(9-42) に累加助詞が現れる例を挙げる。本動詞には一般動詞の他に、一般動詞に準ずる中止形を持つ *sja* 属性動詞が現れる (p. 144 注 1)¹⁷。 *sja* 属性動詞が本動詞に現れる場合、軽動詞に続き、継続補助動詞 1 の補助動詞構文が用いられる (*s-j a-* (する-CVB 継続 1 「～している」)。

(9-39) a. *jum-u-n.*

読む-NPST-IND1

「読む。」

b. *jum-i=ndu s-oo.*

読む-CVB=FOC する-NPST-IND2

「読む。」

(9-40) *oosi=n s-j a-n, kinkisi=n s-j a-n.*

青い.CVB=も する-CVB 継続 1.NPST-IND1 黄色い.CVB=も する-CVB 継続 1.NPST-IND1

「青くもしている。黄色くもしている。」 (lit. 青くもある。黄色くもある。) cf. *oosja-n* 「青い」
kinkisja-n 「黄色い」

基本的には本動詞と軽動詞の間に助詞が現れるが、一方で、本動詞と軽動詞の間に形態素が何も現れない例も見受けられる。従って、軽動詞構文の機能について、さらに調査する必要がある。

(9-41) a. *fusahar-u munu a=cjara en-i s-oo.*

欲しい-NPST もの ある条件 言う-CVB する-NPST-IND2

「欲しい物があったら言うよ。」 cf. *en-oo* 「言うよ。」

b. *munu sīkur-i si ci=ru ho-tar-oo.*

もの 作る-CVB する.CVB 付帯 2=FOC 食べる-PST-IND2

「物を作りながら食べたよ。」 cf. *sīkur-i ci* 「作りながら」

推量の助詞 *saa* が述語末に用いられる際にのみ、*sīs* あるいは *sis* という形式が軽動詞 *s* の異形態として観察された (9-42)。形式の違いによる意味の相違は見出せていない。

(9-42) a. *uri=n ng-i su saa.*

あれ=も 行く-CVB する.NPST 推量 2

b. *uri=n ng-i sīsu saa.*

あれ=も 行く.CVB する.NPST 推量 2

c. *uri=n ng-i sisu saa.*

あれ=も 行く-CVB する.NPST 推量 2

「あれ (あの人) も行くでしょう。」 cf., *ng-u saa* 「行くでしょう。」

¹⁷ *ha* 属性動詞が動詞 *s* 「する」とともに述語を成す場合もあるが、この構造は軽動詞構文とは呼べない。 *takaha su-n raa.* (高い する.NPST-IND1 DSC1) 「(台を) 高くするね。」仮に *takaha* を本動詞と呼ぶなら、本動詞の状態へ変化することを表し、明らかに意味的な違いがあるからである。本構造に関しては、さらに例を集め分析する必要がある。

9.3.2 軽動詞 a(r)

本動詞として ha 属性動詞が用いられ、軽動詞 a(r)「ある」が後続する軽動詞構文では、必ず本動詞と軽動詞の間に助詞が用いられる。焦点助詞が現れる例を (9-43a) 排他助詞 gaasi「だけ」が現れる例を (9-43b) に挙げる。

- (9-43) a. maroha=**ndu** ar-oo.

低い=FOC ある-NPST.IND2

「低い。」 cf. maroha-n「低い」

- b. ng-i+boha **gaasj** ar-oo.

行く-SE+ 願望 だけ ある-NPST.IND2

「ただ行きたいだけだ。」 cf. ngi+boha-n「行きたい」

焦点助詞が後続する動詞 a(r)「ある」と融合した場合、継続補助動詞 1da(r) を含む動詞句であると解釈できる (9.2.1)。 (9-44) に、 (9-43a) を補助動詞 da(r) を含む述語に言い換えた例を挙げる。意味は変わらない。

- (9-44) maroha dar-oo.

低い 継続 1-NPST.IND2

「低い。」

9.3.3 軽動詞 nen

本動詞として属性動詞が用いられ、軽動詞 nen「ない」が後続する軽動詞構文では、本動詞と軽動詞の間に何の形態素も現れない。補助動詞構文の完了補助動詞 1 nen は完了を表すが、軽動詞構文では、単に否定極性を表す。従って、nen に先行する本動詞が一般動詞か、属性動詞かで、nen の機能が相補分布を成していると言える。

- (9-45) a. takaha nen-u.

高い ない-NPST

「高くない。」 cf. takah-en-u

- b. maroha nen-u.

低い ない-NPST

「低くない。」 cf. maroh-en-u

- c. isjagaha nen-ta-n.

小さい ない-PST-IND1

「小さくなかった。」 cf. isjagah-en-ta-n

なお、同じ祖方言から分かれた石垣白保方言では、このような軽動詞構文でのみ ha 属性動詞の否定極性を表せるという (中川奈津子氏, p.c. 2017)。従って、祖方言から分かれた後、波照間方言では nen の軽

動詞用法が否定接辞（6.5.4）として独自に文法化した可能性が考えられる。軽動詞構文を用いて **ha** 属性動詞の否定極性を表す例は、接辞法による否定極性を表す例に比べると少ない。

第 10 章

文の形成

本章ではまず 10.1 で主要な文として、疑問文と命令文の構造を提示する。続いて極性、テンス、アスペクト、モダリティについて 10.2～10.5 で述べる。モーダルな意味を持つ助詞すなわちモーダル助詞については 10.5.2 で、談話標識として機能する談話標識助詞については 10.6 で述べる。最後に 10.7 で受身や使役といった項構造の操作について述べる。

10.1 主要な文の構造

波照間方言の文は、動詞形態で、あるいは助詞を用いてそれぞれの文であることを明示する。(肯定の)疑問文と命令文についてそれぞれ 10.1.1 と 10.1.2 で述べる。これ以外の文を平叙文として認める。平叙文は無標であるため、本節では扱わない。

10.1.1 疑問文

疑問文は、聞き手から命題の真偽や正しい答えを引き出す文である。疑問文の文末は、疑問助詞で示される。波照間方言の場合、イントネーションは疑問文の形成に影響しない (2.4)。下位分類として、真偽疑問文と内容疑問文が認められ、用いられる疑問助詞の形式がそれぞれ異なる。疑問助詞は、異形態に *naa*, *raa*, *baa*, *jaa* がある。

10.1.1.1 真偽疑問文

真偽疑問文は、聞き手から命題の真偽に関する答えを引き出す文である。真偽疑問文には疑問助詞 *naa* が用いられ、述語の動詞は、時制形を取る。(10-1) に例を挙げる。話し手は、「あんた (= 聞き手) が行く」という命題に対して、真か偽かを問うている。結果、答えは真 (oo 「はい」) であった。

(10-1) a. *daa ng-u naa?*

2ND.SG 行く-NPST Q

「あんたが行くのか？」

b. *oo.*

INTJ

「はい。」

真偽疑問文の基本的な返答表現には、真の場合に oo「はい」(10-1)、偽の場合に aaii「いいえ」がある。偽の場合に真となる情報を持っている場合は、返答表現に続けてその情報を提示する。(10-2)に例文を挙げる。答えが偽のため、aaii「いいえ」という返答表現の後、真となる情報を提示する例文である。

(10-2) a. urj=a <seeto> ja-ta naa?

あれ=TOP 生徒 COP-PST Q

「あれは生徒だったか？」

b. aaii, sinsin ja-ta-n.

いいえ 先生 COP-PST-IND1

「いいえ、先生でした。」

答えが偽の場合、aaii「いいえ」という返答表現を用いず、直接、真となる情報を提示することもある。(10-3)に例を挙げる。

(10-3) a. kjuu joo, daa te kjuu <sumuzure>=ci or-an-ta naa?

今日 DSC2 2ND.SG 引用 2 今日 すむずれの家=ALL いらっしゃる-NEG-PST Q

「今日さ、あんたったら今日『すむずれの家¹』にいらっしゃらなかったか？」

b. acca.

明日

「(いいえ) 明日。」

答えが真の場合、oo「はい」が省略されることはめったにない。このことは、波照間方言話者達が談話中に頻繁に用いる表現 ee ja-rj oo naa (そう COP-CVB 敬意.NPST Q)「そうなんですか?」を見ても同様である。筆者は感嘆の表現、あるいは日本語から波照間方言へのスイッチリファレンスを促す合いの手として使用していた。仮に疑問助詞で示されている本表現が、感嘆の機能を持つのであれば、特に返答がなくてもよいはずであるが、筆者の認識とは異なり、本表現にはほとんど真偽値(主に真)が返ってくる。

(10-4) a. ee ja-rj oo naa?

そう COP-CVB 敬意.NPST Q

「そうなんですか？」

b. oo.

はい

「はい。」

真偽疑問文が名詞節から成る場合、平叙文でコピュラ動詞が現れない環境では、名詞述語に疑問助詞が直接後置される²。(10-5)に例を挙げる。コピュラ動詞が現れ、時制形を取る例は(10-2)を参照のこと。

¹ 波照間島のデイサービスセンターの名称。

² コピュラ動詞が現れる環境とは、音形を持つ接辞やモダリティ助詞などの担い手として働く場合である。

- (10-5) a. urj=a <seeto> naa?
 あれ=TOP 生徒 Q
 「あれは生徒か？」 cf. (10-2)
- b. aaii, sinsin.
 いいえ
 「いいえ、先生です。」

10.1.1.2 内容疑問文

内容疑問文は、聞き手から不明な部分の正しい答えを引き出す文である。内容疑問文が動詞節からなる場合、疑問助詞として baa あるいは raa が文末に用いられ、名詞節からなる場合、baa, raa, jaa, naa が用いられる。使い分けについては、それぞれの箇所を参照されたい。疑問文中の焦点助詞 (12.1) は、平叙文と同じものが用いられる。なお、南琉球でしばしば観察される ga のような焦点助詞の形式は波照間では見つかっていない。

内容疑問文が真偽疑問文と統語的に異なる点は、疑問助詞の異形態の現れ方の他、疑問部分を明示する語が含まれる点である。本論文では、疑問部分を明示する語を機能的なまとまりとして疑問語と呼ぶ (7.2)。疑問語の一覧を表 10.1 に挙げる。疑問語はすべて直示的な語である。nee は指示様態詞 (3.2.5)、それ以外は疑問代名詞である (5 章)。不明な部分に適した疑問語を選択し、疑問部分を明確化する。分布には、疑問語が直格項に現れるか (直格)、斜格項に現れるか (斜格)、名詞句の修飾部に現れるか (修飾)、名詞節のコピュラ主語およびコピュラ補語に現れうるか (Cop) を示した。○はこれまでに例が見つかっていることを、ハイフンは例が見つかっていないことをそれぞれ示す。

表 10.1: 疑問語の一覧

形式	意味	品詞	分布			
			直格	斜格	修飾	Cop
taa ³	誰	疑問代名詞	○	-	-	○
nuu	何	疑問代名詞	○	○	○	○
zaa	どこ・どちら	疑問代名詞	○	○	○	○
ici	いつ	疑問代名詞	○	○	○	○
uubi	いくつ・いくら	疑問代名詞	-	-	-	○
nee	どう	指示様態詞	-	-	○	○

以下では、内容疑問文が動詞節から成る場合と、名詞節から成る場合に分けて論じる。

■動詞節から成る内容疑問文

³ taa「誰」は、斜格項として機能する例文は見つかっていないが、奪格や共格とは共起する可能性がある。調べる必要がある。さらに、人称代名詞であるため、名詞句を修飾する例はない。その代わりに被修飾名詞と複合語を成す例はある。例：ta+hi「誰の家」

動詞節から成る内容疑問文では、述語動詞が過去接辞を含む時制形の場合に疑問助詞 **raa**、それ以外の動詞形式の場合には **baa** が用いられる。述語の動詞形式は、不規則的である。過去接辞を含む場合は時制形で、それ以外の場合は中止形で現れる。ただし、後者の場合であっても存在動詞 **a(r)**「ある」、敬意を表す動詞 **o(r)**「いらっしゃる」および、これらの動詞を由来とする動詞語幹に限り、時制形で現れる。例えば、属性動詞語幹、継続接辞を含む動詞語幹、継続を表す補助動詞、敬意を表す補助動詞である。

(10-6) に直格項に疑問語を用いる例を挙げる。話し手は、「誰かが行った」という事実は知っているが、誰が行ったのか知らない。疑問部分は直格項 (S) でかつ人間であるため、疑問語には **ta**「誰」が、何の格助詞も伴わず用いられる。疑問語には焦点助詞=**ndu** (12.1) が後続する傾向がある。なお、疑問語に焦点助詞を付加する場合、疑問語だけではなく、答えとなる語にも焦点助詞が現れる。**ta**「誰」に対する答え **memugee**「前迎さん」に焦点助詞が付加されている (10-6b)。述語動詞は、過去接辞を含むため、時制形で実現し、疑問助詞は **raa** で実現する (10-6a)。

(10-6) a. **ta=ndu ng-uta raa?**

誰=FOC 行く-PST Q

「誰が行ったのか？」

b. **memugee=ndu ng-utar-oo.**

屋号=FOC 行く-PST-IND1

「前迎さんが行った。」

(10-7) に挙げる例文は、疑問部分は直格項 (P) でかつ人間以外であるため、疑問語には **nuu**「何」が何の格助詞も伴わず用いられる。述語動詞は、例外的に時制形で現れる **o**「いらっしゃる」である⁴。疑問助詞は、先行する動詞語幹末が過去接辞ではないので、=**ba** が用いられる。

(10-7) **nuu=ndu fusar-i o baa?**

何=FOC 欲しい-CVB 敬意.NPST Q

「何が欲しいですか？」

zaa および **icī** が直格項として機能する場合、述語動詞は属性動詞でのみ見つかっている。属性動詞は、存在動詞 **a(r)**「ある」を由来とする形式を含む動詞語幹から成るため、述語動詞は時制形で実現する⁵。

(10-8) **zaa=ndu accaha baa?**

どこ=FOC 暑い.NPST Q

「どちらが暑いですか？」

(10-9) **icī=ndu misja baa?**

いつ=FOC よい.NPST Q

「いつがよいですか？」

疑問語が斜格項としても機能することもある。その場合、疑問語に格助詞が後続する。(10-10) から (10-12) に例を挙げる。(10-10) は材料を問う **nuu**「何」と具格助詞 (8.7.4) が組み合わさる例、(10-11)

⁴ 通常、動詞が過去接辞を含まない場合は副動詞形で現れる。

⁵ 属性動詞の由来については 6.1 を参照のこと。

は目的地を問う *zaa* 「どこ」と与格助詞 (8.7.2) が組み合わさる例、(10-12) は開始時間を問う *ici* 「いつ」と奪格助詞 (8.7.1) が組み合わさる例である。

- (10-10) *nuu=si=ru sikur-j a baa?*
 何=INS=FOC 作る-CVB 継続 1.NPST Q
 「何で作っているか？」

- (10-11) *za=ga=ru o baa?*
 どこ=DAT1=FOC いらっしゃる.NPST Q
 「どこにいらっしゃいますか？」

- (10-12) *ici=gara bur-i baa?*
 いつ=ABL いる-CVB Q
 「いつからいるか？」

疑問語は、名詞句の修飾部として機能することもできる。疑問語は、それぞれが属する品詞と同様の振る舞いを見せるため、名詞句の修飾部を占める際には「疑問語=nu」という組み合わせで用いられる (8章)。(10-13) から (10-15) に、疑問語 *nuu* 「何」、*zaa* 「どこ」、*nee* 「どう」が属格助詞と共に用いられる例を挙げる。角括弧で名詞句を示す。

- (10-13) [*nuu=nu jaasee*] *sike baa?*
 何=GEN 野菜 使う.CVB Q
 「何の野菜を使うか？」

- (10-14) [*za=nu sima*]=*na a baa?*
 どこ=GEN 島=LOC1 ある.NPST Q
 「どこの島にあるか？」

- (10-15) [*nee=nu masamunu*]=*ndu siko-ta raa?*
 どう=GEN ごちそう=FOC 作る-PST Q
 「どんなごちそうを作ったか？」

指示人称代名詞は、人称代名詞と同様に、他の名詞を修飾する際には複合語を形成する。

- (10-16) *ta+hi=ga=ci ng-j a-ta raa?*
 誰 + 家=DAT1=ALL 行く-CVB 継続 1-PST Q
 「誰の家に行ったのか？」

理由や方法を聞き手から引き出したい場合は疑問語 *nee* に理由助詞や付帯助詞を後置させ、*nee ki* (どう 理由 2) 「なぜ」あるいは *nee ci* (どう 付帯 2) 「どのように」といった表現を用いる。

- (10-17) *nee ki=ru k-j a baa?*
 どう 理由=FOC 来る-CVB 継続 1.NPST Q
 「なぜ来ているのか？」

(10-18) **nee ci=ru hak-uta raa?**

どう 付帯 2=FOC 書く -PST Q

「どのように書いたのか？」

■名詞節から成る内容疑問文

名詞節から成る内容疑問文では、コピュラ動詞が現れる場合、動詞は必ず時制形で実現する。コピュラ動詞単独の場合と、コピュラ動詞と敬意を表す補助動詞が組み合わさって現れる場合がある (9.2.9)。疑問助詞の現れ方は、次の傾向が観察される。

- **jaa** : コピュラ動詞が現れない環境の場合 (10-19)
- **baa** : コピュラ動詞と敬意補助動詞 **o** が用いられる環境で非過去の場合 (10-20)
- **raa** : 過去接辞を含む場合 (10-21)

naa は、**jaa** あるいは **raa** が期待される環境で、数例見つかっている (10-22)。

(10-19) 疑問助詞 **jaa** が現れる例

a. **urj=a taa jaa?**

あれ.TOP 誰 Q

「あれは誰だ？」

b. **urj=a nuu jaa?**

あれ.TOP 何 Q

「あれは何だ？」

(10-20) 疑問助詞 **baa** が現れる例

a. **nee jarj oo baa?**

どう COP.CVB 敬意.NPST Q

「どうですか？」

b. **uubi jarj oo baa?**

いくつ COP.CVB 敬意.NPST Q

「いくらですか？」

(10-21) 疑問助詞 **raa** が現れる例

a. **nee=nu masamunu ja-ta raa?**

どう=GEN ごちそう COP-PST Q

「どんなごちそうでしたか？」

b. **nee da-ta raa?**

どう FOC.COP-PST Q

「どうだったのか？」

(10-22) 疑問助詞 **naa** が現れる例

- a. urj=a **icĩ** ja-ta **naa?**
 あれ.TOP いつ COP-PST Q
 「あれはいつだったかね？」
- b. **ta**=ndu sinsin **naa?**
 誰=FOC 先生 Q
 「誰が先生か？」

10.1.2 命令文

命令文は、話し手の聞き手への要求・願望を示す文である。基本的に、動作の主体は聞き手である。命令文は、述語動詞が命令法接辞を含む動詞形式（6.4.6）で実現する。(10-23) に例を挙げる。

- (10-23) a. ng-i.
 行く-IMP
 「行きなさい。」
- b. ba=ga sĭk-ah-e.
 1ST.SG=DAT1 聞く-使役-IMP
 「私に聞かせなさい。」
- c. nabi naga iri-**ba**.
 鍋 LOC3 入れる-IMP
 「鍋に入れなさい。」

命令文は、上に挙げた例文のように指図を表す場合に用いられる。一方、動作主体への敬意とお願いを意味することが可能である。敬意補助動詞と依頼補助動詞に命令法接辞が付加する例を挙げる (10-24)。

- (10-24) a. da+hi=nu buja=n dagu sikor-i te=ru en-i **or-i** joo.
 2ND.SG+ 家=GEN おじいさん=も 道具 作る-IMP 引用 2=FOC 言う-CVB 敬意-IMP DSC2
 「あなたの家のおじいさん（に）も道具を作ってと言って下さいね。」
- b. jamada=nu paa, daa bebi panasĩ sĭk-ahe **tabor-i**.
 屋号=GEN おばあさん 2ND.SG 少し 話 聞く-使役.CVB 依頼-IMP
 「山田のおばあさん、あなた少し話を聞かせてください。」

波照間方言の命令文では、(10-24b) のように、動作の主体すなわち聞き手を言及することが、しばしば見受けられる。固有名詞を言及する場合にも、続けて 2 人称代名詞を言及することが多い。

10.2 極性

本論文では、極性を肯定・否定という 2 つの両極の概念と捉える。波照間方言では、否定の場合のみ、述語に否定接辞（6.5.4）あるいは禁止法接辞（6.4.8）が現れる。これら 2 つの接辞が現れない場合

は、すべて肯定である。本節では、否定平叙文、否定疑問文、そして否定命令文すなわち禁止文の例をそれぞれ挙げる。

■否定平叙文

(10-25) と (10-26) に自他動詞節から成る否定平叙文の例を挙げる。否定平叙文では、非過去の場合には確信法接辞は現れない (10-25)。否定接辞と非過去接辞がどちらも用いられる環境で、確信法接辞が付加する動詞形式は存在しない (6.5.4)。一方、過去の場合は必ず確信法接辞が現れる (10-26)。この点で、時制を問わず確信法接辞が動詞末に必ず現れる肯定平叙文とは異なる⁶。

(10-25) 否定平叙文（非過去）

- a. *mana nee jam-an-u.*
今 様 痛む-NEG-NPST
「今の様には痛まない。」
- b. *e su siku busah-en-u.*
そう する 程 大きい-NEG-NPST
「それほど大きくない。」
- c. *bass-un-u.*
忘れる-NEG-NPST
「(このことは) 忘れない。」

(10-26) 否定平叙文（過去）

- a. *en-an-ta-n.*
言う-NEG-PST-IND1
「言わなかった。」
- b. *mir-an-ta-n.*
見る-NEG-PST-IND1
「見なかった。」
- c. *jum-an-tar-oo.*
読む-NEG-PST-IND2
「読まなかったよ。」

非過去でかつ否定の場合に形態的なモダリティを欠くという点に関して、(1) 歴史的に存在したものがなくなった、あるいは (2) 以前からこのような形式だった、という 2 通りの考えが可能である。同じ南琉球の与那国語では、否定非過去の動詞形式に確信法接辞-*n* を付加することができる。このことから、波照間方言にも歴史的には否定非過去の確信法が存在した可能性もある。Yamada et al. (2015) の与那国語の文法を見ると、例えば、非過去否定の確信法の動詞形式は以下の通りである。*hir-anu-n* (行く-NEG-IND) 「行かない。」(Yamada et al. 2015: 459 表 18.7 より。形態素分析、グロス、訳は筆者によ

⁶ 非過去の否定平叙文でも話し手自身の経験や、確実な予定を表していると言えよう。

る。) 一方で、以前から今あるような形式であった可能性もある。否定と肯定を比べた際、言語によっては形式的に否定の方がテンス・アスペクトの区別が少ない、あるいは中和するという報告がある (Payne 1997: 290)。従って、肯定に比べて否定の場合はムードの区別が少ないと考えることは十分可能である。

(10-27) と (10-28) に名詞節から成る否定平叙文の例を挙げる。コピュラ動詞は否定接辞の担い手として、否定文では必ず用いられる。その他は、自他動詞節からなる否定平叙文と同様に、非過去の場合には確信法接辞は現れず、一方、過去の場合は必ず確信法接辞が現れる。

(10-27) 否定平叙文 (コピュラ・非過去)

- a. *wassa kutu ar-an-u.*

悪い こと COP-NEG-NPST

「悪いことではない。」

- b. *manzjon ar-an-u.*

パパイヤ COP-NEG

「パパイヤではない。」

(10-28) 否定平叙文 (コピュラ・過去)

- a. *nu=n wassa kutu ar-an-ta-n.*

何=も 悪い こと COP-NEG-PST-IND1

「何も悪いことではなかった。」

- b. *manzjon ar-an-ta-n.*

パパイヤ COP-NEG-PST

「パパイヤではなかった。」

■否定疑問文

肯定疑問文と否定疑問文の違いは、単に述語動詞に否定接辞を含むか含まないかだけである。(10-29) と (10-30) に否定真偽疑問文と否定内容疑問文の例を挙げる⁷。

(10-29) 否定疑問文 (真偽疑問文)

- a. *daa ng-an naa?*

2ND.SG 行く-NEG.NPST Q

「あんたは行かないのか？」

- b. *<seeto> ar-an naa?*

生徒 COP-NEG.NPST Q

「生徒ではないのか？」

- c. *sino h-ah-an-ta naa?*

昨日 食べる-使役-NEG-PST Q

「昨日食べさせなかったか？」

⁷ (10-29a), (10-29b), (10-30c) の非過去接辞-u は、子音素間母音 u の脱落の音韻規則が適用され、脱落する (2.5.2)。

(10-30) 否定疑問文（内容疑問文）

- a. ta=ndu ng-an-ta raa?
 誰=FOC 行く-NEG-PST Q
 「誰が行かなかったのか？」
- b. nu=ndu h-an-ta raa?
 何=FOC 食べる-NEG-PST Q
 「何を食べなかったのか？」
- c. ta=ndu sinsin ar-an naa?
 誰=FOC 先生 COP-NEG.NPST Q
 「誰が先生じゃないのか？」

■禁止文（否定命令文）

否定文の中で、唯一肯定文と並行的な構造を見せないのが禁止文である。単に（肯定の）命令形に否定接辞を挿入することはできない。禁止文の述語には、禁止法接辞を含む動詞形式が現れる（6.4.8）。(10-31) に例を挙げる⁸。

- (10-31) a. hi=ja usika pak-una te en-oo raa.
 家=TOP 内側 掃く-禁止 引用 2 言う-NPST.IND2 DSC1
 「家は、内側に掃くなって言うよね。」
- b. mana arasi-na.
 今 洗う-禁止
 「今洗うな。」
- c. hi=gara ndi-nna.
 家=ABL 出る-禁止
 「家から出るな。」

10.3 テンス

テンスとは、示されるイベントと、参照点との時間的な関連を示す文法カテゴリーを指す (Payne 1997, Givón 2001)。参照点とは、基本的には発話時を指す。このような文法カテゴリーが体系を成す場合、これをテンス体系と呼ぶ。

波照間方言は、示されるイベントの生じる時点が、参照点に対して「過去なのかあるいは過去以外の時点なのか」を区別し、さらに過去の場合には「直近の過去なのか、あるいはそうではないのか」を区別する。この区別は確信形の動詞と、時制形の動詞に必ず現れる。すなわち、過去接辞（6.4.1）、非過去接辞

⁸ 基本的には禁止法接辞を含む動詞形式が用いられるが、否定接辞を含む語幹に命令接辞を付加したように見える形式が 1 例のみ観察された。観察された唯一の例を挙げる。daa mir-an-ba. (2ND.SG 見る-NEG-IMP) 「あんたは見ないで。」さらに調査が必要である。

(6.4.2) 近接過去接辞 (6-42) のいずれかが現れる。従って、波照間方言は過去・非過去・近接過去のテンス体系を成していると分析する。ただし、6-42 でも述べているように、近接過去については不明な点が多い。本論文では、近接過去接辞が過去接辞および非過去接辞と共起しないという点で、同じ時制のカテゴリーを成していると考えた。近接過去接辞は、過去接辞で代用できる。

例えば (10-32) に例を挙げる。(10-32a) は、示されるイベントの生じる時点が、発話時に対して過去のある時点であることを意味する。(10-32b) は、発話時よりも前すなわち過去ではないことを意味する。一方、(10-32c) は、発話時に近い過去の時点であることを意味する。非過去接辞は音形を持たないこともあるが、本節では明確にするため非過去接辞を表記する。

- (10-32) a. baa s̥imuc̥i jum-uta-n.
 1ST.SG 本 読む-PST-IND1
 「私は本を読んだ。」
- b. baa s̥imuc̥i jum-u-n.
 1ST.SG 本 読む-NPST-IND1
 「私は本を読む。」
- c. baa s̥imuc̥i jum-ja-n.
 1ST.SG 本 読む-RCTPST-IND1
 「私はちょうど本を読み終わった。」

否定接辞を付加する場合は、過去・非過去の 2 項対立を見せる。補助動詞構文中でも 2 項対立が観察される。(10-33) に否定接辞を付加する場合の例を、(10-34) に継続補助動詞構文の例をそれぞれ挙げる。

- (10-33) 否定接辞を付加する場合
- a. baa s̥imuc̥i jum-an-ta-n.
 1ST.SG 本 読む-NEG-PST-IND1
 「私は本を読まなかった。」
- b. baa s̥imuc̥i jum-an-u.
 1ST.SG 本 読む-NEG-NPST
 「私は本を読まない。」

- (10-34) 継続補助動詞構文の場合
- a. baa s̥imuc̥i jum-j a-ta-n.
 1ST.SG 本 読む-CVB 継続 1-PST-IND1
 「私は本を読んでいた。」
- b. baa s̥imuc̥i jum-j a-∅-n.
 1ST.SG 本 読む-CVB 継続 1-NPST-IND1
 「私は本を読んでいる。」

基本的には、発話時を参照点とする絶対テンスの体系を持つ。しかし、複数の節に副詞節 (11.3) と主要部の関係が見られる際の、副詞節 (従属部) のテンス体系については分析が足りない。主要部に示されるイベントの時制を参照点とする相対テンスの体系を持つ可能性も考えられる。今後の課題とする。

10.4 アスペクト

アスペクトとは、示されるイベントの内的な時間性を描写する文法カテゴリーを指す (Payne 1997)。波照間方言は、肯定の場合に限り、完結相と非完結相の対立が見つかっている。完結相は終了や境界に限界点を置き、イベントを全体として捉える (Perfective)。非完結相は、イベントの内的な時間制の中で、継続性や結果面を捉える (Imperfective)。非完結相には 2 つの継続相が観察されるが、違いは未解明のままである。

動詞 *jum* 「読む」を例に、観察される (補助動詞を含む) 動詞形式を表 10.2 に挙げる。

表 10.2: 各相の動詞形式

		時制		
		非過去	過去	近接過去
完結相		<i>jum-u-n</i> 「読む」	<i>jum-uta-n</i> 「読んだ」	<i>jum-ja-n</i> 「今読み終わった」
非完結相	継続相 1	<i>jum-j a-Ø-n</i> 「読んでいる」	<i>jum-j a-ta-n</i> 「読んでいた」	-
	継続相 2	<i>jum-i bir-j a-Ø-n</i> 「読んでいる」	<i>jum-i bir-j a-ta-n</i> 「読んでいた」	-
	結果相	<i>jum-i nen-u</i> 「読んでしまった」	<i>jum-i nen-ta-n</i> 「読んでしまった」	-

10.4.1 完結相

完成相では、イベントの開始限界から終了限界までを全体として捉え、イベントが完成する／したことを表す。例えば (10-35) では、バナナを食べること全体をイベントとして捉える。非過去であれば発話時より後、すなわち未来にイベントが完成することを表す (10-35a)。過去であれば、すでにイベントが完成したことを表す (10-35b)。完成相と完了相との違いは、前者がイベントを全体として捉えるのに対し、後者はイベントの終了時を捉えている点である。

- (10-35) a. *baa baasa+nari ho-n.*
 1st.SG 芭蕉 + 実 食べる.NPST-IND1
 「私はバナナを食べる。」
- b. *baa baasa+nari hoota-n.*
 1st.SG 芭蕉 + 実 食べる.PST-IND1

「私はバナナを食べた。」

c. mana h-ja-n.

今 食べる-RCTPST-IND1

「今食べ終えた。」

近接過去 6.4.3 の完成相は、完了の意味を持つとも考えられる。現段階ではテンスの対立として捉えておく。今後、近接過去接辞の研究が進めば異なる記述が行われる可能性がある。

10.4.2 継続相

非完結相のうち継続相は、イベントの内的な時間性の中で継続性を捉える。継続補助動詞 1 (9.2.1) あるいは継続補助動詞 2 (9.2.2) を用いる補助動詞構文で、継続相を表すことができる。2 つの補助動詞構文は、本動詞の語彙的意味により以下の 3 つの意味を表す。

- 動作の継続
- 動作結果の継続
- 習慣

2 つの形式に、習慣や、多回性、痕跡、「今まさにしつつある」といった意味の違いや使い分けは見られない。例えば、「割る」を意味する *bar* と「死ぬ」を意味する *marasĩ* を用いた例文を挙げる。(10-36) では、いずれも多回的な意味のみ表す。従って、動作の継続あるいは習慣を意味する⁹。(10-37) では、いずれも動作結果の継続のみ表す¹⁰。

(10-36) a. *bar-i dar-oo.*

割る.CVB 継続 1-NPST.IND2

「割っているよ。」

b. *bar-i bir-j ar-oo.*

割る.CVB 継続 2-CVB 継続 1-NPST.IND2

「割っているよ。」

(10-37) a. *marah-e dar-oo.*

死ぬ.CVB 継続 1-NPST.IND2

「(すでに) 死んでいるよ。」

b. *marah-e bir-j ar-oo.*

死ぬ.CVB 継続 2-CVB 継続 1-NPST.IND2

「(すでに) 死んでいるよ。」

⁹ 「割られてある」のような痕跡を意味する場合は、準備の補助動詞を用いて表す (例: *bar-i sik-j a-n* (割る.CVB 準備-CVB 継続 1-NPST.IND))。

¹⁰ 「死につつある」といった意味する場合は、前望を表す複合動詞 (6.6.1) を用いる。(例: *marah-e+gisjaha-n* (死ぬ.SE+ 前望.NPST-IND))。

10.4.3 結果相

非完結相のうち結果相は、イベントの内的な時間制の中で、結果面を捉える。完了の補助動詞構文(9.2.3)を用いて結果相を示すことができる。(10-38)に非過去接辞を含む動詞を用いた例文を、(10-39)に過去接辞を含む動詞を用いた例文をそれぞれ挙げる。非過去接辞を含む場合と過去接辞を含む場合の違いは明らかにできなかった。

(10-38) a. ng-i nen-u.

行く-CVB 完了-NPST

「行ってしまった。」

b. h-e nen-u.

食べる-CVB 完了-NPST

「食べてしまった。」

(10-39) a. parum-i nen-ta cju.

孕む-CVB 完了 HS1

「孕んでしまったとき。」

b. kaer-i=sa nen-tar-oo.

帰る-CVB=? 完了-PST-IND2

「帰ってしまったよ。」

結果相も、近接過去の完結相も(例: jum-ja-n「今読み終わった」)、パーフェクト的な意味を持つ。2つの違いは、話し手や聞き手の予期しないことが生じたということが含意されるかどうかである¹¹。いずれの形式も互いにアスペクトあるいはテンスから完全には独立しているとはいいがく、機能的な違いは未解明のままである。さらなる調査および解明は今後の課題とする。

10.5 モダリティ

モダリティとは、命題の真偽に対する話し手の態度(Propositional modality)あるいは、出来事に対する話し手の態度(Event modality)を指す。波照間方言では、前者を認識的モダリティ(Epistemic modality)、後者を義務的モダリティ(Deontic modality)と呼ぶ。例えば話し手は、命題に対し様々な態度を示す。自ら経験したものなのか、あるいは他の人から聞いたものなのか等である。このような態度や状態に関する文法カテゴリーが体系を成す場合、これをモダリティ体系と呼ぶ。

¹¹ 下地 (2018) では、同様の補助動詞構文を消失結果相と記述しているが、波照間方言では、「消失局面への着目」を例文では確認できなかった。今後、より詳細な調査が求められる。

10.5.1 ムード

波照間方言の動詞は、確信法、命令法、禁止法、意志法で対立しており、モダリティ体系を成している。6.3.2.1 に挙げた動詞形である。表 10.3 に、動詞 *jum* 「読む」を例として、動詞のムード形を一覧にする。確信法は認識的モダリティ、それ以外は義務的モダリティと言える。

表 10.3: ムード形一覧

	時制	形式	意味
確信法 1	非過去	<i>jum-u-n</i>	「読む」
	過去	<i>jum-uta-n</i>	「読んだ」
確信法 2	非過去	<i>jum-oo</i>	「読む」
	過去	<i>jum-utar-oo</i>	「読んだ」
命令法		<i>jum-i(ba)</i>	「読め」
意志法		<i>jum-a</i>	「読もう」
禁止法		<i>jum-una</i>	「読むな」

10.5.1.1 確信法

確信法は、動詞節の場合、動詞末に確信法接辞 1 の *-n* か、確信法接辞 2 の *-oo* が付加する (6.4.4, 6.4.5)。名詞節の場合、コピュラ動詞が必須でない場合には確信法接辞が付加しない。確信法では、命題の真偽に対し、真であると確信している話し手の態度を示す。確信法接辞が付加した動詞が文末に表れる場合、どちらの形式であっても、話し手は確信を叙述する。その結果、(1) 直接体験あるいは (2) 話し手の確実な予定を表す。

まず、直接体験について述べる。直接体験には、自身の経験と、経験を通して知り得た事柄が含まれる。この 2 つは、話し手自身が動作主体であるか、否かで区別できる。自身の経験を表す場合、経験がすでに生じた、あるいは生じていることを含意するため、一般動詞は基本的に過去接辞が付加し、非過去接辞と共に起する場合には、必ず継続補助動詞構文で用いられる。経験を通して知り得た事柄や事実を述べる際、あるいは属性動詞の場合には、時制の制限はない。話し手自身が、自ら見聞きした事柄について用いられる。

(10-40) 自身の経験 (確信法接辞 1)

- a. *pak-u siku=n amasikuru=a jam-uta-n.*

吐く-NPST 程度=も 頭=TOP 痛む-PST-IND1

「(私も昔は) 吐くほど頭が痛かった。」

- b. *<raku>=n si bir-j a-n.*

楽=も する.CVB 継続 2-CVB 継続 1.NPST-IND1

「(昔に比べ、私達は金を儲けて) 楽もしている。」

- c. kurj=a maaha-n.
 これ=TOP 美味しい.NPST-IND1
 「これは美味しい。」

(10-41) 自身の経験（確信法接辞 2）

- a. pīte nagj=a uri=si=ru suu ho-tar-oo.
 畑 LOC2=TOP あれ=INS=FOC 汁 食べる-PST-IND2
 「畑ではあれ（ひょうたん）で汁のおかずを食べたよ。」
- b. tapi=gara=ndu kee ki, he bir-j ar-oo.
 旅=ABL=FOC 買う.CVB 方向.CVB 食べる.CVB 継続 2-CVB 継続 1-NPST.IND2
 「(今は) 旅から買ってきて、食べているよ。」(lit. 島外で買ってきて、食べているよ。)

(10-42) 経験を通して知り得た事柄（確信法接辞 1）

- a. <baiten> nagi bu-ta-n.
 売店 LOC2 いる-PST-IND1
 「(あの子は) 売店にいた。」
- b. e munu nen-ta-n
 そう もの ない-PST-IND1
 「そんなものは(私が若い頃に) なかった。」
- c. zoo naga=n sīk-u-n.
 門 LOC3=も 置く-NPST-IND1
 「(シーサーは) 門にも置きます。」

(10-43) 経験を通して知り得た事柄（確信法接辞 2）

- a. e munu mo=gi ha=gi=n mir-air-oo.
 そう もの こちら=LOC2 あちら=LOC2=も 見る-POT-NPST.IND2
 「そういうものがあちらこちらで見られる。」
- b. be+sīma nagj=a <kaeru>=ja otta=ta=ndu en-oo.
 1ST.PL.INC+ 島 LOC2=TOP カエル=TOP カエル=引用 1=FOC 言う-NPST.IND2
 「波照間島では、カエルはオッタと言うよ。」
- c. e=nu panasī=ndu a-tar-oo.
 そう=GEN 話=FOC ある-PST-IND2
 「そんな話がありました。」

見聞きした事柄に、発話者が間接的に知っている（聞いた）事柄は含まれない。例えば、第三者の行動について、誰かから聞いた話であれば (10-42a) ではなく、以下の (10-44) に挙げるように伝聞を表す形式が用いられる。

(10-44) <baiten> nagi bu-ta cju.

売店 LOC2 いる-PST HS1

「売店にいたそうだ。」

次に、話し手の確実な予定を表す機能について述べる。話し手の確実な予定にも、確信法接辞が用いられる。時制は常に非過去である。これまでに見つかっている例を挙げる。

(10-45) 話し手の確実な予定（確信法接辞 1）

a. ama, <zibun> ici=ru ku-n joo.

姉 自分 いつ=FOC 来る.NPST-IND1 DSC2

「姉さん、自分はいついつに来るよ（と電話が来た）。」

kjuu funi ndi-n.

今日 船 出る.NPST-IND1

「今日は船が出ます。」

(10-46) 話し手の確実な予定（確信法接辞 2）

a. fui nar-iba sis-oo.

冬 なる-条件 2 着る-NPST-IND2

「冬になったら着るよ。」

b. baa fuciri num-oo maa.

1st.SG 薬 飲む-NPST-IND2 INTJ

「私は薬を飲むよ、もう。」

残念ながら、確信法接辞 1 と 2 の詳しい違いは明らかではない。これまでに分かっている違いは 3 つである。(1) 先行する項や述語に焦点助詞=ndu が付加されている場合、必ず確信法接辞 2 が用いられる。例えば (10-41) の 2 例、および (10-43) の b と c の例である。(2) 継続補助動詞 1 には、確信法接辞 2 がより多く用いられる傾向がある。波照間方言では同じ分節音の連続でも、ピッチパターンの違いで継続と近接過去の意味を区別する。そのため、形式的にも区別しやすいように継続補助動詞が用いられる場合に確信法 2 が選択されている可能性がある。例については、6.4.3 および 9.2.1 の例を参照されたい。(3) 話者によると、確信法接辞 1 と 2 を比べた際、確信法接辞 2 の方がより丁寧な印象を受けると言う。このような話者の印象から、確信法接辞 2 が、敬意の意味を含む動詞 o(r)「いらっしゃる」や、当該動詞が文法化した敬意補助動詞 (9.2.9) と歴史的に関連している形態素とも考えられる。このような可能性を含め、さらに調査する必要がある。

これまで動詞節を見てきた。次に名詞節の確信法について述べる。名詞節から成る平叙文では、コピュラ動詞は必須ではない。4.1.2.2 で述べた通り、音形を持つ接辞やモダリティ助詞などの担い手として働く。従って、それらを担う必要がない場合には現れない。平叙文では、過去の場合にコピュラ動詞が現れる。その形式末には、動詞節の場合と同様に確信法接辞が現れる。

(10-47) 非過去

- a. baa sinsin.

1st.SG 先生

「私は先生です。」

- b. kurj=a maari.

これ=TOP 茶碗

「これは茶碗です。」

(10-48) 過去

- a. nasama=nu sunu ja-ta-n.

人名=GEN 着物 COP-PST-IND1

「ナサマの着物でした。」

- b. e ja-tar-oo.

そう COP-PST-IND2

「そうでしたよ。」

10.5.1.2 命令法

命令法は、動詞末に命令法接辞が付加する (6.4.6)。命令法では、話し手の聞き手に対する要求や願望の態度を示す。例は 10.1.2 を参照されたい。

10.5.1.3 禁止法

禁止法は、動詞末に禁止法接辞が付加する (6.4.8)。禁止法では、話し手の聞き手に対する否定の要求や願望の態度を示す。例は 10.2 を参照されたい。

10.5.1.4 意志法

意志法は、動詞末に意志法接辞が付加する (6.4.7)。意志法では、話し手の意志および聞き手への勧誘の態度を表す。例は 6.4.7 を参照されたい。

10.5.2 モーダル助詞

動詞形態のモダリティの他に、助詞の使い分けによっても認識的・義務的モダリティを示すことができる。本論文では、モダリティを標示する助詞をモーダル助詞と呼ぶ。

波照間方言には、認識的・義務的モダリティを何かしらの手段で示すという特徴がある¹²。話し手がニュートラルな態度で叙述することはできない。例えば、普遍的な真理（「地球は回る」など）を命題にした文では、話し手はその命題の真理値について、どの程度確信していることなのか、誰かから聞いたことなのかという判断が必ず明示される。それ以外の（ニュートラルな）表現は基本的に存在しない。

¹² 名詞節から成る主節でコピュラ動詞が現れない場合と、係り結び現象 (12.1.3) が現れる場合は除く。

モーダル助詞を表 10.4 に一覧にした。認識的モーダル助詞には、推量、自問、確信、伝聞がある。義務的モーダル助詞には後悔のみ見つかっている。

表 10.4: モーダル助詞一覧

モーダル助詞		形式	意味
認識的モダリティ	推量 1	pacī	～はず
	推量 2	saa	～でしょう
	推量 3	dore	～だろう
	自問	kajaa	～かな
	確信 1	te	～だってば
	確信 2	waa	～だよ
	確信 3	sita	驚くことに～だ
	確信 4	nu	間違いなく～だ
	確信 5	doo～doa～dura	～だよ
	伝聞 1	cju	～だそうだ
	伝聞 2	noa	～だそうだ
義務的モダリティ	後悔	munu	～なのに

10.5.2.1 から 10.5.2.4 では、それぞれのモダリティ助詞について記述する。これらの助詞同士は基本的に共起しにくい。しかし、確信のモーダル助詞の中にはいくつか共起する例が見つかっているためムード形式も含め、承接順序や共起制限について今後詳しく見る必要がある。

10.5.2.1 推量

推量を表すモーダル助詞には、推量助詞 *pacī*, *saa*, *doree* がある。話し手に直接的な根拠がないため、命題の真偽を確信していない。命題の真偽を推測している態度を示す。

saa は、時制形あるいは確信法 1 のムード形動詞との組み合わせで実現する。*doree* は見つかっている例が少ない。これまでに指示様態詞、時制形動詞との組み合わせで実現する例が見つかっている。

■推量助詞 1

推量助詞 1 は *pacī* である。*pacī* は「はず」と訳せる。常に時制形動詞との組み合わせで実現する。*pacī* の例を (10-49) から (10-50) に挙げる。例えば、(10-49a, b) は、友達同士でなぞなぞを出し合っている場面での発話である。ずっと一緒に生活しているわけではないため、毎日何を食べているか、いつ外に出るか直接的には分からない。従って、確信していない態度を示している。(10-50) は名詞節の例である。*pacī* を用いる場合は、担い手としてのコピュラ動詞が必要である。

(10-49) 動詞節

- a. hii nagj=a... <tamani>=ndu hoo **pacī.**
 家 LOC2=TOP たまに=FOC 食べる.NPST 推量 1

「(あなた達も) 家ではたまに食べるはず。」

- b. pītensi... <heikin... nikai> bara ng-i daa **pacī**.
 1 日に 平均 2 回 くらい 行く-CVB 継続.NPST 推量 1
 「(あなた達も) 1 日に、平均 2 回くらい行っているはず。」

- c. ucīzapītu gaasī jub-j a-ta **pacī** joo.
 兄弟 だけ 呼ぶ-CVB 継続 1-PST 推量 1 DSC2
 「(自分の結婚式には) 兄弟だけ呼んでいたはずよ。」

(10-50) 名詞節

- a. urj=a sinsin ja **pacī**.
 あれ=TOP 先生 COP.NPST 推量 1
 「あの人は先生であるはず。」
- b. urj=a sinsin ja-ta **pacī**.
 あれ=TOP 先生 COP-PST 推量 1
 「あの人は先生だったはず。」
- c. e ja-ta **pacī** raa.
 そう COP-PST 推量 1 DSC1
 「そうだったはずね。」

pacī は、名詞を由来としていると考える。理由は 2 つある。1 つ目は、必ず時制形の動詞と用いられることである。すなわち連体節で主要部 pacī を修飾する名詞句構造だと考えられる。2 つ目は、pacī にコピュラ動詞が後続する例、すなわちコピュラ補語（名詞句）として機能していると考えられる例が見つかるからである (10-51)。ただし、この例は 1970 年代の資料からのみ見つかったもので、現在観察されるのは、文末に現れる例ばかりである。名詞としての性質が随分薄れてきていると言える。

- (10-51) ma-nda... mac-i daa **pacī** ja-ba...
 孫-PL 待つ-CVB 継続.NPST 推量 1 COP-条件 2
 「孫たちが待っているはずなので… (もう帰ります)」

■推量助詞 2

推量助詞 2 は saa である。saa は「でしょう」と訳せる。saa は、時制形あるいは確信形 1 との組み合わせで実現する。推量の態度と、聞き手への確認のための態度を表す用法がある。以下に saa に関する例文を挙げる。

(10-52) 動詞節

- a. <hikkosi> k-j a-n=ta sīk-uta naa?
 引っ越し 来る-CVB 継続 1.NPST-IND1=引用 1 聞く-PST Q
 「引っ越してきたと聞いたか？」

- b. sik-i mir-an saa.
 聞く-CVB 経験-NEG.NPST 推量 2
 「(私は) 聞いたことないでしょう。」

(10-53) 名詞節

- a. urj=a nuu ja-ta naa?
 あれ=TOP 何 COP-PST Q
 「あれはなんだったっけ？」
- b. urj=a sa+mami saa.
 あれ=TOP 茶 + 豆 推量 2
 「あれは茶豆でしょう。」

(10-54) 確認

- a. sjaamicī mir-i daa saa, da-ima.
 毎日 見る-CVB 継続 1.NPST 推量 2 2ND-PL
 「毎日見ているでしょう、あんた達。」
- b. i. e munu=ndu nasī-ta=ta sīk-uta saa.
 そう もの=FOC 産む-PST=引用 1 聞く-PST=推量
 「そういうものを生んだと聞いたでしょう。」
- ii. nn, sīk-uta-n.
 INTJ 聞く-PST-IND1
 「うん、聞いた。」

■その他の推量助詞

その他の推量助詞に *doree* がある。これまでに見つかっている 2 例を挙げる。この 2 例からだけであるが、仮に「だろう」と訳した。例えば、(10-55) は、Chafe (1980) の *pear story* の映像を見ているときの発話である。子どもらが歩いている場面に関する発話 (10-55a)¹³ に対して、推量の助詞 *doree* を用いた返答がなされている (10-55b)。話し手自身のことでもなく、異国の（しかも鮮明とは言えない）映像であるため、確信していない態度を示している。(10-56) は、息子（リュウセイ）が自分の父親のことについて話している場面である。この例文についても、話し手自身のことではないため、推量の助詞が用いられていると考えられる。

- (10-55) a. <neeneete> panasī si ci ng-u raa.
 ねえねえと 話 する.CVB 付帯 2 行く-NPST DSC1
 「(あの子たちは) ねえねえと話をしながら行くね。」
- b. ee dore=ru raa.
 そう 推量 3=FOC DSC1

¹³ 筆者が見た限り、(10-55a) は、対事モダリティ要素を欠いている数少ない例文である。

「そうだろうね。」

(10-56) ...muc-i k-j a-n sika=ru joo, bagar-an doree.

持つ-CVB 来る-CVB 継続 1.NPST-IND1 逆接=FOC DSC2 分かる-NEG.NPST 推量 3

「(紹介状を) 持ってきているけどさ、(自分の父親は) 多分、分からないだろう。」

10.5.2.2 自問

自問助詞は *kajaa* である。自問助詞は、話し手が命題の真偽あるいは疑問部分に関して、自問し思いを巡らせている態度を示す。自問助詞には次の 3 つの機能がある。

- 答えが分からない場合
 - 真偽自問
 - 内容自問
- すでに答えを用意している場合：修辞疑問（反語）

動詞節から成る場合、時制形動詞と自問助詞の組み合わせで実現する例が圧倒的に多い。稀に、確信法 1 ムード形動詞と自問助詞の組み合わせで実現する例がある。

■真偽自問

真偽自問では、命題の真偽に関して自問する。動詞節の例を (10-57) に、名詞節の例を (10-58) に挙げる。名詞節から成る真偽自問の場合、コピュラ動詞は自問助詞の担い手としては現れない。コピュラ補語に直接後置される。コピュラ動詞が動詞接辞の担い手として現れる場合は、必ず時制形で実現する。

(10-57) 動詞節

a. pīsīmarī+munu aa kajaa.

昼 + もの ある.NPST 自問

「昼ごはんはあるかな。」

b. pīma a-n kajaa.

暇 ある.NPST-IND1 自問

「暇があるかな。」

c. ho-n=ta=ru eg-u kajaa

食べる.NPST-IND1=引用 1=FOC する-NPST 自問

「食べようとしているかな。」

(10-58) 名詞節

a. miigasiken kajaa.

三日月 自問

「三日月かね。」

b. jusiki ja-ta kajaa.

すすき COP-PST 自問

「ススキかね。」

c. manzjon ar-an kajaa.

パパイヤ COP-NEG.NPST 自問

「パパイヤじゃないかね。」

■内容自問

内容自問の場合、自問の助詞に先行する項や述語の構造は、動詞形式を除き、疑問文（10.1.1）と同じである。すなわち、命題中の疑問部分は疑問語（表 10.1）で明示される。自問助詞は、その名のとおり、（話し手自身が）自問する際に用いられるため、聞き手の返答を求めない。その点で、疑問文の機能と異なる。（10-59）に動詞節の例を、（10-60）に名詞節の例を挙げる。どちらも疑問部分が不明であり、独り言のように自問する例である。

（10-59）動詞節

a. nuu su-n=ta mo=ga kuu kajaa.

何 する.NPST-IND1=引用 1 ここ=DAT1 来る.NPST 自問

「何をしに、こっちに来るかね。」

b. ici=ru kaer-u kajaa.

いつ=FOC 帰る-NPST 自問

「いつ帰るかね。」

（10-60）名詞節

nu=nu nari kajaa.

何=GEN 実 自問

「何の実かね。」

自問した結果はほとんど現れない。一方で、聞き手と命題を共有している場合には、同意の返答がある例が見つかっている。返答には同意の感嘆詞 gan や assajoo が用いられる。（10-61）は、2 人の話者が見たことのないかごを見て、作り方について疑問に思った際の会話である。聞き手も作り方を知らないという話し手の想定がある¹⁴。聞き手は、話し手の自問を共有し、gan 「そうだね」という同意の態度を表している。

（10-61） a. kunu kagu=wa nee=ru sikur-j a kajaa.

この カゴ=TOP どう=FOC 作る-CVB 継続 1.NPST 自問

「このカゴはどうやって作っているかね。」

b. gan.

INTJ

「そうだね。」

¹⁴ 聞き手が知っている想定する場合、疑問文が用いられるはずである。

■修辭疑問

自問でありながら、話し手はすでに答えを用意している場合がある。これを自問助詞の修辭疑問用法と呼ぶ。(10-62) は、大きい台風が通過した後に交わした会話である。話し手は命題、すなわち *kee=nu* <*taifuu*>=*ta ar-u* (こう=GEN 台風=引用 1 ある-NPST)「こんな台風というものがある」に対して「偽である」という答えをすでに用意している。聞き手は、修辭疑問を共有し、*assajoo*「本当にね」と同意の態度を表している。

- (10-62) a. *ke=nu* <*taifuu*>=*ta ar-u* *kajaa*.
 こう=GEN 台風=引用 1 ある-NPST 自問
 「こんな台風というものがあるかね。(いや、ない。)」
- b. *assajoo cjaa*.
 INTJ INTJ
 「本当にね、もう。」

10.5.2.3 確信

確信のモーダル助詞には、*te*, *waa*, *sita*, *nuu*, *doo doa*~*dura* がある。命題の真偽に対し、真であると確信している話し手の態度を示す。これは、確信法ムードと同じである。*sita* と *nuu* には、確信以外に驚嘆と強い主張といった意味がそれぞれ含意されるものの、他の確信のモーダル助詞同士の違いは明確ではない。これらの組み合わせも可能である。

モーダル助詞のうち、*te* と *sita* については、同根形式の接続助詞 *te* と *sita* がそれぞれある (11.1.2, 11.4.2)。おそらく、これらの接続助詞から派生したと考えられるが、本論文ではどちらも別形式として扱う。確信の *te* と接続助詞 *te* を別に扱う理由は、機能が大きく異なるからである。確信の *te* は、常に命題の真偽に対し、真であると確信している話し手の態度を示す。一方、接続助詞の *te* は他者の発言の引用を示す¹⁵。確信の *sita* と接続助詞 *sita* を別に扱う理由は、機能の違いも去ることながら、*sita* に先行する動詞形式が異なることが一番に挙げられる。先行する動詞は、確信の *sita* の場合に時制形で、接続助詞 *sita* の場合に副動詞形で現れる。

■確信助詞 1

確信助詞 1 は *te* である。*te* は、時制形の動詞と組み合わせられて用いられる。(10-63) に例を挙げる。(10-63a) は、その日の出来事を友人に語ったものである。(10-63b) は、思い出話を友人に語っているものである。(10-63c) は、波照間方言を教えて欲しいと波照間方言でお願いした筆者に対し聞き手が放った言葉である。*te* に先行する動詞の多くは、過去接辞を含む時制形である。(10-63c) のような、過去接辞が付加されない時制形の例は珍しい。(10-64) は名詞節の例である。(10-64a) に挙げるように、コピュラ動詞は *te* の担い手としては現れない。

(10-63) 動詞節

¹⁵ 名詞句の修飾部標識としても用いられる。連体節の特殊な構造である (8.4.2)。

- a. e sita=ru kjuu, naa maa, goobi maa, <kanzjasan> o-ta
 そう 継起=FOC 今日 こちら INTJ たくさん INTJ 患者さん いらっしゃる-PST
 te joo.
 DIR.EV1 DSC2
 「そして今日（三連休だったから）こちらにたくさん患者さんがいらっしゃったんだってばよ。」
- b. uri-ma=n goobi o-ta te joo.
 あれ-PL=も 沢山 いらっしゃる-PST DIR.EV1 DSC2
 「彼らも沢山いらっしゃったってばよ。」
- c. i. be+sima muni sik-ah-e tabor-i.
 1ST.PL.INC+ 島 言葉 聞く-使役-CVB 依頼-IMP
 「波照間方言を聞かせてください（lit. 教えて下さい）。」
- ii. daa muru sis-i da tee.
 2ND.SG 全部 知る-CVB 継続 1.NPST DIR.EV1
 「あんたは全部知ってるってば。」

(10-64) 名詞節

- a. zootuu-na <kekkonsiki> ja-ta munu te.
 上等-ADV 結婚式 COP-PST もの DIR.EV1
 「上等な結婚式だったのってば。」
- b. kadu=nu pïtu=ja joo, keesee=nu buja=tu keesee=nu paa ja-ta
 角=GEN 人=TOP DSC2 屋号=GEN おじいさん=COM 屋号=GEN おばあさん COP-PST
 te joo.
 DIR.EV1 DSC2
 「角の人は、貝敷のおじいさんと貝敷のおばあさんだったってばよ。」

■確信助詞 2

確信助詞 2 は waa である。waa は、指示様態詞あるいは時制形の動詞と組み合わせられて用いられる。最もよく用いられるのは、応答文として指示様態詞 ee「そう」と共起する例である。(10-70) は、それぞれの結婚式の話をしている場面での発話である。推量のモダリティで示された (10-70a) に対し、応答する (10-70b) に確信のモーダル助詞 waa が現れる。

- (10-65) a. daa te patomee nagi=ndu buna s-j a-ta saa.
 2ND.SG 引用 2 屋号 LOC2=FOC 祝言 する-CVB 継続 1-PST 推量 2
 「あんたってば鳩間家で祝言していたのでしょう。」
- b. e waa.
 そう DIR.EV2
 「そうだよ。」

(10-68) と (10-69) に例を挙げる。(10-68) は、筆者に思い出話を語ってくれている場面での発話である。(10-69) は、Chafe (1980) の pear story の映像を見ながらの発話である。どちらの例文でも、waa が話し手自らが経験した証拠を基に、命題の真偽について真と判断していることを示す。いずれの例文も非過去の例で、waa が過去接辞を含む時制形の動詞形式と共に起る例は少ない。名詞節の場合は、モーダル助詞 waa の担い手としてコピュラ動詞が現れる¹⁶。

(10-66) 動詞節

e su kamj=a mana maa <ii> panasī, mussaha panasī=n nar-j
 そう する.NPST 間=TOP 今 まあ 良い 話 面白い.NPST 話=も なる-CVB
 a waa.
 継続 1.NPST DIR.EV2

「そうしたらもう、今はもういい話、面白い話にもなっているよ。」

(10-67) 名詞節

<sugu> h-air-u naari ja waa raa.
 すぐ 食べる-POT-NPST 実 COP.NPST DIR.EV2 DSC1

「すぐ食べられる実だね。」

■その他の確信助詞

確信助詞のうち sita, nuu, doo は、あまり例が見つからない。sita には話し手の驚きの態度が、nuu には強い主張が含意される。

まず (10-68) と (10-69) に sita の例を挙げる。非過去時制形の動詞形式と sita が組み合わさる例でのみ見ついている。名詞節の場合は、コピュラ動詞が sita の担い手として現れる。(10-68a) は、筆者が事前にフィールドワーク用の荷物を話者の家に送ったことに関して、話者が友人と話している場面での発話である。話者の常識では、普通、旅人と荷物が一緒に来る、あるいは旅人が出発時に荷物を送り荷物が後から到着する。しかし、旅人（筆者）が来るよりも先に、話者が旅人の荷物を受け取ったため、驚きの態度が含意されている。(10-68b) は、Chafe (1980) の pear story の映像を見ているときの発話である。波照間島では見たことない果実が、木に沢山なっているのを発見し、驚きの態度が付加されている。(10-68c) は、絵本を見ながら話をしている際の発話である。昼間の話かと思っていたら、絵の中に月を見つけたため、驚きの態度が含意されている。いずれの例も、直接的な証拠によって命題の真偽を判断し、かつ驚きの態度が含意される。

(10-68) 動詞節

a. <nimocu>=ja ki sita, acca=nu pin k-j aa sita.
 荷物=TOP 来る-CVB 継起 明日=GEN 日 来る.CVB 継続.NPST DIR.EV3
 「荷物は（先に）来て、翌日（本人が）来たんだよ！」

¹⁶ (10-70) に挙げるように、指示様態詞と waa が組み合わさる場合にはコピュラ動詞が現れない。どちらも名詞節と考えているため、違いについて今後明らかにしていきたい。

- b. unsiku nar-j aa sita.
 沢山 なる-CVB 継続 1.NPST DIR.EV3
 「(何の実かわからないけど) 沢山なってる！」
- c. siken=du aa sita.
 月=FOC ある.NPST DIR.EV3
 「月があるよ！(だから夜だ)」

(10-69) 名詞節

- e ja sita waa.
 そう COP.NPST DIR.EV3 DIR.EV2
 「そうだよね！」

次に (10-70) と (10-71) に nuu の例を挙げる。nuu は、肯定かつ非過去時制形の動詞形式と組み合わせる例でのみ見つかっている。名詞節の例は見つかっていない。(10-70) は、筆者が 5 月ごろに話者に電話した際の発話である。波照間島で 5 月と言えば、徐々に暑くなる季節である。前日は長袖だったが、その日は急に暑くなりたまず半袖になったという。(10-71) は、面談調査から得られた例文である。ng-u-n (行く-NPST-IND) あるいは ng-oo (行く-NPST-IND) 「行く」よりも、強く主張する際の言い方を聞いた際の返答である。どちらの例も、強い確信あるいは直接的な証拠によって命題の真偽を判断し、かつ強い主張が含意されている。

- (10-70) acaha nuu.
 暑い.NPST DIR.EV4
 「暑い！」(cf. acaha-n 「暑い」、acah-enu 「暑くない」)

- (10-71) baa ng-u nuu.
 1st.SG 行く-NPST DIR.EV4
 「私は絶対行く！」(cf. ng-u-n 「行く」)

最後に doo~doa~dura の例を挙げる。例が少なく、分布の環境や真に異形態かどうかについて詳しくわからない¹⁷。ここでは、これまでに見つかっている例を挙げるに留める。(10-72) は、ある話者が結婚式をしていたという話をもう 1 人の話者に伝える場面での発話である。話し手は自らその話(結婚式をしたという話)を聞いた。(10-72b) は、昔話に出てくる場所について話している場面での発話である。現在でもあるかどうかという話に、話者の 1 人が発したものである。(10-72c) もまた Chafe (1980) の pear story の映像を見ているときの発話である。男性が収穫した果物を盗まれても何も気が付いていない様子を見た。いずれの例文も、直接的に得られた証拠から命題の真偽について判断していると言える。

(10-72) 動詞節

- a. patumee=nu aboa <kekconsiki> s-j a-n ten doa.
 屋号=GEN 母 結婚式 する-CVB 継続.NPST-IND1 引用 2 DIR.EV5

¹⁷ 例えば doa は、doo と waa (同じく確信を表すモダリティ助詞) が融合した形式である可能性が考えられる。

「鳩間のお母さんは、結婚式しているという事だよ。」

- b. a-ta dara sika=ru bagar-an **doo.**

ある-PST かも 逆接=FOC わかる-NEG.NPST DIR.EV5

「あったかもしれないけれど、分からないよ。」

- c. unu buja nu=ta=n mo-an-u. bagar-an **duraa.**

あの おじいさん 何=引用 1=も 思う-NEG-NPST 分かる-NEG.NPST DIR.EV5

「あのおじいさんは何も思わない。分からないよ。」

(10-73) 名詞節

- a. kurj=a turi duraa.

これ=TOP 鳥 DIR.EV5

「これは鳥だよ。」

- b. kjuu=ja <gecujoobi> **doa.**

今日=TOP 月曜日 DIR.EV5

「今日は月曜日だよ。」

10.5.2.4 伝聞

伝聞を表すモーダル助詞は *cju*, *noa* である。主に *cju* が用いられる。*noa* はこれまでに 2 例見つかったのみである。伝聞の助詞は、命題が他人から伝え聞いたことを示す。

■伝聞助詞 1

伝聞助詞 1 は *cju* である。伝聞助詞 1 と組み合わせられて用いられる述語動詞は、時制によって現れ方が異なる。過去接辞を含む場合には時制形で、非過去接辞を含む場合には確信法接辞 1 を含む確信形 1 が現れる。典型的に、*cju* は昔話を語る際に多く用いられる。(10-74) に昔話のはじめの部分抜き出した例文を挙げる。いずれも動詞節の例である。

(10-74) 動詞節

- a. kunu panasī=ja joo, kuturami jagumura... tenu mura=ndu a-ta **cju.**

この 話=TOP DSC2 昔 ヤグムラ 引用 2 村=FOC ある-PST HS1

「この話はね、昔ヤグムラという村があったとき。」

- b. ...deena <nangi> si ci=ru patarag-i bir-j a-ta **cju.**

たいそう 難儀 する.CVB 付帯 2=FOC 働く-CVB 継続 2-CVB 継続 1-PST HS1

「(その村の人々は) たいそう難儀しながら働いていたそうだ。」

- c. pa-ima, abo-ima, be+sīma=nu kuturami=ja aba+ami tenu... fu-ta

おばあさん-PL 母-PL 1ST.PL.INC+ 島=GEN 昔=TOP 油 + 雨 引用 2 降る-PST

cju raa.

HS1 DSC1

「おばあさん達、お母さん達、波照間島の昔は、油雨というのが降ったそうだね。」

話し手の直接体験や確実な予定を表す確信形 (10.5.1.1) が伝聞助詞 1 と共起するという点について、筆者は伝聞文の話し手が第三者の発話を、直接引用しているからだと考える。例えば、(10-75) は、話者が、その日船が出るのか出ないのかを事前に船会社に尋ね、その結果を筆者に伝えた際の発言である。命題の *kjuu funi ndi-n* (今日 船 出る-IND) 「今日、船が出る」は、船会社の確実な予定であり、話し手の予定ではない。

- (10-75) *kju funi ndi-n cju.*
 今日 船 出る.NPST-IND1 HS1
 「今日、船が出るってさ。」

一方、過去の出来事の場合、直接引用されない。(10-76) に例を挙げる。事前に話者が聞いた命題が (10-76a) のように確信形 1 である場合でも、実際に他の人に話す際には (10-76b) のように時制形を用いる。なぜこのような違いがあるのかは明らかではない。考えられる可能性の 1 つとして、時制が過去になると、第三者が命題の真偽を判断する際に、直接的な証拠を持っていたか否かということ問わない、ということが挙げられる。

- (10-76) a. <baiten> *nagi bu-ta-n.*
 売店 LOC2 いる-PST-IND1
 「(あの子は) 売店にいた。」
 b. <baiten> *nagi bu-ta cju.*
 売店 LOC2 いる-PST HS1
 「(あの子は) 売店にいたそうだ。」

名詞節から成る伝聞文の場合、コピュラ動詞は *cju* の担い手としては現れない (10-77a)。過去接辞などと共起し、コピュラ動詞が現れる場合には、時制形で実現する (10-77b, c)。

- (10-77) 名詞節
 a. <cjoosa> *cju.*
 調査 HS1
 「調査だそうだ。」
 b. <cjoosa> *ja-ta cju.*
 調査 COP-PST HS1
 「調査だったそうだ。」
 <cjoosa> *ar-an cju.*
 調査 COP-NEG.NPST HS1
 「調査ではないそうだ。」

■その他の伝聞助詞

cju の他に、*noa* という伝聞助詞が見つかっている。これを伝聞助詞 2 と呼ぶ。*noa* には、後に例を見るとおり、引用助詞 2 に導かれる補文節 (11.1) が先行する。*noa* が用いられた例はこれまでに 2 例見つ

かっているのみである。昔話では用いられないようであるが、**cju** との違いは明らかではない。(10-78) に例を挙げる。(10-78a) は、2 人の話者が筆者について語っている際の例文である。筆者は、話し手に早起きしたことを話した。(10-78b) は、若い男たちが昔どのように遊んでいたか、という思い出話を筆者に語っている際の例文である。話し手は女性であり、男性らから話を聞いたという事である。いずれの例文も **~te noa** を「ということだ」と訳せる。

(10-78) **unu pin sitomuci peesja-na ug-a k-j a-ta te noa.**

その 日 朝 早く-ADV 起きる-CVB 来る-CVB 継続-PST 引用 2 HS2

「その（出発の）日、朝、早くに起きてきたということだ。」

(10-79) **...unsiku hamazanari baar-i o-ta te noa.**

たいそう 自分たちで 笑う-CVB 敬意-PST 引用 2 HS2

「（どんないたずらをしたと）たいそう自分達で笑ってらしたということだ。」

伝聞のモーダル助詞 **noa** の例は 2 例しか見つかっていないが、どちらも接続助詞 **te** によって導かれる引用節に後置される。接続助詞 **te** には異形態に **ten(u)** も確認されており、接続助詞 **ta** と動詞 **eni** 「言う」が融合したものである (8.4.2, 11.1.1)。可能性として、伝聞のモーダル助詞 **noa** が、接続助詞の異形態 **ten(u)** と確信のモーダル助詞 **waa** が融合した形式であることも考えられる。この問題に関しては、さらに分析を進める必要がある。

10.5.2.5 後悔

後悔のモーダル助詞は **munu** である。**munu** 「もの」を由来とする形式である。聞き手に対する残念に思う態度や、あるいは自戒の念を込めた後悔の態度を示す。「(もし～なら)～なのに」と訳せる。

(10-80) に、これまでに見つかっている 2 例を挙げる。どちらの例もなぞなぞを出し合っていた場面で、ようやく回答者が答えにたどり着いた後の（回答者）発言である。やり取りの中で、答えが植物だという事はわかっていたものの、食べられない植物ばかりを回答して間違えてばかりいたため、後悔の念を **munu** で示している。

(10-80) a. **h-air-u munu naa=ta sik-j a-ba misja-ta munu.**

食べる-POT-NPST もの Q=引用 1 聞く-CVB 継続 1-条件 2 よい-PST 後悔

「『食べられるものか?』と（出題者に）聞いていればよかったのに。」

b. **pitu=nu nubur-u munu naa=ta sik-j a-ba misja-ta mun raa.**

人=NOM 乗る もの Q=引用 1 聞く-CVB 継続 1-条件 2 よい-PST 後悔 DSC1

「『人が乗るものか?』と（出題者に）聞いていればよかったのにね。」

10.6 談話標識

話し手が聞き手に対して同意や確認を行うために、あるいは失礼のない態度をとるために句や節末で用いる語がある。これを談話標識 (discourse marker) として扱い、談話標識助詞と呼ぶ。これまでに見つかっている 3 つの談話標識助詞について述べる。

10.6.1 談話助詞 1

談話助詞 1 は *raa* である。「～ね」と訳せ、主に聞き手に同意を求める際に用いられる。

- (10-81) *aba+ami tenu fu-ta cju raa.*
 油 + 雨 引用 2 降る-PST 伝聞 1 DSC1
 「油雨ってのが降ったってね。」

- (10-82) *jaima=nu pītu=nu panasī ja=cjara ee du=n bagar-an raa.*
 八重山=GEN 人=GEN 話 COP=条件 そう 列挙=も 分かる-NEG.NPST DSC1
 「八重山の人の話なら、そうかも分からないね。」

談話助詞 1 は次に述べる談話助詞 2 と共起することができ、必ず談話助詞 1 が談話助詞 2 の後方に用いられる。

- (10-83) *ba=mu=n bagar-an te joo raa.*
 1ST.SG=DAT2=も 分かる-NGE DIR.EV1 DSC2 DSC1
 「私にもわからないってばよ、ね。」

談話助詞 1 は、文頭でも用いることができ、感嘆詞としての機能を獲得しつつある。(10-84) に連続する談話の一部を挙げる。

- (10-84) a. *mo=gi ha=gi=ru a paci.*
 ここ=LOC2 あちら=LOC2=FOC ある.NPST 推量
 「あちらこちらにあるはず。」
 b. *raa.*
 DSC1
 「ね。」

10.6.2 談話助詞 2

談話助詞 2 は *joo* である。「～(で)さ」や、「～よ」と訳せ、主に聞き手に(句や節で述べられる)話の内容を確認しながら話す際に用いられる。(10-85) に連続する談話の一部を例として挙げる。(10-85a) では名詞句末と従属節末に、(10-85b) では主節末に用いられる。

- (10-85) a. *jaa <rjuusjee>=ndu joo, ng-i joo,*
 INTJ 人名=FOC DSC2 行く-CVB DSC2
 「いやあ、リュウセイがよ、行ってよ、」
 b. *daa+panasī <oobana> panasī ja gara jamir-i=ta en-iba=n*
 2ND.SG+ 話 オーバーな 話 COP.NPST 理由 1 止める-IMP=引用 1 言う-条件 2=も
sik-an-u joo.
 聞く-NEG-NSPT DSC2

「あなた（親父）の話はオーバーな話だから止めろと言っても聞かないよ。」

談話助詞 2 も、談話助詞 1 と同様に文頭でも用いることができ、感嘆詞としての機能を獲得しつつある。(10-86) に、(10-85) に続く談話を挙げる。(10-86a) の冒頭に *joo* が用いられる。

- (10-86) a. *joo*, <kangofu>=*ga joo*,
DSC2 看護婦=DAT1 DSC2
「でさ、看護婦によ、」
- b. *ha=ja kju=ja joo*,
REFL=TOP 今日=TOP DSC2
「自分は今日はよ、」
- c. *kunu fuciri num-an=cja joo*,
この 薬 飲む-NEG.NPST=条件 3 DSC2
「この薬を飲まないでよ、」
- d. *ha<o> s̄in-as̄i sjaami naa te en-tar-a joo...*
REFL. を 死ぬ-使役.NPST つもり Q 引用 2 言う-PST-条件 1 DSC2
「自分を死なすつもりかと言ったからよ、」

10.6.3 談話助詞 3

談話助詞 3 は *juu* である。節末にのみ用いられる。「～ですよ」と訳せ、聞き手に失礼のない態度を表すと分析するが、例が少ないため今後用例を集めて検討する必要がある。これまでに見つかっている 2 例とあいさつの例を挙げる。すべて係り結び現象 (12.1.3) に見られる例である。

- (10-87) a. *mana bagi=n tur-i dar-u juu, s̄isaree.*
今 限界=も 通る-CVB 継続 1-NPST DSC3 INTJ
「(自分達のこの名前は) 今までも通っているんです、はい。」
- b. *baa <asooreiko>=ta=ru en-u juu.*
1ST.SG 人名=引用 1=FOC 言う-NSPT DSC3
「(自己紹介の際) 私は麻生玲子と言います。」
- c. *niiha juu.*
? DSC3
「ありがとう (ございます)。」「

10.7 項構造の変更

節内で、動詞の項構造 (Argument structure) と意味役割 (Semantic role) の対応をある一定の操作により変更することがある。波照間方言の場合、このような操作は語彙的あるいは形態的に行われる。

これまでに表 10.5 に挙げる 3 つの操作が見つまっている。表中の「形式」はその操作が語彙的あるいは形態的に行われるものなのかを示し、「操作」はどのような項が増減されるかを示した。今回網羅できなかった相互・再帰・受益といった項構造の変更操作に関する調査と考察は、今後の課題とする。

表 10.5: 項構造の変更操作

機能	形式	操作
直接受動	形態的	減 動作者
間接受動	形態的	増 被害者
使役	語彙的・形態的	増 使役者

以下では、それぞれの操作について個別に述べる。例文を挙げる際には、平叙文とともに例示する。

10.7.1 受動

受動には、動作者項を減らす直接受動（他動詞文→自動詞文）と、被害者項を増やす間接受動（他動詞文→他動詞文）がある。まず、直接受動について述べる。

動詞に受身接辞（6.5.2）が付加される場合、動作者は直格項では言及されず、被動者のみ直格項で示することができる。このような形で直格項を減らす操作を受動と呼ぶ。動作者は、奪格助詞で標示される斜格項で示される。与格助詞では示されない。動作者は不明な場合であることが多い。

例文の (a) に平叙文、(b) に受動文を並べて挙げる。(b) は実際、(10-89) と (10-90) のどちらの例でも動作者が不明である。(10-89b) は、八重山そば（誰が作ったかわからない）の写真を見て話者が言った発話である。(10-90b) は、話者が学校の前で看板を見つけた時の話（誰が看板を書いたかわからない）である。この例文は、連体節内の例である。

(10-88) a. 平叙文

ija **baa+ututu tatag-j** **a-ta-n.**
 父 私 + 弟 叩く-CVB 継続 1-PST-IND1
 A_{動作主体} P_{被動者} 述語
 「父は私の弟（妹）を叩いていた。」

b. 受動文

baa+ututu ija=gara **tatag-ar-a-ta-n.**
 私 + 弟 父 叩く-受身-CVB. 継続 1-PST-IND1
 S_{被動者} 斜格 動作主体 述語
 「私の弟（妹）は父から叩かれていた。」

(10-89) a. 平叙文

aboa **(kuri) sikur-j** **ar-oo.**
 母 これ 作る-CVB 継続 1-NPST.IND2
 A_{動作主体} P_{被動者} 述語

「お母さんが（これを）作ったよ。」

b. 受動文

kuri=ja maamasi sikur-ar-a bir-j a-n.
 これ=TOP とても美味しく 作る-受身-CVB 継続 2-CVB 継続 1.NPST-IND1
 S_{被動者} 述語
 「これは、とても美味しそうに作られている。」

(10-90) a. 平叙文

baa <socugjoosiki>=ta hak-uta-n.
 1st.SG 卒業式=引用 1 書く-PST-IND1
 A_{動作主体} P_{被動者} 述語
 「私は卒業式と書いた。」

b. 受動文

<socugjoosiki>=ta hak-ar-ar-u (munu)
 卒業式=引用 1 書く-受身-CVB. 継続 1-NPST もの
 S_{被動者} 述語
 「卒業式と書かれているもの（が外にあった。）」

次に、間接受動について述べる。受動文は文脈により、被害の意味を表す。面接調査でのみ、被害の意味を表す例文が1例のみ見つかった。被害者は直格項として示され、動作者は奪格助詞で標示される斜格項として示される。動詞には受身接辞を付加する。以下、(10-91a)に平叙文、(10-91b)に被害の意味を表す受動文を挙げる。

(10-91) a. 平叙文

(maju=ndu) baa+masamunu hoo-ta-n.
 猫=FOC 私 + ご馳走 食べる-PST-IND1
 A_{動作主体} P 述語
 「猫が私のご馳走を食べた。」

b. 被害の受動文

(baa) baa+masamunu maju=gara h-ar-a nen-u.
 1st.SG 私 + ご馳走 猫=ABL 食べる-受身-CVB 完了-NPST
 A_{被害者} P 斜格 動作主体 述語
 「(私は) 私の御馳走を猫に食べられた。」

上記の通り、得られた間接受動文の例は、他動詞文であった。東京方言の「雨が降った」を受動文にした「雨に降られた」というような自動詞文の例は、これまでの調査では波照間方言には見つかっていない。

10.7.2 使役

動詞に使役接辞（6.5.1）が付加される場合、イベント全体の使役者項を増やし、イベントが使役者項の意志の元に行われたことを意味する。この操作を使役と呼ぶ。イベント全体の使役者は直格項で、被使役者は与格助詞で標示される斜格項で示される。（10-92）から（10-94）に a に平叙文、b に使役文の例をそれぞれ挙げる。

(10-92) a. 平叙文

utama s̄imucī jum-u-n.
 子ども 本 読む-NPST-IND1
 A P 述語
 「子どもが本を読む。」

b. 使役文

(baa) utama=ga s̄imucī jum-as̄i-n.
 1ST.SG 子ども=DAT1 本 読む-使役.NPST-IND1
 A_{使役者} 斜格 被使役者 P 述語
 「(私は) 子どもに本を読ませる。」

(10-93) a. 平叙文

<doosoosjee> masamunu h-an-ta naa?
 同窓生 ご馳走 食べる-NEG-PST Q
 A P 述語
 「同級生はご馳走を食べなかったか？」

b. 使役文

daa <doosoosjee>=ga masamunu h-ah-an-ta naa?
 2ND.SG 同窓生=DAT1 ご馳走 食べる-使役-NEG-PST Q
 A_{使役者} 斜格 被使役者 P 述語
 「あんたは同級生にご馳走を食べさせなかったか？」

(10-94) a. 平叙文

daa e=nu panas̄i sik-u-n.
 2ND.SG そう=GEN 話 聞く-NPST-IND1
 A P 述語
 「あなたはその話を聞く。」

b. 使役文

(baa) da=ga e=nu panas̄i sik-ah-a raa.
 1ST.SG 2ND.SG=DAT1 そう=GEN 話 聞く-使役-INT DSC1
 A_{使役者} 斜格 被使役者 P 述語

「(私は) あなたにその話を聞かせようね。」

使役接辞は自動詞を他動詞化する機能も持つ。他動詞化の機能も、使役の機能と同様に、イベント全体のコントローラーである A 項を増やすという点で、広義の使役と捉えられる。(10-95) と (10-96) の、それぞれ a に自動詞文、b に他動詞文の例を挙げる。

(10-95) a. 自動詞文

mizi ndi-n.

水 出る.NPST-IND1

S 述語

「水が出る。」

b. 他動詞文

(baa) mizi nd-asĩ-n.

1st.SG 水 出る-使役.NPST-IND1

A P 述語

「(私は) 水を出す。」

(10-96) a. 自動詞文

naari uti-n.

実 落ちる.NPST-IND1

S 述語

「実が落ちる。」

b. 他動詞文

(baa) naari ut-asĩ-n.

1st.SG 実 落ちる-使役.NPST-IND1

A P 述語

「(私は) 実を落とす。」

使役接辞のうち、他動詞化の機能を持つのはクラス 1, 3 に付加する使役接辞のみである (asi 系統)。使役接辞を付加することにより他動詞化可能な自動詞を表 10.6 に挙げる。

表 10.6: 他動詞化可能な自動詞

自動詞	他動詞化した動詞
ndi 「出る」	nd-ah 「出す」
uci 「落ちる」	ut-ah 「落とす」
ugi 「起きる」	ug-ah 「起こす」
karigi 「乾く」	karig-ah 「乾かす」
uri 「降りる」	ur-ah 「降ろす」

使役接辞の他に、語彙の交替で他動詞化する例がある。(10-97) に、語彙の交替で他動詞化する例を挙げる。

(10-97) a. 自動詞文

jadu ag-u-n.

扉 開く-NPST-IND1

S 述語

「扉が開く。」

b. 他動詞文

(baa) jadu agir-u-n.

1st.SG 扉 開ける-NPST-IND1

A P 述語

「(私は) 扉を開ける。」

このように、語彙的に自動詞と他動詞が交替する動詞のペアは、agi「開く」／agi(r)「開ける」の他に angari「上がる」／angiri「上げる」、maari「回る」／maasi「回す」が見つかっている。

第 11 章

節の結合

様々な節を観察すると、主要部なしでは成り立たない節がある。このように従属的な性質を持つ節を、従属節と呼ぶ。波照間方言は 5 種類の従属節がある。このうち、5 の連体節については 8.4 で述べた。本章では連体節以外の 1 から 4 の従属節について、11.1 から 11.4 で記述する。

1. 補文節
2. 逆接節
3. 副詞節
4. 中止節
5. 連体節

これらのほとんどの従属節は、様々な接続助詞と組み合わさって現れる。従属節は基本的に主要部すなわち主節に先行する。補文節のみ、主に主要部に埋め込まれる構造を見せる。

11.1 補文節

補文節は、引用助詞と組み合わさって用いられ、発言や思考内容を引用する。引用助詞は 3 つあり、それぞれについて述べる。

11.1.1 引用助詞 1

引用助詞 1 は、=ta である。補文節と引用助詞 1 の=ta が組み合わさって用いられる場合、典型的には主要部の述語には発言や思考に関する動詞が現れ、補文節は発言内容、思考内容を直接引用する。従って従属節とはいえ、述語動詞は主節と同等の形式で現れる。発言や思考に関する動詞の代表的なものは、動詞 en「言う」や mu「思う」である。

以下に挙げる例文では、補文節を角括弧で示す。(11-1) では、述語動詞 mu「思う」の内容、(11-2) では、述語動詞 en「言う」あるいは en-i o（言う-CVB 敬意.NPST）「おっしゃる」の内容が補文節で示される。補文節にとっての主要部は、主節である場合もあれば、さらに他の主要部に対する従属節である場合もある。主要部が主節である例は (11-2a) で、それ以外の例は、主要部が従属節の例である。

(11-1) 思考内容

- a. [kurj=a deezi=**ta**] mu-i...
 これ=TOP 大変=引用 1 思う-CVB
 「これは大変と思って、…」
- b. (baa) [<mada> or-an kajaa=**ta**] mu-i ci...
 1st.SG まだ いらっしゃる-NEG.NPST 自問=引用 1 思う-CVB 付帯 2
 「(私は) まだいられないかな、と思いながら…」

(11-2) 発言内容

- a. [...midumu<o> pii=gara bunc-ah-eba=**ta**] en-ta cju.
 女を 岩場=ABL 渡る-使役-IMP=引用 1 言う-PST HS1
 「(物知りは) …女を岩場から渡らせろ、と言ったとさ。」
- b. [bebi pīnar-u paci=**ta**] en-i o-ta sika...
 少し 減る-NPST 推量 1=引用 1 言う-CVB 敬意-PST 逆接
 「少し減るはずとおっしゃったけど、…」
- c. [ee mun-an doo=**ta**] en-i o-ta kutu...
 そう 言う-NEG.NPST DIR.EV5=引用 1 言う-CVB 敬意-PST こと
 「そう言わないんだよ、と言ってらっしゃったこと (を忘れない)」

補文節と引用助詞 1 の組み合わせは、発言や思考を引用する機能の他に、2 つの用法が見つまっている。1 つ目は ng「行く」、k「来る」といった移動を意味する動詞が主要部述語に現れる場合である。このような場合、補文節は目的を表す。

- (11-3) a. [ko-n=**ta**] k-j ar-oo.
 買う.NPST-IND1=引用 1 来る-CVB 継続 1-NPST-IND2
 「買いに来たよ。」 cf. kee k-j a-n (買う.CVB 接近-CVB 継続 1.NPST-IND1) 「買ってきた」
 (9.2.4)
- b. [ho-n=**ta**] ng-j ar-u munu ar-an-u.
 食べる.NPST-IND1=引用 1 行く-CVB 継続 1-NPST もの ある-NEG-NPST
 「食べに行っているのではない。」

2 つ目は主要部述語に eg という動詞が現れる場合である。eg は形式的には動詞として分析できるが、単独用法はない。上に挙げた用法と同様に、この場合も補文節は目的を表す。移動を表す動詞と eg で示されるの目的の異なる点は、前者が単に目的を示すのに対し、後者は、まさに目的を遂行している途中であることを表す点である。例えば、(11-4a) は、星を見てくるという目的を遂行するために、玄関で靴を履いている際の発言である。(11-4b) は、診療所に行くという目的を遂行するために道を歩いている途中であることを意味する。

- (11-4) a. [pucu mir-i ng-u-n=**ta**] eg-oo.
 星 見る-CVB 乖離-NPST-IND1=引用 1 する-NPST-IND2

「星を見てこようとしているよ。」

- b. [sinrjoosjo]=ga ng-u-n=ta] eg-iba...
 診療所=DAT1 行く-NPST-IND1=引用 1 する-条件 2
 「診療所に行こうとしたら…（途中で校長先生につかまった）」

11.1.2 引用助詞 2

引用助詞 2 は **te**~**ten(u)** である。以下では、引用助詞 2 の由来となる形式、機能、異形態の実現環境について順に述べる。

■由来となる形式

te は、「補文節=**ta**」を内包する連体節を修飾部に持つ名詞句の一部が、文法化した形式であると考えられる。すなわち、引用助詞 1=**ta** と **en**「言う」の時制形 **en-u**（言う-NPST）が文法化した形式である可能性が高い¹。

以下に p. 198 の (8-27) を (11-5) として再掲する。

- (11-5) a. *[koosi=ta en-u] munu
 菓子=引用 1 言う-NPST もの
 b. [koosi te] munu
 菓子 引用 2 もの
 「お菓子というもの」

引用助詞 1 と、時制形の動詞 **en-u**「言う」が文法化したと考える理由は 2 つある。1 つ目は引用助詞 2 の異形態に、時制形の動詞そのものを含む形式 **tenu** があるからである。2 つ目は話者が提示するほとんどの訳に、=**ta en-u** に対する日本語訳「～と言う」が現れるからである。

この場合の文法化は、接語と後続する動詞との融合によって生じたものである。普通に考えれば、接語は先行する要素とアクセント単位を成すため (3.1.2)、後続する要素との融合は不自然とも言える。しかし、このような接語と接語に後置される動詞との融合は、他に継続の助動詞 **da** がある (9.2.1)。**da** は、焦点標識***du** と、後置される動詞 **a**「ある」が文法化したものと分析する。

■機能

補文節が **te** と組み合わせられて用いられる場合、主要部は名詞句の場合と節の場合がある。前者の場合は名詞句主要部を修飾し、後者の場合は引用助詞 1 と同様に発言などを引用する機能を持つ。前者の例が多く、後者の例は少ない。その理由は、上述した由来となる形式による。すなわち、元々は連体節の構造を持っていたからである。名詞句の修飾部として機能する場合の例は 8.4.2 を参照されたい。以下では後者の例を挙げる。主要部述語の動詞に **eni**「言う」が現れる場合、その引用内容が補文節に現れる場合がある (11-6)。

¹ このように引用助詞と動詞「言う」が文法化したと分析する先行研究には、中川他 (2016) (八重山語白保方言) がある。

- (11-6) a. [**<sinbun> te**] en-an-u, mata [**<terebi> te**] en-an-u...
 新聞 引用 2 言う-NEG-NPST また テレビ 引用 2 言う-NEG-NPST
 「新聞と言わず、またテレビと言わず…（悪いニュースばかりだ）」
- b. [**jaasee te**] en=cja...
 野菜 引用 2 言う.NPST=条件 3
 「野菜と言っても…（何の野菜を使うか？）」
- c. [**<kekkonsiki> s-j oo-ta te**] en-i sita...
 結婚式 する-CVB 敬意-PST 引用 2 言う-CVB 継起
 「結婚式をされたと言って（いたけど）…」

■異形態の実現環境

引用助詞 2 の異形態 **te**~**ten(u)** は、補文節が名詞句の修飾部として機能する場合に **te** あるいは **tenu** で、発言等の内容を引用する場合に **te** で実現する。**tenu** が実現する環境で、母音脱落の音韻規則 (2.5.2) が適用される場合に **ten** で実現する。補文節が名詞句の修飾部として機能する場合の、異形態の実現環境については明らかではない。以下では、これまでに見つかっている主要部名詞、**munu** 「もの」、**kutu** 「こと」、**panasī** 「話」、**mura** 「村」の場合について述べる。

主要部に **munu** 「もの」が現れる場合には **te** で実現する例のみ見つかっており、一方、**kutu** 「こと」、**panasī** 「話」が現れる場合には **tenu** が実現する例のみ見つかっている。

- (11-7) 主要部が **munu** 「もの」

ke=nu <gasu> **te** **munu** nen-u.
 こう=GEN ガス 引用 2 もの ない-NPST
 「(当時は) こんなガスというものがない。」

- (11-8) 主要部が **kutu** 「こと」

<tamago takusan> a-n **ten** **kutu**=nu ar-an sika...
 卵 沢山 ある-IND1 引用 2 こと=NOM ある-NEG.NPST 逆接
 「卵が沢山あるということはないけど…」

- (11-9) 主要部が **panasī** 「話」

nabihakida **tenu** **panasī**=ndu a-tar-oo.
 地名 引用 2 話=FOC ある-PST-IND2
 「『ナビハキダ（鍋搔き田）』という話があったよ。」

主要部に **mura** 「村」が現れる場合には、**te** と **tenu** で実現する場合が見つかっている。

- (11-10) 主要部が **mura** 「村」

- a. ucīza futa-ri, bidumu=tu midumu=tu=ndu jagumura te mura=na sīm-j
 兄弟 2-CLF. 人 男=COM 女=COM=FOC 地名 引用 2 村=LOC1 住む-CVB
 a-ta cju.
 継続 1-PST HS1
 「兄弟二人、男と女が『ヤグムラ』という村に住んでいたそうだ。」
- b. jagumura tenu mura=ndu a-ta cju.
 地名 引用 2 村=FOC ある-PST HS1
 「『ヤグムラ』という村があったそうだ。」

11.1.3 引用助詞 3

引用助詞 3 は、duu~dara である。補文節と引用助詞 3 が組み合わさって用いられる場合、主要部の述語には bagar-an-u (わかる-NEG-NPST)「わからない」が現れ、補文節は思考内容を直接引用する。

補文節と引用助詞 3 が組み合わさって用いられる場合、基本的には引用される内容が 2 つ以上ある。「～か、～か（どうか）わからない」と訳せる。(11-11) は対称的な選択肢を列挙している例、(11-12) は連続した発話の例である。(11-12) は、男の子が転んだ理由に関して、石に躓いたのか、あるいは自転車に乗った女の子とすれ違った時にぶつかって転んだのか、と考えている際の発話である。補文節と引用助詞 3 を組み合わせ、選択肢を示している。

- (11-11) [be+sīma=nu funi=ja misja-n duu] [misjah-en duu] bagar-an-u.
 1ST.PL.INC+ 島=GEN 船=TOP よい.NPST-IND1 引用 3 よい-NEG.NPST 引用 3 わかる-NEG-NPST
 「波照間島の船（の状況）は、良いか、良くないか、わからない。」
- (11-12) a. e sika katamuta=na joo, maagi+isi=ndu ar-i ki=ru joo,
 そう 逆接 横=LOC1 DSC2 大きい + 石=FOC ある-CVB 理由 2=FOC DSC2
 「そうだけど、横に大きな石があったからさ、」
- b. [kunu isi naga=ndu hakar-i ci mabuta-ta duu]...
 この 石 LOC3=FOC 引っかかる-CVB 付帯 2 転んだ?-PST 引用 3
 「この石に引っかかって転んだのか…」
- c. [utama=tu, un, miduntama=tu=ndu igebari si mabuta-ta duu]...
 子ども=COM INTJ 女の子=COM=FOC 交差 する.CVB 転んだ? 引用 3
 「子どもと、女の子と交差して転んだのか…（はっきりとはわからない）」

複数の選択肢が明示される場合もあれば、明示されないこともある。明示されない場合でも引用助詞 3 が用いられる場合、複数の選択肢が想定される。

- (11-13) [du=n utama=n pītu=n tama=n <dokodega²> pītu=nu <osewani>
 自分=GEN 子ども=も 人=GEN 子ども=も どこでが 人=GEN お世話に
 nar-u-n duu] bagar-an-u waa.
 なる-NPST-IND1 引用 3 分かる-NEG DIR.EV2

「自分の子どもも人の子どもも、どこで人のお世話になるか（ならないか）分からないよね。」

- (11-14) gan maa [<atowa> ne=ndu e s-uta **du**]=n bagar-an sika...
 INTJ INTJ 後は どう=FOC そう する-PST 引用 3=も 分かる-NEG.NPST 逆接
 「そう、まあ後はどうしたかもわからないけれど…」

選択肢が複数ない場合には、引用助詞 1 が用いられる (11-15)。

- (11-15) [zaa=gi tur-i da=ta] bagar-an-u.
 どこ=LOC2 撮る-CVB 継続 1.NPST=引用 1 わかる-NEG-NPST
 「どこで取っているかわからないよ。」

引用助詞 3 の異形態 *dara* の実現環境はよくわからない。*dara* は *duu* と何か他の形態素との融合形である可能性もある。

- (11-16) a. [uri=n nee nar-u **dara**] bagar-an-u.
 それ=も どう なる 引用 3 わかる-NEG-NPST
 「それもどうなるかわからない。」
 b. [uzu=ja ta=ndu kam-a-ta **dara**] bagar-an-u ma.
 布団=TOP 誰=FOC 頭に載せる-CVB. 継続 1-PST 引用 3 わかる-NEG-NPST INTJ
 「布団は誰が頭に載せていたかわからないよ。」

11.2 逆接節・逆接助詞

逆接助詞は *sika* である。従属節が逆接助詞 *sika* と組み合わさって用いられる場合、従属節は主節に示される事象からは期待や予想されない事象や、釈明を示す。このような従属節を逆接節と呼ぶ。

- (11-17) [kuturami=ja nen-ta **sika**] mana a-n.
 昔=TOP ない-PST 逆接 今 ある.NPST-IND1
 「昔はなかったけど、今はある。」

逆接節の述語は、肯定非過去の場合に確信形、それ以外の場合に時制形で実現する。例えば (11-18) は肯定非過去なので確信形、一方 (11-19) は過去なので時制形で実現している例である。このような違いが何に起因するのかについては明らかではないため、さらに分析が必要である。

- (11-18) [jaccin k-u-n **sika**] mada k-un-u.
 絶対 来る-NPST-IND1 逆接 まだ 来る-NEG-NPST
 「絶対来るはずだけど、まだ来ない。」

² 波照間島で話されている日本語では、「が」が焦点標識として用いられることがある。「どこでが」は、「どこで」に焦点標識「が」が付加した形式である。日本語東京方言では耳慣れないが、日本語からの借用語である。

- (11-19) [e=nu panasì=ndu sīk-uta **sīka**] bagar-an-u.
 そう=GEN 話=FOC 聞く-PST 逆接 分かる-NEG-NPST
 「そういう話を聞いたけど、(本当のところは) わからない。」

引用助詞 3 (11.1.3) が逆接助詞と共に、**dara sīka** という助詞の連続で現れ「かもしれないけど」という意味を表す。

- (11-20) a. [siko basj=a siko-n **dara sīka**]...
 使う.NPST 時=TOP 使う.NPST-IND1 引用 3 逆接
 「使う時は使うかもしれないけど…」
- b. [mizasi kutu ja-ta **dara sīka**]...
 大変 こと COP-PST 引用 3 逆接
 「(台風と豊年祭が当たったら) 大変なことだったかもしれないけど…」
- c. [a-ta **dara sīka**]=ru bagar-an doo.
 ある-PST 引用 3 逆接=FOC わかる-NEG.NPST DIR.EV5
 「あったかもしれないけど、(私は) わからないよ。」

11.3 副詞節

従属節の中には、理由や条件などを示すことで主要部を修飾する機能を持つものがある。このような従属節を副詞節と呼ぶ。副詞節の述語は、動詞が単独で用いられる場合もあれば、動詞が様々な接続助詞と組み合わさって用いられる場合もある。従属節述語の動詞形式や一緒に用いられる接続助詞の意味機能により、主要部に示される事象に対して理由、条件、付帯状況、限界点などを表す³。本節では形式を中心に、主な意味機能と周辺的な意味機能を記述する。

11.3.1 理由を表す副詞節

理由を表す副詞節に関して、2 種類の理由助詞を認める。従属節が理由助詞と組み合わさって用いられる場合、従属節は主要部に示される事象をもたらす背景・理由を示す。

11.3.1.1 理由助詞 1

理由助詞 1 は **gara** である。従属節が動詞節であっても名詞節であっても、述語動詞は時制形で現れる。従属節が理由助詞 1 と組み合わさって用いられる場合、従属節は主要部に示される事象をもたらす背景・理由を示す。

例えば、(11-21a) の例では、角括弧で示す副詞節が、主節に示される事象 **mac-i bir-j a-ba** (待つ-CVB 継続 2-CVB 継続 1-IMP) 「待っていないさい」の理由を示している。すなわち、**usitu nar-u=cja noor-u** (年寄り なる-NPST=条件 3 治る-NPST) 「年寄りになれば治る」からである。

³ 副詞節に関する多くの接続助詞は、指示様態詞 **ee** と組み合わせり、接続表現として定型化している (3.2.5)。

(11-21) 動詞節

- a. [usitu nar-u=cja noor-u gara] mac-i bir-j a-ba.
 年寄り なる-NPST=条件 3 治る-NPST 理由 1 待つ-CVB 継続 2-CVB 継続 1-IMP
 「年寄りになったら（頭痛は）治るから、待っていなさい。」
- b. [bassa munu=ndu aa gara] tur-i kohee=ta.
 忘れる.CVB. 継続 1.NPST もの=FOC ある.NPST 理由 1 取る-CVB 接近.INT=引用 1
 「忘れ物があるから取ってこよう、と（言った）。」

(11-22) 名詞節

- a. [baa <seeto> ja gara] bagar-an-u.
 1st.SG 生徒 COP.NPST 理由 1 分かる-NEG-NPST
 「私は生徒だから分からない。」
- b. [<sengosugu> ja-ta gara]...
 戦後すぐ COP-PST 理由 1
 「戦後すぐだったから（結婚式は質素なものだった）。」

稀に、時制形動詞と理由助詞 1 の間に jon~jo という形式が現れることがある。可能性として、形式名詞として分析する様子を表す jo と同一である可能性がある (8.5)。

- (11-23) [sima=ga kaer-i=n k-un-u jon gara]...
 島=DAT1 帰る-CVB=も 接近-NEG-NPST ? 理由 1
 「(若者が) 島に帰っても来ないから、(この島はどうなるかな)」

- (11-24) [<tamagowa> a-ta jo gara]...
 卵は ある-PST ? 理由 1
 「卵はあったから、(何とかなった)」

11.3.1.2 理由助詞 2

理由助詞 2 は ki である。従属節が動詞節であっても名詞節であっても、一部の例外を除き、述語動詞は中止形で現れる。従属節が理由助詞 2 と組み合わせられて用いられる場合、理由助詞 1 と同様に、従属節は主要部に示される事象をもたらす背景・理由を示す。

例えば (11-26) では、角括弧で示す副詞節が、主節に示される事象<sumuzure>=nu pïtu=ja goobi o-ta-n (すむずれ=GEN 人=TOP 沢山 いらっしゃる-PST-IND1)「すむずれの人は沢山いらっしゃった」の理由を示している。すなわち、<sjoogakkoono socugjoosiki> jar-i (小学校の 卒業式 COP-CVB)「小学校の卒業式」だからである。本例は、副詞節が主節の途中で割り込む例である。

(11-25) 動詞節

- a. [ee=nu munu tur-i+he ki]=ru maa e ci ma...
 そう=GEN もの 取る-SE+ 食べる.CVB 理由 2=FOC INTJ そう 付帯 2 INTJ
 「そういうものを取って食べるから、まあ、そうしながら… (そんな子どもを産んだね。)」

- b. [muc-i ng-u munu nen-a ki] deezi ja-ta-n.
 持つ-CVB 乖離-NPST もの ない-CVB 理由 2 大変 COP-PST-IND1
 「持って行くものがなくて、大変だった。」

(11-26) 名詞節

- a. kjuu <sumuzure>=nu pïtu=ja joo, [<sjoogakkoono socugjoosiki> jar-i ki]
 今日 すむずれ=GEN 人=TOP DSC2 小学校の 卒業式 COP-CVB 理由 2
 joo, goobi o-ta-n.
 DSC2 沢山 いらっしゃる-PST-IND1
 「今日、すむずれの人は、小学校の卒業式だからさ、たくさんいらっしゃった。」
- b. [<doo nici gecude sanrenkjuu> jar-i ki] kjuu goobi <kanzja>=ndu
 土 日 月で 三連休 COP-CVB 理由 2 今日 沢山 患者=FOC
 o-ta te joo
 いらっしゃる-PST DIR.EV1 DSC2
 「土、日、月で三連休だから今日沢山患者がいらっしゃったんだってばよ。」

理由助詞 2 に属性動詞が先行することも可能である。しかし、属性動詞が用いられる場合は、例外的に語幹そのもので用いられる⁴。

- (11-27) [unu midumu=ja deera abarisja ki] meeju <koodansino> bidumu=ndu k-uta cju.
 あの 女=TOP とても 美しい 理由 2 毎晩 好男子の 男=FOC 来る-PST HS1
 「その娘はたいそう美しかったので、毎晩好男子の男がやってきたとき。」

- (11-28) [tusaha ki] mo=ga bagi k-un-u.
 遠い 理由 2 こちら=DAT 限界 来る-NEG-NPST
 「遠いのでこちらまで来ない。」

11.3.2 条件を表す副詞節

条件を表す副詞節に関して、述語には動詞と条件助詞を組み合わせ用いられる場合と、条件副動詞形 1 あるいは条件副動詞形 2 が用いられる場合がある。それぞれについて述べる。

11.3.2.1 条件助詞

条件助詞は=cja(ra) である。異形態の実現環境については明らかではない。従属節が条件助詞と組み合わせ用いられる場合、従属節は主要部に示される事象をもたらす仮定の条件を表す。主要部に示され

⁴ 属性動詞は、語幹そのものと非過去形の時制形が同じ音形を持つため、理由助詞 2 に先行する動詞形式を時制形だと分析することも可能である（例：abarisja vs. avarisja-Ø）。時制形と分析せずに、屈折接辞を伴わない形式であると分析する理由は、一般動詞の場合、（従属節で）時制を指定しない中止形が用いられ、主節の述語が時制を担っているからである。属性動詞の場合でも平衡的に分析し、本論文では無理に分析せず、仮に例外的に語幹そのものが用いられると分析する。このように例外的に例外的に屈折接辞を伴わない語幹そのものが用いられていると分析できるものに、属性動詞が補助動詞構文や軽動詞構文で用いられる場合が見つまっている（p. 219 注 2）。この問題については、他の現象と合わせてさらに調査する必要がある。

る事象が未確定である場合に用いられる。稀に確定条件も表すこともあるが、例が少ないため、周辺的な用法だと言える (11-31)。確定条件の定義については 11.3.2.2 を参照されたい。

従属節が動詞節から成る場合、述語動詞は非過去時制形である。過去接辞が現れる例は見つかっていない。名詞節の場合はコピュラ動詞が現れず、条件助詞が従属節に直接後置される。

(11-29) および (11-30) に動詞節からなる仮定条件の例を=cja と=cjara に分け挙げる。例えば、(11-29a) では、主節に示される事象は misja-n (よい.NPST-IND) 「(居て) よい」という許可である。この事象の生じる条件が従属節で示されている。すなわち条件は、daa=ndu bu-n=ta mu (2ND.SG=FOC いる.NPST-IND1=引用 1 思う) 「あんたが居(られ) ると思う」なら、である。条件助詞のグロスには「条件 3」を用いる。

(11-29) =cja : 動詞節

- a. [da=ndu bu-n=ta mu=cja] misja-n.
2ND.SG=FOC いる.NPST-IND1=引用 1 思う.NPST=条件 3 よい.NPST-IND1
「あんたが、居る、と思ったら(居て) いいよ。」
- b. [ui=ga nubur-an=cja] kurj=a deezi=ta mu-i...
上=DAT1 登る-NEG.NPST=条件 3 これ=TOP 大変=引用 1 思う-CVB
「上に登らないと、これは大変と思って…」
- c. [daa=n tucī tur-u=cja]...
2ND.SG=も 歳 取る-NPST=条件 3
「あなたも年を取ったら… (よくなる。)」

(11-30) =cjara : 動詞節

- a. utamanzi=ja [gaku=ci nd-asī=cjara]...
子ども=TOP 学校=ALL 出る-使役.NPST=条件 3
「子どもたちは、(石垣の) 学校に出したら… (帰ってこない。)」
- b. [bupītu nar-u=cjara]...
大人 なる-NSPT=条件 3
「大人になったら… (そんなことはするな、と言われた。)」

例は少ないが、確定条件の例も見つかっている。(11-31) では、主要部に示される事象 udurug-i (驚く-CVB) 「驚いて」はすでに実現している。事象が生じる条件が ee su-n te munu mi (そう する.NPST-IND1 引用 2 もの 見る.NPST) 「そう (いう風に) するというものを見る」ならである。

- (11-31) [e s-u-n te munu mi=cjara] maa udurug-i joo...
そう する-NPST-IND1 引用 2 もの 見る.NPST=条件 3 INTJ 驚く-CVB DSC2
「そう (いう風に) するというものを見たら、もう驚いてさ…」

従属節が名詞節から成る場合について述べる⁵。指示様態詞 ee 「そう」がコピュラ補語として条件助詞 2 と組み合わさって用いられる場合、直前に述べられたこと受け、それを主要部に示される事象をもたら

⁵ ただしこれらの例は、コピュラ主語が現れず、常にコピュラ補語のみ現れるため、節と認定できるか悩ましい。

す条件とする。(11-32) に例を挙げる。(11-32a) は昔話からの用例である。波照間島の祖先となる夫婦が、海のそばで暮らしていたら、ムカデや海の生き物を産み続けたという。夫婦は、この（条件の）ままではいけないと考え、丘に引っ越したという場面での発話である。(11-32b) は、なぞなぞを出題する場面で、「汁物と考えてください」とヒントが出た際の発話である。本例は、主要部と従属部が倒置している。

(11-32) 名詞節（指示様態詞）

- a. **e=cja** nar-an=ta mu-i...
 そう=条件 3 なる-NEG.NPST=引用 1 思う-CVB
 「このままではだめだと思って…（丘に引っ越した）」
- b. **simunu kajaa, ee=cjara.**
 吸い物 自問 そう=条件 3
 「吸い物かね、（汁物という条件）だったら。」

次に、(11-33) にコピュラ補語に名詞句が現れる例を挙げる。動詞節と同じく、いずれも主節に示される事象が生じる条件を示す。

(11-33) 名詞節（名詞句）

- a. [**be+sima=cja**] <saikin>=du e munu mo=gi ha=gi
 1ST.PL.INC+ 島=条件 3 最近=FOC そう もの ここ=LOC2 あそこ=LOC2
 mir-air-oo.
 見る-POT-NPST.IND2
 「波照間島だって最近はそういうものがあちこちで見られるよ。」
- b. [**sinsin=cja**] fuciri nd-asï doo.
 先生=条件 3 薬 出る-使役.NPST DIR.EV5
 「（もしどんな薬か持って来れば）先生だって薬を出すよ。」

11.3.2.2 条件副動詞形 1

従属節の述語に条件副動詞形 1（6.3.2.3）が用いられる場合、従属節は主要部に示される事象に対して主に次の 2 つの意味を示す。条件副動詞形 1 は条件と理由のどちらも表しうるが、便宜的に条件副動詞形と呼ぶ。

- 確定条件
- 確定理由

■確定条件

従属節の述語に条件副動詞形 1 が用いられる場合、従属節が主要部に示される事象をもたらす条件を主に示す。主要部に示される事象はすでに実現した、あるいは確定している場合に限る。このような条件を、確定条件と呼ぶ。

(11-34) に確定条件の例を挙げる。(11-34a) では、主要部に示される事象 *zootuu* 「上等である」ということは確定しており、上等になる条件を副詞節が示している。すなわち、条件は *moo=ga k-utar-a* (こちら=DAT 来る-PST-条件) 「こちらに来たら」(lit. 来るなら) である。

(11-34) 確定条件

- a. [*mo=ga k-utar-a*] *zootuu=ta en-oo*.
 こちらは=DAT1 来る-PST-条件 1 上等=引用 1 言う-NPST.IND2
 「こちらに来たら上等だと言うよ。」
- b. [*utama mari-tar-a*]...
 子ども 生まれる-PST-条件 1
 「子どもが生まれたら、(順調に大きくなったとき。)」
- c. *e su kamj=a [sipitumari mir-utar-a]*...
 そう する 間=TOP 周り 見る-PST-条件 1
 「そうして、周りを見たら、(帽子が落ちていたので拾ってあげた。)」⁶

■理由

従属節の述語に条件副動詞形 1 が用いられる場合、従属節が主要部に示される事象をもたらす理由を示すことがある。主要部に示される事象はすでに実現した、あるいは確定している場合に限る。このような理由を確定理由と呼ぶ。

(11-35) に理由の例を挙げる。(11-35a) では、主要部に示される事象、*baa udurug-i* (1st.SG 驚く-CVB) 「私は驚いて」はすでに実現している。副詞節はこの事象が生じる理由を示す。すなわち、理由は *min=nu na=n akas-i zankaman ja-tar-a* (目=GEN そこ=も 赤い-CVB あちこち COP-PST-条件 1) 「目のそこ(らへん)もあちこち赤くしていたから」である。

(11-35) 理由

- a. [*min=nu na=n akas-i zankaman ja-tar-a*] *baa udurug-i*...
 目=GEN そこ=も 赤い-CVB あちこち COP-PST-条件 1 1st.SG 驚く-CVB
 「目のそこ(らへん)もあちこち赤くしていたから私は驚いて…」
- b. [*<daizjobu>=ta en-tar-a*]...
 大丈夫=引用 1 言う-PST-条件 1
 「大丈夫と言ったから、(はあ、と思ったけど、)」
- c. [*micī=na maagi+isi=nu a-tar-a*]...
 道=LOC1 大きい + 石=NOM ある-PST-条件 1
 「道に大きい石があったので、(拾って片づけた。)」

⁶ *mi(r)* 「見る」に過去接辞を付加する場合、通常 *mi-ta* (見る-PST) が実現する (巻末の付録 A 参照)。しかし、条件接辞 1 を付加する際には (11-34c) に見るように、*mir-utar-a* という語幹が観察された。

■その他の用法

条件副動詞形 1 は、基本的に確定条件と理由を表すが、一方で仮定条件および継起関係を表すことがある。確定条件や確定理由に比べて例文は多くない。(11-36) と (11-37) にそれぞれ仮定条件と継起関係の用法の例を挙げる。

仮定条件とは、従属節が主要部に示される事象の生じる仮定の条件を示す場合である。主要部に示される事象が未確定である場合に用いられる。(11-36) では、主要部に示される事象が明示されていないが、主要部は命令文から成り、未確定の事象である。各括弧で示す従属節は仮定の条件を示す。

(11-36) [juru bidumu=ndu k-j a-tar-a]...
 夜 男=FOC 来る-CVB 継続 1-PST-条件 1
 「夜男が来ていたら、(糸を通した針を髪にさしておけ。)」

継起関係は、従属節と条件助詞 1 が組み合わさったものが連続し、単に時間の流れに沿って事象が生じることを表す。(11-37) において、先行する従属節に示される事象、すなわち ku-n joo=ta en-tar-a (来る-IND1 DSC2=引用 1 言う-PST-条件 1) 「来るよと言ったら」と、後続する従属節に示される事象、すなわち baa mana isasima doa=ta en-tar-a (1ST.SG 今 石垣島 DIR.EV5=引用 1 言う-PST-条件 1) 「私は今石垣だよと言ったら」との関係は、条件や理由といったものではない。単に事象が連続して起こっていることを表している⁷。

(11-37) [...ku-n joo=ta en-tar-a], [baa mana isasima doa=ta
 来る.NPST-IND1 DSC2=引用 1 言う-PST-条件 1 1ST.SG 今 石垣 DIR.EV5=引用 1
 en-tar-a] joo...
 言う-PST-条件 1 DSC2
 「(相手がいついつ) 来るよ、と言ったら、私は今石垣だよと言ったらさ… (相手はそうか、と言って…)」

11.3.2.3 条件副動詞形 2

従属節の述語に条件副動詞形 2 (6.3.2.3) が用いられる場合、従属節は主要部に示される事象に対して主に次の意味を示す。この他に、周辺的な用法として理由を表す用法がある。理由を表す用法に関しては、最後に述べる。

- 確定条件
- 仮定条件
- 逆条件
- 仮想条件
- 並列

⁷ 継起の用法では、副詞節と分析しているものの、連続する従属節に従属部と主要部の関係はないとも言える。どのように分析するかは、今後の課題とする。

■確定条件

従属節の述語に条件副動詞形 2 が用いられる場合、従属節が主要部に示される事象をもたらす条件を示すことがある。主要部に示される事象はすでに実現した、あるいは確定している場合に限る。このような条件を、確定条件と呼ぶ。

(11-38) に確定条件の例文を挙げる。例えば (11-38a) では、主節に示される事象、<denwa> k-j a-ta te (電話 来る-CVB 継続 1-PST DIR.EV1)「電話が来ていたんだってば」の条件が、従属節で示されている。すなわち、条件は ng-iba (行く-条件 2)「(葬式に出席しようと) 行けば」(行ったら)である。主節の述語動詞には過去接辞が付加していることが多い。主節の述語が状態を表す場合には、非過去接辞が付加していても確定条件を示せる (11-39)。

(11-38) 過去接辞

- a. [ng-iba] joo, <denwa> k-j a-ta te joo.
 行く-条件 2 DSC2 電話 来る-CVB 継続 1-PST DIR.EV1 DSC2
 「(葬式に出席しようと) 行ったらさ、電話が来ていたんだってばよ。」
- b. [<sinrjoosjo>=ga ng-u-n=ta eg-iba]...
 診療所=DAT1 行く-NPST-IND1=引用 1 する-条件 2
 「診療所に行こうとしたら、(途中、小学校の鼓笛隊が鳴っていた。)」

(11-39) 非過去接辞

- a. [zaa=nu sima=n e=nu sima=n baa mir-iba] ai dar-oo.
 どの=GEN 島=も その=GEN 島=も 1ST.SG 見る-条件 2 ある.CVB 継続 1-NPST.IND2
 「どんな島も、私が見る限りあるよ。」
- b. [suu bagas-iba]=n [nbus-iba]=n maha-n.
 汁 沸かす-条件 2=も 蒸す-条件 2=も 美味しい.NPST-IND1
 「(冬瓜は) 煮ても、蒸しても美味しい。」 lit. 汁を沸かしても蒸しても美味しい。

■仮定条件

従属節の述語に条件副動詞形 2 が用いられる場合、従属節が主要部に示される事象をもたらす仮定の条件を示すことがある。主要部に示される事象の生起は未確定である場合に用いられる。このような条件を、仮定条件と呼ぶ。主節の述語動詞には非過去接辞が付加している。

(11-40) に仮定条件の例を挙げる⁸。例えば、(11-40a) の主要部に示される事象 bagar-i dar-u (わかる-CVB 継続 1-NPST)「わかる」はまだ実現していない。従属節が主要部の事象が生起する条件を示す。すなわち、条件は uri=nu kuba (あれ=GEN 来る. 条件 2)「あれ (船) が来るなら」である。

- (11-40) a. [uri=nu kuba]=ru maa bagar-i dar-u sika...
 あれ=NOM 来る. 条件 2=FOC INTJ わかる-CVB 継続-NPST 逆接

⁸ 例文 (11-40) は、どちらの従属節述語も「来る」を意味する動詞語幹 k で占められているにもかかわらず、条件副動詞形 2 が kuba~kiba である。単に不規則動詞のパリエーションなのか、意味の違いがあるのかさらに調査する必要がある。

「あれ（船）が（実際に）来れば、もうわかるけど…」

- b. [nee=nu fuciri=ta muc-i kiba]=ru...

どう=GEN 薬=引用 1 持つ-CVB 接近. 条件 2=FOC

「どんな薬と持って来れば、（先生だって薬を出す。）」

■逆条件

従属節の述語に条件副動詞形 2 が用いられる場合、主要部に示される事象が生じる際に、期待される条件とは逆の条件を従属節が示すこともある。このような条件を逆条件と呼ぶ。予想に反する事象が起こる際に用いられる⁹。「～しても」や「～にもかかわらず」と訳せる。逆条件の用法では、条件副動詞形 2 に並列助詞=n が後続する。

(11-41) に逆条件の例文を挙げる。例えば (11-41a) の主節に示される事象 *sik-an-u*（聞く-NEG-NPST）「聞かない」に期待される条件はこの場合、「止めろと言わない」である。その逆の条件を従属節に示している。すなわち、*jamir-i=ta en-iba*（止める-IMP=引用 1 言う-条件 2）「止めろと言って（も）」である。

- (11-41) a. [jamir-i=ta en-iba]=n sik-an-u joo.

止める-IMP=引用 1 言う-条件 2=も 聞く-NEG-NPST DSC2

「止めろと言っても聞かないよ。」

- b. [sikur-iba]=n [sikur-iba]=n...

作る-条件 2=も 作る-条件 2=も

「（作物を）作っても作っても、（搾取され、難儀していた。）」

- c. [<tekimikata> ja-ba]=n...

敵味方 COP-条件 2=も

「敵、味方であっても、（戦争が終わったら友達になって…）」

■仮想条件

従属節の述語に条件副動詞形 2 が用いられる場合、従属節が主要部に示される事実と反する仮想の事象に対して、事象が生じる条件を示すことがある。このような用法を仮想条件（反実仮想）と呼ぶ。

(11-42) に、これまでに見つかっている 2 例を挙げる。どちらの例もなぞなぞを出し合っていた場面で、ようやく回答者が答えにたどり着いた後の（回答者）発言である。例えば、(11-42b) のなぞなぞの答えは「船」であった。やり取りの中で、答えがみんな使用するものだという事はわかっていたものの、中々答えは出なかった。回答者は満足のいくやり取りができなかったため、このような発言をした。主節に示される事象 *misja-ta munu*（よい-POST 後悔）「よかったのに」は、仮想である。従属節が、この仮想の事象が実現する条件を示す。すなわち条件は、*pitu=nu nubur-u munu naa=ta sik-j a-ba*（人=NOM 乗る-NPST もの Q=引用 1 聞く-CVB 継続 1-条件 2）「人が乗るものか？ と聞いていれば」である。

- (11-42) 仮想条件

⁹ 逆接節 (11.2) の強調とも言える。

- a. [h-air-u munu naa=ta sik-j a-ba] misja-ta munu.
 食べる-POT-NPST もの Q=引用 1 聞く-CVB 継続 1-条件 2 よい-PST 後悔
 「『食べられるものか?』と（出題者に）聞いていればよかったのに。」
- b. [pītu=nu nubur-u munu naa=ta sik-j a-ba] misja-ta mun raa.
 人=NOM 乗る もの Q=引用 1 聞く-CVB 継続 1-条件 2 よい-PST 後悔 INRJ
 「『人が乗るものか?』と（出題者に）聞いていればよかったのにね。」

■並列

従属節の述語に条件副動詞形 2 が用いられる場合、これまでに挙げたような様々な条件ではなく、単に事象を列挙する場合に用いられることがある。本用法を並列と呼ぶ¹⁰。

(11-43) に例を挙げる。例えば、(11-43a) の主節に示される事象、すなわち *tapi=gara=nu pītu=n siko-n* (旅=ABL=GEN 人=も 使う.NPST-IND1) 「島外からの人も使う」に対して、従属節 *bee+sima=nu pītu=n sikeba* (1st.PL.INC+ 島=GEN 人=も 使う. 条件 2) 「波照間の人も使えば」は、実現する（あるいは実現した）条件ではない。むしろ等位の関係にあり、基本的には条件助詞 3 の特殊な用法と言える。

- (11-43) a. [be+sima=nu pītu=n sikeba] tapi=gara=nu pītu=n siko-n.
 1st.PL.INC+ 島=GEN 人=も 使う. 条件 2 旅=ABL=GEN 人=も 使う.NPST-IND1
 「波照間の人も使えば、島外からの人も使う。」
- b. [zīi=nu iru s-j a munu ar-iba]...
 土=GEN 色 する-CVB 継続.NPST もの ある-条件 2
 「土色をしているものもあれば、(青色のものもある。)」
- c. [pīsumari ja-ba]=n [juunen ja-ba]=n siko-n.
 昼 COP-条件 2=も 夕方 COP-条件 2=も 使う.NPST-IND1
 「(簀は) 昼でも夜でも使う。」

■その他の用法

1970 年代の例文からは、条件や並列の用法以外に、理由を表す用法が見つかっている。従属節の述語に条件副動詞形 2 が用いられ、従属節が主要部に示される事象をもたらす理由を示す。(11-44) に例を挙

¹⁰ 並列の用法では、(11-43c) のように基本的にはコピュラ動詞が現れる。しかし、名詞句に条件接辞 2 と考えられる形式が直接後続する例が 1 例見つかった。*nuu=n jaasee-ba=n...* (何=GEN 野菜-条件 2=も) 「何の野菜でも…(使う。)」この例の他には、様態指示詞 *e* 「そう」に条件接辞 2 が付加する例が見つかっている (3.2.5, *e-ba=n* 「だけど」)。複数の品詞に後続するという点で、条件接辞 2 として分析している形式を接語として分析することも考えられるが、本論文では動詞形態を統一的に記述するという観点から、動詞接辞として分析し、名詞や様態指示詞に用いられる例は例外として記述する。例えば、クラス 1 の動詞語幹 (例えば *jum* 「読む」) とクラス 3 の動詞語幹 (例えば *iri(r)* 「入れる」) に条件接辞 2 が付加する際、*jumiba* 「読めば」や *iriba* (～*iririba*) 「入れれば」が実現する。分析方法として (1) 仮に *ba* を接語と認める場合には、クラス 1 では中止形が、クラス 3 の場合は時制形 (あるいは語幹そのもの) が接語に先行すると記述することとなる。(2) 仮に *iba* (クラス 3 の場合は *ba*) を接語と認める場合には、クラス 1 もクラス 3 も語幹そのもの (すなわち屈折していない形式) が用いられると記述することとなる。(1) に関して、ある形式に先行する動詞形式は、動詞語幹のクラスに関わらず同じであるという立場に立つ。すなわち、クラス 1 で中止形ならば、他のクラスでも中止形を取るはずである。(2) に関しては、基本的に動詞はいずれかの屈折接辞を取るという立場に立つため、上記のいずれの分析立場もとらず、条件接辞 2 に名詞句が先行する例、様態指示詞が先行する例は例外として記述する。

げる¹¹。

- (11-44) a. *sisanci nar-iba [juru=nu su=n pīs-iba]...*
 秋 なる-条件 2 夜=GEN 潮=も 引く-条件 2
 「秋になれば、夜の潮も引くので、(魚釣りにはいい季節だけど…。)」
- b. *[ngoobi sunamunu=a k-j a-ba]...*
 沢山 品物=TOP 来る-CVB 継続 1-条件 2
 「沢山品物は来ているので、(どうぞ買って行ってください。)」

11.3.3 付帯状況をあらわす副詞節

付帯状況を表す副詞節に関して、述語には動詞と条件助詞を組み合わせて用いられる場合と、付帯副動詞形が用いられる場合がある。それぞれについて述べる。

11.3.3.1 付帯助詞

付帯助詞は *ci* である。従属節が付帯助詞と組み合わさって用いられる場合、従属節は主要部に示される事象の付帯状況を表す。付帯助詞は「～しながら」と訳せる。グロスには「付帯 2」を用いる。

従属節の述語動詞は中止形である。(11-45) に例を挙げる。例えば、(11-45a) では、主節に示される事象 *munu ho-tar-oo* (もの 食べる-PST-IND2) 「ご飯を食べたよ」がどのように行われたのか、従属節が示す。すなわち *andani=nu paa=ndu <supungawari> si* (アダンの葉=GEN 葉=FOC スプーンの代わり する.CVB) 「アダンの葉をスプーンの代わりにする」が付帯状況である。

- (11-45) a. *[andani=nu paa=ndu <supungawari> s-i] ci munu ho-tar-oo.*
 アダンの葉=GEN 葉=FOC スプーンの代わり する-CVB 付帯 2 もの 食べる-PST-IND2
 「アダンの葉をスプーンの代わりにしながらご飯を食べたよ。」
- b. *[unu pīkidasi naga sunu ir-a] ci=ru muc-i k-uta saa.*
 あの 引き出し LOC3 着物 入れる-CVB 付帯 2=FOC 持つ-CVB 接近-PST 推量 2
 「あの引き出しに着物を入れたまま持ってきたでしょう。」
- c. *[suu=ta mui] ci...*
 汁=引用 1 思う.CVB 付帯 2
 「汁物と思って、(考えてください。)」

否定の付帯状況「～しないで」を表す例が 1 例見つかっている。従属節と形式名詞 *suku* (8.5.6) と付帯助詞が組み合わさって用いられる。

- (11-46) *nu=ta=n moan suku ci kaer-i=sā nen-u.*
 何=引用 1=も 思う.NEG.NPST 程度 付帯 2 帰る-CVB=? 完了-NPST
 「何とも思わないで、帰ってしまった。」

¹¹ (11-44a) のはじめに現れる従属節 *sisanci nar-iba* 「秋になれば」は、理由ではなく仮定条件である。

11.3.3.2 付帯副動詞形

従属節の述語に付帯副動詞形が用いられる場合、従属節は主要部に示される事象の付帯状況を表す。付帯副動詞形が用いられる場合も、付帯助詞と同様に「～しながら」と訳せる。

(11-47) に例を挙げる。例えば、(11-47) では、主節に示される事象 *haa=ga kaer-i=sa nen-tar-oo* (あちら=DAT1 帰る-CVB=? 完了-PST-IND2) 「(子どもたちは) 向こうに帰ってしまったよ」の付帯状況を従属節が示す。すなわち *utama-nzi=ja ... h-encana* (子ども-PL=TOP 食べる-付帯 1) 「子どもたちは(果実を) 食べながら」が付帯状況である。付帯副動詞形が用いられる副詞節は、付帯助詞が用いられる副詞節と比べると、用例が少ない。自然談話での用例は (11-47) の 2 例のみである。グロスには付帯 1 を用いる。

- (11-47) a. [*utama-nzi=ja... h-encana*] *ha=ga kaer-i=sa nen-tar-oo*.
 子ども-PL=TOP 食べる-付帯 1 あちら=DAT1 帰る-CVB=? 完了-PST-IND2
 「子どもたちは(果実を) 食べながら、向こうに帰ってしまったよ。」
- b. [*atasima... asip-incana ng-i kooso-n*].
 一時 遊ぶ-付帯 1 行く-CVB 来る.NPST-IND1
 「一時、遊びながら行ってきます。」

11.3.4 限界点を表す副詞節・限界助詞

限界助詞は *bagi* である。従属節が限界助詞と組み合わさって用いられる場合、従属節は主要部に示される事象の限界点を示す

従属節の述語動詞は時制形である。(11-48) に例を挙げる。主節に示される事象 *mac-i bir-j a-tar-oo* (待つ-CVB 継続 2-CVB 継続 1-PST-IND2) 「待っていたよ」の限界点(いつまで待っていたか)を従属節が示す。すなわち *<zikan> kuu bagi* (時間 来る.NPST 限界) 「時間が来るまで」である。

- (11-48) e ci [*<zikan> kuu*] *bagi=n mac-i bir-j a-tar-oo*.
 そう 付帯 2 時間 来る.NPST 限界=も 待つ-CVB 継続 2-CVB 継続 1-PST-IND2
 「そうやって、時間が来るまで待っていたんだよ。」

限界助詞は、動詞節と組み合わさって用いられる例は少なく、コピュラ補語のみ現れる名詞節で観察されることが多い。(11-49) と (11-50) に例を挙げる。いずれも限界点を示す¹²。

- (11-49) [*jamatu*] *bagi ng-u-n*.
 大和 限界 行く-NPST-IND1
 「大和(本州)まで行く。」

¹² このような例ではコピュラ主語が現れず、常にコピュラ補語のみ現れるため、節と認定できるか悩ましい。条件助詞と同様である(11.3.2.1)。bagi と組み合わさる名詞句が、主要部と同一の節内にあるとも考えられる。従って bagi が、主要部(この場合は述語)に対する名詞句の関係、すなわち格、を表しているとも考えられる(4.5)。実際、先行研究(Aso 2015a, 麻生 2015b など)では、bagi を格助詞として扱っている。本論文では bagi に動詞述語を拡張する用例が見つかったことから、他の格助詞とは性質が異なると考え、格助詞の体系には組み込まなかった。限界助詞は他の接続助詞とは異なる振る舞いを見せる。

(11-50) [banu bagar-u tukuru] bagi panas-i mir-a raa.

1st.SG わかる-NSPT 所 限界 話す-CVB 試行-INT DSC1

「私が分かるところまで話してみようね。」

11.4 中止節

中止節 (Medial clause) は、単に時間の流れに沿って事象が生じることを表す。形態的には従属的であるにもかかわらず、従属節に示される事象は、主要部に示されるそれと対等の扱いを受ける。中止節の述語動詞は中止形である。中止節は、単独で用いられる場合と、継起助詞 *sita* と組み合わせられて用いられる場合がある。

11.4.1 中止形

多くの中止節は、他の助詞と組み合わせることなく単独で用いられる。中止節を角括弧で示し、(11-51) に例を挙げる。主節に示される事象は *he bir-j a-tar-oo* (食べる.CVB 継続 2-CVB 継続 1-PST-IND2) 「食べていたよ」である。中止節、すなわち *ini, an, mun=ba sīkor-i* (稲 粟 麦=TOP.ACC 作る-CVB) 「稲、粟、麦を作って」は、単に「(稲、粟、麦を) 作って」そして「食べていた」という、事象が順に起こったことを意味する。主節の事象に対し条件や理由といった従属的な意味は持たない。

(11-51) [ini, an, mun=ba sīkor-i], he bir-j a-tar-oo.

稲 粟 麦=TOP.ACC 作る-CVB 食べる.CVB 継続 2-CVB 継続 1-PST-IND2

「(昔は) 稲、粟、麦を作って食べていたよ。」

中止節は、主節にいくつも先行することができる。以下に挙げる例文は、連続した談話である。(11-52c) が主節で、その他のすべての節は中止節である。

(11-52) a. [kii=nu ui naga nubur-i], [meedarikaki naga mansin naari<o> ir-a],

木=GEN 上 LOC3 上る-CVB 前掛け LOC3 いっぱい 実を 入れる-CVB

「木の上に登って前掛けここにいっぱい実を入れて、」

b. [sita naga ur-a ki], [kunu naari<o> kagu naga muru ir-a],

下 LOC3 降りる-CVB 接近.CVB この 実を カゴ LOC3 全部 入れる-CVB

「下に降りてきて、この実をかごの中に全部入れて、」

c. e su kamj=a pītu-sin=ja uta-ta-sar-oo.

そう する.NPST 間=TOP 1-CLF. 細=TOP 落ちる.CVB. 継続 1-PST-?-IND2

「そうしているうちに、1 個は落ちたはず。」¹³

事象が性質を表す場合にも、用いることができる。その場合、時間的な流れは関係ない。(11-53) に、中止節と主節がどちらも性質を表す例を挙げる。

¹³ 本例文は継続の補助動詞構文として分析しているが、話者は、*uta-ta-sar-oo* (落ちる.CVB. 継続 1-PST-?-IND2) に「落ちたはず」という訳を付けた。もしかすると継続の補助動詞構文ではなく、近接過去接辞 (6.4.3) である可能性もある。

- (11-53) [ina=ja oos-i], zinto=ja takaha-n.
 海=TOP 青い-CVB 空=TOP 高い.NPST-IND1
 「海は青く、空は高い。」

11.4.2 継起助詞

継起助詞は *sita* である。中止節が継起助詞と組み合わさって用いられる場合がある。(11-54) から (11-56) に例を挙げる。(11-54) の主要部は主節で、一方、(11-55) の主要部は副詞節である。

- (11-54) [kaikan nagi=ndu nuf-i] **sita**, sitomuci=ndu ja=ci kaer-i k-j
 会館 LOC2=FOC 寝る-CVB 継起 朝=FOC 家=ALL 帰る-CVB 接近-CVB
 ar-oo.
 継続 1-NPST.IND2
 「会館で寝て、朝に帰って来ていたよ。」
- (11-55) [jaasi=nu naari... pis-i ki], mata [sis-i] **sita**, <futacuni> agi=cja...
 ヤシ=GEN 実 拾う-CVB 接近.CVB また 切る-CVB 継起 2 つに 開ける.NPST=条件 3
 「ヤシの実を拾ってきて、また切って 2 つに開けたら… (それを腕にした)」

命題に示される事象が性質を表す際にも、用いることができる。中止節述語が接続助詞で拡張されない場合と同様、この場合、時間的な流れは関係ない。(11-56) に、中止節と主節がどちらも性質を表す例を挙げる。

- (11-56) [naana si] **sita**, busaha-n.
 とても長い する.CVB 継起 大きい-IND1
 「とても長くて大きい。」

中止節が継起助詞なしで、単独で用いられる場合は、主要部にいくつもの中止節が先行する例が見つかる(11-52)。一方、中止節と継起助詞が組み合わさって用いられる場合には、主要部に 2 つ以上用いられる例は見つかっていない。必ず 1 つである。中止節と継起助詞が組み合わさって用いられる場合、その中止節は常に主要部の直前に現れる。(11-57) に挙げる例文は、連続した談話である。主節、すなわち *midumu<o> pii=gara bunc-ah-eba* (女を 岩場=ABL 渡る-使役-IMP) 「女を岩場から渡らせろ」の直前に、*he sita* (食べる.CVB 継起) 「食べて」が現れる。これに先行する 3 つの中止節は、いずれも単独で用いられている。

- (11-57) a. [<kjuurekino sangacusannici>=na masamunu=ba sikor-i], [zubagu naga ir-a],
 旧暦の 3 月 3 日=LOC1 ごちそう=TOP 作る-CVB 重箱 LOC3 入れる-CVB
 「(その人は) 旧暦の三月三日に、ご馳走を作って、重箱の中に入れて、」
- b. [ina=ci muc-i ng-i], [he] **sita**, midumu<o> pii=gara bunc-ah-eba.
 海=ALL 持つ-CVB 乖離-CVB 食べる.CVB 継起 女を 岩場=ABL 渡る-使役-IMP
 「海に持って行って、食べて、女を岩場から渡らせろ (と言ったそうだ。)」

第 12 章

情報構造

本章では、情報構造に関連するテーマについて記述する。まず 12.1 と 12.2 で焦点助詞と主題助詞の形式と分布および機能について述べる。その後、累加助詞と排他助詞について 12.3 で述べる。

12.1 焦点助詞

波照間方言の焦点助詞は=(n)du および=ru である。焦点 (Focus) という機能を持つ形式には言語によって様々な用法があるが、(1) 新しい情報を導入する (2) ある要素を他より際立たせる、といった共通した特徴が見られる (Miller 2006)。=(n)du および=ru は、まさにそのような機能を持つため、焦点助詞と呼ぶ。焦点助詞には、大きく 2 つの機能がある。

- 新情報の導入
- 対比

本節では、まず 12.1.1 で形式と分布について述べたのち、12.1.2 で上に挙げた 2 つの機能についてそれぞれ述べ、最後に、12.1.3 で焦点助詞が主節の動詞形式に影響を与える係り結び現象について述べる。

12.1.1 形式と分布

焦点助詞=(n)du および=ru は、相互入れ替えが可能な場合もあるが、一方が全く現れない環境がある。先行する要素の統語機能によって分布の傾向が異なる。表 12.1 に=(n)du と=ru が現れる分布を示す。=du は、=ndu が現れる環境で、前接する語の末尾音が n の場合に実現する。

表 12.1: =(n)du と=ru の分布

	項						節		
	直格	時 NP	斜格				引用節	逆接節	副詞節
			奪格	与格	位格	具格			
=ndu	○	○	○	○	○	○	○		
=ru		○	○	○	○	○	○	○	○

それぞれ直格項には=(n)du が、直格項以外の項については、どちらの形態素も実現しうる。一方、節に関しては、引用節には=(n)du と=ru の両方が、引用節以外には=ru が組み合わさって用いられる。以下に、直格項、斜格項、述語がそれぞれ焦点助詞と用いられる例を挙げる。焦点助詞と組み合わせる節の例は、これまでに引用節、逆接節、付帯状況を表す副詞節で見つかっている¹。焦点助詞に先行する項と格助詞、および節を角括弧で示す。

(12-1) 直格項 S

[kaccee=nu nakasja]=**ndu** kjuu or-j a-ta te joo raa.
 勝連=GEN 次男=FOC 今日 いらっしゃる-CVB 継続 1-PST DIR.EV1 DSC2 DSC1

「勝連の次男坊が今日いらっしゃってたんだってばよね。」

(12-2) 直格項 P

a. Q: pīmiza=ja agan hoo naa?

ヤギ=TOP 芋 食べる.NPST Q

「ヤギは芋を食べるの？」

b. A: pīmiza=ja [fuca]=**ndu** hoo.

ヤギ=TOP 草=FOC 食べる.NPST

「ヤギは（芋じゃなくて）草を食べる。」

(12-3) 斜格項：位格

[usīna nagi]=**ndu** e munu=a busahar-oo.

沖縄 LOC2=FOC そう もの=TOP 大きい-NPST.IND2

「沖縄に、そういうものがたくさんある。」

(12-4) 斜格項：具格

kuturami=ja saa=ja [duu=si]=**ru** sīkur-i num-utar-oo.

昔=TOP お茶=TOP 自分=INS=FOC 作る-CVB 飲む-PST-IND2

「昔はお茶は自分で作って飲んだんだよ。」

(12-5) 逆接節

[a-ta dara sika]=**ru** bagar-an doo.

ある-PST 引用 3 逆接=FOC 分かる-NEG.NPST DIR.EV5

「あったかもしれないけど、分からないよ。」

(12-6) 副詞節

¹ それ以外の従属節や、形式名詞を含む名詞句項（8.5）といった環境では深く調べられていない。今後の課題とする。

sunu=n nen-a ki [sikobaree+nasama=nu sunu sis-i ci]=ru <kekkonsiki>
 着物=も ない-CVB 理由 2 屋号 + 人名=GEN 着物 着る-CVB 付帯 2=FOC 結婚式
 s-j a-tar-oo.
 する-CVB 継続 1-PST-IND2

「着物もないから、底原のナサマの着物を着ながら結婚式をしたよ。」

一方で、軽動詞構文 (9.3) の主動詞には、=ru ではなく、=ndu が現れる。

(12-7) 軽動詞構文の主動詞

jum-i=ndu soo.
 読む-CVB=FOC する.NPST-IND2

「読む。」(lit. 読みがする)

主節述語の動詞形式に目を向けると、文中のいずれかの要素に焦点助詞が現れる場合、主節述語には確信形 1 は実現しない。述語動詞に確信法接辞が付加する場合には、必ず確信形 2 が選択される。上に挙げた例で言えば、(12-3), (12-4), (12-6), (12-7) がそうである²。

12.1.2 機能

本節では 12.1 の冒頭で挙げた (1) 新情報の導入と (2) 対比の機能について述べる。

12.1.2.1 新情報の導入

新情報の導入の機能は、発見、すなわち談話内の登場人物あるいは事物などを導入するといった場合と、疑問文およびその返答文に観察される。

■発見

発見の機能では、直格項と焦点助詞で用いられる例のみ観察される。後続する述語には、存在を表す動詞 a(r)「ある」や bu(r)「いる」、o(r)「いらっしゃる」といった動詞が現れる。(12-8) から (12-10) に例を挙げる。例文中の角括弧で示された名詞句は、談話内で初めて言及された参与者である。

(12-8) mugasī mugasī [abo=tu midumu]=ndu bu-ta cju.
 昔 昔 母さん=COM 女=FOC いる-PST HS1
 「昔々お母さんと娘がおったとき。」

(12-9) kuturami=ja... [sīi te munu]=ndu a-ta gara, sīi... bebisjar-u
 昔=TOP 酢の物 引用 2 もの=FOC ある-PST 理由 1 酢の物 小さい-NPST
 birikanapaa naga sim-i, muc-i=ru o-tar-oo.
 クワズイモの葉 LOC3 包む-CVB 持つ-CVB=FOC いらっしゃる-PST-IND2

² 焦点助詞と主節述語の動詞形式に関する分析は、今後の課題とする。現状、詳しい違いが分かっていない確信法接辞 1 と 2 の性質に関連する可能性がある (6.4.4, 6.4.4, 10.5.1.1)。

「昔は（魚の）酢の物というものがあったから、酢の物を小さいクワズイモの葉に包んで、持っていらっしやったよ。」

- (12-10) kjuu goobi [**<kanzja>**]=**ndu** o-ta te joo.
 今日 たくさん 患者=FOC いらっしやる-PST DIR.EV1 DSC2
 「今日は患者さんがたくさんいらっしやったんだってばよ。」

■疑問文およびその返答文

疑問文（10.1.1）において、疑問語あるいは疑問語を含む名詞句が焦点助詞と組み合わさって用いられ、疑問部分を新情報として導入する機能がある。疑問部分の他、その返答文において答えとなる名詞句にも焦点助詞が後続する例が見つかっている。疑問語 *taa* 「誰」、*nuu* 「何」、*zaa* 「どこ」、*nee* 「どう」、*nee* 「どう」を含む名詞句からなる例を (12-11) から (12-15) に挙げる。

- (12-11) **ta=ndu** per-j a-ta raa?
 誰=FOC 入る-CVB 継続 1-PST Q
 「誰が入っていたのか？」

- (12-12) a. Q: gokka nuu=**ndu** he baa?
 鶏 何=FOC 食べる.CVB Q
 「鶏は（普通）何を食べるのか？」
 b. A: gokka mee=**ndu** hoo.
 鶏 米=FOC 食べる.NPST
 「鶏は米を食べる。」

- (12-13) **za=ndu** a baa?
 どこ=FOC ある.NPST Q
 「どこにあるのか？」

- (12-14) **nee=ndu** <kekconsiki> s-j oo-ta raa?
 どう=FOC 結婚式 する-CVB 敬意-PST Q
 「どんなふうに結婚式をしてらっしやったんですか？」

- (12-15) a. Q: nabi=ja, bebisja nabi, nee=nu naabi=**ndu** a-ta raa?
 鍋=TOP 小さい.NPST 鍋 どう=GEN 鍋=FOC ある-PST Q
 「鍋は、小さい鍋、（他に）どんな鍋があったっけ？」
 b. A: zjurarumin nabi.
 ジュラルミン 鍋
 「ジュラルミン鍋」

12.1.2.2 対比

焦点助詞は、典型的には、先行する節で聞き手の前提を否定し、後続する節で焦点助詞を用い、正しい知識を提示する機能がある。これを対比用法 (Contrastive focus) と呼ぶ。日本語で言えば、「(あなたが思っているような) A ではなく、(正しくは) B である。」と訳せる。先行する節には、基本的に否定接辞が含まれる。対比用法では、項の他に、節と焦点助詞が組み合わさって用いられる例も観察される。

以下に例文を示す。(12-16) は、連続している談話である。昔の思い出を筆者に話している際、昔はスプーンと言うものがなかったから、植物の葉をスプーンの代わりにして使っていたという文脈である。(12-16a) の角括弧 A : *supun te munu* 「スプーンというもの」と、(12-16b) の角括弧 B : *andaninu paa* 「アダンの葉」を対比している。聞き手の想定である角括弧 A は、*nen-u* 「ない」で否定され、角括弧 B は焦点助詞と組み合わさって用いられ、正しい知識を提示していると言える。

- (12-16) a. *pīte nagi=ja [supun te munu]_A nen-u.*
 畑 LOC2=TOP スプーン 引用 2 もの ない-NPST
 「畑ではスプーンというものはない。」
- b. *[andaninu paa]_B=ndu supun <gawari> s-i ci, munu hotar-oo.*
 アダン=GEN 葉=FOC スプーン 代わり する-CVB 付帯 2 もの 食べる.PST-IND2
 「アダンの葉をスプーンの代わりにしながらご飯を食べたよ。」

(12-17) は、昔の米菓子について筆者に説明している場面での連続した発話である。昔は作り手、材料、道具が揃っていたから波照間島で作っていたけど、今はもう自分たちでは作らないで、大きな島で買って食べている、という文脈である。(12-17a) の角括弧 A : *moo=gi* (ここ=LOC) 「ここ(波照間島)で」と、(12-17b) の角括弧 B : *tapi=gara* (旅=ABL) 「旅(石垣島)から」が対比されている³。

- (12-17) a. *mana ho-n sika [mo=gi]_A=ja sīkur-an-u.*
 今 食べる.NPST-IND1 逆接 ここ=LOC2=TOP 作る-NEG-NPST
 「今でも食べるけど、ここ(波照間)では作らない。」
- b. *[tapi=gara]_B=ndu kee ki ho-n.*
 旅=ABL=FOC 買う.CVB 接近.CVB 食べる.NPST-IND1
 「旅(石垣島)から買って来て食べるよ。」

(12-18) は、昔の青年たちの話を筆者にしている場面での連続した発話である。青年たちは夜になっても家に帰らないで、会館(青年団の家という集会所)で寝て、それから朝帰ってくるという文脈である。この例文では後続する節に焦点助詞が2度現れる。(12-18a) の角括弧 A1 : *jaa=ci* (家=ALL) 「家に」と、(12-18b) の角括弧 B1 : *kaikan nagi* (会館 LOC) 「会館で」が対比されている⁴。(12-18b) の角括弧 B2 :

³ (12-17) およびのちに挙げる (12-19) は、新情報の導入(発見)の機能とも考えられる。例えば、(12-17) が「(波照間ではなく)石垣島で作る」であれば明確に対比だと言えるが、実際は「石垣島で買ってくる」であるため、項も述語も異なる。従って、新しい情報だと言える。本論文では仮に対比として記述したが、新情報と対比の機能を区別する基準については、今後の課題とする。

⁴ 波照間方言では「家」を表す語に *hii* と *jaa* がある。主に *hii* が用いられる印象があるが、(12-18a) では *hii* (*hii nagi*) と *jaa* (*jaa=ci*) のどちらも用いられている。

sitomuci「朝」に関しては、先行する節で対照する名詞句は表出していないが、文脈から「夜（家に帰る）」という想定への対比であると考えられる。

- (12-18) a. <sjeenendan>=nu hii nagi muru sjama-ima te [ja=ci]_{A1}=n kaer-an-u.
 青年団=GEN 家 LOC2 全部 兄さん-PL 引用 2 家=ALL=も 帰る-NEG-NPST
 「青年団の家で、みんな兄さんたちというものは（夜になっても）家にも帰らない」
- b. [kaikan nagi]_{B1}=ndu nuf-i sita, [sitomuci]_{B2}=ndu ja=ci kaer-i kutar-oo.
 会館 LOC2=FOC 寝る-CVB 継起 朝=FOC 家=ALL 帰る-CVB 接近.PST-IND2
 「会館で寝て、朝、家に帰ってきたよ。」

談話中に先行する節が複数現れる場合もある。以下の(12-19)は、昔はコンロやガスというものはなく、木（薪）でご飯を炊いていた、という文脈である。(12-19a)の角括弧 A : konro「コンロ」、(12-19b)の角括弧 A' : gasu「ガス」と、(12-19c)の角括弧 B : kii=si（木=INS）「木で」が対照されている。「A でもなく、A' でもなく、B である。」と訳せる。

- (12-19) a. kuturamj=a [<konro>]_A=n nen-u.
 昔=TOP コンロ=も ない-NPST
 「昔はコンロもない。」
- b. ke=nu [<gasu> te mun]_{A'} nen-u.
 こう=GEN ガス 引用 2 もの ない-NPST
 「こんなガスというものがない。」
- c. [kii=si]_B=ru munu bagah-e ho-ta gara, …
 木=INS=FOC もの 炊く-CVB 食べる-PST 理由 1
 「木でご飯を炊いて食べていたから、（煤がすごかった）」

(12-20) は、節と焦点助詞が組み合わさって用いられる例である。昔は海から塩水を運ぶときは頭に載せて持ってきた、という文脈である。当時は今のような水を運ぶのに適した容器（ペットボトルやポリタンク）などがなかったため、桶など大きく口の空いた容器が主流であった。それゆえ、先行する節で対比される事象が言及されていないが、おそらく「手で持って運ぶ」⁵と「頭に載せて運ぶ」が対比されているのではないかと推測する。

- (12-20) busu=ja [kam-a ci]=ru muc-i k-utar-oo.
 塩水=TOP 頭に載せる-CVB 付帯 2=FOC 持つ-CVB 接近-PST-IND2
 「塩水は頭に載せながら持ってきたよ。」

項と焦点助詞の組み合わせの場合でも、(12-20)と同様に対比されるものが発話内に明示されない場合がある。例えば(12-21)は、昔青年たちが行っていたいたずらについて、いたずらした相手に自ら暴露していた、という文脈である。普通であればいたずらなんてものは隠しておくはずなのに、それに反して「他ではない、兄さん（青年）たち自身が（相手に暴露した）」ということの意味する。すなわち「聞き手

⁵ あるいは「車で運ぶ」と「頭に載せて運ぶ」である可能性もある。

の知識に対する想定」とは異なることを意味するため、対比の機能とする。「他でもなく、まさにそれ（焦点助詞に先行する項が示す事柄）」と訳することができる。

(12-21) [sjama-ima]=**ndu** e=nu panasī mata ha-ima su-ta <koto> mata...

兄さん-PL=FOC そう=GEN 話 また 再帰-PL する-PST こと また

ama-ima=ga sīk-asī-tar-oo.

姉さん-PL=DAT1 聞く-使役-PST-IND2

「(他でもなく) 兄さんたちが、その話を、また自分らがしたことを、また姉さんたちに聞かせたよ。」

「他ではなく、まさにそれ（焦点助詞に先行する節に示される事柄）」のように訳せる用法には、指示様態詞 ee「そう」と焦点助詞が組み合わさって用いられる例で多く見つかっている。ee に焦点助詞を付加し、「他ではなく、そう（／その通り）」という意味を持つ。(12-22) は、結婚式に行く際、着物を着たら皆、帯を太鼓帯にしたという話の中での発話である。

(12-22) ba-ima=n ee=**ru** sis-i ng-j a-ta te.

1st-PL=も そう=FOC 着る-CVB 行く-CVB 継続 1-PST DIR.EV1

「私達も（まさに）そんな風（太鼓帯）にして着ていったんだってば。」

12.1.3 係り結び現象

焦点助詞は、主節の動詞形式に影響を与える場合がある。叙述文の主節述語が動詞 1 語で占められる場合、基本的に 2 種類の確信形のいずれかである (6.3.2.1)⁶。一方で、文中のいずれかの要素が焦点助詞と組み合わさって用いられる場合、例外的に主節の述語動詞に時制形の動詞が現れる例が数例見つかっている。このような現象を係り結び現象と呼ぶ。ムード形で実現する場合と時制形で実現する場合の意味的な違いは、明らかではない。

(12-23) の主節述語動詞は不規則動詞 sīk「使う」である。時制形は sīko-Ø（使う-NPST）である⁷。(12-24) は主節の述語動詞に過去接辞が付加される例である。動詞の語末に現れる母音 u に関しては明らかではないが、これも時制形と考えられる (6.4.1)。(12-25) は節に焦点助詞が後続する例である。主節述語は非過去の時制形である。(12-26) の主節述語は継続の補助動詞 daa~da(r) の非過去時制形である。daa~da(r) はそれ自身に焦点助詞を内包している (9.2.1)。

(12-23) midumu=**ndu** busa sīko.

女=FOC 沢山 使う.NPST

「(それは) 女が沢山使う。」

⁶ 12.1.1 の最後に述べた通り、文中のいずれかの要素に焦点助詞が現れる場合、平叙文の主節述語には確信形 1 が用いられず、必ず確信形 2 が用いられる

⁷ ただし、sīk「使う」と h「食べる」(例文 (12-12a) など) に関しては、非過去の確信形 2 と時制形との形式的な違いが明確ではない。すなわち sīko-Ø（使う-NPST）と、sīkoo（使う.NPST.IND2）の対立である。現在は短母音と分析している。明らかにいずれかが使用される場面を特定し、母音の持続時間を計測する必要がある。今後の課題とする。

(12-24) daa=**ndu** baa tatag-j **a-tar-u**.

お前=FOC 1ST.SG 叩く-CVB 継続 1-PST-?

「お前が私を叩いた。」

(12-25) dagu sīkor-i, mac-i ci=**ru** maa **ng-air-u** maa.

道具 作る-CVB 待つ-CVB 付帯 2=FOC INTJ 行く-POT-NPST INTJ

「道具を作って、待ちながら、まあ、行けるよ、もう。」

(12-26) mana bagi=n tur-i **dar-u** juu sisaree.

今 限界=も 通る-CVB 継続-NPST DSC3 INTJ

「(自分達のこの名前は) 今までも通っているんだよ、はい。」

一般的に、日本語や琉球語の研究において、名詞句の特定の助詞（波照間方言の場合は焦点助詞）と、連体節の述語と同じ動詞形式（波照間方言の場合は時制形）から成る動詞述語の呼応は「係り結び」と呼ばれる（内間 1985, Shinzato 2015）。しかし波照間方言の場合、係り結び現象が見られる例は、これまでの調査で 10 例程度見つかっているのみである⁸。例が少ないのは、焦点助詞の頻出度が低いわけではなく、焦点助詞と時制形動詞の呼応が必須ではないからである。述語動詞が時制形でかつ、文末にいずれの助詞も現れない場合、先行するいずれかの要素に必ず焦点助詞が現れる。しかしその逆、すなわち「先行する要素に焦点助詞が現れれば、必ず文末の述語は時制形である」とは言えない。以下 (12-27) に、名詞句（mansin「肩」）に焦点標識が現れているものの、述語が確信法終止形で占められる例を挙げる。

(12-27) mansin=**du** kor-j **ar-oo**.

肩=FOC 凝る-CVB 継続 1-NPST.IND2

「肩が凝っているよ。」

係り結び現象に関連し、引用助詞 2 の異形態 tenu (11.1.2) が、主節述語を占めているように分析できる例が見つかっている (12-28)。引用助詞 2 は、引用助詞 1=ta と動詞 en「言う」が融合したものである。名詞句 pite「畑」と焦点助詞が組み合わさって用いられ、主節述語に引用助詞 1=ta と動詞 en「言う」の時制形 en-u（言う-NPST）が融合した形式 tenu が現れている。これも係り結び現象の一種と言えるだろう。引用助詞 2 は、先行する焦点助詞と呼応するという動詞の性質を保っているため、引用助詞として文法化の途中にあると言える。

(12-28) pite=**ndu** maa unsiku sir-ar-a **tenu** maa.

畑=FOC INTJ たいそう やる?-受身-CVB. 継続 1.NPST 引用 2 INTJ

「畑がかなりやられているということですよ、もう。」

⁸ 同じ波照間方言でも、書き言葉からことわざを音声記号化した資料（西岡 2010）では、係り結びの現象が多く見られる。同系の言語を見渡すと、琉球諸語宮古語伊良部方言ではこの現象が頻出すると述べられている（下地 2008: 97）。

12.2 主題助詞

波照間方言の主題助詞は=(j)a および=ba~=wa である。Lambrecht (1994) によると、ある指示対象が主題と解釈されるのは、談話内で命題がその指示対象に関する情報であり、聞き手のその指示対象に関する知識を増やす場合である⁹。=(j)a には、主にこのような主題を表す用法がある。従って、当該形式を主題助詞と呼ぶ。=ba~=wa は例が少ないため、よくわからない点が多い。=ba~=wa に関してはこれまでに見つかっている例文を 12.2.1 ですべて挙げる。

主題助詞には主題を表すよう法を含め、以下の 3 つの機能がある。

- 主題
- 対比
- 時の規定

以下では、まず形式と異形態の分布について述べ、次に各機能について述べる。

12.2.1 形式と分布

主題助詞の異形態の現れ方は、はっきりとわからない。先行する名詞句の末音が u、i あるいは i¹⁰の場合に=a で実現し、その他の環境では=ja で実現する傾向がある。=ja は、直格項、時を表す名詞句、位格助詞が現れる斜格項、および軽動詞構文 (9 章) の主動詞 (V1) に付加しうる。一方、=ba についてはそもそも例が少ないため、異形態の現れ方がよくわからない。ただし、直格項の内、P 項と組み合わさって用いられる例が見つかっている。表 12.2 に、=(j)a と=ba~=wa が現れる分布を示す。斜格名詞句と組み合わさって用いられる例は、位格でのみ見つかった。

表 12.2: =ja と=ba の分布

	項			
	S/A	時 NP	斜格 位格	P
=ja	○	○	○	○
=ba				○

以下、(12-29) から (12-33) に、それぞれ S 項、A 項、時を表す名詞句、位格名詞句、P 項と主題助詞が組み合わさって用いられる例をそれぞれ挙げる。

(12-29) S 項

⁹ A referent is interpreted as the topic of a proposition if in a given discourse the proposition is construed as being about this referent, i.e. as expressing information which is relevant to and which increases the addressee's knowledge of this referent. (Lambrecht 1994: 127)

¹⁰ 先行する名詞句の末音が i の場合、末音 i は、母音の渡り音化の音韻規則 (2.5.3) によって、j と交替する。

be+sima=nu pītu=**ja** muru marah-e...
 1ST.PL.INC+ 島=GEN 人=TOP 全部 亡くなる-CVB

「波照間島の人は皆亡くなって…」

(12-30) A 項

midumu=**ja**... paku<no> utama<o> nah-j a-ta cju.
 女=TOP 蛇の 子どもを 産む-CVB 継続 1-PST HS1

「女は蛇の子どもを（そろそろと）産んでいたそうだ。」

(12-31) 時を表す名詞句

unu <zidai>=**ja** fuciri=n nen-u.
 あの 時代=TOP 薬=も ない-NPST

「あの時代は薬もない。」

(12-32) 斜格（位格）

be+sima nagj=**a**...
 1ST.PL.INC+ 島 LOC2=TOP

「波照間島では…（みんな使う）」

(12-33) P 項

zīn+kanj=**a** moog-a ci...
 銭 + 金=TOP 儲ける-CVB 付帯 2

「金銭を稼ぎながら…（食べているけど）」

(12-34) 軽動詞構文の主動詞

jum-i=**ja** s-an sika...
 読む-CVB=TOP する-NEG.NPST 逆接

「読みはしないけど…（書きはする）」

=ba～=wa に関しては、そもそも用例自体が少なく、機能が分かっていないため、これまでの調査で見つかっている 10 個の例文を挙げるにとどめる。異形態=wa は、日本語の主題助詞「は」と音が似ているため借用かどうかの判断も付きにくい。しかし、=wa が現れる例文は、80 代以上の話者からのみ得られたため、日本語の「は」として即座には判断しかねる。70 代の話者は=ba のみ用いる。以下の例文中、(12-35a, e) のみが 70 代の話者から得られたものであり、その他の例文は 80 から 90 代の話者から得られたものである。すべて P 項に主題助詞が後続する例である。

(12-35) =ba の例

- a. gokka kee=**ba** dag-j a-n.
ニワトリ 卵=TOP 抱く-CVB 継続 1-NPST-IND1
「ニワトリが卵を抱いてるよ。」
- b. ini, an, mun=**ba** sikor-i, he bir-j a-tar-oo.
稲 粟 麦=TOP 作る-CVB 食べる.CVB 継続 2-CVB 継続 1-PST-IND2
「(昔は) 稲、粟、麦を作って食べていたよ。」
- c. nasama=nu sunu=**ba**=ru sis-i sita=ru joo...
人名=GEN 着物=TOP=FOC 着る-CVB 継起=FOC DSC2
「ナサマの着物を着てね…」
- d. uri=**ba** muc-i ng-j a-tar-oo.
あれ=TOP 持つ.CVB 乖離-CVB 継続 1-PST-IND2
「それを持って行ったよ。」
- e. <sangacu sannici>=na masamun=**ba** sikor-i...
3 月 3 日=LOC1 ごちそう=TOP 作る-CVB
「3 月 3 日に、ごちそうを作って…」
- f. kanzumi=**ba** bee muc-i or-i tabor-i hir-oo.
缶詰=TOP 少し 持つ-CVB 接近-CVB 依頼-CVB 受益-NPST-IND2
「缶詰を少し持ってきてくださいな。」

(12-36) =wa の例

- a. uri=**wa** e ci ho-tar-oo.
あれ=TOP そう 付帯 2 食べる-PST-IND2
「あれはそうしながら食べたね。」
- b. jafugee=**wa**=ru muc-i ng-j a-tar-oo.
入れ物=TOP=FOC 持つ.CVB 乖離-CVB 継続 1-PST-IND2
「入れ物を持って行ったよ。」
- c. e=nu kutu=**wa**... bupitu nar-u=cjara...
そう=GEN こと=TOP 大人 なる-NPST=条件 3
「そのようなことは大人になったら… (するなよ)」
- d. pite=nu maari=**wa**...
畑=GEN 腕=TOP
「畑の腕は… (そうやって作った。)」

このように=**ba**~=**wa** が P 項とのみ用いられることから、格標示機能を持っていないと言い切れないのも確かである。例えば、Shimoji (2008) では南琉球宮古語の伊良部方言に、対格の他に第二対格を認めている。第二対格の特徴に (1) 談話中の中止節にのみ用いられる (2) 非完結相で用いられる (3) P 項で示されるものは比較的不特定のものである、という 3 点を挙げた (Shimoji 2016)。例が少ないものの、

波照間方言の=ba~=wa に関しても概ね当てはまる¹¹。従って、主格助詞=nu (4.5.2) のように、歴史的に格標識(対格標識)であったものが衰退していく過程にある形式である可能性が考えられる。同じ八重山語の黒島方言でも対応する形式が上記特徴(1)に当てはまることが報告されている(原田 2015)。

=ba~=wa に関しては、周辺の八重山語諸方言を含め詳しく調査することを今後の課題とする。12.2.2以降で述べる主題助詞の機能に関しては、=(j)a のみを対象とする。

12.2.2 機能

本節では、12.2 の冒頭で述べた3つの機能についてそれぞれ述べる。

12.2.2.1 主題

主題になり得る事柄は、すでに談話内で述べられているか、話し手と聞き手で共通の認識を持つ情報である。日本語で言う「~に関しては」と訳せる。物語のテキストにおいて、焦点助詞あるいは他の方法で導入された複数の登場人物の一方について、主題助詞を用いて言及し、その後、もう一方の登場人物について、主題助詞を用いて言及する例が見つかっている。例えば、以下(12-37)に昔話の冒頭部分を挙げる。(12-37a)で焦点助詞=ndu によって aboa「母」と midumu「女」という2人の登場人物が導入される。この登場人物を角括弧で示す。その後、その登場人物を示す名詞句は主題助詞と組み合わせさせて用いられ、登場人物に関する言及がなされる。まず(12-37b)と(12-37d)で midumu「女」が言及され、その後(12-37e)で aboa「母親」について言及される。

- (12-37) a. mugasī mugasī [abo]=tu [midumu]=ndu bu-ta cju.
昔 昔 母さん=COM 女=FOC いる-PST HS1
「昔々お母さんと娘がおったとき。」
- b. [unu midumu]=ja deera abarisja ki, meeju <koodansino> bidumu=ndu
あの 女=TOP とても きれい.NPST 理由 2 毎晩 好男子の 男=FOC
ku-ta cju.
来る-PST HS1
「この娘はたいそう美しかったので、毎晩好男子の男がやってきたとき。」
- c. e sika nd-a ng-u fuci=n bagar-an-u.
そう 逆接 出る-CVB 乖離-NPST 口=も 分かる-NEG-NPST
「だけれど、住んでいるところも分からない。」
- d. e su kami=ja [midumu]=ja parum-i=sa nen-ta cju.
そう する.NPST 間=TOP 女=TOP 孕む-CVB=? 完了-PST HS1
「そうしているうちに、娘は孕んでしまったとき。」
- e. e su-tar-a [abo]=ja udurug-i, munu sis-j ar-u pītu-nta=ga
そう する-PST-条件 1 母さん=TOP 驚く-CVB もの 知る-CVB 継続 1-NPST 人-所=DAT1

¹¹ (12-353) や (12-36b) は、焦点助詞とも共起している。主題標識であれば、焦点標識と共起するとは考えにくい。

sondan si ng-j a-ta cju.

相談 する.CVB 行く-CVB 継続 1-PST HS1

「そうしたらお母さんは驚いて、物知りの人のうちに相談しに行ったとき。」

物語の他、主題助詞が付加した名詞句に談話標識 joo 「～ね・～よ」が後置された形で、主題用法として用いられることが多い。

(12-38) a. amasikuru=ja joo...

頭=TOP DSC2

「頭はね、(年取ったらあまり痛まない)」

b. kunu panasī=ja joo...

この 話=TOP DSC2

「この話はね、(こういう話だよ)」

c. mugasī=a joo...

昔=TOP DSC2

「昔はね、(こんなだったよ)」

12.2.2.2 対比

主題助詞には、いくつかある情報を、順番に提示し対比する機能がある。情報になり得る事柄は、すでに談話内で述べられているか、話し手と聞き手で共通の認識を持つ情報である。焦点助詞(12.1)の対比機能と異なる点は、前者が聞き手の想定を覆すものであり、後者は聞き手の想定を基本的に持たない点である。例文(12-39)は、伝統的なお菓子の作り方について話しているテキストの冒頭部分である。例文冒頭の arīsimuci 「アルスムチ(米菓子)」は主題助詞と組み合わせられて用いられるが、これは対比ではなく主題の機能と考える。主題を共有したうえで、次に、主題助詞を付加しない形で musume 「お米」、sakume 「もち米」を導入し、その後名詞句に主題助詞を付加し、それぞれの情報について順に述べる。

(12-39) arīsimuci=ja joo, musume=tu sakume=tu, [sakume]=ja busahar-i, [musime]=ja

アルスムチ=TOP DSC2 お米=COM もち米=COM お米=TOP 大きい-CVB もち米=TOP

isjaga mizī naga sīk-a sita,...

少し 水 LOC3 漬ける-CVB 継起

「アルスムチはね、お米ともち米と、お米は多くして、もち米は少し(それを)水につけて…」

(12-40) も同様に、2つの情報を対比させている。情報は、「若者」と「年寄り」という対義する名詞句である¹²。

(12-40) be+sīma <ippan>, [bagaha munu]=a en-an sika, [usitu]=ja maa muru

1ST.PL.INC+ 島 一般 若い.NPST 者=TOP 言う-NEG.NPST 逆接 年寄り=TOP まあ 皆

¹² bagaha munu 「若者」、usitu 「年寄り」という語は談話中で初めて現れた語であるが、新情報ではなく、話し手と聞き手で共通の認識を持つ情報と考える。

ba=ga <zirikka> paa=ta en-i ci tur-i dar-u juu,
 1st.SG=DAT1 ジリッカ おばあさん=引用 1 言う-CVB 付帯 2 通る-CVB 継続 1-NSPT DSC3
 sisaree.
 INTJ

「波照間では一般的に、若い人は言わないけれど、年寄りみんな私に「ジリッカパー」と呼んで（あだ名が）通っているんだよ、はい。」

主題助詞の対比用法が、焦点助詞の対比用法と共に用いられる例が見つかっている。(12-17)に挙げた例を以下(12-41)に再掲する。焦点助詞の対比用法と共に用いられる場合には、共通して認識を持つ情報を主題助詞で提示し、聞き手の想定を覆す情報を焦点助詞で提示する。例えば、(12-41)では、行事の際に食べるアルスムチ（米菓子）が話題である。現在も、このアルスムチを波照間島で食べることは聞き手も認識している。従って(12-41a)の moo=gi（こちら=Loc2）「ここで」は主題助詞と組み合わせられて用いられる。しかし聞き手の想定に反し、作るのは波照間島ではなく、石垣島である。従って(12-41a)述語には否定接辞が現れ、(12-41b)の tapi=gara（旅=ABL）「旅から」は焦点助詞と組み合わせられて用いられると解釈する。

- (12-41) a. mana ho-n sika [mo=gi]=ja sikur-an-u.
 今 食べる.NPST-IND1 逆接 ここ=LOC2=TOP 作る-NEG-NPST
 「今でも食べるけど、ここ（波照間）では作らない。」
- b. [tapi=gara]=ndu kee ki ho-n.
 旅=ABL=FOC 買う.CVB 接近.CVB 食べる.NPST-IND1
 「旅（石垣島）から買ってきて食べるよ。」

12.2.2.3 時の規定

時を表す名詞句と主題助詞が組み合わせられて用いられ、事象が起こる時を規定することがある。これを時の規定用法と呼ぶ。

以下に挙げる(12-42)の例文には、名詞句と主題助詞の組み合わせが2つ現れる。このような場合、先行する組み合わせが時を表す名詞句である場合が多い。時を表す名詞句を角括弧で示す。2つ目に現れる主題助詞は主題用法の例である。

- (12-42) e ki=ndu... [<sangacu sannici>]=ja midumu-nda=ja ina=ci ur-a, sii+pan
 そう 理由 2=FOC 3月 3日=TOP 女-PL=TOP 海=ALL 降りる-CVB 手+足
 arah-e, pii<no> ui=gara bunc-uta cju.
 洗う-CVB 岩場の 上=ABL 渡る-PST HS1
 「そうだから、3月3日には女の子たちは海に降りて手足を洗い岩場の上を渡ったとき。」

名詞句と主題助詞の組み合わせが1文に3つ現れることもある。以下に挙げる(12-43)には(1) acca=n sitomuci「翌日の朝」(2) abo「母親」(3) kunu <ito> tador-i ng-u kami「この糸をたどっていく間」がそれぞれ主題助詞と用いられている。(1)および(3)が時の既定用法の例であり、(2)は主題用法の例である。(3)の名詞句主要部は形式名詞である(8.5)。

- (12-43) *acca=n sitomuci=ja abo=ja kunu <ito> tador-i ng-u kami=ja...*
 明日=GEN 朝=TOP 母さん=TOP この 糸 辿る-CVB 乖離-NPST 間=TOP
 「翌日、お母さんはこの糸をたどって行ってみると…」

12.3 累加助詞と排他助詞

12.3.1 累加助詞

累加助詞は=(ju)n である。主に=n が実現する。=jun は、柴田 (1972) のテキストからのみ見つかっている形式であるため、例が少なく、わからない点が多い。累加助詞には、次の機能がある。

- 累加
- 非生起
- 逆条件

以下では、まず異形態の分布について述べ、次に各機能について述べる。

12.3.1.1 形式と分布

累加助詞は、基本的に=n で実現する。累加助詞は、名詞句、副詞節、および補助動詞構文 (9 章) の主動詞 (V1) と、それぞれ組み合わせさせて用いられる。(12-44) に名詞句の例を、(12-45) に副詞節の例を、(12-46) に複数の動詞から成る動詞句の例をそれぞれ挙げる。

- (12-44) *reiko=n joo, daa=n...*
 人名=も DSC2 2ND.SG=も
 「玲子もね、あんたも… (年を取れば、頭痛はよくなる)」
- (12-45) [*<zikan> kuu bagi]=n mac-i bir-j a-tar-oo.*
 時間 来る.NPST 限界=も 待つ-CVB 継続 2-CVB 継続 1-PST-IND2
 「時間が来るまでも待っていたよ。」
- (12-46) *sima=ga kaer-i=n k-un-u jon gara...*
 島=DAT1 帰る-CVB=も 接近-NEG-NPST ? 理由 1
 「島に帰っても来ないから…」

累加助詞の異形態のうち=jun¹³ は、先に述べた通り、柴田 (1972) のテキストからのみ見つかっている形式であり、筆者が調査を始めた 2007 年以降のテキストからは見つかっていない。例が少なく詳しいことはわからないが、当時は CV から成る音節が先行する場合に=n が、それ以外の場合に=jun が用いら

¹³ =jun が=n の異形態であるという分析は、八重山語黒島方言を研究している原田走一郎氏が、研究会で受けた指摘である。筆者はその場にいなかったが、後日、原田氏より教えてもらった。中川他 (2016: 40) によると、現在の八重山語白保方言では、n および jun のどちらの形式も観察される。白保方言の場合は jun のうち ju を対格助詞、n を累加助詞と分析しているが、その機能については不明な点が多いようだ。

れていた可能性がある。例えば、(12-47) では soomin 「そうめん」に、(12-48) では<undoo>kwai 「運動会」に=jun が実現する。

- (12-47) oo, kanzume=n ari, soomin=**jun** ki...
 INTJ 缶詰=も ある.CVB そうめん=も 来る.CVB
 「はい、缶詰もあるし、そうめんもきてるし… (なんでもあります)」

- (12-48) oo, isasima=ja <undoo>kwai=**jun** sikaitu mussahar-i...
 INTJ 石垣島=TOP 運動会=も とても 面白い-CVB
 「はい、石垣島は運動会も大変面白くて…」

この他、<zikan> 「時間」、<udon> 「うどん」に後続する場合に=jun が実現する例が見つまっている。ただし、語幹末音が CV の場合でも 1 例だけ見つまっている¹⁴。

- (12-49) mata sabani=**jun** jamasika <gorokusoo> bara...
 また 小舟=も 沢山 五六艘 くらい
 「小さい船も、沢山、5、6 艘くらい、(流れて行ってしまった)」

現在では、=jun は用いられない¹⁵。語幹末音が n であっても、=n が用いられる。(12-50) のような例では、n が長子音化する。

- (12-50) <dokutamo>, isjan=**n** oo gara joo,
 ドクターも 医者=も いらっしゃる.NPST 理由 1 DSC2
 「ドクターも、医者もいらっしゃるからよ、…」

12.3.1.2 機能

■累加

同じ、あるいは似たような事象を示す節が複数連続し、全ての節の項、あるいは一部の節の項が累加助詞と用いられることがある。このような場合、各節に示される事象に対して、項に示される対象もまた同様に参与者であることを(節を超えて)示す。これを累加用法と呼ぶ。(12-51) から (12-53) に同じ述語動詞を用いる節が連続する例、(12-54) にいずれも飲食するという意味を持つ述語動詞を用いる節が連続する例を挙げる。例えば (12-51) は、結婚式に出席した人が話題となっている場面での発話である。bujaa 「おじいさん」と paa 「おばあさん」という名詞句が累加助詞と組み合わせあって用いられ、どちらも結婚式の参与者であることを示している。名詞句と累加助詞の組み合わせのみが連続する例は、見つかっていない。名詞句ごとに述語が現れ、節の形式を取る。同じあるいは似たような事象を示す節を角括弧で示す。

¹⁴ このことから、1 音節が 2 モーラから成る重音節に後続する場合には必ず=jun が現れ、1 音節が 1 モーラから成る軽音節に後続する場合には=n も=jun も現れうるとし、その理由を、1 音節が 3 モーラから成る超重音節を避けるためであると分析できる可能性がある。例えば、/kwai=jun/ は 2 音節から成り (kwai.jun)、それぞれの音節は 2 モーラである (kwa.i.ju.n)。一方、/kwai=n/ の場合は 1 音節 (kwain) 3 モーラである (kwa.i.n)。いずれにせよ、このように言い切るには例が足りない。

¹⁵ ただし、面接調査で isjan=jun (医者も) / sinsin=jun (先生も) と言えるか聞いたところ、本形式を繰り返したうえで、言えるという回答は得ている。

- (12-51) [da+hi=nu buja=n or-i], [pa=n or-i]...
 2ND.SG+ 家=GEN おじいさん=も いらっしやる-CVB おばあさん=も いらっしやる-CVB
 「(結婚式には) あなたの家のおじいさんもいらっしやって、おばあさんもいらっしやって…」
- (12-52) [baa ng-u-n] sika, [daa]=n ng-u naa?
 1ST.SG 行く-NPST-IND 逆接 2ND.SG 行く-NPST Q
 「私は行くけど、あなたも行くのか？」
- (12-53) [ba+hi=na=n a-ba], [agata=na=n a-ba]...
 私 + 家=LOC1=も ある-条件 2 屋号=LOC1=も ある-条件 2
 「私の家にもあれば、東田にもあれば… (どこにでもある)」
- (12-54) [saki=n num-i], [masamunu=n hee]...
 酒=も 飲む-CVB ご馳走=も 食べる.CVB
 「酒も飲んで、ご馳走も食べて…」

項だけではなく、事象そのものを累加しうる。条件助詞 3 に導かれる副詞節が累加助詞と組み合わさって用いられる場合、主節に示される事象が生じる条件を累加していると分析できる。(12-55) に例を挙げる。箒を使うのはいつか、という質問に対する発話である。主節に示される事象は *siko-n* (使う.NPST-IND1) 「(人は箒を) 使う」である。事象の成立条件は、*pisumari ja* (昼 COP.NPST) 「昼(である)」と *juunen ja* (夕方 COP.NPST) 「夜(である)」である。

- (12-55) [pisumari ja-ba]=n [juunen ja-ba]=n siko-n.
 昼 COP-条件 2=も 夕方 COP.NPST-条件 2=も 使う.NPST-IND1
 「(箒は) 昼でも夜でも使う。」

■皆無

不定指示代名詞 *nuu* 「何」と累積助詞が組み合わさって用いられ、述語動詞に否定接辞が現れる場合、同一節内に示される事象以外の生じるあらゆる可能性が皆無である事を示す。これを皆無用法と呼ぶ。「何も(全く)～ない」と訳せる。

例えば (12-56) に例を挙げる。*nuu=n* 「何も」と、述語動詞に否定接辞が付加する *bagar-an* (わかる-NEG.NPST) 「わからない」が現れる。この場合、*bagar-an* 「わからない」以外が生じる余地が全くないことを意味する。例えば「少しわかる」などが想定できる。

- (12-56) baa nuu=n bagar-an sika...
 1ST.SG 何=も 分かる-NEG.NPST 逆接
 「私は、何もわからないけど…」
- (12-57) baa nuu=n da+hi=gaci kun-a-ta-n.
 1ST.SG 何=も 2ND.SG+ 家=ALL 来る.NEG-?-PST-IND1
 「私は、全くあなたの家に行かなかった。」

- (12-58) e gara mana jam-u munu nuu=n wassa kutu ar-an-u.
 そう 理由 1 今 痛む-NPST もの 何=も 悪い.NPST こと COP-NEG-NPST
 「だから、今（頭が）痛むのは、何も悪いことではないよ。」

述語動詞に否定接辞が現れる代わりに、非存在を表す動詞 **nen** 「ない」が用いられる場合もある。否定接辞が現れる述語の場合と、同等の扱いを受ける。非存在を表す動詞は、累加助詞の皆無用法に多く見つかっている。この場合、存在の余地が全くないこと、すなわち 1 つもないことを表す。例えば (12-59) では nu=nu koosi te munu (何=GEN お菓子 引用 2 もの)「何のお菓子というもの」が 1 つもなかったことを意味する。(12-61) は、累加助詞が 2 つ現れる。1 つ目は皆無用法の例、2 つ目は累加用法の例である。

- (12-59) be+sima=ja unu <toozi>=ja nu=nu koosi te munu=n nen-u.
 1ST.PL+ 島=TOP あの 当時=TOP 何=GEN お菓子 引用 2 もの=も ない-NPST
 「波照間はあるの当時は何のお菓子というものも（何も）ない」

- (12-60) nu=n nen-ta-n.
 何=も ない-PST-IND1
 「何もなかった」

- (12-61) <okjakusan>=nu o=cjara nu=n [nd-asii munu te munu]=n
 お客さん=NOM いらっしゃる.NPST=条件 3 何=も 出る-使役.NPST もの 引用 2 もの=も
 nen-u.
 ない-NPST
 「お客さんがいらっしゃたら、何も、出すものというものもない。」

nuu 以外の zaa 「どこ」、taa 「誰」、nee 「どう」といった不定を表す語が、累加助詞=n と共起して非生起の用法で用いられる例は、これまでの調査では見つからない。今後、これらの例が見つかる可能性はある¹⁶。

■逆条件

副詞節述語に条件副動詞形 2 (6.3.2.3) が現れ、累加助詞と組み合わせられて用いられる場合、累加以外の意味を表すことがある¹⁷。主要部に示される事象が生じる際に、期待される条件とは逆の条件を従属節が示す。本用法を逆条件と呼ぶ (11.3.2.3)。予想に反する事象が起こる際に用いられ、「～しても」や「～にもかかわらず」と訳せる。

(12-62) は、p. 289 の (11-41) を再掲したものである。副詞節を角括弧で示す。例えば、(12-62b) の副詞節が示す条件、すなわち sikur-iba (作る-条件 2)「(作物を) 作れば」から期待される主節の事象は、通常「豊かに過ごせる」である。しかし、実際には搾取され難儀していた。このように、予想されない事象が起こる際に、累加助詞が用いられる。

¹⁶ zaa 「どこ」に累加助詞が付加していると考えられる表現に zankaman 「あちこち」がある。実際に、八重山語白保方言では、za=n kama=n (どこ=も あちら=も)「どこもかしこも」と分析される (中川奈津子氏, 2017 p.c.)。しかし、波照間方言では kama という場所を表す指示代名詞は見つからないため、分析は行わない。

¹⁷ 当該副詞節が累加助詞と組み合わせられて累加用法として用いられる例は、すでに (12-55) に挙げた。

- (12-62) a. [jamir-i=ta en-iba]=n sĭk-an-u joo.
止める-IMP=引用 1 言う-条件 2=も 聞く-NEG-NPST DSC2
「止めろと言っても聞かないよ。」
- b. [sĭkur-iba]=n [sĭkur-iba]=n...
作る-条件 2=も 作る-条件 2=も
「(作物を) 作っても作っても、(搾取され、難儀していた。)」
- c. [<tekimikata> ja-ba]=n...
敵味方 COP-条件 2=も
「敵、味方であっても、(戦争が終わったら友達になって…)」

12.3.2 排他助詞

排他助詞は、gasi~gaasi である¹⁸。母音の渡り音化の音韻規則 (2.5.3) が適用される場合に gasj~gaasj、それ以外では gasi~gaasi が実現する。

項や軽動詞構文の V1 と排他助詞が組み合わさって用いられ、指示対象や事象が、それ以外の何ものである、唯一のものであることを示す。「(ただ) ~だけ」と訳せる。ある情報を他の情報より際立たせる用法であるため、一種の焦点用法だと言える (12.1, 4.5.3.2)。

(12-63) に項と排他助詞が組み合わさって用いられる例を、(12-66) に軽動詞構文で V1 と排他助詞が組み合わさって用いられる例を挙げる。

- (12-63) futari gaasi nugar-j a-ta=ta sĭk-u-n sĭka...
2 人 だけ 逃れる-CVB 継続 1-PST=引用 1 聞く-NPST-IND1 逆接
「2 人だけ (油雨を) 逃れたと聞いたけれど…」
- (12-64) ng-i+boha gaasj ar-oo.
行く-SE+ 願望 だけ ある-NPST-IND2
「ただ行きたいだけだ (本当に行きたい。)」

排他助詞は (1) 「名詞句 排他助詞 格助詞」の組み合わせで用いられ、(2) 焦点助詞 (12.1) と共起し得る。(12-65) に「名詞句 排他助詞 格助詞」の組み合わせで用いられる例を挙げる。このような組み合わせで用いられる例は、排他助詞と同様にその他の助詞に分類される、焦点助詞、主題助詞、累加助詞には見られない。なお、「名詞句 格助詞 排他助詞」の組み合わせで用いられる例は見つかっていない¹⁹。

- (12-65) da-ima gaasi=ga h-a-tar-oo.
2ND-PL だけ=DAT1 あげる-DUR-PST-IND2
「あんたたちだけにあげたよ。」

¹⁸ アクセント実現のための同母音音素の挿入規則 (2.5.1) が適用され、gasi の他、gaasi という同母音連続の異形態も実現する。

¹⁹ 焦点助詞、主題助詞、累加助詞は、拡張名詞句 (格助詞を内包する名詞句の単位。8 章) に後続する。

排他助詞は焦点助詞と組み合わせたり **gaasi=ru** という表現で用いられることがある。(12-66) に例を挙げる。**gaasi** と共に用いられる焦点助詞は異形態=**ru** でのみ見つかっている。

- (12-66) a. <honno> pĭtu-cĭ **gasi=ru** ar-oo.

ほんの 1-CLF. 一般 だけ=FOC ある-NPST.IND2

「ほんの 1 つだけあるよ。」

- b. toonu sĭma=ci=ru <osameru> kutu **gaasi=ru** s-i...

大和の 島=ALL=FOC 納める こと だけ する-CVB

「大和の島に収めることだけをして… (働いていた)」

終章

本論文では、波照間方言の包括的な記述を行った。音韻・形態・統語の一通りの項目については網羅したと考えるが、不足している部分も散見する。最後に、残された課題と今後の展望について述べる。

残された課題

本文中でも細かく課題を指摘したが、残されている大きな課題を再度、以下に指摘する。

■音声的長母音・長子音が実現する環境

一番大きな課題として残るのが、(音声的)長母音・長子音が実現する環境の同定である(2章)。音韻規則(2.5.1)によって、音声的長母音が実現する環境を7~8割程度は同定することができたが、不明な点が多く、完全には網羅できていない。子音の音声的長短の区別は、これまでに観察された例を列挙するにとどまってしまった(2.2.7)。今後の研究では、再度、短母音と長母音の区別、あるいは単子音と長子音の区別が弁別的かどうかを確かめるために知覚的なテストの導入等を視野に入れ、解明に努めたい。

■個別の形式の分布・用法に関する課題

例が非常に少なかった形態素に、時制接辞の1つに挙げた近接過去接辞がある(6.4.3)。本形式が用いられる動詞に関して、アクセントと意味をセットで注意深く観察する必要がある。音節数が長い動詞語幹を選ぶことや、有声音が多い語幹を選択し、アクセントを明確にできるよう努めたい。他の琉球諸語と照らし合わせながら、分布を解明できそうな形式に複数接辞がある(5.4.2.1)。現在2種類の接辞の分布は傾向しか述べることができていない。今後は、指し示す対象が目上かどうか、あるいは呼びかけの文脈か否かなど、文脈に注意しながら再調査したい。

■情報構造に関連する考察の強化

12章では、2つ大きな課題がある。1つ目は、焦点助詞についてである。 $=(n)du$ と $=ru$ の分布や機能について大まかな記述は行ったが、不足している部分がある。焦点のドメインを記述したうえで、分布と機能を再考したい。2つ目はP項のみを標示する主題標識 $=ba \sim =wa$ である。本形式に関しては歴史的な変化を考慮する必要があるので、周辺方言を研究している研究者と共に、より深い記述を行いたい。

今後の展望

数十ある琉球諸語は、今後 10～20 年で消滅すると考えられている。個別言語の文法現象は詳しく記述されるべきではあるが、仮に、その間筆者が同様の研究を新たに行う場合、多くて 3 言語に取り組むのが限界ではないかを感じる。

一方で、調査を始めた時からには比べ物にならないくらい情報通信技術の発達が目覚ましい。調査を始めた時点で、諸先輩方からは録音機やメディア媒体に関して「昔とは比べ物にならない」と言われたが、私が調査を始めた時点と今を比べても、比べ物にならない。これらのことを踏まえ、今後は個別言語の文法記述を行いながらも、より、大量の言語データを取得することを優先したらどうかと考えている。データの入手は言語が消滅してからでは永遠に不可能であるからだ。今後は琉球諸語の研究仲間と現地コミュニティの方々と共同で、上記のような研究を行うことを目指したい。

謝辞

博士論文を執筆するにあたり、多くの人々のサポートを受けました。

研究に協力してくださった波照間島の皆さんには大変お世話になりました。録音に協力してくださった皆さん：東田シモさん、出地テルさん、浦仲孝子さん、浦仲浩さん、嘉良永吉さん、嘉良キヨさん、崎山チヨさん、田盛吉さん、通時幸子さん、波照間哲夫さん、鳩間末さん、前野幸助さん、前迎廣正さん、前迎スミさん、宮良英子さん、宮良フジさん、山田シゲさん、屋良部ヒデさん（以上、五十音順）、ありがとうございます。話者探しなどで現地での生活のサポートしてくださった皆さん：阿利恵真子さん、崎山文子さん、嘉良直さん、前迎広満さん（そしてご家族の皆さん）、屋良部功さん（以上、五十音順）、ありがとうございます。

特に田盛吉さんには宿泊場所も提供していただき、また日常生活でも波照間方言の指導をしていただきました。アマー、いつも本当にありがとうございます。

研究を遂行するにあたり、根気強く指導していただいた先生方、仲間たちへお礼申し上げます。特に担当教官の3人の先生、中山俊秀先生、澤田英夫先生、渡辺己先生へは感謝しても感謝しきれません。国立国語研究所の木部暢子先生、琉球大学の狩俣繁久先生におかれましては、未熟な筆者を共同研究のメンバーに入れてくださり、研究環境をサポートして下さいました。ありがとうございます。Fieldling および琉球諸語研究会の先輩、同輩、後輩からはいつも刺激を受けています。その中でも、青井隼人さん、江畑冬生さん、小川晋史さん、加藤幹治さん、呉唯さん、坂井美日さん、重野裕美さん、下地理則さん、白田理人さん、ケナン・セリックさん、辻笑子さん、中川奈津子さん、中澤光平さん、新永悠人さん、トマ・ペラールさん（以上、五十音順）には様々な段階での的確なコメントを頂きました。ありがとうございます。特に重野裕美さん、白田理人さんには中間の段階で、下地理則さんには最後に細かく見ていただき、大変心強かったです。ありがとうございました。

2019 年 12 月

麻生玲子

参考文献

- 秋永一枝 (1960) 「八重山方言一・二音節名詞のアクセントの傾向」, 『国語学』, 第 41 卷, 121–125 頁.
- 青井隼人 (2012) 「南琉球多良間中舌母音」, 『言語研究』, 第 142 卷, 77–94 頁.
- 麻生玲子 (2009) 「琉球語波照間方言の動詞と助詞の研究」, 修士論文, 東京大学.
- Aso, Reiko (2010) “Hateruma (Yaeyama Ryukyuan),” in Shimoji, Michinori and Thomas Pellard eds. *An Introduction to Ryukyuan Languages*, Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, pp. 189–227.
- 麻生玲子 (2012) 「ことばと仲間がつながる島—日本最南端の有人島・波照間島で只今奮闘中」, 『Field+』, 第 7 号, 6–7 頁.
- Aso, Reiko (2015a) “Hateruma Yaeyama grammar,” in Heinrich, Patrick, Shinsho Miyara, and Michinori Shimoji eds. *Handbook of the Ryukyuan languages –History, structure, and use*, Vol. 11 of *Handbook of Japanese Language and Linguistics*, Berlin/Boston/Munich: Mouton de Gruyter, pp. 423–447.
- 麻生玲子 (2015b) 「八重山波照間方言の文法スケッチ」, 狩俣繁久 (編) 『琉球諸語記述文法 I —消滅危機言語としての琉球諸語・八丈語の文法記述に関する基礎的研究』, 47–74 頁.
- 麻生玲子・小川晋史 (2016) 「南琉球八重山語波照間方言の三型アクセント」, 『言語研究』, 第 150 卷, 87–115 頁.
- アウエハント, コルネリウス (2004) 『波照間: 南琉球の島嶼文化における社会=宗教的諸相』, 沖縄: 榕樹書林.
- Bhat, D. N. S. (2004) *Pronouns*, Oxford Studies in Typology and Linguistic Theory, New York: Oxford University Press.
- Booij, Geert (2006) “Inflection and Derivation,” in Brown, Keith ed. *Encyclopedia of Language & Linguistics*, Vol. 5, , Amsterdam・Tokyo: Elsevier, pp. 654–661.
- Chafe, Wallace L. ed. (1980) *The pear stories: Cognitive, cultural, and linguistic aspects of narrative production*, Vol. 3 of *Advances in discourse processes*, Norwood, NJ: Ablex.
- Comrie, Bernard (1978) “Ergativity,” in Lehmann, Winfred P. ed. *Syntactic Typology*, Austin: The University of Texas Press, pp. 329–394.
- Dixon, R. M. W. (1982) *Where Have All the Adjectives Gone?:* Berlin: Mouton de Gruyter.
- Dixon, R. M. W. and Alexandra Y. Aikhenvald (2002) “Word: a typological framework,” in Dixon, R. M. W. and Alexandra Y. Aikhenvald eds. *Word: A cross-linguistic typology*, Cambridge: Cam-

- bridge University Press, pp. 1–41.
- Dixon, R. M. W. (2010) *Basic linguistic theory*, Vol. 2, New York: Oxford University Press.
- Givón, Talmy (2001) *Syntax: An Introduction (Rev. ed.)*, Vol. 1, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- 原田走一郎 (2015) 「南琉球八重山黒島方言の文法」, 博士論文, 大阪大学.
- Haspelmath, Martin and Andrea D. Sims (2010) *Understanding Morphology*, Understanding Language Series, London: Hodder Education, 2nd edition.
- 服部四郎 (1950) 「付属語と付属形式」, 『言語研究』, 第 16 卷, 1–26 頁.
- 林由華 (2013) 「南琉球宮古語池間方言の文法」, 博士論文, 京都大学.
- 早田輝洋 (1977) 「生成アクセント論」, 大野晋・柴田武 (編) 『音韻』, 第 5 卷, 岩波講座日本語, 岩波書店.
- (1999) 『音調のタイポロジー』, 大修館書店, 東京.
- Heinrich, Patrick, Shinsho Miyara, and Michinori Shimoji eds. (2015) *Handbook of the Ryukyuan languages –History, structure, and use*, Vol. 11 of Handbook of Japanese Language and Linguistics, Berlin/Boston/Munich: Mouton de Gruyter.
- 平山輝男・大島一郎・中本正智 (1967) 『琉球先島方言の総合的研究』, 明治書院, 東京.
- 平山輝男 (編) (1988) 『南琉球の方言基礎語彙』, 桜楓社, 東京.
- 平山輝男・中本正智 (1964) 『琉球与那国方言の研究』, 東京堂, 東京.
- Hombert, Jean-Marie (1978) “Consonant type, vowel quality and tone,” in Fromkin, Victoria A. ed. *Tone: A linguistic survey*, New York: Academic Press, pp. 77–111.
- Hombert, Jean-Marie, John J. Ohala, and William G. Ewan (1979) “Phonetic explanations for the development of tones,” *Language*, Vol. 55, No. 1, pp. 37–58, 3.
- 五十嵐陽介 (2016a) 「アクセント型の対応に基づいて日琉祖語を再建するための語彙リスト「日琉語類別語彙」」, 『日本語学会 2016 年度春季大会予稿集』, 233–238 頁.
- (2016b) 「日琉語類別語彙」, 2016 年 5 月 15 日版月, 電子データ.
- 五十嵐陽介・田窪行則・林由華・ペラルル, トマ・久保智之 (2012) 「琉球宮古語池間方言のアクセント体系は三型であって二型ではない」, 『音声研究』, 第 16 卷, 第 1 号, 134–148 頁.
- 石垣市教育委員会文化財課 (2014) 「八重山諸島の考古学」, 2014 年 4 月 9 日版月, <http://www.city.ishigaki.okinawa.jp/400000/410000/410400/bunkazai/yaeyamakouko/koukoindex.html>.
- 石原昌家 (1983) 『もうひとつの沖縄戦—マラリア地獄の波照間島—』, おきなわ文庫, ひるぎ社.
- 上代語辞典編修委員会 (編) (1967) 『時代別国語大辞典 上代編』, 三省堂, 東京.
- 加治工真市 (1996) 「波照間方言の音韻研究」, 『沖縄文化研究』, 法政大学沖縄文化研究所, 137–181 頁.
- (1998) 「波照間方言動詞の活用」, 『波照間島総合調査報告書—自然・歴史・民族・考古・美術工芸—』, 沖縄県立博物館, 192–219 頁.
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) (1996) 『言語学大辞典 第 6 卷 (術語編)』, 三省堂, 東京.
- かりまたしげひさ (2009) 「波照間方言と与那国方言の形容詞語尾を言語接触からみる」, 『南島文化』, 第 31 卷, 1–10 頁, 沖縄国際大学南島文化研究所紀要.
- 風間伸次郎 (1992) 「接尾型言語の動詞複合体について: 日本語を中心として」, 宮岡伯人 (編) 『北の言語: 類型と歴史』, 東京: 三省堂, 241–260 頁.

- 金田一春彦 (1974) 『国語アクセントの私的研究—原理と方法』, 塙書房, 東京.
- Kingston, John (2011) “Tonogenesis,” in van Oostendorp, Marc, Clin J. Ewen, Elizabeth Hume, and Karen Rice eds. *The blackwell companion to phonology*, Vol. 4 of Blackwell Companions to Linguistics series: Wiley-Blackwell, pp. 2304–2333.
- 久野眞 (1992) 「波照間方言の音韻」, 田島・丹波 (編) 『日本語論究 1 言語とその周辺』, 和泉書院, 55–85 頁.
- 久野マリ子 (2002) 「波照間方言のアクセント体系再考—1、2 音節名詞について—」, 『國學院雑誌』, 第 103 巻, 第 11 号, 1–17 頁.
- Lambrecht, Knud (1994) *Information structure and sentence form : topic, focus, and the mental representations of discourse referents*, Vol. 71 of Cambridge Studies in Linguistics, Cambridge: Cambridge University Press.
- Lau, Tyler (2014) “Aspectual Distinction via Pitch Accent in Yaeyama,” 8, presentation material for 14th European Association of Japanese Studies International Conference in Ljubljana, Slovenia.
- ローレンス, ウェイン (2000) 「八重山方言の区画について」, 石垣繁 (編) 『宮良當壯記念論集』, 宮良當壯生誕百年記念事業期成会, 石垣, 547–559 頁.
- Maspero, Henri (1912) 「Études sur la phonétique historique de la langue annamite: les initiales」, 『Bulletin de l'École Française d' Extrême Orient』, 第 12 巻, 1–126 頁.
- 松森晶子 (2010) 「多良間島の 3 型アクセントと「系列別語彙」」, 上野善道 (編) 『日本語研究の 12 章』, 明治書院, 東京, 490–503 頁.
- (2015) 「南琉球の方言の三型アクセント体系—その韻律単位に関する考察—」, 『日本女子大学 紀要 文学部』, 第 64 巻, 55–92 頁.
- Miller, J (2006) “Focus,” in Brown, Keith ed. *Encyclopedia of language & linguistics*: Elsevier, 2nd edition, pp. 511–518.
- 宮城信勇 (2003) 『石垣方言辞典』, 沖縄タイムス社.
- 宮良當壯 (1980) 『八重山語彙』, 第 8 巻, 宮良當壯全集, 第一書房.
- 中川奈津子・ラウ, タイラー・田窪行則 (2015) 「琉球八重山語白保方言の音韻」, 狩俣繁久 (編) 『琉球諸語 記述文法 I —消滅危機言語としての琉球諸語・八丈語の文法記述に関する基礎的研究』, 1–21 頁.
- (2016) 「八重山語彙保方言の文法概説」, 『琉球諸語 記述文法 II』, 1–60 頁.
- 名嘉真三成 (1992) 『琉球方言の古層』, 東京: 第一書店.
- 中松竹雄 (1987) 『琉球方言辞典』, 那覇出版社.
- Niinaga, Yuto (2014) “A grammar of Yuwan, a Northern Ryukyuan language,” Ph.D. dissertation, The University of Tokyo.
- 西岡敏 (2010) 「波照間方言のことわざ集—『波照間島の歴史・伝説考—仲本信幸遺稿集—』をもとにしたの音声記号化の試み—」, 『沖縄国際大学日本語日本文学研究』, 第 14 巻, 第 2 号, 1–26 頁.
- 西岡敏・小川晋史 (2011) 「竹富方言の音韻・文法概説」, 前新透 (編) 『竹富方言辞典』, 南山舎, 沖縄, 3–63 頁.
- Ogawa, Shinji and Reiko Aso (2012) “Three-pattern accent system in Hateruma Ryukyuan,” Oct. 11th, International Workshop on Corpus Linguistics and Endangered Dialects, poster session.

- National Institute for Japanese Language and Linguistics.
- 小川晋史・麻生玲子 (2015) 「波照間方言の三型アクセント」, 2015 年 10 月 4 日月, 第 29 回日本音声学全国大会 (神戸大学) ワークショップ: 三型アクセント研究の現在.
- 沖縄県教育委員会 (1975) 「波照間の方言—琉球方言緊急調査 第 2 集」, 沖縄県文化財調査報告書 3, 沖縄県教育委員会.
- 沖縄県立博物館 (1998) 「波照間島総合調査報告書—自然・歴史・民俗・考古・美術工芸—」.
- 大野眞男 (1990) 「琉球波照間方言の助数詞—その形態と意味構造—」, 『琉球の方言』, 第 14 巻.
- (1989) 「琉球波照間方言の音対応と音変化」, 『岩手大学教育学部研究年報』, 第 48 巻, 第 2 号, 1-17 頁.
- パップラルド, ジュゼッペ (2012) 「波照間方言 2 変種の音響音声学的比較」, 『音声研究』, 第 16 巻, 第 1 号, 6-15 頁.
- Payne, Thomas E. (1997) *Describing Morphosyntax—A guide for field linguists*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Pellard, Thomas (2015) “The linguistic archaeology of the Ryukyu Islands,” in Heinrich, Patrick, Shinsho Miyara, and Michinori Shimoji eds. *Handbook of the Ryukyuan languages—History, structure, and use*, Vol. 11 of Handbook of Japanese Language and Linguistics, Berlin/Boston/Munich: Mouton de Gruyter, pp. 13-37.
- 崎村弘文 (1987) 「波照間島方言のアクセント体系」, 『南海研紀要』, 第 8 巻, 第 1 号, 1-11 頁.
- 柴田武 (1972) 『全国方言資料』, 第 11 巻, 琉球編 II, 東京: 日本放送出版協会.
- 柴谷方良・影山太郎・田守育啓 (1982) 『言語の構造—理論と分析—』, 意味・統語編, くろしお出版.
- 下地理則 (2008) 「伊良部島方言の動詞屈折形態論」, 『琉球の方言』, 第 32 巻, 69-114 頁.
- (2015) 「焦点化と格標示」, 11 月 28 日~29 日月, 日本言語学会第 151 回大会 (名古屋大学) 予稿集.
- Shimoji, Michinori (2008) “A grammar of Irabu, a Southern Ryukyuan language,” Ph.D. dissertation, The Australian National University.
- (2014) 「A syntactic description of Yonaguni Ryukyuan: with a special focus on alignment and case-marking」, 『思言』, 第 10 巻, 81-106 頁.
- (2016) “Aspect and non-canonical object marking in the Irabu dialect of Ryukyuan,” in Kageyama, Taro and Wesley M. Jacobsen eds. *Transitivity and valency alternations*, Berlin/Boston/Munich: Mouton de Gruyter, Chap. 7, pp. 215-245.
- 下地理則 (2018) 『南琉球宮古語伊良部島方言』, シリーズ記述文法 1, くろしお出版, 東京.
- Shinzato, Rumiko (2015) “Okinawan kakari mucubi in historical and comparative perspectives,” in Heinrich, Patrick, Shinsho Miyara, and Michinori Shimoji eds. *Handbook of the Ryukyuan languages—History, structure, and use*, Berlin/Boston/Munich: Mouton de Gruyter, pp. 299-320.
- 白田理人 (2016) 「琉球奄美喜界島上嘉鉄方言の文法」, 博士論文, 京都大学.
- Silverstein, Michael (1976) “Hierarchy of features and ergativity,” in Dixon, R. M. W. ed. *Grammatical categories in Australian languages*, Canberra: Australian Institute of Aboriginal Studies, and New Jersey: Humanities Press, pp. 112-171.

- 杉村孝夫 (2003) 「八重山波照間方言の形態音韻論」, 『第 4 回「沖縄国際シンポジウム」』, 第 4 回「沖縄研究国際シンポジウム」実行委員会, 186–195 頁.
- 鈴木重幸 (2001) 「琉球八重山方言の動詞の研究—石垣方言の動詞のアスペクトとテンス (中間報告) —」, 平成 11 年度～平成 12 年度月, 研究成果報告書.
- Svantesson, Jan-Olof (1989) “Tonogenesis mechanisms in Northern Mon-Khmer,” *Phonetica*, No. 46, pp. 60–79.
- (2001) “Tonogenesis in Southeast Asia –Mon-Khmer and beyond,” in Kaji, Shigeaki ed. *Proceedings of the symposium cross-linguistics studies of tonal phenomena –tonogenesis, Japanese accentology, and other topics*: Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, pp. 45–58.
- 小学館 (編) (2000) 『日本国語大辞典 第二版』, 小学館, 東京.
- 角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語』, くろしお出版, 東京.
- 内間直仁 (1985) 「係り結びのかかりの弱まり—琉球方言の係り結びを中心に—」, 『沖縄文化研究』, 第 11 巻, 223–244.
- 上村幸雄 (1961) 「沖縄本島」, 遠藤嘉基 (編) 『方言学講座第 4 巻 (九州・琉球方言)』, 東京堂, 東京.
- 上野善道 (1977) 「日本語のアクセント」, 大野晋・柴田武 (編) 『音韻』, 第 5 巻, 岩波講座日本語, 岩波書店, 東京, 281–321 頁.
- (1996) 「奄美大島佐仁方言のアクセント調査報告—名詞の部—」, 『琉球の方言』, 第 20 巻, 26–57 頁.
- (2000) 「奄美方言アクセントの諸相」, 『音声研究』, 第 4 巻, 第 1 号, 42–54 頁.
- (2006) 「日本語アクセントの再建」, 『言語研究』, 第 130 巻, 1–42 頁.
- (2012) 「N 型アクセントとは何か」, 『音声研究』, 第 16 巻, 第 1 号, 44–62 頁.
- Yamada, Masahiro, Thomas Pellard, and Michinori Shimoji (2015) “Dunan grammar (Yonaguni Ryukyuan),” in Heinrich, Patrick, Shinsho Miyara, and Michinori Shimoji eds. *Handbook of the Ryukyuan languages –History, structure, and use*, Vol. 11 of Handbook of Japanese Language and Linguistics, Berlin/Boston/Munich: Mouton de Gruyter, pp. 449–478.
- 山本俊英 (1955) 「形容詞ク活用・シク活用の意味上の相違について」, 『国語学』, 第 23 巻, 71–75 頁.
- Zwicky, Arnold M. and Geoffrey K. Pullum (1983) “Cliticization vs. Inflection: English N'T,” *Language*, Vol. 59, No. 3, pp. 502–513.

付録 A

不規則動詞の活用表

以下に 6.2 の表 6.3 で不規則動詞に分類した動詞のうち、k「来る」、s「する」、en「言う」、mu「思う」、h「食べる」、mi(r)「見る」、o(r)「いらっしゃる」、a「ある」、ja（コピュラ）の確信形 1、確信形 2、命令形、禁止形、意思形、時制形、条件副動詞形 1、条件副動詞形 2、付帯副動詞形、中止形の形式を挙げる。非過去の時制形に否定接辞を付加した形式も含める。ハイフン（-）はこれまでに確認できなかったことを意味する。

なお、表 6.3 に挙げた不規則動詞のうち、上記以外の動詞について、nu「縫う」は mu「思う」に、k「買う」、sik~sik「使う」は h「食べる」に、bu(r)「いる」は o(r)「いらっしゃる」にそれぞれ準ずる。

表 A.1: 不規則動詞 k「来る」

	ムード	時制	形式	意味
k「来る」	確信法 1	非過去	kun koosin	「来る」
		過去	kutan	「来た」
	確信法 2	非過去	koo	「来る」
		過去	kutaroo	「来た」
	命令法		kuu~kuba	「来い」
	意志法		kohee~kaa	「来よう」
	禁止法		kuna	「来るな」
	非過去時制形		kuu~ku	「来る」
	非過去否定時制形		kunu	「来ない」
	過去時制形		kuta	「来た」
	条件副動詞形 1		kutara	「来たら」
	条件副動詞形 2		kiba	「来れば」
	付帯副動詞形		-	
	中止形		kii~ki~kj	「来て」

表 A.2: 不規則動詞 s 「する」

	ムード	時制	形式	意味
s 「する」	確信法 1	非過去	sun	「する」
		過去	sutan	「した」
	確信法 2	非過去	soo	「来る」
		過去	sutaroo	「来た」
	命令法		sii~siba	「しろ」
	意志法		saa	「しよう」
	禁止法		sunā	「するな」
	非過去時制形		suu~su	「する」
	非過去否定時制形		sanu	「しない」
	過去時制形		suta	「した」
	条件副動詞形 1		sutara	「したら」
	条件副動詞形 2		siba	「すれば」
	付帯副動詞形		-	
	中止形		sii~si~sj	「して」

表 A.3: 不規則動詞 en 「言う」

	ムード	時制	形式	意味
en 「来る」	確信法 1	非過去	-	
		過去	entan	「言った」
	確信法 2	非過去	enoo	「言う」
		過去	entaroo	「言った」
	命令法		eniba	「言え」
	意志法		ena	「言おう」
	禁止法		enna	「言うな」
	非過去時制形		enu	「言う」
	非過去否定時制形		enanu	「言わない」
	過去時制形		enta	「言った」
	条件副動詞形 1		entara	「言ったら」
	条件副動詞形 2		eniba	「言えば」
	付帯副動詞形		-	
	中止形		eni~enj	「言って」

表 A.4: 不規則動詞 mu「思う」

	ムード	時制	形式	意味
mu「思う」	確信法 1	非過去	mun	「思う」
		過去	mutan	「思った」
	確信法 2	非過去	moo	「思う」
		過去	mutaroo	「思った」
	命令法		-	
	意志法		-	
	禁止法		-	
	非過去時制形		muu～mu	「思う」
	非過去否定時制形		moanu～ muanu	「思わない」
	過去時制形		muta	「思った」
	条件副動詞形 1		mutara	「思ったら」
	条件副動詞形 2		muiba	「思えば」
	付帯副動詞形		-	
	中止形		mui	「思って」

表 A.5: 不規則動詞 h「食べる」

	ムード	時制	形式	意味
h「食べる」	確信法 1	非過去	hon	「食べる」
		過去	hootan～ hotan	「食べた」
	確信法 2	非過去	hoo～ho	「食べる」
		過去	hotaroo	「食べた」
	命令法		hee～heba	「食べろ」
	意志法		haa	「食べよう」
	禁止法		hanna～ honna	「食べるな」
	非過去時制形		hoo～ho	「食べる」
	非過去否定時制形		haanu～hanu	「食べない」
	過去時制形		hota	「食べた」
	条件副動詞形 1		hotara	「食べたら」
	条件副動詞形 2		heba	「食べれば」
	付帯副動詞形		hencana	「食べながら」
	中止形		he(e)～hj	「食べて」

表 A.6: 不規則動詞 mi(r)「見る」

	ムード	時制	形式	意味
mi(r)「見る」	確信法 1	非過去	mirun	「見る」
		過去	mitan	「見た」
	確信法 2	非過去	-	
		過去	mitaroo	「見た」
	命令法		miri～miriba	「見ろ」
	意志法		mira	「見よう」
	禁止法		miruna	「見るな」
	非過去時制形		mii～miru	「見る」
	非過去否定時制形		miranu	「見ない」
	過去時制形		mita	「見た」
	条件副動詞形 1		mirutara	「見たら」
	条件副動詞形 2		miriba	「見れば」
	付帯副動詞形		mirincana	「見ながら」
	中止形		miri～mirj	「見て」

表 A.7: 不規則動詞 o(r)「いらっしやる」

	ムード	時制	形式	意味
o(r) 「いらっしやる」	確信法 1	非過去	on～orun	「いらっしやる」
		過去	otan	「いらっしやった」
	確信法 2	非過去	oroo	「いらっしやる」
		過去	otaroo	「いらっしやった」
	命令法		ori～oriba	「いらっしやってください」
	意志法		oraa～ora	「いらっしやいましょう」
	禁止法		oruna	「いらっしやらないでください」
	非過去時制形		oo～o～oru	「いらっしやる」
	非過去否定時制形		oranu	「いらっしやらない」
	過去時制形		ota	「いらっしやった」
	条件副動詞形 1		otara	「いらっしやったら」
	条件副動詞形 2		oriba	「いらっしやれば」
	付帯副動詞形		-	
	中止形		ori～orj	「いらっしやって」

表 A.8: 不規則動詞 hi(r) 「あげる」

	ムード	時制	形式	意味
mi(r) 「見る」	確信法 1	非過去	hirun	「あげる」
		過去	hitan	「あげた」
	確信法 2	非過去	hiroo	「あげる」
		過去	-	
	命令法		hiri~hiriba	「あげろ」
	意志法		haa	「あげよう」
	禁止法		hiruna	「あげるな」
	非過去時制形		hii~hiru	「あげる」
	非過去否定時制形		hunu~hanu	「あげない」
	過去時制形		hita	「あげた」
	条件副動詞形 1		-	
	条件副動詞形 2		hiriba	「あげれば」
	付帯副動詞形		-	
	中止形		hiri~hirj	「あげて」

表 A.9: 不規則動詞 a(r) 「ある」

	ムード	時制	形式	意味
a(r) 「ある」	確信法 1	非過去	an	「ある」
		過去	atan	「あった」
	確信法 2	非過去	aroo	「ある」
		過去	ataroo	「あった」
	命令法		-	
	意志法		-	
	禁止法		-	
	非過去時制形		aa~a~aru	「ある」
	非過去否定時制形		-	
	過去時制形		ata	「あった」
	条件副動詞形 1		atara	「あったら」
	条件副動詞形 2		ariba	「あれば」
	付帯副動詞形		-	
	中止形		ari~ai	「あって」

表 A.10: 不規則動詞 ja (コピュラ)

	ムード	時制	形式	意味
ja(r) (コピュラ)	確信法 1	非過去		
		過去	jatan	「～だった」
	確信法 2	非過去	-	
		過去	jataroo	「～だった」
	命令法		-	
	意志法		-	
	禁止法		-	
	非過去時制形		jaa～ja	「～である」
	非過去否定時制形		aranu～ jaranu	「～ではない」
	過去時制形		jata	「～だった」
	条件副動詞形 1		jatara	「～だったら」
	条件副動詞形 2		jariba	「～なら」
	付帯副動詞形		-	
	中止形		jari～jarj	「～で」

付録 B

テキスト

付録として、4.5.3 で実際に使用した 2 編のテキストを載せる。

1 つ目は 2 人の波照間方言話者による自由会話「診療所での笑い話」である。本テキストは麻生 (2009) に収められているテキストを分析しなおしたものである。

2 つ目は独話による昔話「ナビハキタ (鍋搔き田)」である。聞き手は筆者である。

B.1 自由会話「診療所での笑い話」

(B1-1) Y: kjuu joo

今日 DSC2

「今日よ」

(B1-2) Y: daa te kjuu <simuzure>=ci or-an-ta naa?

2ND.SG 引用 2 今日 すむずれ=ALL いらっしゃる-NEG-PST Q

「あなたは今日すむずれにいらっしゃらなかったか？」

(B1-3) H: acca.

明日

「明日。」

(B1-4) Y: acca.

明日

「明日か」

(B1-5) Y: kjuu <simuzureno> pïtu=a joo,

今日 すむずれの 人=TOP DSC2

「今日すむずれの人はよ、」

(B1-6) Y: <socugjoo... sjoogakkoono socugjoosiki> jari ki joo,

卒業 小学校の 卒業式 COP.CVB 理由 2 DSC2

「卒業、小学校の卒業式でよ、」

- (B1-7) Y: goobi o-ta-n.
 沢山 いらっしゃる-PST-IND1
 「沢山いらっしゃった。」
- (B1-8) Y: baa mata sitomuci joo,
 1st.SG また 朝 DSC2
 「私はまた朝よ、」
- (B1-9) Y: sitomuci, joo
 朝 DSC2
 「朝よ、」
- (B1-10) Y: <sinrjoosjo>=ga ng-u-n=ta eg-iba unsiku <kotekitai>=ndu
 診療所=DAT1 行く-NPST-IND1=引用 1 する-条件 2 たいそう 鼓笛隊=FOC
 unsiku nar-u te joo raa.
 たいそう 鳴る-NPST 引用 2 DSC2 DSC1
 「診療所に行こうとしたらたいそう鼓笛隊がたいそう鳴っていたんだよね。」
- (B1-11) Y: ai <tote socugjoosiki> kajaa=ta mu-i,
 INTJ? 卒業式 自問=引用 1 思う-CVB
 「あれ、と卒業式かなと思って、」
- (B1-12) Y: <sjoogakkoono> mee=na ng-utar-a,
 小学校の 前=LOC1 行く-PST-条件 1
 「小学校の前に行ったら、」
- (B1-13) Y: <socugjoosiki>=ta hak-ar-a munu a-tar-a,
 卒業式=引用 1 書く-受身-DUR.NPST もの ある-PST-条件 1
 「卒業式と書かれたものがあったから、」
- (B1-14) Y: ee kjuu <socugjoosiki> raa.
 そう 今日 卒業式 DSC1
 「あ、今日卒業式だね。」
- (B1-15) Y: e sika te
 そう 逆接 引用 2
 「けど」
- (B1-16) Y: <kuzi> bara ja-tar-a,
 九時 くらい COP-PST-条件 1
 「九時ぐらいだったから」

- (B1-17) Y: e sika te nu=n <kuruma>=n nen-u <fukei> te munu <mada>
 そう 逆接 引用 2 何=も 車=も ない-NPST 父兄 引用 2 もの まだ
 or-an kajaa=ta mu-i ci,
 いらっしゃる-NEG.NPST 自問=引用 1 思う-CVB 付帯 2
 「だけど何にも車もない、父兄というものもまだいられないかなと思いながら、」
- (B1-18) Y: <a zja sinrjoosjo>=ga ng-u me=na bebi <nozoitekaraikusaa>=ta mi-ri
 あ じゃあ 診療所=DAT1 行-NPST く 前=LOC1 少し 覗いてから行くさ=引用 1 見る-CVB
 sita ng-u-n=ta... mu-tar-a joo,
 継起 行く-NPST-IND1=引用 1 思う-PST-条件 1 DSC2
 「あ、じゃあ診療所に行く前に少し覗いてから行こうと、見ていこうと思ったらよ、」
- (B1-19) Y: <rensjuuno> s-i bir-j a-tar-oo, <kotekitaino>.
 練習の? する-CVB 継続 2-CVB 継続 1-PST-IND2 鼓笛隊の
 「練習をしていたよ、鼓笛隊の。」
- (B1-20) Y: e s-j a <koocjoo sinsin>=du joo kjuu <zjuuzi>=gara ja
 そう する-CVB 継続 1.NPST 校長 先生=FOC DSC2 今日 十時=ABL COP.NPST
 gara jaccin or-i joo or-i joo <to obasan>
 理由 1 必ず いらっしゃる-IMP DSC2 いらっしゃる-IMP DSC2 と おばさん
 or-i joo or-i joo te en-tar-a joo,
 いらっしゃる-IMP DSC2 いらっしゃる-IMP DSC2 引用 2 言う-PST-条件 1 DSC2
 「そしたら校長先生がよ、今日十時からだから必ずいらしてよ、いらしてよと、おばさんいらしてよいらしてよと言ったからよ、」
- (B1-21) H: <e cjuuga, sjoogakkoo>...
 え 中学 小学校
 「え、中学、小学校…?」
- (B1-22) Y: <sjoogakkoo>.
 小学校
 「小学校。」
- (B1-23) Y: e s-j a nan, <zjuuzi>=gara te en-tar-a, ee, ee naa
 そう する-CVB 継続 1.NPST ? 十時=ABL 引用 2 言う-PST-条件 1 そう そう Q
 te
 引用 2
 「そしたら何だ、十時からと言ったら、(私は) そうか、と (言って)」
- (B1-24) Y: <dokutamo> isjan=n oo gara joo <daizjobujo>,
 ドクターも 医者=も いらっしゃる.NPST 理由 1 DSC2 大丈夫よ

「ドクターも、医者もいらっしゃるからよ、大丈夫よ、」

- (B1-25) Y: isjan kuu gara misja-n <daizjobu> te enta gara <ha
 医者 来る.NPST 理由 1 よい.NPST-IND1 大丈夫 引用 2 言う.PST 理由 1 はあ
 zja>=ta mu-ta sika,
 じゃあ=引用 1 思う-PST 逆接

「医者が来るからいいよ、大丈夫と言ったから、はあ、じゃあと思ったけど、」

- (B1-26) Y: kjuu=ja <gecujoobi> doa.
 今日=TOP 月曜日 DIR.EV5

「今日は月曜日でしょ。」

- (B1-27) Y: <doo nici gecu de sanrenkjuu> jar-i ki, kjuu goobi <kanzja>=ndu
 土 日 月 で 三連休 COP-CVB 理由 2 今日 沢山 患者=FOC
 o-ta te joo.
 いらっしゃる-PST 引用 2 DSC2

「土、日、月で三連休だから今日沢山患者がいらっしゃったんだよ。」

- (B1-28) Y: e sika isjan joo maa haa joo maa,
 そう 逆接 医者 DSC2 INTJ REFL DSC2 INTJ

「だけど医者よ、まあ自分はよ、まあ、」

- (B1-29) Y: sunu=n <suucu>=n joo <junbi> s-i kj a-n sika <mo zibun
 着物=も スーツ=も DSC2 準備 する-CVB 来る.CVB 継続 1.NPST-IND1 逆接 もう 自分
 moo ikenaihazu>=ta
 もう 行けないはず=引用 1

「着物も、スーツも準備してきたけど、もう自分はもう行けないはずと、」

- (B1-30) Y: en-ta te joo e sika ban=n maa kissa <zjuuicizi> nar-i=sa
 言う-PST 引用 2 DSC2 そう 逆接 1st.SG=も INTJ とくに 十一時 なる-CVB=?
 nen doo.
 完了.NPST DIR.EV5

「言ったんだよ。だけど私もまあ、とうに十一時になってしまったんだよ (=結局卒業式には行けなかった)。」

- (B1-31) Y: e sita=ru kjuu naa maa goobi maa <kanzjasan> o-ta te joo.
 そう 継続=FOC 今日 そこ INTJ 沢山 INTJ 患者さん いらっしゃる-PST 引用 2 DSC2

「そしたら今日、そこ（診療所）にまあ沢山まあ患者さんがいらっしゃったよ。」

- (B1-32) Y: kaccjee=nu nakasja=ndu
 屋号=GEN 次男坊=FOC

「勝連の次男坊が」

- (B1-33) Y: kjuu or-j a-ta te joo raa.
 今日 いらっしゃる-CVB 継続 1-PST 引用 2 DSC2 DSC1
 「今日いらっしゃってたんだよね。」
- (B1-34) Y: haa=ja joo kjuu fuciri kunu fuciri num-an=cja joo ha<o> joo
 REFL=TOP DSC2 今日 薬 この 薬 飲む-NEG.NPST=条件 3 DSC2 REFL. を DSC2
 sîn-asî-n=ta.
 死ぬ-使役.NPST-IND1=引用 1
 「自分はよ、今日薬、この薬飲まなければよ自分をよ、死なす、と。」
- (B1-35) H: goha-n.
 怖い.NPST-IND1
 「怖い。」
- (B1-36) Y: funtu unu buja joo du=ndu sinsin saa.
 本当 あの おじいさん DSC2 自分=FOC 先生 推量 2
 「本当あのおじいさんはよ、自分が先生（偉い人）でしょ。」
- (B1-37) H: e ki=ru joo unu sinsin nagi tumar-u se joo, <anmari jobunna> panasî
 そう 理由 2=FOC DSC2 あの 先生 LOC2 泊まる.NPST 際 DSC2 余り 余分な 話
 suu gara joo, maa tumar-i+boh-en-u=ta joo en-i o-ta cju.
 する.NPST 理由 1 DSC2 INTJ 泊まる-SE+ 願望-NEG-NPST=引用 1 DSC2 言う-CVB 丁寧-PST HS1
 「だからよ、あの先生のところに泊まる時にはよ、余りにも余分な話をするからよ、まあ泊まり
 たくないと言っただけだ。」
- (B1-38) Y: jaa <rjuusjee>=ndu joo ng-i joo daa+panasî <oobana> panasî ja
 INTJ 人名=FOC DSC2 行く-CVB DSC2 2ND.SG+ 話 オーバーな 話 COP.NPST
 gara jamir-i=ta en-iba=n sîk-an-u joo.
 理由 1 止める-IMP=引用 1 言う-条件 2=も 聞く-NEG-NSPT DSC2
 「いやあ、リュウセイがよ、行ってよ、親父（あなた）の話はオーバーな話だから止めろと言っ
 ても聞かないよ。」
- (B1-39) Y: joo <kangofu>=ga joo ha=ja kju=ja joo kunu fuciri num-an=cja
 DSC2 看護婦=DAT1 DSC2 REFL=TOP 今日=TOP DSC2 この 薬 飲む-NEG.NPST=条件 3
 joo ha<o> sîn-asî sjaami naa te en-tar-a joo.
 DSC2 REFL. を 死ぬ-使役.NPST つもり Q 引用 2 言う-PST-条件 1 DSC2
 「よ、看護婦によ、自分は今日はよ、この薬を飲まないで、自分を死なすつもりかと言ったか
 らよ、」
- (B1-40) Y: ha=gi usîna nagi fuciri num-j aru fuciri tenu=a e s-j
 あちら=LOC2 沖縄 LOC2 薬 飲む-CVB 継続 1.NPST 薬 引用 2=TOP そう する-CVB

a te nee=nu fuciri=ta muc-i kiba=ru sinsin=cja fuciri

継続 1.NPST 引用 2 どう=GEN 薬=引用 1 持つ-CVB 接近. 条件 2=FOC 先生=条件 3 薬

nd-asï doo.

出る-使役.NPST DIR.EV5

「あちらで、沖縄で、薬、飲んでいる薬というのは、そしたら、どんな薬と持って来れば先生
だって薬を出すよ。」

(B1-41) Y: <honttoni oowaraisitejoo>.

本当に 大笑いしてよ

「本当に大笑いしてよ」

(B1-42) Y: e s-j a buja daa e s-j a te daa

そう する-CVB 継続 1.NPST おじいさん 2ND.SG そう する-CVB 継続 1.NPST 引用 2 2ND.SG

fuciri muc-i oba=ta <dokoniaruka wakarimasjen> unu fuciri num-j

薬 持つ-CVB 丁寧.IMP=引用 1 どこにあるか わかりません あの 薬 飲む-CVB

a mun toni sutasï-ta-n tenu kutu joo.

継続 1.NPST もの とうに 捨てる-PST-IND 引用 2 こと DSC2

「そしたらおじいさん、あなたそしたらあなた薬を持っていっちゃって下さいと、どこにある
かわかりません、その薬を飲んだもの（包装シート）はどうに捨てたという事よ。」

(B1-43) Y: e s-j a sinsin=cja <zjenzjen> bagar-an-a waa, <kecuacuno

そう する-CVB 継続 1.NPST 先生=条件 3 全然 分かる-NEG-? DIR.EV2 血圧の

kusuridemo nansjuruiarukara>.

薬でも 何種類あるから

「そしたら先生だって全然わからないよね、血圧の薬でも何種類もあるから。」

(B1-44) H: <futasjurui misjurui aru moo>.

二種類 三種類 ある もう

「二種類三種類あるよ、もう。」

(B1-45) Y: nd-a h-an-u te en-ta-sar-oo.

出す-CVB 受益-NEG-NPST 引用 2 言う-PST-?-IND2

「出してあげないと言ったはず。」

(B1-46) Y: e sika <mata> ha=ja=ru kju=a joo kuri num-an=cja joo

そう 逆接 また REFL=TOP=FOC 今日=TOP DSC2 これ 飲む-NEG.NPST=条件 3 DSC2

sin-i s-u gara=ta joo <kangofu>=ga joo en-i ki <minna

死ぬ-CVB する-NPST 理由 1=引用 1 DSC2 看護婦=DAT1 DSC2 言う-CVB 理由 2 皆

oowaraisitejoo>.

大笑いしてよ

「だけどもた、自分は今日はこれ飲まないとよ、死ぬからとよ、看護婦によ、言うからみんな大笑いしてよ、」

- (B1-47) Y: <demo> buja=n min tusa oo naa ikasiku pītu=nu enba=n
でも おじいさん=も 耳 遠い.NPST 丁寧.NPST Q どんなに 人=GEN 言う. 条件 2=も
joo nu=ta=n bagar-an-u naa.
DSC2 何=引用 1=も 分かる-NEG-NPST Q

「でもおじいさんも耳が遠くていらっしゃるかね、どんなに人が言ってもよ、何ともわからないかね。」

- (B1-48) Y: agajaa <kjoojo honto oowaraisitejoo>.

INTJ 今日よ 本当 大笑いしてよ

「あれまあ、今日よ、本当大笑いしてよ。」

- (B1-49) Y: assajoo <naniga sinutoiukotoga arukatarā jo kono> sinsin=ja joo pītu=ga joo
INTJ 何が死ぬという事があるかたら DSC2 この 先生=TOP DSC2 人=DAT1 DSC2
maa fuciri=n h-un-u=ta=ru joo,
INTJ 薬=も あげる-NEG-NPST=引用 1=FOC DSC2

「あれまあ、何が死ぬという事があるかと言ったらよ、この先生はよ、人によ、まあ、薬もくれない、とよ、」

- (B1-50) Y: daa <sjookaizjoo> hak-i muc-i k-un-a-ta naa te en-tar-a
2ND.SG 紹介状 書く-CVB 持つ-CVB 完了-NEG-?-PST Q 引用 2 言う-PST-条件 1
joo,
DSC2

「あなた紹介状書いて持ってこなかったか? と言ったらよ、」

- (B1-51) Y: <sjookaizjoo> bagar-an cju te <rjuusjee> muc-i k-j
紹介状 分かる-NEG.NPST HS1 引用 2 人名 持つ-CVB 来る-CVB
a-n sika=ru joo bagar-an doree.
継続 1.NPST-IND1 逆接=FOC DSC2 分かる-NEG.NPST 推量 3

「紹介状はわからないとさ、って、リュウセイが、持って来てるけどよ、わからないはず(と言った)」

- (B1-52) Y: e sita e s-j a te <kinjoobika mokujo> k-un-a-ta raa
そう 継起 そう する-CVB 継続 1.NPST 引用 2 金曜日か 木曜 来る-NEG-?-PST Q
te en-tar-a joo, <okjakusan>=du,
引用 2 言う-PST-条件 1 DSC2 お客さん=FOC

「そして、そしたら金曜日か木曜来なかったかと言ったらよ、お客さんが、」

(B1-53) Y: <okansan> joo,
 お客さん DSC2
 「お客さんよ、」

(B1-54) Y: <denwa> tur-u gara joo ha=ja maa kir-ar-un-ta cju.
 電話 取る-NPST 理由 1 DSC2 REFL=TOP INTJ 来る-POT-NEG-PST HS1
 「(お客さんからの予約の) 電話を取るからよ、自分はよ、来れなかったとさ。」

(B1-55) Y: buja <koccinohitoga minnaga> joo, buja, daa te e s-j
 おじいさん こっちの人が 皆が DSC2 おじいさん 2ND.SG 引用 2 そう する-CVB
 a te du=nu <bjookito okjakuno> za=ndu, za=ndu joo, <daichi>
 継続 1.NPST 引用 2 自分=GEN 病気と お客さんの どこ=FOC どこ=FOC DSC2 第一
 ja te en-tar-a joo,
 COP.NPST 引用 2 言う-PST-条件 1 DSC2
 「おじいさん、こっちの人みんながよ、おじいさん、あなたってばそしたら自分の病気とお客
 さんのどちらが、どちらがよ第一か? と言ったらよ、」

(B1-56) H: assajoo.
 INTJ
 「あれまあ。」

(B1-57) Y: enba=n ma nu=ta=n moan-u.
 言う. 条件 2=も INTJ 何=引用 1=も 思う.NEG-NPST
 「言っても、まあ、何にも思わない(返答がなかった)。」

B.2 昔話「ナビハキタ(鍋搔き田)」

(B2-1) R: tamuree=nu ama.
 田盛=GEN 姉
 「田盛の姉さん、」

(B2-2) Y: oo.
 INTJ
 「はい。」

(B2-3) R: nabihakita tenu panasī,
 ナビハキタ 引用 2 話
 「ナビハキタという話は」

(B2-4) R: nee=nu panasī jarj oo baa?
 どう=GEN 話 COP.CVB 敬意.NPST Q
 「どんな話ですか?」

(B2-5) R: sĭk-ah-e tabor-i.

聞く-使役-CVB 丁寧-IMP

「聞かせてください。」

(B2-6) Y: oo.

INTJ

「はい。」

(B2-7) Y: kunu panasĭ=ja joo,

この 話=TOP DSC2

「この話はね、」

(B2-8) Y: kuturami,

昔

「昔」

(B2-9) Y: jagumura na tenu

ヤグムラ ? 引用 2

「ヤグムラという」

(B2-10) Y: mura=ndu a-ta cju.

村=FOC ある-POST HS1

「村があったとき。」

(B2-11) R: e naa?

そう Q

「そうですか。」

(B2-12) Y: e s-u kami=ja,

そう する-NPST 間=TOP

「そして」

(B2-13) Y: mura=nu pĭtu=ja,

村=GEN 人=TOP

「村の人は」

(B2-14) Y: too=nu sĭma=gara

?=GEN 島=ABL

「大和の島から」

(B2-15) Y: sĭkur-iba=n sĭkur-iba=n,

作る-条件 2=も 作る-条件 2=も

「作っても作っても」

- (B2-16) Y: s̥ikur-u munu
 作る-NPST もの
 「作るもの（作物）を」
- (B2-17) Y: s̥ikur-iba=n s̥ikur-iba=n,
 作る-条件 2=も 作る-条件 2=も
 「作っても作っても」
- (B2-18) Y: too=nu s̥ima=ci=ru <osameru>
 ?=GEN 島=ALL=FOC 納める
 「大和の島に納める」
- (B2-19) Y: kutu gaasi=ru s-i,
 こと だけ=FOC する-CVB
 「ことだけして、」
- (B2-20) Y: deena
 たいそう
 「たいそう」
- (B2-21) Y: <nangi> s-i ci=ru,
 難儀 する-CVB 付帯 2=FOC
 「難儀しながら」
- (B2-22) Y: patarag-i bir-j a-ta cju.
 働く-CVB 継続 2-CVB 継続 1-PST HS1
 「働いていたそうだ。」
- (B2-23) R: ee jarj oo naa?
 そう COP.CVB 敬意.NPST Q
 「そうですか。」
- (B2-24) Y: e s-u kamj=a,
 そう する-NPST 間=TOP
 「そして」
- (B2-25) Y: <aru> p̥in,
 ある 日
 「ある日、」
- (B2-26) Y: too=nu s̥ima=gara
 ?=GEN 島=ABL
 「大和の島から」

- (B2-27) Y: kunu
この
「この」
- (B2-28) Y: s'ikur-j a munu<o>...
作る-CVB 継続 1.NPST ものを
「作ったものを」
- (B2-29) Y: n...
INTJ
「うん…」
- (B2-30) Y: tur-u-n=ta,
とる-NPST-IND1=引用 1
「取りに」
- (B2-31) Y: funi sor-i ci k-j a-ta cju.
船 連れる-CVB 付帯 2 来る-CVB 継続 1-PST HS1
「船と一緒に来たそうだ。」
- (B2-32) R: e naa?
そう Q
「そうですか。」
- (B2-33) Y: sima=nu p'itu=ja,
島=GEN 人=TOP
「島の人、」
- (B2-34) Y: too kjuu=nu juru=ja,
INTJ 今日=GEN 夜=TOP
「ちょうど今日の夜、」
- (B2-35) Y: kunu p'itu-ima<o>
この 人-PL. を
「この人たちを」
- (B2-36) Y: saki num-ah-e,
酒 飲む-使役-CVB
「酒を飲ませて、」
- (B2-37) Y: bitakora-sim-a sita,
酔う?-使役-CVB 継起
「酔っぱらわせて、」

- (B2-38) Y: pĩngi <kangeo> muuru=si s-j a-ta cju.
逃げる.NPST 考えを 全部=INS する-CVB 継続 1-PST HS1
「逃げる（という）考えを皆でしていたそうだ。」
- (B2-39) R: e naa?
そう Q
「そうですか？」
- (B2-40) Y: oo.
INTJ
「はい。」
- (B2-41) Y: e sita,
そう 継起
「そして」
- (B2-42) Y: muruzanari
全員で
「皆で」
- (B2-43) Y: unu too<no> sima=nu pĩtu=tu saki num-i,
あの ?の 島=GEN 人=COM 酒 飲む-CVB
「その大和の島の人と酒を飲み、」
- (B2-44) Y: bitakora-sim-a,
酔う?-使役-CVB
「酔っぱらわせ、」
- (B2-45) Y: unu too=nu sima=nu pĩutu=ndu nuf-j ar-oo...
あの ?=GEN 島=GEN 人=FOC 寝る-CVB 継続 1-NPST.IND2
「その大和の島の人が寝ている…」
- (B2-46) Y: baasi
時
「間に」
- (B2-47) Y: sii, manandusi=ndu
INTJ 今の内=FOC
「ほら、今のうちに」
- (B2-48) Y: be-ma pĩngir-air-u=ta
1ST.PL.INC-PL 逃げる-POT-NPST=引用 1
「私達は逃げられると」

- (B2-49) Y: muuru safuk-i pee=nu
 全部 引っ張る-CVB 南=GEN
 「皆を連れて南の」
- (B2-50) Y: ina=ci
 海=ALL
 「海に」
- (B2-51) Y: sor-i ng-i,
 連れる-CVB 行く-CVB
 「連れて行って、」
- (B2-52) Y: haa=nu pee=nu
 あちら=GEN 南=GEN
 「あちらの、南の」
- (B2-53) Y: paipateroma ten sima=ndu a-ta cju.
 パイパテロマ 引用 2 島=FOC ある-PST HS1
 「パイパテロマという島があったそうだ。」
- (B2-54) R: ee jarj oo naa?
 そう COP.CVB 敬意.NPST Q
 「そうですか？」
- (B2-55) Y: unu sima=ci maa ping-a ng-a=ta
 あの 島=ALL INTJ 逃げる-CVB 行く-INT=引用 1
 「その島にまあ逃げようと」
- (B2-56) Y: funi naga nubur-i
 船 LOC3 乗る-CVB
 「船に乗って、」
- (B2-57) Y: par-i ng-u-n=ta
 走る.CVB 行く-NPST-IND1=引用 1
 「走って行こうと」
- (B2-58) Y: eg-uta kamj=a,
 そうする-PST 間=TOP
 「していたら、」
- (B2-59) Y: pïtu-ri=nu midumu=ndu
 1-CLF. 人=GEN 女=FOC
 「1 人の女が」

- (B2-60) Y: haa,
INTJ
「ああ、」
- (B2-61) Y: munu, bass-a munu=ndu aa gara tur-i kohee=ta
もの 忘れる.CV.B. 継続 1.NPST もの=FOC ある.NPST 理由 1 取る-CVB 来る.INT=引用 1
「もの、忘れものがあるから取ってくる、と」
- (B2-62) Y: en-ta cju.
言う-PST HS1
「言ったそうだ。」
- (B2-63) R: e naa?
そう Q
「そうですか？」
- (B2-64) Y: oo.
INTJ
「はい。」
- (B2-65) Y: e siba unu midumu=ja,
そう する. 条件 2 あの 女=TOP
「そうしたらその女は」
- (B2-66) Y: mura=ci ng-i,
村=ALL 行く.CV.B
「村に戻って、」
- (B2-67) Y: unu <naabeo> tur-i,
あの ナベを 取る.CV.B
「その鍋を取って、」
- (B2-68) Y: par-i kuta ten sika,
走る-CVB 接近.PST 引用 2 逆接
「走ってきたというけれど、」
- (B2-69) Y: haa <nabe>
あちら ナベ
「あちらの、ナベ…」
- (B2-70) Y: hakida te=ndu na bagi k-j a-ta sika,
ハキダ 引用 2=FOC ? 限界 来る-CVB 継続 1-PST 逆接
「ハキダというところまで来たけど、」

- (B2-71) Y: funi=ja maa,
船=TOP INTJ
「船はもう、」
- (B2-72) Y: ha=ga maa,
あちら=DAT1 INTJ
「あちらにもう、」
- (B2-73) Y: nd-a par-i nen ki
出る-CVB 走る-CVB 完了.NPST 理由 2
「出ていってしまったから、」
- (B2-74) Y: kunu midumu=ja,
この 女=TOP
「この女は、」
- (B2-75) Y: ha=nu takade nagi
あちら=GEN 高台? LOC2
「あちらの高台（?）で」
- (B2-76) Y: naabi<o> gangan=ta sik-i,
ナベを ガンガン=引用 1 鳴らす-CVB
「ナベをガンガンと鳴らして、」
- (B2-77) Y: gasaragasara=ta
ガサラガサラ=引用 1
「ガサガサと」
- (B2-78) Y: hak-i ci naag-i ci
搔く-CVB 付帯 2 泣く-CVB 付帯 2
「引っ搔きながら、泣きながら、」
- (B2-79) Y: maa eg-uta cju.
INTJ そうする-PST HS1
「まあ、そうしていたそうだ。」
- (B2-80) R: e naa?
そう Q
「そうですか？」
- (B2-81) Y: unu utama, unu midumu=ja
あの 子ども あの 女=TOP
「(その子ども) その女は」

- (B2-82) Y: <moo> maa
INTJ INTJ
「もう」
- (B2-83) Y: <sikata> nen-u ma,
仕方 ない-NPST INTJ
「しかないね、」
- (B2-84) Y: gan ma <atowa> nee=ndu e s-uta duu=n bagar-an sika,
INTJ INTJ 後は どう=FOC そう する-PST 自問=も 分かる-NEG.NPST 逆接
「そう、まあ、あとはどうしたかともわからないけれど、」
- (B2-85) Y: e=nu panasi=ndu a-tar-oo.
そう=GEN 話=FOC ある-PST-IND2
「そんな話がありました。」
- (B2-86) Y: ee jarj oo naa?
そう COP.CVB 敬意.NPST Q
「そうですか？」
- (B2-87) Y: oo, obii.
INTJ おしまい
「はい、おしまい。」
- (B2-88) R: niiha juu.
INTJ DSC3
「ありがとうございます。」
- (B2-89) R: <soo...> e s-j a=cja unu midumu nag-j a-ta tukuru
そう そう する-CVB 継続 1.NPST=条件 3 あの 女 泣く-CVB 継続 1-PST 所
nabihakita te en naa?
ナビハキタ 引用 2 言う.NPST Q
「(そう…) そうしたらその女が泣いていた所をナビハキタと言うんですか？」
- (B2-90) Y: oo. haa nabi+hak-j a+da=ta=ru
INTJ あちら ナベ + 掻く-CVB 継続 1.NPST 田=引用 1=FOC
「はい。あちらが「鍋を掻いていた田 (ナビハキダ)」と」
- (B2-91) Y: en-tar-oo.
言う-PST-IND2
「言ったんだよ。」
- (B2-92) Y: eban,
だけど
「だけど、」

- (B2-93) Y: <tocikairjoo> siba=n
土地改良 する. 条件 2=も
「土地改良をしても」
- (B2-94) Y: aa paci
ある.NPST 推量 1
「あるはず。」
- (B2-95) Y: baa maa aga,
1st.SG INTJ INTJ
「私はまあ、いや、」
- (B2-96) Y: muttu ng-i mir-an sika,
本当に 行く-CVB 経験-NEG.NPST 逆接
「本当に行ったことないけれど、」
- (B2-97) Y: ha=ja <cimee> ja-ta siki=ndu
あちら=TOP 地名 COP-PST ?=FOC
「あちらは地名だったけれど」
- (B2-98) Y: nabihaki
ナビハキ
「ナビハキ」
- (B2-99) Y: ta=ndu e=nu <cimee>=ndu aa kajaa=ta mu sika,
タ=FOC そう=GEN 地名=FOC ある.NPST 自問=引用 1 思う.NPST 逆接
「タというそういう地名があるかなと思うけど、」
- (B2-100) Y: maa,
INTJ
「まあ、」
- (B2-101) Y: sisaba=n mir-an gara,
知る.CVB?. 継続 1. 条件 2=も 見る-NEG.NPST 理由 1
「知っていても見ていないから、」
- (B2-102) Y: eban a-n kajaa=ta mu-i bir-j ar-oo.
だけど ある.NPST-IND1 自問=引用 1 思う-CVB 継続 2-CVB 継続 1-NPST-IND2
「だけどあるかなと思っているよ。」
- (B2-103) R: ee jarj oo naa?
そう COP.CVB 敬意.NPST Q
「そうですか？」

(B2-104) Y: oo.

INTJ

「はい。」